THE CENTRAL REVIEW

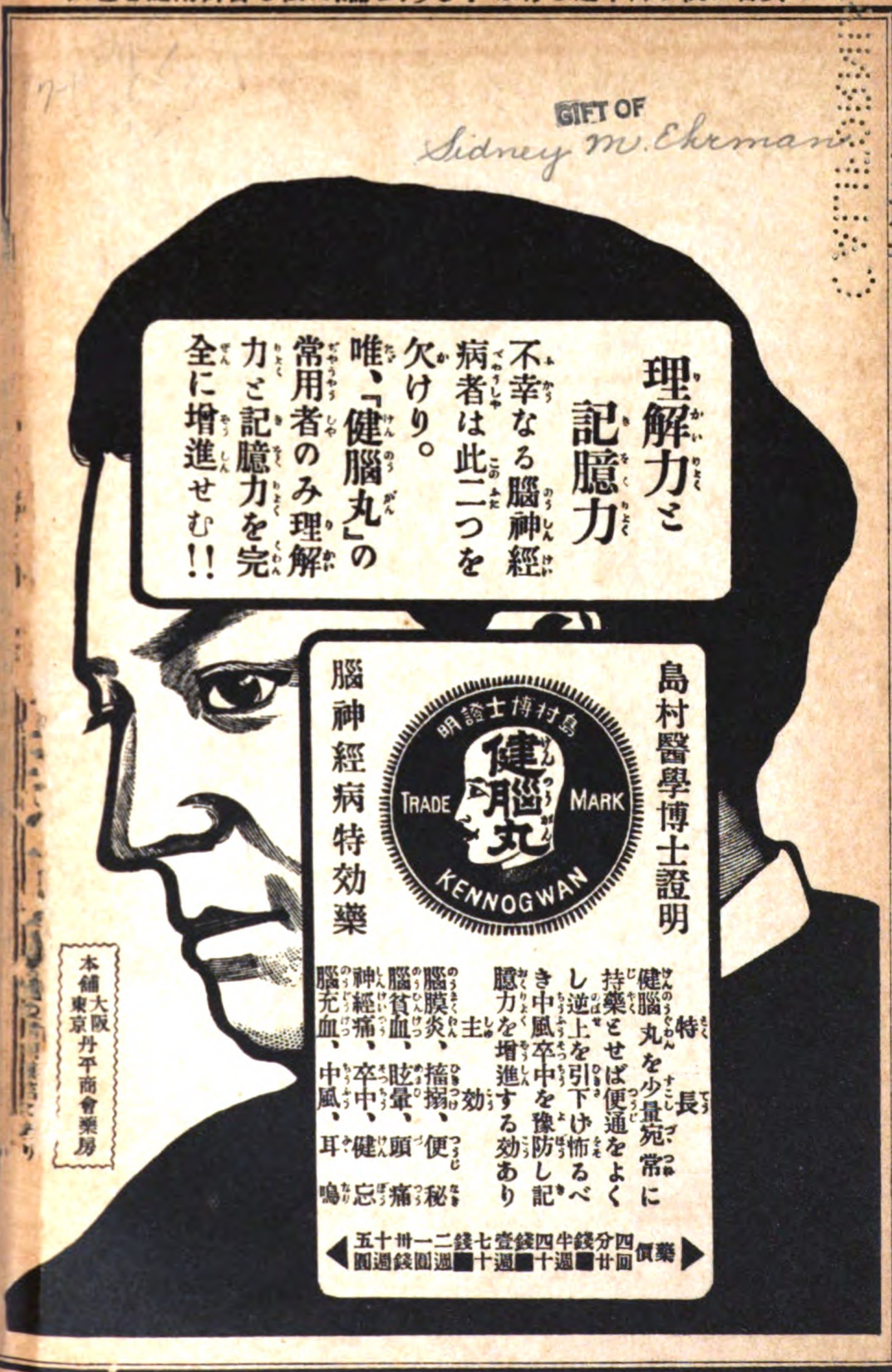
大正六年五月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

五月號

第三十二年第五號　第三百四十三號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新進作家叢書

第一 **新らしき家** 武者小路實篤著

第二 **恐るべき結婚** 里見弴著

五月上旬發行

黎明の空、新潮の海、――わが新興文壇の華かに盛なる姿を看よ。新しき人の新しき時代の來りつゝある現下文壇の鳥瞰圖を描いて、新文藝の渇仰者に示さん爲め、こゝに本叢書を發刊することゝなつた。卽ち新進作家中の最も傑ぐれたる人々に就き、その最も得意とする作品、三篇乃至五六篇を請ひ得てこれを購ふに易く讀むに便なる小冊に編み、逐次刊行するのである。こゝに始めて醸されたる美酒の芳香と、始めて開ける花の生氣ある色彩とがあらう。而して新しき世紀を照らす新しき日の、淸き最初の光が輝いてゐるであらう。敢へて文藝愛好者に薦める。

續刊目次――出版の順序に變更ある可し

- 生あらば 豐島與志雄
- 大津順吉 志賀直哉
- 偸盜 芥川龍之介
- 結婚前 長與善郞
- 手品師 久米正雄
- 生と死の愛 谷崎精二
- ギプスの死 相馬泰三
- 澄子の兄 江馬修

■中版美本■一冊百七十頁乃至二百頁 ■定價四十錢、送料四錢づゝ

東京牛込矢來中の丸 振替（東京）一七四二 **新潮社** 電話番町八〇九番 電話番町八九九番

信用ある店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日とのみ競ふ

マツダランプ



五拾燭光迄長型壹個金五拾錢

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番 一〇一番 一〇二番 一〇三番 一〇四番

販賣部

東京出張所　東京市京橋區銀座尾張町一丁目　電話京橋一九三・三二一二　長一〇五九

横濱出張所　横濱市伊勢佐木町一丁目　電話長一七一一

大阪出張所　大阪市西區阿波座南通一丁目五番地　電話長西一〇九五

御照會の節は此點線を切取りお送り下されば綺麗な説明書を差上ます

御住所

御姓名

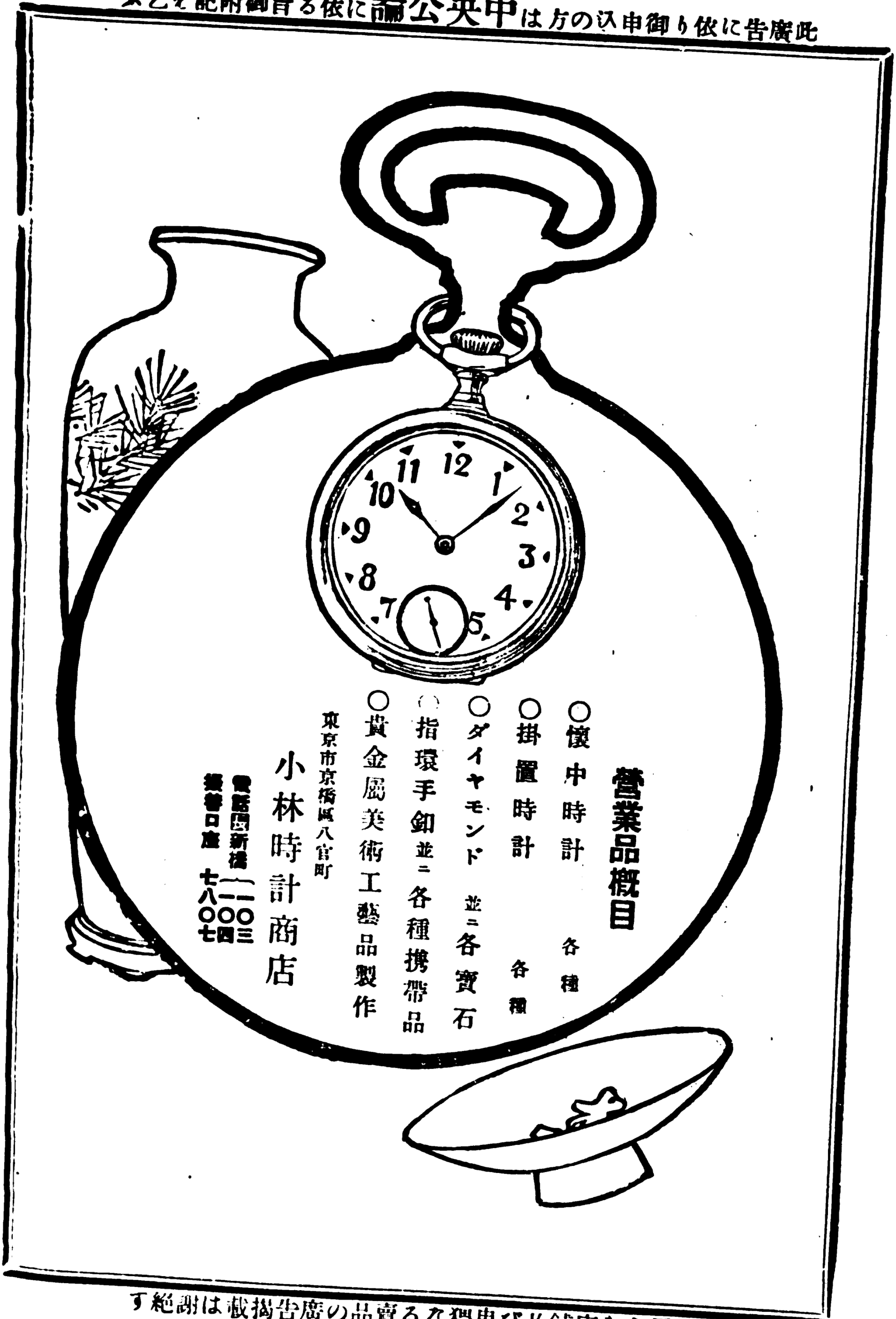
信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



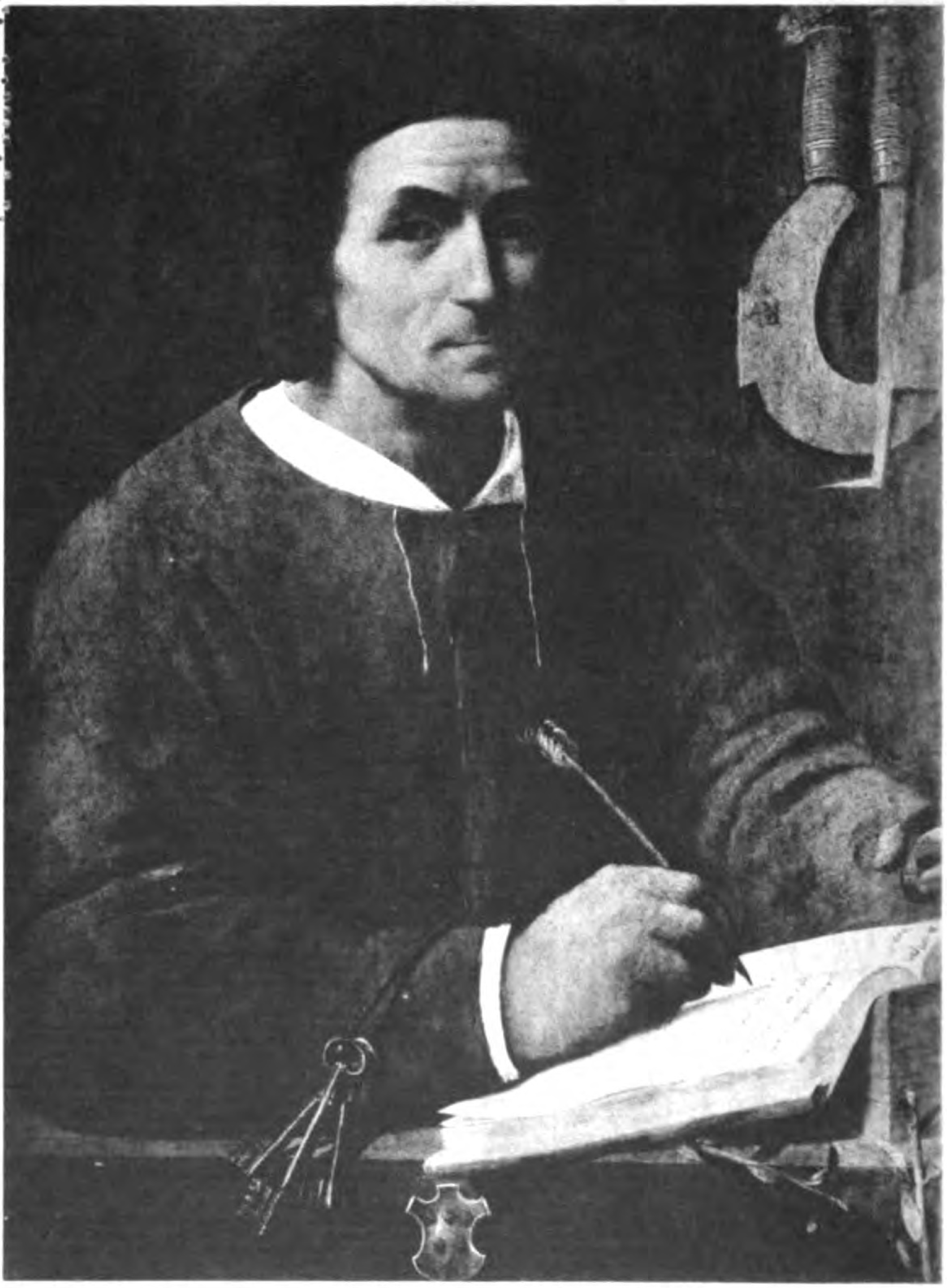
中央公論第卅二年五月號目次



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



FRANCESCO DI CRISTOFORO BIGI
PORTRAIT OF THE GARDENER OF PIER
FRANCESCO DE' MEDICIS AT FLORENCE

中央公論



五月號
第卅二年第五號
第三百四十三號

新聞記者道德論

松井柏軒

（一）

新聞記者往々自から布衣の宰相を以て任じ、甚だしきは乃ち無冠の帝王とまで稱する者あり、其の位に在らずして天下國家の事を左右し、其の職に在らずして世論民心を進退す、所謂『一言にして天下の法となり、匹夫にして百世の師となる』もの正さしく記者其の人を評隲して適切の言なるが如し、而して其の臂を把て交遊する所のものは、國務大臣、博士、文人、將軍、豪富、貴族より、市井の商工、藝人、遊俠、娼婦の徒に至り、往返出入自在ならざるなく、故に古の志あるものは、國を醫する宰輔たら

ずんば人を治する辭たらんといひ、今の英國大學生は、總理大臣たらずんば則ち倫敦タイムスの主筆たらんことを希ふといふ、蓋し新聞紙の勢力ある、記者をして幾んど九鼎大呂より重からしめ、勢ひ權豪を傾むくる大臣其の他の勢家と雖も、記者に向つて、溫顏以て佳辭を酬ひざる能はず、心に忌むこと毛蟲の如しと雖も、陽には則ち好言令色して其の歡を迎ふるを常とす、記者の多數が常に得々として一世に傲睨する所以ありと謂ふべし。

故兒玉大將曾て謂へらく、日淸及び日露の兩戰役の好果を收めし一因は、新聞紙の力に由る、其の主張は能く國論を一致せしめて外征將士を後援し、其の軍事通信は能く軍人家族を慰安し、又國民をして其の義務に執掌せしめたればなりと、當時新聞紙の効力を認めたるもの必らずしも大將一人に止まらず、多くの政事家まで悉く之を認めて、百方新聞紙の利用に鋭意せざるなし、去れば內閣の信望あると否と、政黨の振ふと振はざると、また多くは新聞紙の援助を得ると失ふとに由る、彼の大隈內閣の成るや、貴族院の援助あるに非ず、衆議院に於ては絕對多數黨たる政友會を敵として、而して國民黨をすら味方とする能はず、與黨なきに非ざるも、微々として素より反對黨と相較するに足らざりしと雖も、唯だ新聞紙の多數に擁護せられしため、俗間の喝采を受けて一代の人氣を集中す、故に識者大隈內閣を譏して、『新聞內閣』と稱し、其の基礎全く紙上に在りと評したりき。

新聞紙の勢力は、冷靜水の如き國民の感情を挑發し煽動して、熱烈幾んど金を鑠かすに至らしめ、爲めに國交を斷絕し、宣戰を公布せしむるも珍らしからず、米國が曾て西班牙と交戰せしも、其の公使の私信を訐きて極力之を鞭撻せし新聞紙その原由を爲し、佛帝ナポレオン三世が非買五十餘縣の議會戰爭

反對なりしを悟らず、政府國民と相率ゐて普漏西に宣戰せしも、實に新聞紙の煽動に由れるに非ずや。

新聞紙の勢力や斯の如し、之を作るもの、殊に記者其の人の世に勢ひを振ふや知るべきのみ、然れども勢ひ大なるものは必らず之に伴ふ責任なかる可らず、茲に於てか新聞記者道德論在り、權利在る所必らず義務の伴ふあり、獨逸人は唯だ權利を高唱して義務を知らざる爲せんとし、英國人は權利を尊重すること切なると共に、又義務の觀念に强し、我が新聞記者は獨逸人たらずして英人たらざる可らず、然り、眞に新聞紙をして善良なる効果を擧げしめんとせば、其の記者をして第一に道德を重んぜしめ、英人の如く其の義務に忠實ならしめざる可らざる也。

（二）

新聞記者の無責任といふよりも、不道德なる一事例として、最近に頗ぶる世間の感情を衝動したるものは、彼の東京朝日新聞の元記者某々等が、虛僞の電報を發し、之を某々新聞紙に揭げしめ（太だしきは號外を出したる新聞紙もありき）之に由て株式市場を動搖せしめ、乘じて以て若干の利益を獲たるが爲め、所謂財界攪亂の犯罪者として檢擧せられし一事なるべし。

斯の如き不道德例が其の實如何なる程度まで新聞記者の間に行はるゝかは、吾人未だ之を確知するに至らず、唯だ往年東京日々新聞の一記者が、其の社の得たる電報を利用して投機を試み、一時若干の利益を得たるも、事の露見するや、直ちに同社より放逐せられしも、曾て法律の問ふ所と爲らず（當時は其の條文なかりしやも知れず）却つて其の利益を以て代議士にまで當選して、揚々得色あり、世また多く之を非難して、何等社會的制裁をすら與ふるなかりしを知るのみ。

思ふに投機市場に出入して、其の事情を掲載すべき職分を擔當する記者中には、多少實際に投機を試むる者なきに非ざるべし、必らずしも嚴に咎むるに足らずと雖も、彼の新聞社の得る中外の電報を利用(否、濫用)し、早く大事變故を知るに乘じて投機を試むるが如きは、甚だしき不道德なるや論なし、官吏として機密を知るを利し、之を投機に用ふるは、假令自から手を下さずと雖も、之を仲買若くば親近者に漏らし、由て以て間接に賣買すると、亦甚だしき不義にして、其の前者は明白に瀆職者也、新聞記者には官吏の如き服務規律なく、また瀆職の罪なしとするも、道德上の罪に至ては、官吏と寸毫も差違あるなし。

大浦子爵曾て人に語て曰く『內閣の鐵道國有を決定するや、予若し投機を以て利を網する妄念あらば、當時之を以て百萬百五十萬を獲る易々たりしのみ、然かも予は之を秘書官にすら漏らす所なかりき』と、財利に淡にして謹嚴自から持せし子爵にして斯の言あり、他の大臣にして投機に手を汚さゞりしもの果して幾人ぞ、夫れ一時投機熱の熾んなるや、彼の聽診器を耳にして、メスを手にする外、多く俗事に淡なる醫學博士と雖も、尙ほ株式を賣買して損得に遑々たりしといふ、時代の習風斯の如き時、獨り新聞記者の投機市場に出入するを禁ぜんとす、果して可能なりや否や、然れども新聞紙が常に中外の電報を得て、機密を知ること世に先んずる以上、猶ほ官吏と齊しく、斷じて之を爲すことを容るす可らず、少くも道德上の罪人として、明白に制裁を加へざる可らず。

新聞記者にして單に投機に手を染むる既に不可也、何ぞ況んや虛僞の電報を作爲し、之を新聞紙に揭げしめて、以て市場の人心を動搖せしめ、其の間に乘じて以て不正の利を壟斷せんとするをや、是れ曾

だ道德上の大罪人たるに止まらずして、斯の如きの記者を出すは、操觚社會の一大恥辱也。

(三)

新聞記者の不德義より生ずる弊習は、曾て三四の雜誌に掲載せられしが如き事例も絶無に非ざるべし、例せば、政黨の事務所、其の他官衙、會社銀行等に出入する記者の中には、其の政黨、若くば官衙若くは銀行會社より、毎月若くば毎年定期に多少の秘密手當を受くるものも稀には之あるべし、其の全く之れなくして、時々饗宴に招かるゝが如きは、素より何等責むべきの理なし、唯だ政府の筋等より秘密の扶持金を受け、之がため其の筆を曲げて政府の御用を勤むるが如きは、所謂黄金のため走狗となる者にして、其の心事の卑しきは勿論、全く德義なきや論を俟たず、君子人は當さに之を唾棄すべし。

人望なき内閣、殊に新聞紙より公然援助を受くること能はざる内閣は、堂々乎として新聞社其の物を擧げて味方たらしむるを得ざるが爲め、密かに其の社中の若干記者を買收して走狗と爲し、間を覗ひ隙を窺ふて筆を曲げしむるといふ、曲げしむる者素より非なりと雖も、黄金のため節を屈して自から曲ぐる者最も卑むべし、斯の如くにして國家を正義の支持者といひ、新聞紙また人道を喋々するも、竟に是れ盗跖仁義を說くの類のみ。

或る官衙は、一は新聞社の内情を知らんがため、一は或る機關に利用せんがため、毎月若干の記者に一定の金錢を與ふ、其の額僅かに十五圓乃至三十圓、多きも五十圓を越えずといふ、此の區々たる手當のため、甘んじて一種の所謂「犬」と爲るが如き、寧ろ聞く者知る者の啞然たる所なるべし、同じく記者と稱す、其の數と種類と多かるべしと雖も、苟くも記者の内、尙ほ斯の如きある、何人も驚かざるを得

ざるべし。

或は商店のため、或は興業者のため、常に其の手先となりて便宜を計るの職務を受負ふ者あり、是れ亦一定の手當を受け、若くば物品の贈與を受くるの例にして、同じく記者中の一階級を爲すといへり。凡そ斯の如きは、如何なる低級の記者と雖も、之を不道徳と感ぜざるは莫かるべし、乃ち之を感ずと雖も、自から良心を殺して秘密裏に之を爲し、居常自から苦むが如きは、決して好んで之を爲すにあらずして、勢ひ已むを得ざるものあるが故ならん、彼の偸盗者の如き、苟くも先天的特性に出づる者の外は、皆其の惡事たるを識りて而して忍んで之を敢てせざる莫し、蓋し薄志弱行にして一方の或る欲を抑ゆる能はず、自制克己の心を喪ふて竟に犯罪を敢てするのみ、彼の道徳を犯す新聞記者もまた又斯の類ならざらんや。

然らば則ち新聞記者にして、自から其の徳義を犯すは何の故ぞ、曰くパンの爲め也、曰く或る欲望のため也、今の新聞記者には、專門の學校を出でたる壯者甚だ多し、彼等生平新聞記者の地位の自由にして、其の交遊の廣く、又到る處に勢力あるを視て羨望に堪えず、一たび新聞社に入りて記者席に就くや、恰かも支那人の科擧に及第したるが如く、幾んど揚々として登龍門の威を爲さん、然れども其の俸給稀薄にして、到底會社銀行員等と較す可らず、官吏若くば教師にすら及ばざらんとす、茲に於てかパンのために俸給以外何等かの收入を得ざる可らず、殊に學校の羈絆より脫して、始めて自由の身となるや、青年の欲望燃ゆること火の如きものあるに方り、職分上饗宴等に出づるの機會多く、出づるに隨つて遊蕩の味ひを覺え、一方に生活の放縱を來すと共に、俸給以外の收入を得ざる可らざるの必要益々切實を

加ふ、是れ新聞記者の漸くにして德義を犯すに至る徑路にして、他の職業者に比して誘惑多く、且つ墮落の機會多きは、實に記者なるものの職分の、他の官吏教師若くば銀行會社員と異なる所とす。

故に新聞記者の墮して不德義となる主たる原因は、其の俸給の稀薄なるに在りと斷せざる可らず、今や先進者の失敗せる先例に懲りて、學校出身者の新聞記者を志望するの漸く少きに至れるは、寧ろ悦ぶべしとせざる可らず、然れども其の結果、有爲有能の士漸くにして操觚社會より遠ざかること必然なりとせば、新聞紙のためには却つて悚然たらざる可らず、玆に於てか此の問題を根本的に考慮するの必要生ず。

（四）

鮑魚の肆に在るもの鮑魚の臭きを知らず、予の如き多年操觚界に在るもの寧ろ其の弊を知らず、否、其の弊に馴れて、知覺神經或は麻痺し去れるやも測る可らす、或は斯くいふがため、同業者よりは、却つて動もすれば自から訐きて以て直とする者の如く忌まるゝなきを保せず、難い哉我が新聞記者を論ずることや。

然れども新聞記者の德心の低級なるを證するため、尙ほ一二言はざるを得ざるものあり、歐洲の新聞記者は、社會道德を守るを嚴にして、苟くも其の耳にしたる他の話談の如き、其の承認を得るに非ざれば之を新聞紙に公表することなしと雖も、我が新聞記者は曾て斯の如き德義と作法とに頓着せず、如何にプライベートの話談と雖も、競ふて之を紙上に掲ぐるを以て、苟くも少しく用心する人は、新聞記者の在る坐席に於ては、互ひに緘默を守るを例とし、假令相語るも、一片の辭令贅談に過ぎず、新聞記者

の前には絶對に機密事項に言及せざるを常とす、隨つて新聞記者を目して、機密を守るの德義なき者の如くに思ひ做し、心中に之を忌みつゝ表面敬遠せざる莫し。

是を以て放膽なる政事家は、其の話談の新聞紙に掲載せられて、事實少しく不便なることあるや、直ちに之れを口外したることなしと打消し、全然其の新聞紙を以て虚言者と爲して平然たるのみならず、其の新聞紙も亦最も卑むべく慚づべき虚言者とせられて、一片の義憤をすら發することなし、彼の大隈侯が支那の政體の帝政ならざる可らずして、已に帝政と爲す以上、袁世凱を皇帝とするの外なしといへる談話の新聞紙（殊に侯の機關新聞にまで）に掲載されし時、袁は日本政府の意玆に在りと爲したるが如く、後に大隈政府却つて帝政に警告を發するや、袁の驚倒したりしや察するに餘あり、而して其の事の我が議會の問題となるや、大隈侯は遲疑する所なく、是れ我が談話に非ずと打消し、平然として其の責任を知らざるもの丶如くなりしを以て、當時のアドヴアタイザア新聞の如きは、大に之を論じて我が政事家及び新聞紙の無責任を非難したりき。

實だに然るのみならず、新聞記者其の人は、却つて全然他の談話なるものを捏造することなきに非ず、最も明白なるは、某新聞に大隈侯が辯護士を惡罵したる談話の掲げられし一事にして、當時辯護士會の激昂甚だしく、某新聞の大隈侯の談話を聽取せりといへる一記者を招きて實狀を質せしに、侯の談話の痛烈なる、新聞記事以上なりしかば、辯護士會の憤怒益々强く、侯を詰責するの決議を爲さんと欲して、更に調査を試みたりしに、某記者が大隈侯に面會せしは事實なるも、當時侯が對客と或る結婚に就て雜談したるのみなること明白となりて、辯護士會も實に啞然たるの外なかりしといふ。

更に最近の例は、北京駐在の獨逸公使ヒンツエ氏が、國交斷絕のため去つて海路他に向はんとし、我が長崎に寄港せし時、彼れは何人にも面會せざりしに拘らず、東京の某々新聞紙には、公使との面會記事と其の談話と麗々しく掲載されありて、爲めに電報捏造の刑事問題を起さんとしたりき。

米國の新聞紙は、努めて他の談話を聽取して、之に種々の尾鰭を附加へ、且つ其の寫眞等を掲げて、頗ぶる誇張的に之を掲載する傾向あり、我が新聞紙も近來著るしくアメリカナイズして、苟くも會合らしき會合ある每に、直ちに寫眞師を差向け、無遠慮にマグネシウムを燃やして、宴室を濛々たらしむるも平然たるが、今や竟に無より有を生じ、瓢簞より駒を飛び出さしむるが如く、全く他の談話をも虛構し捏造するに至ては、其の德心なきこと實に言語に絕せりと謂はざる可らず。

彼の某伯爵嗣子夫人の其の自働車運轉手と情死を計りて遂げざるや、新聞紙の爭ふて之を記せしは左ることながら、其の詳細を競はんとするの極、夫人の父なる老伯に面會を强要し、老伯が其の羞恥と哀傷とのため、一切の公職を抛つの決心を爲し、且つ老夫人と共に竟に病みて床上に橫れるに拘らず、百方其の談話を聽かんとしたるが如き、將た卑むべくして憫れむべき重傷の夫人の容體及び其の周圍の事情を委さんと欲して、絕えず四邊の人を惱まし、晝夜殆んど見張を附くるの趣ありしが如きは、實に同情なき冷酷の措置にして、其の風敎人心に及ぼす影響の好ましからざるや言を俟たず、蓋し斯の如きは單に新聞記者の不見識に止まらず、實に德心の極めて低調なるの致す所ならずんばあらず。

凡そ此の類の例を擧れば、僕を更へて數ふるも足らざらんとす、徒らに低調なる俗人の好奇心を挑發せんとするに急なるがため、個人の權利を重んぜざるは勿論、其の影響の社會の善良なる風俗に及ぼす

所如何を顧みざるが如き傾向の近時著るしく加はれるは、心ある者の嘆惜する所たるべく、而して其の因する所、主として新聞記者の德義の缺乏に在るや、何人も之を否定せざるべし。

（五）

殆んど世間に其の存在をすら認められざる無勢力無信用なる新聞紙若くは雜誌の記者に至ては、其の不德なる恰かも彼の虛僞の行商人と擇ばざるものあり、少しく名を知られし人を訪ねて其の談話を求め、其の人の寫眞と併せて之を紙上に掲載すると同時に、掲載料として若干の金錢を哀請し强請するが如きは、隨處に看るの例にして、彼等の多くは、實際其の社より一定の俸給を支給さるゝことなきを以て、總て斯の如き方法に由て餘儀なく金錢を求むるなりといふ。

彼等はまた銀行會社商店等の廣告を哀訴し强要し、太だしきは承諾せざる廣告を掲げて事後に强ひて廣告料を要求する者あり、斯の如きは全く法令の禁ずる所にして、其の記者は所罰を免がれずと雖も、若し銀行會社商店等にして之を告發せんか、彼等は更に他の有らゆる方法を以て復讐するが故に、多くは之を恐れて廣告料を仕拂ふといふ、驚ろくこと勿れ、其の廣告料といふも、時としては法外に高價なるものなることを。

曾て或る大會社が、某通信社の廣告取扱ひの依賴の再三に及ぶを拒絕し、事後承認を求むるにも亦應ぜざるや、通信社は直ちに大會社の內幕と稱するものを訐き、虛實取交ぜて誇張過大に之を通信したりしを以て、大會社は竟に叩頭百拜して、少からざる詫金なるものを提供したる外、廣告取扱ひをも一手に依托したりしといふ、相當に名を知られしもの既に然り、況んや存在をすら世間に認められざる小な

るものをや。

彼等記者は又個人の私行を訐きたる原稿を作り、之を新聞紙若くば通信に出さゞるの好意を諷して、其の原稿作成者の勞に對する報酬を求むることあり、現に警察官に之を發見せられて、拘引されしもの數十名を下らずといふ、是れ所謂一種の陣笠記者のみならん、然れども操觚社會に此の種の記者を根絕するに至らざるは實に新聞記者の一大汚辱なりとせざる可らず。

（六）

若し新聞記者の德義低くして、羞惡廉恥の心なく、金錢を獲るがために手段を擇ばざると滔々風を爲さば、其の結果の恐るべき、殆んど戰慄に堪えざらんとす。

獨逸が世界の强國を敵として戰ひながら、動もすれば敵國の內部を攪亂せんとするの勢ひある所以のものは、夙くより金錢を以て各國の新聞記者を買收し、新聞紙の勢力を利用したるが爲めならずや、彼れは到る處に無線電信其の他を設けて、包圍中の本國と海外の中立國（甚だしきは敵國）と通信の便宜を支持し、有らゆる報告を撒布し、若くば印刷物を配布するのみならず（最近までは支那より日本に涉りて斯くしたりき）、又新聞記者を買收して、努めて此等の通信を掲載せしめ、以て獨逸の便宜を圖りて、敵の不利益を釀すに鋭意しつゝあり。

露國議會に暴露されし事實のみに就て視るも、獨逸は曾てマナセーウイチ・マヌイロフなる者の手を以て、露國隨一の新聞紙ノヴオ・ヴレミヤを買收せんと欲し、マヌイロフに與ふるに八十萬留（ルーブル）を以てしたるのみならず、其の失敗するや、更に前內務大臣心得プロトポポフ氏に托して、露國の重もなる十

行に五百萬留（ルーブル）の出資を促がし、以て一大新聞を刊行せしめんとしたるも、亦果さずして、竟にアゾブドンスキー銀行、露都中外商業銀行、露國貿易銀行より出資せしめしといふが、此の三銀行は共に獨逸資本に由りて經營せらるゝものなりき。

獨逸の如く目的のため手段を擇ばず、辛辣至らざるなきもの、他國の新聞紙を利用するがためには、實に何事をも爲さゞるなかるべし、曾て我が國に於ける一大疑獄たりし彼のシーメンス事件の裏面にも實に記者ありしことと暴露せられしに非ずや。

吾人は素より我が新聞記者中より獨探を出さんとは豫期する能はず、然れども紀律の最も嚴格なるべき軍人中に在てすら、既に軍事上の機密を外國に漏らして黄金に易へんと試み、爲めに軍法會議に附せられしもの、一二に止まらざるを思へ、若し我が新聞記者の德義の頽廢するに委せば、竟に露探たり、獨探たり、支那探たり、英探たる者の絶無ならざることは、誰か敢て保證し得べしとするぞ。

殊に新聞紙の勢力を利用せんとする野心ある富人にして、新聞記者を買收し、意の如く新聞紙を操縱せんか、其の荼毒の及ぶ所殆んど測る可らず、新聞紙が單に富豪階級の機關となりて、多數國民の利害を犠牲にすることあるが如きは、識者の夙に憂惧を禁ぜざる所とす、若し彼等にして果して擧げて富豪勢家の皂隷たらば如何、外國の機關となりて非國民的なることをすら敢てする如き新聞記者にして、如何ぞ富豪の足下に跪拜せざるの理あらんや。

官僚の或るものすら、現に新聞紙を手にせんがため、恰かも惡辣なる會社乘取の如き手段に出でんと欲したることありき、何ぞ況んや多少の黄白を以て恩を新聞記者に估り、之を以て自家の走狗として、

陰に陽に之を指嗾する如きをや。

故に新聞紙の神聖（若し然かいひ得べくんば）を保持して、其の本然の主旨を失はざらしめんとせば、何よりも先づ第一に新聞記者の道徳を高めざる可らず、而して又同時に新聞紙をして經濟的に獨立せしむる所以にも考へ及さゞる可らず。

（七）

職業には素より貴賤高下の別あるとなし、婦人にして其の貞操を賣り、男子にして所謂幇間若くは賣笑婦の隷屬たる箱屋となるが如きは、何人も之を侮蔑すべしと雖も、他の職業に至ては、竟に上下の差あらずとす、然れども職業として利益的なると名譽的なるとあり、前者は農商工鑛及び之に雇はるゝ銀行員、會社員、商店員及び輸送業者勞働者等にして、本來利益を主とするがために、比較的收入多きを例とするも、僧侶、敎師、文藝美術家、官吏、軍人の如きは後者にして、其の收入寧ろ少きも、他の尊敬を受くべき名譽の職分たり、新聞記者は寧ろ後者に屬すべきものにして、其の收入は初めより多きを望む可からず。

然れども今日の我が新聞記者にして、月收三百圓以上なるもの果して幾人かある、月收三百圓といへば、官吏に在ては高等官三等乃至二等の間に在り、軍人に在ては大佐乃至少將級に過ぎず、夫れ堂々たる操觚界の長老耆宿にして、一代の時論を指導すべき要職に在りながら、其の收入よりいへば、知事若くは大佐少將にも劣るといふ、果して何の故ぞや。

大會社の社員にして、少しく重き地位にあるものは、月收少くも四五百圓を下らずして、且つ毎年兩

期幾萬圓の賞與を得るを例とす、單に收入の點よりいへば、新聞記者は實に憫れむべきもの也、國務大臣、元老、博士、重役、將軍、富豪の徒と曾を把て交遊し、常に天下國家を以て任とすといふ新聞記者も、茅屋矮舍に辛ふじて膝を容れ、米鹽また屢々空しといふ、果して何が故ぞや。

新聞記者の地位を理想的にいへば、其の主筆記者格たるものは、彼の政事家の如く、全く經濟を超越したるものならざる可からず、語を換へていへば、衣食に苦むことなく、否、之に累せらるゝことなくして、唯だ專念に國論を指導し、一世を操縱して其の經綸を行はんとするものに限りて、主筆若くは編輯長の如き新聞記者中の幹部員たるを要す、政事家を以つて生活上の職業とする者の卑むべきが如く、職業的に新聞記者たらんとするものは、全く錯誤也、唯だ彼等以下の新聞記者に至ては、之を職業として可なりと雖も、尙ほ且つ僧侶、敎師、文藝美術家、官吏、軍人の如く、名譽的職業たることを自覺せざる可らず、唯だ其の收入や稀薄なりと雖も、兎に角衣食に事缺かざると、猶ほ敎師、官吏、軍人等と同一程度ならざる可らず、然かも事實に於て然る能はざるものは、それ新聞紙其のものが、未だ十分に經濟的に獨立し得るに至らざる結果ならざらんや。

（八）

試みに思へ、今日の我が新聞紙の代價は一ヶ月四拾錢内外にして、之を卸賣八掛けとするも、參拾貳錢に過ぎず、實際よりいへば其の卸賣の價格法外に廉にして、全く用紙代にすら足らざるもの少からず、今之を假りに一ヶ月參拾貳錢宛として、拾萬枚を賣るとせば、其の實收は三萬貳千圓に過ぎざるに非ずや、此の内より用紙代として貳萬圓乃至貳萬五千圓を支拂はゞ、剩す所七千圓より多きも一萬貳千圓の

み、是より編輯費、印刷費及び雜費を支辨するの到底不可能なるや言を俟たず。

單に雜費といふも、是より家賃、地代、販賣諸費、燈火及び有らゆる交際費を含み、印刷費は職工俸給手當を始め、インキ、諸器械修繕、缺損準備費等に至り、殊に編輯費は記者の俸給手當、通信費及び中外の電報費最も多額を要するを以て、其の用紙代の幾倍に上るや言を俟たずとす。

然るに新聞紙の收入といへば、主として廣告料の外なき也、其の廣告料の少き新聞紙に在ては、僅々一萬圓にすら達せざるもありといふ、新聞紙經濟の貧弱なる想ふべきのみ、現に新聞社の振出したる小切手にして、銀行社會の信用を得て圓滿に待遇せらるゝもの東京に於て五指を屈するに足らざるに視るも其の經濟の貧弱なるや察すべし。

我が帝國大學の工學科には、未だ新聞社として特別の建築法を構成したる參考書すらなしといふ、新聞紙の最も盛んなりといはるゝ米國に於ても、予の知る限り、獨立の建物は紐育ヘラルド、費府レッヂア等に過ぎず、他の魏然たる大厦に在るものと雖も、建物の幾部若くば大部分を他の商店或は事務所に賃貸す、殊に東京に於ては新聞社として獨立に建築せられしもの僅かに二三に止まるも怪むに足らず。

米國のジアナル及びウヲルド新聞の如きは、日々百萬枚以上も刊行すと稱するも、今や我が帝都に於ては、恐らくば貳拾萬枚以上を賣出すもの莫かるべし、紙數の賣行斯の如く少きのみならず、其の廣告に至つては、殆んど同日に語る可からざるものあり。

米國の雜誌アウトルックの如き、メトロポリタンの如きは一冊の定價僅々十仙のみ、其の用紙代にも引足らざると明白なるも、尙ほ且つ高價なる原稿及び寫眞等を挿入し、最上等の紙を用ゆる所以のも

は、一に多大なる廣告料あるが故のみ、米國は其の貿易に於て、昨年の如き六十億圓以上の輸出超過を視、總輸出貿に百億を越えしも、之を其內地の商賣に比すれば十分の一にも過ぎず、隨つて新聞紙雜誌の廣告の殷盛なる想像に餘あり、我が國の貿易は輸出に於て尙ほ十億を超ゆること多からず、內地商賣の額の如き、多くも百五十億には上らざるべし、米國大藏卿マッカヅー氏の報告によれば、米人一人の平均年收六百圓にして、一家五口は三千圓の年收を得る割合なりといふも、我が國に於ては、多くも其の十分の一に過ぎずして、一人平均六十圓、五口の一家は年收三百圓に過ぎざらん、其の富力及び商賣に大懸隔あるが如く、新聞紙の廣告にも大逕庭あり、殊に米人は廣告利用に熱中し、種々の意匠を競ふのみならず、思ひ切り突飛なる廣告を爲すより、實に世界に冠たるを以て、新聞紙の收入の豐かにして、其の事業が營利的に十分發達するも當然也、紐育ヘラルド新聞社が地代一坪一萬幾千圓に値する紐育市のブロードウエーに巨然たる一屋を構へ、大西洋の海底電信を私有し、巴里に華麗なる一英字新聞を刊行せるが如き豐富なる營業振は、到底、我が國新聞紙の夢想だも爲し得ざる所ならずや。

英國の新聞紙も亦堂々として、其の發達せるより到底、日本諸新聞の比に非ず、歐洲に於て比較的貧弱なりと稱せらるゝ獨逸の新聞紙と雖も、其の經濟的に基礎の固きことは、遙かに我が國新聞紙の上に在り。

且つ我が國の新聞紙は、歐米に比して遙かに多くの經費を要す。彼の諸國の新聞紙には、リノタイプなる器械ありて、タイプライターと同じく其の文字を押せば、語々綴々として組み出さるゝを以て、廣告の如き特別の文字を用ふるものゝ外は、別に文選職工を要せざれば也、彼の諸國の文字は僅かに三十

字に達せざるも、我が國の新聞用字は幾千種の多きを數へ、之に振假名をも附せざるを得ざるが故に、啻だに多數の植字職工を要するのみならず、最も多くの文選職工及び解版職工を要して、經費の嵩むと遙かに歐米の新聞紙の上に在るに、其の收入に至ては、却つて甚だ少しとせば、我が國新聞紙の著るしく貧弱なる、素より怪むに足らざるのみ。

（九）

我が新聞紙は、其の編輯法に於て歐米の其れの如く巧みならず、歐米の新聞紙中には、其の花客とする所に由て、特に專門的なるもの少からず、或はグラフィックの如く、寫眞及び挿畫を主とする者あり、又家庭の參考に資するを主とする者あり、或は敎育、或は軍事を主とするものあり、我が新聞紙に至ては、未だ斯る專門的のものなく、其の內外の電報を始め、記事、寫眞等に至るまで、彼も此も略々相似て、孰れの新聞紙を讀むも多く差別なからんとす、故に讀者は必らずしも甲若くば乙の新聞紙に限りて購讀するを要せず、多くは賣捌人の勸誘に從ふを常とす、故に新聞販賣業者なるもの、新聞製造に一擧手一投足の勞をなすに非ず、唯だ直接に購讀者と應酬するがため、多くの新聞紙を左右する勢力あり、甲の新聞紙にして、若し價格の割引其の他に於て意に適せざるものあらんか、直ちに乙又は丙の新聞紙を販賣す、故に堂々たる新聞と雖も、此の新聞製作には何等勞する所なき賣捌人の鼻息を窺ひ、百方して其の歡心を失はざらんとす、新聞紙の花客が絕えず浮動して新聞紙に安心を與へず、一に賣捌人に左右せらるゝが如きは、新聞紙に儼乎たる特色なく、甲乙丙丁孰れも千遍一律なるがためにならずや、而して是れまた新聞紙の經濟的に不振なる所以の一因たり。

富度大にして商賣の殷盛なる英國に於ける新聞紙と雖も、其の利益の多からざるためか、倫敦タイムスは彼の大英百科全書を始め、多く出版物を刊行して利を收めんとす、我が國の新聞紙にも書籍出版を兼營するものあり、また唯だ其の利益を以て新聞紙の經濟を補はんとするのみ、然れども新聞紙の刊行と書籍雜誌の出版とは、恰かも兄弟姉妹の如く、必らずしも無因緣といふ可らずと雖も、堂々たる新聞社にして、代理部と稱する一商店を設け、有らゆる賣殘り商品のブローカアを爲すは勿論、甚だしきは年末の臺引までを賣捌きて、社前をして臭氣紛々、人をして鼻を掩はしむる如きは、頗ぶる異なりとせざる可らず、殊に新聞紙が一の高等營業として課稅を免ぜらるゝに乘じ、營業稅なしに尋常の商賣を營むが如きは、德義上の非難を免かれず、然れども新聞紙の損失を補ふがため、餘儀なく之を敢てすと辯疏したる人あるは、是れ寧ろ詐らざる告白として世上識者の私かに同情する所なるべし。

多年通信事業に鞅掌して、精苦最も努めたる某氏曾て曰く『通信事業は到底收支相償ふものに非ず、盛んに新聞紙の廣告取次を爲し、其の利益を以てすると雖も、竟に永久に獨立し得べき見込なし』と、是恐らくは最も其の眞實を吐露したるものならん、我が實業界の先輩が曾て二十萬圓を醵出して、之を擧て或る外國關係の通信業を扶けしに看るも、通信事業の經濟的に獨立するの難さや想像に餘あり、何ぞ況んや通信事業に幾十倍する大規模の新聞紙をや、新聞紙が今少しく高價に賣られ、且つ主として多額の廣告料收入なき限り、到底經濟的に獨立を完するヿ難しといふべし。

政府若くば政黨の機關新聞たるものと雖も、政府政黨より十二分の補助を受くるに非ずして、大部分の經濟は、新聞紙自から其の力を以て之を擔當せさる可らず、然るに政府政黨の機關新聞たるものは、其の論文及び記事の餘りに偏倚して、往々事實をすら枉ぐるヿあり、反對者に對する攻撃まゝ軌道を逸

して、罵詈讒謗に過ぐることあり、新聞紙としての品格餘りに卑しきのみならず、素人をしても信用を繋ぐ能はざらしむるものあるを以て、其の實行普通新聞に及ばざると遠く、隨つて其の損失額また多し、故に政黨中少しく考慮あるものは、今や公然機關新聞を有するを欲せず、却て陰に記者買收其の他の方法に由て、暗默の間に其の機關用を爲さしむるといふ、彼の東京日々新聞が太政官御用の看版を掲げて多年政府の機關たりし時、福澤先生交詢社の窓前より、遙かに日報社（東京日々新聞發行所）の側背を指さして曰く「彼れ遠からずして失敗し、其の巨然たる家屋また他の手に陷るを視よ」と、彼の尾張町の建物が今や赤煉瓦に改築せられて、數個の商店に分貸せられつゝあるを思へ、機關新聞の發達しがたきや知るべきのみ。

（一〇）

我が國今日の新聞紙は、實に百を以て數ふべし、然れども記者及び職工等のため、養老又は遺族扶助等の制度を確立し、其の從事者をして安心して其の事に從はしむるもの幾許ぞや、殆んど全く絶無ならん、否、絶無に非ずと雖も極めて稀有にして、五指を屈するにも足らざるべし。

官吏たること十五年ならば、所謂恩給なるものあり、而して任官中に死すれば、遺族扶助料の制あり、假令全く遺族の生計を支ふるに足らずとするも、尙ほ一定の制度あるがため、官吏をして薄俸と雖も、孜々として其の事務に鞅掌し、また恪勤廉潔にして、不正を營むと勿らしむ、然るに新聞記者の勢力ありて而して誘惑多きや、遙かに官吏に過ぐるに拘らず、又其の平生の俸給微薄にして、遠く官吏にだも及ばざるに拘らず、一の恩給方法も、遺族扶助料も之なしといふ、新聞記者たるの不安なる如何ぞや。

予の如き操觚界に入りし以來、覺えず三十有餘年を過しゝものと雖も、何等恩給若くは遺族扶助の保

證を有するに非ず、自から移りて他の利益多き事業に從はざりし生來の愚鈍乃ち然るのみといふも、家に擔石の蓄なくして却つて負債あり、妻兒また少からざるを思ふ時、如何に無頓着と雖もまた懼々然たらざること能はず、我が同業者にして之と同憂の士また少からざるべき乎、若し唯だ『筆を擔へる一個の渡り職人』たるに甘んぜば知らず、少しく天下國家を思ふものに在ては、誰か憫殺笑殺を禁ぜざらん。

多くの新聞紙にして、平生相當の俸給を其の記者に與ふる能はず、少くも其の地位職分に至當なる報酬を給せず、爲めに新聞記者をして、誘惑を排斥する能はずして、良心の苛責を忍びつゝ幾多の正しからざることを敢てし、竟に全く其德性を麻痺するに至らしむるに止まらず、安んじて其の職に從ふべき方法をも立つるに至らざるは、主として新聞紙の利益稀薄なるの致す所たるを思はゞ、新聞紙の經營者は、茲に根本的考慮を費さゞる可らず、是れ新聞記者の道德を論ずるもの丶必らず逸す可らざる問題とす。

思ふに從來の新聞紙は、其の經營法に於て多くの謬りあるべし、文字の用法に注意せずして、印刷上に多くの手數と費用とを要するを顧みざりしことは其の一也、好みて他の機關となり、先天的に營利事業として立つの心なく、爲めに經濟の獨立に重きを置かざりしことは其の二也、事務繁雜にして徒らに人を要する多きがため、實効擧らずして却つて費用を嵩ましめしは其の三也、編輯法に意匠及び特色なくして、賣行きの多からざるは其の四也、新聞紙の數多きに過ぎて、其の結果自然に新聞紙の發行數少きは其の五也、前項の影響として無理なる競爭多く、其の用紙代にすら足らざる程の安價と爲し、廣告料の如きも亦頗ぶる低廉に過ぐるは其の六也。

或る人曰く『新聞紙程多くの人を使用し、事務また繁雜にして而しき利益の乏しきは無し』と、一外國新聞記者曾て來りて我が某新聞社を訪ひ、其の應接室に揭げたる寫眞額面を目指して曰く『是れ何等

の人々ぞや』曰く『是れ悉く我が社員也』彼の記者驚きて曰く『何ぞ多くの人を要すること玆に至るや、我が新聞の如き英國有數の大新聞と稱せらるゝと雖も、其の社員數は、乃ち此の三分一に過ぎざるのみ』我が新聞紙の利益の稀薄にして、寧ろ損失多きや思ふべし、故松下軍治氏曰く『我がやまと新聞をして今日に至らしめしまでには、實に通じて八十萬圓を投じ、一時は一ヶ月七千圓以上を損したることありき、此の點よりいはゞ、我がやまと新聞社は百萬圓にあらざれば他に渡しがたし』と、新聞紙の損失の大なるや斯の如し、其の記者を優遇して、少くも他の誘惑に克つ能はざらしむるも、多く怪むに足らざるのみ。

普通營利事業に在ては、他より之を利用すべきこと少く、隨つて其の從事員に對する誘惑は甚だ少し、然れども如何なる營利事業と雖も、特種の事情のため何等かの機密（勿論不正に非ざるも）なきは莫し、然るに其の競爭者にして之を奪はんがため、其の從事員を誘惑せんとすること絶無とす可らず、唯だ其の從事員の德義を守ると、且つ相當の俸給と賞與とを得るに安心するがため、未だ多く惑はされざるのみ、今夫れ新聞紙は、最も早く中外の機密を知るに於て、且つ民心を左右し輿論を進退するの勢力あるに於て、之を利用し濫用せんとする者少からずして、新聞記者に對する誘惑の手は、恰かも四方より綱を張るに異ならず、投機市場に巨利を覗ふものが新聞記者によりて、其の得たる機密、殊に重要なる中外の電報を偵知せんとするが如き、將た銀行會社其の他に關して故意に信用を揚げ、若くは過度に之を傷けんとして、巧みに新聞記者を操縱せんとするが如き是れ也、彼の最近に財界攪亂問題として世を驚かしたる事件の如き、また全く此の一例に非ずや。

大正の今日、最も人心を蠱惑し易く、また最も人心を煽動し挑發し激昂せしむるに効力あるもの、實に新聞紙に如くはなし、新聞紙一たび少しく一銀行の信用を損するが如き記事を掲げんか、其の門前忽ちにして預金引出人に由て充塞せられ、其の銀行は旦夕にして破産の厄に罹らん、彼の憲政擁護に方り群衆激昂して議院を包圍し、石を投じ火を放ちて、竟に殺傷の慘事を生ぜしも、主として新聞紙のためならずや、鋭利鋏をも斷つの銘刀を用ゆるものは、良劍客ならざる可らず、勢力ある新聞紙に筆を執る記者其の人が重大なる責任あると共に、最も多く德義を守らざる可らざるや論莫し、而して近時却つて新聞記者の德義を疑ふべきが如き問題相亞で起るは、全く聖代の不祥事ならざらんや、言を立つる者必らずしも千古の業を成さずと雖も、今にして新聞記者を目して空言の徒と爲すは謬まれり、能く之を重んずると共に、また常に責むるに嚴格なる德義を以てせざる可らず。

世の富豪中には、新聞紙の名器にして而して一朝失墜するを惜み、若くば記者其の人の才を憐れみて私かに資を出して之を援くる篤志者なきに非ざるべし、與ふるものに求むる心なく與へらるゝもの爲めに主張を枉ぐるに至らず、恩を恩として忘れず、之に盡すに其の道を以てして寸毫も謬るなくんば、素より難ずべき所なしと雖も、新聞紙及び記者としては、是れ一の變のみ、常に非ざる也、其の常道としては、宜しく必らず新聞紙をして經濟的に獨立せしめ、記者亦頂天立地、苟くも其の自尊心を傷けざるを要す。

古人曰はずや『士人の貴ぶ所は節行を大なりとす、軒冕は之を失ふも時あつて復た來ると雖も、節行は身を終るまで得べからず』と、新聞記者にして其の天職の貴くして、而して其の生計の卑薄なるべきを省みず、富裕なる豪客に倣ふて遊蕩を恣にし、物質的欲求に急なるがため、其の勢力を濫用して、他の誘惑に隨つて正しからざる利を網するが如きは、實に自から節行を賊する也。

機械戰か肉體戰か

歩兵少佐　櫻井忠温

この問題は重大な問題である。歐洲戰の實狀よりして將來の戰爭は機械戰にあるか、肉體戰にあるかといふ問題は容易に口を出すことが出來ぬのである。歐洲戰に於て機械力獨り威力を逞ふして居るのを見て、今頃肉體戰などゝいふ舊弊な戰法は頭を出すことの出來ぬ有様であるが、果して然るかは大に考へて見なければならぬ。また少しは考へんでもなかつたのである。ところが三月號の中央公論が三日の日手に入つたので、それを持つてその日の約束であつた同志社の講演に出掛る途中電車の中で開いて見ると、來月號の記事豫告に立派に「機械戰か肉體戰か」といふ表題で私の名が載つてゐるのを見て實は大に狼狽したのである。瀧田君と約束したことは頭に殘つてゐるが、其の約を果すは何れの時にあるか、そこまでは考へてゐなかつたのである。御催促のないのがもつけの幸ひぐらゐに思つてゐたので、實はもう忘れてもらひたかつたのである。そこへこの豫告を見たのであるから大に驚いたのである。遠方から搜り打ちをしても利目がないとでも思はれたか、直ちに突撃を決行されたのは贊成するところであるが當方では大に弱つたのである。しかし四月號に載るといふことになつてみれば、安閑としてゐるわけに行かぬので、狼狽又狼狽を以て筆を取つたのであるが、幸か不幸か、風邪のため寢込んでしまつたので、中止の止むなきに立到つたのである。そこで一月後れてけふ四月二日――あす雨が降れば同志と叡山へ登らうといふことになつてゐる（天氣がよければ登らうといふのが當り前であるが）前日、不精無精に筆を取つたわけである。しかしこれといふ名案も浮いて來ない。たゞ責塞ぎに思ひ付きのまゝを書き並べてみるといふだけである。

蒸暑い晩である。あすは屹度雨に違ひない。叡山に登ることを樂みにしつゝペンを走らしてゐるのである。

一

機械戰か肉體戰か、科學の力が戰爭の上に最も働いてゐるか、人肉が安價に戰爭の犧牲に供されてゐるか、これは歐洲の戰爭に於て明瞭に我等にそれを示してゐるのである。

即ち歐洲の戰爭は科學戰機械戰最も目醒しきものであつて、人間其者は却つて戰爭の慘烈から避けて居るといふ珍現象である。決戰的戰鬪を避けて專ら塹壕に膠着し、臆病な子供の喧嘩のやうに遠方から長い竹竿で叩き合つてゐるやうな戰爭である。彼の慘烈なる步兵戰の如きは殆んど之を見ること能はずして大砲、飛行機の如きが獨り威力を揮つてゐるのである。私は曾てこの雜誌に「歐洲戰に於て活動すべくして活動せざるものは軍隊其物である」と書いたことがあるが決して奇矯な言ではないつもりである。

尤も兵器機械が驚くべき偉力を奏する今日では人間は到底戰場に頭を出せないわけである。旅順に於ける日本軍の强襲の如きは野蠻人の戰爭であつて、今日の新兵器に對してはかゝる戰法は影を潛めなければならぬ如くに考へられるのである。旅順では强襲又强襲を以て要塞前地の諸障碍を通過し一堡砲臺の主たらんとする大膽不敵なる行爲を以て世界の人を驚かしたのである。築城を無視し、火兵を無視し、意外にも意外なる高價を拂つたが、かゝる戰法は最早今日影を沒すべき時代が來たのであるかも知れぬ。

四十珊知砲、毒瓦斯、飛行機、自動車等の活動は歐洲戰の美觀である。日露戰爭では日本軍が廿八珊知砲を戰場に出したといふので、露軍は勿論、世界の兵學界大に驚いたのである。然るに今日では野戰兵器として四十二珊知砲なる巨砲——二百五十貫の彈丸、其價格五千二百六十圓といふ奴がビユー／＼と飛んでゐるのである。名築城家ブリアルモンの築いたリエージも一溜りもなくこの大砲のために叩き潰されてしまつた。獨軍の失敗した方面にはいつでもこの大砲がなかつたともいふが或はさうかも知れぬ。四十珊知砲は戰爭の運命の鍵を持つてゐるといふのも誤りでない狀況である。そこで佛蘭西では五十珊知といふのを造つたといふことである。すると英國も獨逸も之に負けまいと目下六十珊知といふデカイ奴を製造中であるといふことであるが、今に七十珊知八十珊知九十珊知だのといふのが現出せないとも限らぬ。戰爭の勝敗は一に此の巨砲に

よつて決せらるゝといふので大砲の競爭を始めた。

この彈丸はリエージに於ては第一發に千七百人を殺し、第二發二千五百人を殺した。そしてその中心から數哩の遠方にある家も樹も人も馬も、蠅が旋風に吹き捲くられるやうに飛んでしまつたのだといふ大袈裟な報導がある。何割掛直があるか知らぬが恐ろしく吹いたものである。

歐洲の戰場は砲彈で耕されてゐるのである。シャンパーンに於ては英軍は僅か四十五分間に十三萬五千發の砲彈を打つて居る。ソンムでは佛軍は二千萬發の砲彈を準備して取りかゝつた。砲彈を以て戰場一面を埋める覺悟である。ベルダンに於て獨軍の打つた砲彈は一千メートルの正面、六百メートルの深さ——八町四方にも足らぬ地域に五時間八萬發といふものが落ちて居る。

砲彈獨り空を唸つて人間は益々壕底に沈下しつゝあるのが歐洲戰の現狀であるといふも誤りでないのである。この頃英國政府の撮影とかいふ振込みで活動寫眞を持ち廻つてゐるものがある。私もそれを四條南座で見た。砲彈破裂の光景などで大に人氣を呼んでゐた。私の隣りに三十ばかりになる女がゐた。彼女はそれを見て「誰れもゐやはらんところへ彈丸を打つてはる」といつたので、私は「これは皮肉だ」と思つたが、一人の女の見た歐洲戰は果てしもない原野に無數の砲彈が落ちて、ただ洞穴を穿つてゐる光景に過ぎないのである。

またこれが歐洲戰の實狀でもあるのだ。うどん粉をバラ撒いた中を走つてゐても、寫眞では爆烟の中を突擊してゐるやうにも見えるものだ。それでも辯士君は「これは決死隊突擊の光景であります。ベルダンではかかる慘劇が屢々繰り返されたのであります」といふ御說明であつた。

歐洲戰は砲兵戰、機械戰であつて「人間の戰爭」でない。小銃を持つ步兵も壕底に隠れてゐて射擊するやうな工面までするやうになつた。塹壕の上には筒先のみを出して、壕底にゐる銃手は全く體を出さないで反射鏡によつて照準し射擊する仕掛である。「神は何故吾

人の眼球を頭上の最頂部に附着せざりしぞ」と塹壕から頭を出すことを怖がつてゐる兵隊に以て來いの鐵砲である。

人命もとより惜まなければならぬ。これが生物の本能である。しかし極度に之を愛惜して「戰爭はするが命は棄てまい」といふならば始から戰爭をせぬがいゝ。

劍と劍との戰爭、射程の短かい弓矢の戰爭から進んで小銃となり大砲となり今日では數里の遠方から射擊の出來る巨砲の出現にもなつたが、かゝる兵器の進步は一面から見れば人間が生命を惜しむの結果近戰を避けて遠戰に移る自然の傾向を示して居るのである。しかし主なる目的は人馬を殺傷するにあるのである。我れの一人を損する間に敵の三人五人十人を殺さねばならぬのである。しかし如何なる大砲も、頭を出して居らぬものを打つてもいくらも効力はない。現に歐洲戰に於ては一人を殺すに二千發の砲彈を使用してゐるといふ數が表はれて居る。日露戰爭では三十發であつたが、歐洲戰では二千發——一彈平均二十圓と見て四萬圓を要してゐるわけである。卽ち砲彈の大多數は人間を殺して居らぬといふことになるのである。それでやられるものは餘程間拔けな男、「ボヤ〳〵してはる」男に違ひない。

これ、火砲の威力が減じたわけでは無論ない。威力は非常に增大してゐる。發射速度も增した。非常な遠距離から射擊も出來るやうになつた。しかしそれに伴ふて彈の多い割合に命中しない。命中する彈も多からうが命中せぬ彈も非常に多い。「四十珊知砲は一彈に千五百人を殺したの、毒瓦斯は一聯隊を全滅したのといふ報導に驚いて、戰爭の勝敗を唯かゝる兵器によつて決せらるゝものと考へるのは粗雜である。一發に千五百人を殺すから千發に一萬五千人を殺すといふわけに行かぬ。千五百人を殺すこともあらうが一人も殺さぬこともある」と冗談半分にこの雜誌へ書いたことがあるが全くその通りである。

多く打てば少く打つより中りがいゝに違ひない。しかし頭を出してゐないものをいくら打つても中らない

に極つて居る。速度の増大しただけぞれだけ却つて命中率は減少してゐるのである。兵器の精巧却つて反對の結果を來して居るのである。

二

大口徑の砲は數里の遠方から射擊して十分の效力がある。しかし中れば十分の效力があるので中らねば何もならぬ。學者技術者は「中るべき筈である。其の原理は斯く／＼である」と吹聽するが、さて之を使用する人間はさう學者技術者の思ふ通りにはならぬ。戰場に於ける人間の感情は決して平時考へると同じには行かぬ。大砲試驗場で打つた成績を以て直ちに戰時效力とするわけに行かぬのである。人間の感情は決して平時の如くではないのである。戰爭に臨むものはその壯快なる光景を夢み、勃々たる功名心に驅られて居るが、焉んぞ知らん壯快なるべしと考へた戰場は恐ろしき慘劇の演ぜらるゝ所である。死、血、疲勞これ等の迫害によつて頭の大部分を占領されてゐる銃手砲手――すべての戰場の人間は一種の發狂人である。「戰が烈しくなつて頭が熱してくると彈丸の音も聞えぬ。騷がしさも耳に入らぬ。戰友の死んだのも知らずにゐる。銃を打つてゐるものも無意識に引鐵(ひきがね)を引いてゐる。急にクルッと向きを變へさせられても知らずにその方を敵と思つて發砲するくらゐのものだ。…… 胴の上にあるものは首でなくて變な氣味の惡い物だ」などゝアンドレーエフは「赤き笑」に戰場の狂兵を書いて居る。獨軍がリエージを攻擊した時連日連夜の戰鬪に疲れた多數の獨兵はムーズ河に身を投げて死んだといふが、物狂はしさと怕しさの中にある人間――狂人それが鐵砲や大砲を打つて居る。

すべて、ものといふものは理窟通りにならぬといふことは最も明瞭に證據立てられてゐるのである。射擊場で十發中るものは戰場では一發か二發しか中らぬのである。大砲の如き遠方から射擊するものでも戰時は平時の四分の一か五分の一である。

砲彈飛來の中に在つて平常の如き感情であるものは氣狂ひか阿呆である。彈丸が奇音を發して近く頭上を

通過する時頭首の收縮するを覺えざるものはないのである。神色自若たるものもあらう、しかし自若たり得ないものが大部分である。「敵方を見る人の姿を見よ。顎を上げ頭部を後ろにし、力めて命中面を減ぜんとして居るではないか」と何にかに書いてあつたやうに覺えて居る。如何なる精巧の兵器も、たゞ學者技術者の机上の論の如くなるものでない。兵器もまた人間の感情のまゝに働くのである。實戰の經驗なきものは沈着して精密に照準せよといふ。しかし怕ろしき戰場の光景の中にあつて果してこの要求を完全に履行することが出來るであらうか。かゝる要求は結構である。またかくの如くせなければならぬ。しかし畢竟非實戰的の論であつて、人間の感情は決して器械的に運轉はしないのである。

新兵器の出現に驚き、誇大的の報を聞いて直ちに兵器機械戰獨り威力を逞ふし、人間は到底戰鬪上の主勢力にあらず、戰術玆に大革命を來したりと思ふものは實に淺薄である。

三

機械力もとより驚くべきものである。しかし今日の戰爭は人間其者の戰爭にあらずして、兵器が戰爭の主體であるかの如く考へるのは全く「戰爭」の何者たるかを知らぬのである。機械力を輕んずるのではない。精神力のみを以て文明の利器を顧みずといふのでは勿論ない。白兵萬能などゝいふ無茶は通用せぬ時代である。しかし、砲彈は金錢を以て購ひ得べく若干時日の間に製造も出來る。然るに之に代ゆるに不換金の尊貴たる肉彈を以てせんとするは不經濟極まる、などゝいふ論者もあるが實に危險至極の議論といはねばならぬ。かゝる說が勢力を占むるとなれば實に由々敷大事である。この說俗耳に入り易い。しかしこの說をなす輩と雖砲彈を以て戰鬪を始終せんとするつもりではあるまい。またこれが出來るわけもないのである。

成程一人の人間は生後二十年にして始めて一個の戰鬪兵となすに過ぎぬが、砲彈は瞬く間に製造されて而かも一彈數百の人類を殺傷し得る恐るべき物である。

しかし動物の鬪爭に於て絶對的の勝敗を決し得べきものは遂に肉體と肉體との鬪爭に待たねばならぬのである。砲戰の如きは肉體戰の一つの準備行爲に過ぎぬのであつて、眞の戰鬪は遂に劍尖と劍尖肉體と肉體との衝突である。其他はすべて皆これに附帶する動作である。即ち砲戰は肉體戰のための一つの準備に過ぎぬのである。ドラゴミロフの言を借りていへば、近時銃槍戰の稀なるは往々人の信ずる如く銃槍戰の消滅せるにあらずして我と等しく銃槍の使用に適する敵兵稀なるに因るのみ。銃槍は戰鬪目的遂行唯一の戰法にして其他の諸作業は皆此の目的を達するに要する一つの補助に過ぎぬのである。然るに肉彈の代償として砲彈にのみ寄らんとする如き論は、抑も「戰爭」の何者たるかを知らぬ者であつて、塹壕に噛ぢり付いてゐる兵隊に喜ばれさうな論である。

人或は肉體戰壯快なり然れども人命は尊むべし猥りに肉體を火兵前に曝露する如きは野蠻人の戰爭なり。戰爭に在りても極力人命を保護して可及的砲戰機械戰を以てすべしといふものがあるかも知れぬ。然らば宜しく戰爭を廢すべしと申すより外に之に答ふる術を知らぬ。

歐洲戰に於て多數者が少數者の攻擊を受けて而かも其の壓迫に堪へ兼ねてゐるのを見てもこの問題は明かに解決されるではないか。日露戰爭前獨逸に於ては學理的射擊の成績に心醉して、將來の戰爭は火器の效力を發揚する爲め防禦を以て戰爭唯一の戰法となすべしとの迷說を抱き、火器の效力に恐怖して到底前進不可能なることを痛論してゐたのである。然るに日露戰爭の結果は忽ち獨逸軍をして實戰的に蘇がへらしめたのである。即ち精神力は戰爭の上に極めて重大なる要素たること、攻擊は戰勝唯一の原因たることを發見せしめたのである。

獨逸は忽ち戰鬪方針を一變して「卓越なる攻擊精神を以て絶對的前進」これを以て大に練つたのである。制式的敎練に拘泥せず、精神的實戰的敎練に精力を注いだのである。「步兵は火力を以て決戰するを常とす」

との主義は久しく獨逸軍を風靡し、火戰を以て戰鬪を終始すべしとの迷説を抱いてゐたのであるが今日はかかる非實戰的の戰術は影を沒してしまつたのである。「獨逸は大砲が多い、だから一番強い」などゝいふ大砲萬能論者は全く獨逸軍の眞相を知らぬのである。卽ち「少數者が多數者を壓迫して居る」こゝに內部的の觀察をしてみなければならぬのである。

要するに、遠戰具を以て勝敗を決すべしといふ、明治初年の戰法——種ヶ島の渡來に驚いて白兵使用絕對無效を叫んだ時代に逆轉したやうな議論を吐いて俗人を欺くのは甚だ危險性を帶びて居る。

四

機關銃は近戰用の兵器である。一分間五六百發を發射し瞬間の效力を收むる突貫的兵器である。目下一分間九百發發射のものも發明されて居るが、あのカタカタといふ機關の騷がしい多忙な音響を聞くと何人も縮み上がるのである。大砲は却つて怖がらぬが機關銃には怖れるのである。其の銃口から出る彈丸は恰も一本の火の棒である。ブルガリアの少佐セルヂウズは騎兵聯隊を以て機關銃隊の前に突擊して之を擊退したが、セルヂウスは軍法會議に廻された。それは機關銃に彈がなかつたからで、彈があれば人も馬も一つ殘らず打ち殺されたに違ひない。機關銃の前に突擊するなどゝいふは素人戰術であるといふのである。これはショーの「武器と人」にあるのだが、セルヂウスはために愛人の寵を失ふに至つたとは機關銃の威力も實に恐ろしいものでないか。

この恐るべき魔物が毒瓦斯、爆彈陸上ドレットノート、迫擊砲などゝ共に歐洲の塹壕に於て怪腕を揮ふてゐるのである。

歐洲戰は塹壕戰であつて一連不斷の大要塞と見るべきである。其の戰鬪は極めて執拗なる地下戰又は小數兵の爆藥戰機關銃戰である。損傷も非常に多い。しかしかゝる短戰用兵器の戰鬪が決戰のためでなくして單に正面の苦痛を排除せんがためであるのは歐洲戰の一つの特色である。卽ち極めて退嬰的戰鬪であつて、狹

小なる地域を追ふたり追はれたりしてゐるに過ぎぬのである。乾坤一擲の運命を賭して輸贏を決せんとするのではなくて、たゞ自己の正面の苦痛を除かんとする極めて狹い意味に於ての戰鬪である。尤も塹壕を以て相對する現狀に於てはこれも止むを得ないかも知らぬが、戰況今日の如くなつたのは、要するに彼等に戰ふ意志がないからである。現狀維持、彼等の目的はこれ以外には出ないのである。

無限の砲彈、機械といふ機械によつて戰はれつゝある歐洲戰に何故大々的決戰が起きないのであらうか。彼等は砲戰機械戰によつて絕對の效力を收むるにあらざれば飛び出さうとしないからである。戰場敵の一兵なきに至るまで其時を待たうとするのである。しかしかゝる時が遂に來るであらうか。「步兵は砲兵の協力によりて前進す」この原則は常に彼等が口にして居るのである。しかし事實は「砲擊によつて地上一物の障碍なきに至つて步兵始めて前進す」といふ珍戰法である。

多くの塹壕の錯綜せる迷宮、豫期せざる困難の突然現出する迷宮、將に目標に達せんとする瞬間に於て機關銃の俄然現出する迷宮、此の如き迷宮內に盲目的に步兵を放つは無謀なり。と彼等はかう言つて居るのである。もとより無謀に肉彈を投じて塹壕の埋草とせよといふのではない。しかし大砲が何れの時この迷宮を根本的に破壞するであらうか。其時を待たんとするのであるか。吾人はかゝる贅澤な呑氣なことを考へて居るわけには行かないのである。

歐洲戰は鐵量の競爭戰である。鐵といふ鐵、古釘でも靴の鋲でも掻き集めて五年なり十年なり最後まで打ち續けた者が勝利者となるのであらう。兵器彈藥の欠乏などゝいふことも早や問題に上つて大騷ぎをして居るのである。大砲も空腹では戰爭どころの騷ぎでない。彈がなくて彈藥盒の中にチョコレートを入れて居る兵隊が出來るやうになつては大變である。チョコレートどころでない石ころでも入れて置くより外に何にも入れるものがないといふ兵隊がセルビアあたりには居るさうだが、腹が減つてだぶ／＼になつた服を着た兵隊

が空筒を枕にして寢て居るといふのは一寸面白い圖である。

某軍では極端に兵器彈藥の損失を恐るゝの餘り、戰鬪少しく危險に頻するときは戰鬪其者よりも兵器彈藥を失はざることを以て第一要件とし大砲の如きは其使用謹愼に過ぎ之を損失する者は裁判に附せらるゝといふ有樣である。兵器機械を唯これ救世主と仰いで隨喜感仰の淚をこぼしてゐるとは實に哀れな次第である。

五

戰場に在る人間は極めて神經的である。到底乘ずべからずと思ふ中にも一呼吸間一髮の餘裕を發見してそこに大なる仕事をすることが出來る。戰爭はつまりその小さな空間の爭ひにあるのだ。無限の砲彈によつて封鎖されてある中にもなほ乘ずべき空間はいくらもある。その空間は極めて小さいものであるかも知れぬ。しかしそこに大なる仕事をすることが出來るのである。

我等は敵から投げた爆彈を摑んで敵に投げ返した經驗を持つて居る。破裂せない前の一瞬間にそれを摑むほど神經的である。その一瞬間――それは一秒間であるか或は一分間であるか、或は全く破裂せないか、それは全く不定の問題である。しかし兎に角一瞬間である。手を離さぬ内に破裂するのもある。その空間は極めて小さい。しかしそれを摑むほど頭が細かく銳どく働いて居るのである。

これは一つの小さい例に過ぎぬが戰術上の諸種の手段も要するに其空間を如何に摑むかにあるのである。

我等は將來常に防禦者でなく攻擊者として立たねばならぬ。さうして寡兵を以て衆敵を破るの覺悟がなければならぬのである。之が爲には有形的要素に於ては到底乘ずべからずとするものも、なほ其間隙に乘じてそこに大なる仕事を企てなければならぬのである。

將來の戰爭は兵器機械の優勢も十分之を占めなければならぬ。しかし無限の兵力を提げて、なほ且つ決戰的行動を避けつゝある如き戰法は斷じて之を取ることは出來ぬ。兵器大に大切である。しかし依然として肉彈である。巧妙なる戰術とこの猛氣とを以て、常に寡

を以て衆を破らねばならぬ。塹壕に膠着して徒らに時日を遷延する如きは到底之を許さぬのみならず、兵器の威力に於て相當の効果を收めたならば直ちに出でゝ突撃、この主義に出でなければならぬ。砲彈の絶對効力を待たんとするは恰も百年河清を待つに等しく到底望み得られぬのである。歐洲戰の現狀の如きは國民性としても共鳴を感ずることの出來ぬ戰法である。然らば國民精神乃至軍人精神の將來は如何、かくの如き戰鬪に堪ゆるや否やといふ問題が起きて來るが、これは大問題である。

日本軍が戰捷の一動力は神經の鋭敏なるに在りといつた人がある。日露戰爭後ある露人は「吾人は曾てボア人と戰ひし如く日本人は狡猾なりし爲め多大の損害を蒙れり」といつて居る。なるほど日本人は小悧巧に立廻る方である。鈍重牛の如き露人に取つては日本人は剃刀のやうにも見えたらう。曾て奉天新聞が「露人蠅の如く日本人蚊の如し」など丶書いたことがある。露人が滿洲に於ける經營振を見ても實に執拗な氣の長い遣口であつた。拂へども拂へども來る蠅で、五月蠅いこと此の上もない。しかし日本人は短兵急である。肝癪持である。劍付鐵砲でチク／＼とやるといふ風で丸で喧嘩腰である。丁度それが蚊のやうで露人蠅のやうだといつて居るのである。

日本人の戰鬪振はどこまでも神經鋭敏に、狡猾に（少し文句は惡いが）蚊式に、その特色を以て戰はねばならぬ。

今日の如き著しき兵器に對しては夜戰は大に大切である。人の寢靜まる頃にソロ／＼這ひ出さうといふのだから少し質のよくない方だが、夜陰に隱れて敵前に近接し不意に起つて突撃するといふ遣口でなければならぬ。これ又蚊式である。蚊といふ奴は日の暮れから出て來て人を惱ます奴である。彼等の戰法は夜戰を以て原則として居るのだ。旅順にゐたある露兵が「日本兵虱の如し」など丶言つたことがある。「日本兵は山の襞をゾロ／＼と這ひ上つて來る。いくら潰しても潰してもやつて來る。丁度虱のやうだ」と仰せらる丶ので

ある。亂とは恐入るが、これ又暗所から暗所を傳ふて活動する奴である。所謂夜戰兵である。

ベルダムに於ては獨軍は屢々夜間攻撃を以てした。しかし未だ大々的には實施されてゐなかつたやうである。日露戰爭に於ては露軍は日本軍の夜襲に懲りて居るので、レンネンカンプの如きは夜戰論者の隨一人で獨逸の兵器に對しては夜戰を以て劣勢を補はなければならぬといふ意見を持つてゐるのである。然し「暗黑」はすべての物を一變するのである。其の行動は容易の業でない。鋭敏な悧巧な兵隊には要求も出來るがノロマには到底問題にならぬのである。日本軍は過去の戰役に於ても屢々夜戰を以て成功してゐるのである。殊に大部隊を以て全く未知の地に於て何等の準備なくして成功して居るのである。

日本軍は今後益々蚊式亂式を以て大に其の特色を發揮せねばならぬのである。

六

戰爭は無茶が原則である。野蠻が本能である。文明の徳義のといふ野暮の通らぬところに戰爭の興味があるのだ。「力の强味」これさへあれば何でも通る世の中である。腕がなければ眼を探照燈ほどに光らしてゐても睨みが利かない。泣寢入りである。

獨逸從軍詩人ガングホーフエルは皇帝の言として次のやうに書いて居る。「吾々獨逸人を野蠻人なりといふ人々は文明といふものと、戰爭といふものとの區別を知らぬらしい。我等は戰爭のために全力を盡してゐるのだ。それから先は成るやうにしか成らない」と、その言實に味ひがある。皇帝の言の通りである。道德的紳士必ずしも戰爭には强くない。有識の人必ずしも戰爭に强いとはいへぬ。戰爭は獸的の爭ひである。ブルドックの喧嘩である。そこに於て大に野蠻性を發揮せねばならぬのである。力の强い奴、腕のある奴、これが常に勝利者である。戰爭を夜會同樣に心得て居る紳士諸君は大砲の奏樂を以て戰爭の結末がつくものだと思つてゐるのであらうが、さう旨くは問屋が卸さぬ。

「日本人は動物的なり。血を見れば益々狂奔すること

動物と異ならず」とある外國通信員がいつたことがある。これ我に取つては實に多大の讃辭である。蛾が灯の中に飛び込んで、そこに死ぬるやうに、向日葵が太陽を望んで首を振り向けるやうに、光と熱と血に對して熱狂する性狀は動物的であるかも知れぬが、實に賴もしい一種の發狂である。そしてこの發狂は戰鬪實行上の最大原動である。この蠻性が肉體戰の四十珊知砲であり、毒瓦斯である。

この狂性蠻性が我等をして常に攻勢を取つて敵に當らしむるのである。タイムスは「日露戰爭は時間に對して最も寬大なる人間と、熱中的なる人間との爭ひである」と評したが、日露戰爭が意外に早く結果がついたのは、日本軍の攻擊又攻擊、前進又前進の結果であつて、露軍は却つて日本軍攻擊の繁に堪へなかつた傾向があつたのである。今日の兵器科學の力を以てしては歐洲戰は一層急激なる發展を見なければならぬ筈である。しかし反對に戰爭器械は極めて鈍い運轉をして居るのである。

しかし如何に野蠻の元氣も兵器機械の力に敵し得られぬ場合もある。實際に於て兵器に於て非常なる優勢を以てせなければ肉彈も遂に使用し得られぬに至るかも知れぬ。卽ち今日の實況に鑑みて將來大に科學上の發達を遂げなければ到底敗者たるを免れぬのである。歐洲戰が我等に極端に兵器機械が戰場の勇者であることを教へたが、取つて以て大に教訓とせなければならぬのである。

しかし、歐洲戰が封鎖兵器を以て戰爭の効果を期待しつゝあるは愚の極といはねばならぬ。殊に敵を餓死せしめんことを目的として兵器封鎖をなすに至つては實に兒戲に類するものである。敵の戰鬪力を根本より喪失せしめんには劍の力に依るの外はないのである。こゝに於て私は舊弊ながら「彈丸は愚婦なり彼は迷走す。然れども銃劍は勇卒なり」の言實に眞理なることと思ふのである。

もう時計は三時を廻つて居る。靜寂な京の眞夜に、ペンの音響のみが鋭どく響いて居る。しかしもう私も眠くなつた。外にはボツ〳〵と雨が瓦を打つて居る。いよ〳〵あすは叡山行だ(京都東山にて)

丘博士の生物學的人生社會觀を論ず

大杉榮

博士の忠實な弟子の一人として

たしか僕が十九か二十の時だつたと思ふ。かねて欲しくて堪らなかつた「進化論講話」を漸く手に入れた。實際丘博士の本を買ふ時には、いつも此の「漸く」がつきまとふので困る。五號活字にでもすれば四五十錢かせい〴〵七八十錢の本になるものを、四號か三號かの大きな活字で組んで二圓九十錢三圓五十錢と云ふ恐ろしい高い本にする。出版屋や著者には其の方がいゝかも知れないが、貧乏書生にはやり切れたものぢやない。が、とにかく此の「進化論講話」は、當時新刊で評判の高かつた本だ。早速讀み始めた。面白くて堪らない。一行毎に、まるで未知の、すばらしい驚異の世界が、目まぐるしい程に眼の前に展けて行く。とうとう其日の一と晩のうちに讀みあげて了つた。

僕はそれまでにも隨分いろんな本を貪り讀んだ、小說にも耽つた。心理學とか、哲學とか、社會學とかの、當時の僕にはまるで分りもしない本にまでも嚙りついた。何んでもいゝ、たゞ無茶苦茶に何にか讀みたかつたのだ、何にか知りたかつたのだ。しかしどんな本を讀んでも、本當に何にか讀んだ、何にか知つた、何にか摑へたと云ふ、はつきりした自覺や可なりの滿足のあつた事はなかつた。現に其頃讀んだ本で、今でも其の内容を覺えてゐると云ふ程のものは、殆んど一冊もない。

そして此の自覺と滿足とを始めて僕に與へてくれたのが「進化論講話」であつたのだ。四五日の間僕は、

夜も晝も、殆んど夢中になつて進化論の事ばかり考へてゐた。そしてそれから一ヶ月ばかりの間に更に三四度繰返して讀んだ。讀めば讀む程面白い。周圍が明るくなる。自分が急に大きくなつたやうな氣がする。僕は自分だけで此の面白味を占めてゐる事が出來なかつた。會ふ友人毎に、本の內容を話をして、是非讀むようにと强ひるやうにして勸めた。本も、次ぎ次ぎに、時としては矢張り强ひるやうにして、幾人かの友人に貸してやつた。

僕は今、丘博士の生物學的人生觀及び社會觀を論ずる前に、是非ともこれだけの僕一個の私事を語る事を許して貰ひたい。それはよつて僕は、始めて僕に實りある讀書の味を知らしめ、同時に始めて僕を生物學と云ふ等しく亦實り多い新科學に導き入れてくれた博士に、心からの感謝の意を捧げたいのだ。

それに、考へて見れば、これは强ちに僕一人だけの私事ではない。僕が中學校で敎はつた博物學か動物學かの本は、たしか矢張り博士の手になつたものだ。されば僕と同時代若しくはそれ以後の多くの靑年は博士によつて博物學若しくは動物學の手引きをされたと共に、更に博士の其後の著書によつて、僕程の幼稚でないとしても、少なくとも僕のに似た感謝を博士に負ふてゐる筈である。

丘博士は、日本に於ける廣い科學界での、殆んど唯一の科學思想普及者である。博士は、其の專門の生物學を單に實驗室と敎室とのみに閉ぢ籠めて置く代りに、それを興味多い通俗な筆致で一般社會の間に公開した。そして其の生物學を單に生物學としてのみ說く代りに、更に進んで之れと人生社會との密接な交渉を論じた。科學と人生。これ僕等が久しく科學者に聞かんと欲して、しかも丘博士以前の殆んど、誰れからも遂に聞く事の出來なかつた好題目である。僕等は爭ふて博士の著書を讀んだ。博士のどの著書も瞬く間に數版を重ねた。博士によつて、生物學又は進化論の何んたるかを知り、且つ其の生物學又は進化論から觀た人生社會の眞相を悟り得たものが、僕等靑年の間に幾千幾

萬あるか知れない。それに博士の讀者の中には、博士の地位の上から、多くの小中學校教師が含まれてゐる。博士の著書は、其等の讀者を通じて、來るべき世代の無數の青年にまでも其の影響を及ぼしてゐる。僕等は、博士の事を語る時には、何によりも先づ、僕等自身の此の啓蒙を博士に感謝しなければならない。

しかし、斯くして最初は博士の所説を丸呑みにして敎へられてゐた僕等も、博士の懇篤な指導のお蔭で、漸く博士の所論を多少の批評を加へつゝ讀むようになつた。そして遂には、博士の觀察や推理に往々粗漏があり、矛盾があり、曖昧があり、誤謬があるとまで疑ふようになつた。現に僕は、僕が勸めて博士の著書を讀ました小學校敎師及び其他の青年の多くから、屡々博士に對する疑問を聞かされてゐる。

で僕は先づ、博士の忠實な弟子の一人として、博士に敎へられたまゝの研究法と物の見方とから出發して、博士の所論に對する僕自身の疑問を呈出して見たい。そして僕は、博士が其の弟子の一人の恐らくは幼稚な、しかし眞面目な質問を容れ、且つそれに再び懇篤な敎へを垂れんが爲めに、多忙な研究と業務との中から多少の時間を割いて貰へるものと信じてゐる。

博士の根本的態度、方法と見方

丘博士には、『進化論講話』の外に、『人類進化の研究』『人類の過去現在及未來』、『生物進化論』、『進化と人生』、及び『生物學講話』の著がある。しかし此等の何れの著書にも、又其の中の何れの論說にも、一貫した、博士の根本的態度とも云ふべき二つの主張がある。それは、科學者としての博士の科學的研究法と、生物學者としての博士の生物學的の物の見方との力說である。これが博士の思想の一切の出發點である。博士の忠實な弟子の一人たる僕も亦、矢張り此の二つの根本的態度から出發する。そして僕は又、博士の忠實な弟子の一人として、博士の所論を觀るのに、出來るだけ博士の言葉其のまゝを、しかも出來るだけ丁寧に、

引用して行きたい。

「學問の中にも、研究の方法を標準として分けて見ると、僅かに二組の區別がある。第一の組に屬する學科では、經驗に重きを置かず、專ら人々の持つて生れた推理力のみによつて、先きから先きへと理を推して進む方法を用ひる。從來の哲學や倫理學は全く此の組に屬する。之に反して第二の組に屬する學科では、推理力も素より用ひるが、常に經驗に重きを置き、先づ實驗と觀察とによつて、成るべく正しい經驗を成るべく廣く集め、之を基として一般に通ずる理法を確かめ、更に理を推して考を進めるに當つては、必ず實驗と觀察とによつて推理の結論の當否を試驗し、略々其の正しい事の見込みがつけば、猶其の先きへ理を推して進む。物理學、化學、生物學等の如き所謂自然科學及び其の應用の學科は總て此類に屬する。此等の學科では實驗と觀察との結果が推理の結論と矛盾する場合には、一と先づ理論の方を差控へ、何故斯かる矛盾が生じたかと追究して、推理の方法の足らなかつた點を發見しようと努め、斯くして理論と實際とが一致した上でなければ、猶其の先きへ理を推して進むと云ふやうな事はしない。」

今時分になつて科學的研究法などを力說するのは、隨分時候遲れのやうな氣もする。しかし翻つて僕等の周圍の思想界を見るに、殆んど何處にも、此科學的研究法を見出す事が出來ない。誰れも彼れも、殆んど皆な、アプリオリ的推理、懷手的推理、與太的推理にのみ耽つてゐる。殊に、近來の歐米に於ける非科學的思想の流行に乘じて、其の無學と無知とを掩はんが爲めの、多くの六部爺的論法家がうぢやうぢやゐる。博士の科學的研究法の主張は、決して時候遲れでもなく、無駄でもなく、却つて益々力說されなければならぬ程のものである。

次ぎに「生物學的の物の見方とは如何なる見方かと云ふに、一言で云へば人間を生物の一つとして見る事である。即ち人間を他の生物とは全く離れて一種特別のものとせず、單に生物の一種と見做し、人間社會の

現象をも生物界の現象の一部と見做して觀察するのである。それには先づバクテリアの如く簡單微細な生物から猿人間の如き高等なものまでを一個所に集めたと想像し、全部を見渡しながら其の一部なる人間を見るやうにしなければならぬ。之を芝居に譬へて見れば、バクテリア、アメエバ等より猿、猩々に至るまで總ての生物を一列に並べて舞臺の背景とし、其の前へ人間を引出して浮世の狂言を演ぜしめ、自分は遠く離れて、棧敷から見物してゐる氣になつて公平に觀察すのである。」

『總て物は見方によつて種々異なつて見えるもので、同一の物でも、見方を變へると、全く別物かと思はれる程に違つて見える事もある……一方から見るのみで、他の方から見る事を忘れては、決して正しい概念を得る事は出來ない。之は素より明な事で、從來とても、何にか事を調べるに當つては成るべく各方面から見るように注意してゐたやうに見受けるが、此處に一つ今日まで全く忘れられ度外視されてゐた見方がある。それは即ち此の生物學的見方である。我等の考へによれば、人間社會に起る百般の出來事を正しく觀察するには、是非とも此の見方を加へる事が必要で、之を省いては到底皮相的にとゞまるを免れない。特に人間の行爲を對象とする倫理教育學の如き所謂精神科學に於ては、今後時代の進歩に伴ふ爲めに大に此の見方を奬勵する必要がある。」

此の主張も、科學的研究法の主張と同じく、陳腐と云へば云へるのであるが、矢張り僕等の周圍の思想界では、例の奇妙な生存競爭說以外には、殆んど少しも行はれてゐない。何事も人間はたゞ人間としてのみ、人間社會の事はたゞ人間社會の事としてのみ、例の懐手式に思索され評論されてゐる。少しく他の動物の生活を調べて見れば、直ぐにはつきりと分るような事にまでも、俺れはかう思ふ俺れはあゝ思ふだけで議論を進めてゐる。更に甚だしいのになると、其の人間なり人間社會なりをたゞ現在有りのまゝの人間なり人間社會なりとしてのみ觀て、其の過去の歷史を少しも顧み

ないのがある。

博士の人類滅亡論、諦めと努力

そこで、こんどは、丘博士が此の科學的研究法と生物學的の物の見方とによつて、如何に人生社會を觀たかと云ふ問題になる。

博士の「進化と人生」は博士の他の何れの著書よりも、今云つた博士の根本的主張と其の人生社會に對する適用とを最も明白に現はしたものである。そして本書には、科學思想普及者としての博士と同時に、一個の科學的思想家としての博士の方が、より多く現はれてゐる。で、僕も、思想家としての博士を觀察し批評するのに、主として此の進化と人生に據つて行く。前項の引用も矢張り此の本からの拔き書である。

次手に一寸書き加へて置くが、博士の著書の中には、二度の勸め、三度の勸め、若しくは四度も五度もの勸めをしてゐる論文が非常に多い。丁度學校での毎年の講義のやうに、一著書毎に同じ題目の同じ内容のものが幾度となく繰返される。そして前に云つた通りのいつも箆棒に高い本だ。まるで讀者は、無法と云つてもいゝ程の高い月謝を拂はせられて、落第ばかりしてゐるやうなものだ。

博士の根本的思想は、生物學者として當然の事であるが、其の多くの著書の題目を見ただけでも窺はれる如く、進化論である。生存競爭說である。博士は、此の兩刃の劍を提げて、科學的研究法と生物學的見方との冴え切つた腕をふるひながら、人生社會其者及び其の有らゆる方面に斬りこんで行く。斯くして得た博士の最後の結論は、人類の滅亡である、人生社會に對する痛烈な諦めである。そして博士は、此の諦めの中に在つて、靜かに絕望的努力を說く。

「凡そ物が亡びるには二通りの原因がある。一は外に在つて外から働く原因で、他は内に生じて内から働く原因である。」

「地質學上の各時代に優勢の地位を占めてゐた諸種の

動物が、後に至り忽ち亡び失せたのは、決して單に他の種屬の爲めに攻められて敗けた譯ではなく、寧ろ其の亡びる原因が内部に生じたのに因る。然して其の内部に生じた原因と云ふのは、卽ち初め其の種屬をして總ての他の動物に勝つて優勢の地位に達せしめた原因と同一のものである。」

「或る動物は身體の大きく筋肉の强い事によつて他の種屬に打勝ち、或る動物は武器の鋭い事によつて他の種屬に打勝ち、其他それ〴〵異なつた方面に他に優れた所があつた爲めに優勢の地位に達し得たであらう。……しかし身體の大きくて力の强いと云ふ事は、確かに生存競爭上都合の好い性質ではあるが、まだ生活に多量の食物を要する事、成長に長年月を待たねばならぬ事、蕃殖の遲かるべき事、動作に敏捷を缺く事、其他猶種々の不利益な事が必然に附帶して來る。また牙や角の大きく鋭い事は、之を用ひて敵を倒すには無論極めて有利な性質であるが、之とても牙や角だけが單獨に發達し得るものでなく、之を戴せる爲めの頭骨や顎骨も、之を運用すべき筋肉も、其の筋肉を養ふべき血管も共に發達せざるを得ず、それだけ其の動物の負擔が重くなる。斯くして此等の性質も一定の度を超えれば、却つて生存競爭上都合が惡くなる。」

「凡そ或性質を備へたるが爲に總ての他の種屬に打勝つて、絶對に優勢の地位に進んだ動物は、後には更に其の性質を用ひて相互に競爭するを免れぬもので、筋肉で天下を取つた種屬は後には自己の種屬内で相互に筋肉を以て爭ひ、牙で優勢を占めた種屬は後には自己の種屬内で相互に牙を以て鬪ふ故、益々身體の大きなもの牙の强いものでなければ生存する事が出來ず、斯くして其の種屬をして他に優らしめた性質は何處までも際限なく進まねば止まぬ有樣となるが、前述の通り、如何に初め生存競爭に都合の好かつた性質でも、或る程度を超えると却つて不利益なものとなり、且つ身體が或る一定の生活法に適するように專門的に遠く變化すると、總ての他の方面にはそれだけ不適當なものとならざるを得ず、隨つてそれだけ融通の利かぬも

のと成り、遂に益々生存競爭上不利益な地位に陷つて、漸次他の種屬の爲めに亡されるに至つたのである。」

「さて人類は如何であらうか。人類だけは獨り他の動物とは全く違ふて、人類をして今日の優勢なる地位に達せしめた腦と手との力により、言語と器械とを使用して、今後も永久限りなく益々榮え行くであらうか。將たまた他の動物と同一の法則に從ふて嘗つては人類をして、他の動物に打勝たしめ、文明人をして野蠻人を征服し得せしめた其の腦と手との働きが、やがて却つて禍をなして、人類をして恰も空に向つて投げた石が降ち來る時の如きパラボラ線を書いて、一刻毎に速力を增しつゝ滅亡の運命に向つて進ましめ居る如き事はないであらうか。」

博士は此の人類の滅亡を其の生物學的推論の必然の結果として觀てゐる。そして更に進んで、現在の人類の社會的、精神的、及び肉體的の墮落を詳論して、其の退化の第一步を指摘してゐる。

博士に據るに、吾々人類は到底此の退化の勢を防ぎ止める事は出來ない。吾々はたゞ、吾々の滅亡のいつ來るのか定まつてゐないのを幸に、當分は來ぬものとして、氣にかけずに生活してゐる外に仕方がない。と同時に又、吾々は此の人類の中の一民族として存在してゐる事を忘れてはならない。「今日の人類は恰も不治の病の初期に罹つてゐる有樣で、各民族は未だ輕いながらも到底全快の見込みのない不治の病人に比較すべきものである。一個人が不治の病の初期に罹つた場合には、他事を投擲つて安樂に靜養する事も出來るが、地球の表面に於ける各民族は、常に互に睨み合ふて、僅かの隙でもあらば相倒さうと待つてゐるのであるから、専ら病を養ふのみに掛かつては居られぬ。必ず外に向ふては武備を固めて敵の侮を防ぎ、内は出來るだけの方法を講じて一刻でも病勢の進む事を止めて壽命を長くする事を努めねばならぬ。今後に於ける各民族間の競爭は恰も不治の病人が相鬪ふてゐるやうなものの故、武備の劣つたものが先づ敗ける要があるのは

であると同時に、病氣の急に進んだものも忽ち敵に倒されるのは疑ひない。されば各民族共に全力を盡して、此の兩方面に於て常に他の民族に優るように努める事が必要である。」

博士の觀た人類退化の三大原因

博士の此の人類滅亡論は、博士がみづから獨自の解釋であると稱する古生物學の事實から出發した、そして又みづから獨自の見解であると稱してゐる餘程お得意のものである。で、僕は先づ、博士の議論の批評にはいる前に博士の巧妙な論法の一見本として、其「進化と人生」中の一論文「人類の將來」の一節を此處に、拔き書きして見た。そればかりではない。博士の人生觀と社會觀との殆んど全部が此の一論の中に含まれてゐるのだ。

博士の弟子たる僕は、まだ博士の如くには、人類の將來如何を論ずるだけの十分な準備がない。又、博士の謂はゆる「健康なる人の常態」として、「來るか來ぬか分らぬ危害」、或は「來る時の定まらぬ危害」には、「氣にかけずに生活してゐる。」從つて此點に就いての博士の議論の是非を云ふ大した資格もなく又興味もない。僕の持つてゐるものは、たゞ、博士の此の議論の出發點から到着點に至る行程に就いての疑問である。此の議論の中に含まれてゐる諸種の人生觀及び社會觀に對する等しく亦行程に就いての疑問である。

しかし僕は又、それと同時に、此の論文と他の論文との間の見逃すべからざる矛盾をも認めてゐる。で、先づそれを明かにする爲めに、もう少し詳しく、博士の所論を觀て見たい。

「人類の起りを想像するに、恐らく今日より何百萬年か何千萬年かの昔に、其頃生存してゐた猿類の中の或る一種が、樹上の生活より地上の生活に移り、後足のみで體を支へ、直立して歩み、斯くして自由になつた前足を用ひて簡單な器械を使ひ始め、或は石を拾ふて敵に投げ、或は枝を折つて敵を防ぐべき棒となし、或

は石を打合せて割れて鋭い刃の生じたものは之を斧又は刀として用ひ、小さい片は鏃として矢の先に結びつけ、又斯くして石を打合せ或は木を摩り合せてゐるとき偶烈火の發する事を屢々經驗する間には、遂に自由に火を造る方を覺え、隨意に火を用ひ得る樣になつた以上は、之によつて土器を燒く事も出來、次には鑛物を熱して青銅、鐵さへも採つて種々の武器を造り得るまでに進むであらうが、此の程度まで進んだ以上は、最早人類の敵として恐るべきものは一つもなく、自分に危害を加へる獸類は悉く退治し、自分の種屬は漸々蕃殖して全世界に擴がり、終に戰とし云へば人類相互の戰みのを意味する今日の有樣までに進み來つたのであらう。又斯く手を用ひて爲る事が進歩する間には、經驗の重なるに連れて、腦の働きも速に發達し、終には困難な無形の事柄をも抽象的に思考するまでに進み來つたのであらう。』

斯くの如く腦と手との力によつて、又其の用ひる言語と器械との力によつて、人類は今日の優越な地位に達したのであるが、此の力の發達に伴つて人類社會にどんな事が起つたか。博士は、何によりも先づ、私有財産制の勃興と其の結果とを說いてゐる。

『凡そ器械を用ひる以上は所有權と云ふものが生じ、財産なるものが現はれ、同時に財産を貸して利子を取る制度も起るが、その必然の結果として終に貧富の懸隔が甚しくなり、富めるものは益々富み、貧しきものは益々貧しく、一社會の中に遊びながら贅澤の極を盡す少數の極富者と、如何に働ても生活に必要な衣食さへも充分に獲られない無數の極貧者とを生ずるに至る。西洋諸國では今日既に此の有樣に達してゐるが、世の進むに從ひ此の傾向は益々烈しくなるに違ひない。金の有りあまる富豪と、生活の爲めには如何なる恥をも忍ぶ貧民とが並び存すれば、其間に宜しからぬ現象の起るは當然の理で、之のみでも世道の頽廢、人心の墮落の原因としては充分である。』

そして博士は、所謂文明の弊の源の中に、更に此の『世道の頽廢、人心の墮落』の現狀を詳細に論じて、

「我國の將來を考へると寔に憂慮に堪へぬ次第である。世道とか人心とか品性とか人格とか云ふ議論の喧しいのは、皆な世の墮落してゐる證據で誠に情ない事ではあるが、又一面此の墮落を憂ふる人の猶多少世に存する徴と見做せば、聊か心强い如き感じを生ずる」と志士的憤慨を洩らすと同時に併せて其の救濟策の暗示にまで及んでゐる。

斯くして博士は、人類の退化と滅亡とを說く豫言者の地位から、急に社會革命家の地位にまで降つて來た。

「凡そ一つの弊を改めやうとするには、先づ其の因つて起る眞の原因を究めて、之を除く事を圖らねばならぬ。若しも其の原因を究める事を忽にし、眞の原因でもないものを原因であるかの如くに思ひ誤り、之を基として矯正の方法を講ずる如き事があつたならば、其の結果は唯世を益せぬのみならず、或は民族發展の上に取り返しのつかぬ妨害を生ずる事がないとも限らぬ」

「然らば文明の弊なるものゝ眞の原因は何に存するかと云ふに、我等の考へに依れば、主として社會の制度、特に財產に關する制度に缺點があるに因る。」

「我等は決して現今の財產制度を悉く有害と考へるのでない。……今日の財產制度の中で社會的生活に適せず、隨つて人心墮落の原因となるものは、唯だ土地、物品、金錢等を貸して個人が利子を取ると云ふ制度である。」

博士は、其の「動物の私有財產」の中に、動物の私有財產制と人間の私有財產制とを比較硏究して、其の異同と得失と優劣とを論じた。其の結論の大體に云ふ。第一に、私有財產を獲んとする爲め相互の間に劇しき競爭の起るを免がれぬは、人間でも他の動物でも全く同樣である。第二に、私有財產の不平等なる事、及び其の不平等ならざる可らざる理由も、人間と他の動物との間に少しも相違はない。第三に、私有財產の相續は、動物では子の代までに限る。それも、單に其の子が一通り生長して生存競爭場裏へ打つて出られる樣になるまでの養育費を出る事がない。第四に、人間

社會にのみ存して他の動物には決してない特殊の財産制度は、物を貸して利子を取る事である。」

「人間と他の動物との財産制度上の相違の點は、主として子孫が親の遺産の恩澤に浴する程度の相違と、物を貸して利子を取る制度の有無との二つである。しかし、若し利子を取ると云ふ制度がなかつたならば、如何に刻苦勉勵しても、今日の富豪の有する如き莫大の財産を一代に造る事は到底不可能である。たとへ巨萬の財産を積み得たとしても、子孫が働かずに食ひ減らせば、忽ち消滅する故、數代も數十代も後の子孫までが懷手で贅澤に暮らせるといふ事は無い。されば人間と他の動物との財産制度上の相違は、詰る所、利子を取るか取らぬかと云ふ一點に歸する。」

そして此の相違は、人間は動物と違つて、何にをするにも單に手足の如き身體の或る部分の外に猶道具を使ふ事に基因する。人と道具との二つが揃つて始めて仕事が出來る、若し或る一人が他人から道具を借りて何物かを收獲し得た場合には、これに對して相應の報酬を贈るのは當然の事と思はれる。

斯くして、問題は再び、人類の進化即人類の退化の第一原因にまで歸る。そして博士は、人間の根本的性質と云ふもう一つの原因を其の間に挾めて、益々問題を複雜にしてゐる。

「元來人間には他人の迷惑は少しも顧みぬと云ふ性質が生れながらに備つてゐる。……斯かる根性を持つた人間が集まつて社會を成してゐるのであるから、到底蟻や蜂の如き完全な社會が成立つ理屈がない。若しも人間に聊かでも生れながらにして他人の迷惑を顧みて己れの欲せざる所を他人に施さぬといふ性質があつたならば、蟻や蜂の社會と同樣な眞に協力一致して毫も爭ひのない社會が出來るであらうが、蟻や蜂の社會の斯く完全であるのは、長い年月を經て多くの代を重ねる間に、自然淘汰の行はれた結果として漸々發達し來つたのである故、今日の人間が俄かに斯かる境遇に達しようと思ふても、それは到底出來ぬ事である。禮儀作法によつて少數の人々の間に恰も互の迷惑を顧み

する如き體裁を粧ふ事は或は出來るでもあらうが、先祖代々遺傳し來つた腦髓を練り直して、急に本來の性質を改める事は到底不可能である故、先づ當分の間は、他人の迷惑を顧みぬと云ふ此の性質は直らぬものと見做して置く外に致し方はない。』

然らば人間の此の根本的性質は、如何とも手のつけようのないものかと云へば、さうでもない。『畢竟人心が墮落したとか、世道が頽廢したとか云ふのは、唯人間の此の性質を表面に現はす程度が從來よりも猶一層激しくなつて來たと云ふに過ぎぬ。今日までの人間が、他人の迷惑を顧みぬと云ふ本來の性質を或る程度まで抑へ隱して現はさぬのは、全く社會の制度に基づく事故、若し社會の制度に不備の點があつたならば、此の性質は忽ち激しく現はれ出でざるを得ない。英吉利の或る政治家の云つた言葉に、政治の要は容易に惡を爲し難き社會を造るにありとあるが、人間の此の性質が到底直らぬものと定まつた以上は、社會の制度の方を充分に研究して、其の缺點を調べ、若し爲し得べくば之を改めて、人間の此の性質の劇く現はれ得ぬやうに社會を造らんと務める外に道はないであらう。』

そこで博士に據るに、一、人類進化の原因其者が卽ち手と腦との發達が更に逆轉して人類退化の原因となつた事、二、人類の根本的性質卽ち利己心、及び三、社會制度特に財產制度の缺點、と云ふ三大原因が相錯雜して、人類を退化と滅亡とに導きつゝあるものゝ如く信じられる。そして博士の此の推論の間には、絕えず例の生存競爭說がつきまとつてゐる事は、云ふまでもない。

博士の所謂三原因の關係と價値

丘博士の批評をするつもりで、つひ其の議論の解說に豫定の紙數の半ばを費して了つた。此の調子で行くと、あとの半ばも、矢張り解說だけで濟んで了ひさうだ。博士の取扱つた問題は甚だ大きく且つ廣い。そし

てどの問題でも、其の間に相互の密接な聯絡があつて、一つ一つ離して見る譯に行かない。それに內容は面白い、論法は巧妙だ。解說し始めると、其の解說の興味だけでゝも、あれもこれも入れたくなつて限りがない。

しかし前項までの解說で、博士の生物學的人生觀及び社會觀の中心思想だけは大體分かつたやうだ。そして又、前項の解說の結果は、漸く僕をして博士の議論の批評にはいる事を得しめる糸口にまで導いてくれたやうだ。卽ち、博士の謂はゆる人類退化の三大原因と、更に其の根柢に橫はる生存競爭說とを分析し批判する事によつて、ほゞ僕の目的が達せられるやうだ。

で僕は先づ、僕の第一の質問を博士に呈出する。此の人類退化の三原因は、其の間にどれだけの交涉があり、又其の中のどれが最も重大なのか。

一切の事物は、其の事物みづからの中にも亦其の相互の間にも、必ず相紛糾した多少の複雜さを持つてゐる。素より一本調子で見る譯には行かない。其の相紛糾し相複雜した一つを離して、更に其の相互の關係を明かにする事によつて、始めて其の事物の眞相が分かる。科學の任務と云ふのも要するにこれである。

博士は其の謂はゆる人類退化の原因を三つに分けた。しかし、斯く分け離して見たゞけで、其の間の相錯雜した關係を殆んど說いてゐない。人類が他の諸動物に優越して進化するに至つた原因其者、卽ち手と腦との發達が、人類退化の根本的の且つ最も重大な原因であるやうにも思はれる。又、此の手と腦との發達から生じた道具の貸借による利子、卽ち社會制度の缺陷が、本質的の且つ更に重大な原因であるやうにも思はれる。そして又、社會制度は人間の根本的性質其者卽ち利己心から、必然に此の缺陷を生ずるものゝやうにも思はれる。しかし又、人間は其の手と腦との發達によつて、此の社會制度を改善し、人間の根本的性質を壓さへ隱くし、從つて先きに同じ手と腦との發達から生じた一切の弊害、殊に道具の弊害を除き去る事が出來るやうにも思はれる。要するに何んの事だか少しも分か

らない。

そこで、博士の大體の論旨と全く矛盾するらしく思はれる此の最後の點を取つて、もう一度博士の著書に歸つて見る。

「進化と人生」中の人類の滅亡を說いた「人類の將來」に據つて、手と腦髓との發達から人類社會にどんな事が起つたかと見るに、第一に、といふよりも寧ろ殆んど全く、財產制度の缺陷及び其の弊害のみを說いてゐる。尤も、器械を用ひる結果人間の生活が漸次に自然の狀態に遠ざかり、從つて其の身體が自然に對する抵抗力を減じて、益々人間が懦弱になると云ふ事も說かれてはゐる。しかしこれは、次ぎに云ふが如く、博士自身も他の場所で其の救濟法のある事を白狀してゐる。

「人類進化の研究」の中に、「人類に對する自然の復讐」と問題する一章がある。自然には一定の理法がある。これを破るものは必ず罰せられる。森林の濫伐は河川の洪水を、小鳥の濫獲は毒蟲の繁殖を招く。しかしそれは極く「輕い復讐」で「先見の明」がありさへすれば、直ぐに「償ふ事が出來る。」又、生物には用不用の區別がある。絕えず使ふ身體の部分は次第に强く大きくなり、常に蔽ひ隱くして用ひない部分は次第に弱く細くなる。人間は火を點す事を知つてから、火食の結果胃腸を弱くした、著物を著て皮膚を弱くした。前の復讐に較べれば此の方は少し「重い。」しかしこれとても、人間の智慧の働きによつて「防ぎ止める事は出來る。」

然るに「自然の復讐の最も劇烈な最も慘酷なのは、人間の社會生活の不條理の點に起因する。之は人間の自然の征服に對する直接の復讐と云ふよりも、寧ろ人間の社會制度の缺點に附けこむ間接の復讐とも云ふべきもので、社會の制度が今日のまゝで續く限りは到底防ぐ事は出來ぬ。」

其の一例を擧げれば、「富者は益々富み貧者は益々貧しくなる今日の世の中では、學者が折角汗水流して研究し發明した事も、唯富者のみが之を利用し、貧者は

却つて其の爲めに更に困難に陷り易い。蒸汽機關でも、水力電氣でも、人間の爲した自然の征服としては最も立派なものであるが、後より見れば貧富の懸隔を甚だしくする爲めに特に造られたかの如き觀がある。」又、年々諸種の疾病や罪惡が殖えて行くのも、「其の遠い原因を探れば、社會制度に缺點がある事に構はずに、智慧に任せて自然を征服したからである。」

博士の議論の面白さに引きずられて、其の次ぎの「精神的思想的方面の自然の復讐」と云ふ一項からも、次ぎの十數行の引用を許して貰ひたい。

「假りに此處に一つの國があるとして、其の國の最高の權力を握り得た少數の人間が、全國民に斯樣々々の事を信ぜしめるのが自分等の爲めに都合が宜しいと考へた事を、有らゆる方法を用ひて强制的に人民に信ぜしめ、少しでも之と異なつた考を發表せんと試みるものがあれば、直ちに之を刑に處して、其の思想を未然に防ぐ事を務めたとすれば、其の國は如何なる狀態に陷り、又將來如何に、成り行くであらうか。」

「凡そ世の中の進むのは自由研究の結果であつて、研究が自由であればある程、その成績も著しく、進歩も早い。若し或る方面に自由研究を禁ずれば、其の方面の進歩も止まる。そして猶他の方面へも影響する。遂に國全體の進歩が止まる。研究の自由な隣國とは競爭が出來なくなる。」

「知力が進み腦髓が發達すれば、それに伴ふて常に新しい思想の生じ來るのは自然の働きである。權力者が一定の信仰箇條を造つて、これを强制し、思想の進歩を止めるのは、即ち人爲を以て自然の働きを壓し止めるのである。一時は自然を征服し得たるが如き有樣を呈しても、忽ち自然の復讐の結果が現はれて、早晩自然の成行きに從ふ時代が來る。」

そして博士は、更に「觸れば祟る神を祭つた天罰」を說いて、其の結末に、突然行を變へて「斯く考へると、憲法によつて信仰の自由を保證されてゐる文明時代に生れた我々は、何んと幸福ではないか」と空うそぶいてゐる。

其他、博士が其の謂はゆる人類退化の原因として、社會制度の缺陷を頗る重大視した箇所は、博士の著者の殆んど到る處に見出される。そして、先きにも引用した「所謂文明の弊の源」の如きは、「凡そ一つの弊を改めやうとするには、先づ其の因つて起る眞の原因を究して、之を除く事を圖らねばならぬ」と云つて、其の眞の原因を社會制度の不備に歸し、更に其の根本的改革を暗示したものである。

此等の諸論文に據るに、人類の退化は、たゞ其の手や腦の力を惡用し濫用した結果であり、又其の惡用や濫用を激成する社會制度の結果である。從つて、さうとさへ分かれば、更に手や腦の力を善用し直し、又其の善用を誘導する社會制度に造り直して、此の退化の勢をとめる事が出來る。と云ふ論旨としか思へない。

博士の社會觀と他の社會的學說

斯う見て來ると、博士の說は大分社會主義者のそれと似て來る。社會主義と雖も、博士の所說と同じく一切の私有財產を否認するのではなく、博士の謂はゆる利子の取れる一切の生產機關の公有を主張するものである。社會主義は、博士の「動物の私有財產」の中にあるが如き、猿の頰嚢の中に詰めこまれてある人參や、犬の寢床の下にある喰ひかけの牛の骨や、鳩の食道の中途にある餌嚢の中の豆や、駱駝の胃の周圍にある小嚢の中の水の、私有財產を批難するものではない。

其他、博士が現代社會の腐敗や、謂はゆる世道の頽廢や、人心の墮落を慨歎して、其の根本的原因に觸れない道德、宗敎、慈善、及び有らゆる部分的改良手段の無効を痛論してゐるあたりは、どの頁を開いて見ても、大ぶ社會主義者の口吻に近い。殊に、次ぎに引用する比喩の如きは、アメリカの社會主義者ベラミイの名著「百年後の新社會」の中の有名な比喩と、全く符合する。

「一人を富豪ならしめる爲めには、數百萬人が其の犧

性となつて貧苦に陷らねばならぬ事は計算上明らかな理である故、一方に少數の者が巨萬の富を積む間には、他方に於ては幾千萬の人間は漸々貧困となり、饑に迫られては段々安い給金にも甘んじて、牛馬の如くに勞働せざるを得ず、終には露命を繋ぐ事さへ容易でなくなる。斯かる狀態の世の中は、之を他物に譬へて云へば、恰も贅澤華美を盡した重い馬車に少數の客を乘せ、數百千人のものが馬の代りにそれを挽いたり押したりして坂路を登つて行く樣なものである。」

「現時の世の中は略々斯かる有樣である故、之に對して不滿の聞ゆるのは當然の事で、毫も怪しむには足らぬ。車を挽くものが車上の客を眺めて、彼も人なり、我も人なり、特に我の方が筋力も知識も彼に比しては遙に優等である、然るに彼は斯く安樂に贅澤に暮し、我は斯く喘ぎ苦しまなければならぬのは如何なる理由に由るかと考へ出しては、一刻も不平なき譯には行かぬ。」

「それ故、今日孰れの文明國にも、斯かる議論の起らぬ所はない。虛無黨と云ひ、社會黨と云ひ、アナーキストと云ふ、イルレデンタと云ひ、名稱も種々で理想とする所も樣々ではあるが、現代に對する堪へ難き不滿の念が凝り固まつて終に表面に現はれたものなる事だけは同じである。」

それればかりではない。一時優勢を極めた古生物が如何にして滅亡したか、の問題に就いて、博士は其の獨得の原因を發見した。そして其の發見を生物進化の上の一理法として人類社會の將來にまで適用した。これ又、殆んど不思議な程の、博士と社會主義との符合である。社會主義者は、一時ヨオロッパの全思想界を風靡したヘエゲルの辯證法、即ち正（thesis）、反（Anti-thesis）、合（synthesis）の進化的理法を、其の推理の最高の形式として採用した。一切の事物は其の勃興の原因（正）其者の中に、其の亡滅の原因（反）を含み、斯くして亡滅する間に更に新しき事物を生ずる（合）。宇宙の萬物は此の正反合の循環的進化に從ふ。社會主義者は、有らゆる自然科學の上の此の辯證法的事實を

理法との新發見を學び、更に之れを現社會の資本家制度の上に適用して、其處に始めて彼等の謂はゆる近世科學的社會主義を建設した。

こゝに一寸お斷りをするが、僕は此の謂はゆる近世科學的社會主義者ではない。社會主義者の辯證法にも、又其の社會現象の上への適用にも、多少の疑問を持つてゐる。それに今は社會主義の紹介をするつもりでは毛頭ないのだから、此の議論はいゝ加減にして切りあげる。

然らば博士は、其の獨自の生物進化の理法を提げて、嘗つて人類の過去現在及び未來に切りこんで行つた如く、更に同樣に社會制度の過去現在及び未來にも切りこんで行くか、又、切りこんで見た事があるか。そして其の結論が全く社會主義者と同一になるか、又なつたか、どうか。これは大な面白い問題だらうと思ふ。同一の科學的研究の方法を以て、同一の進化的推理の形式を以て、同一の問題に當面するのだ。斯くして博士は、其の議論の社會主義的に見られる所々に殊更らしく公言してゐる社會主義嫌ひを、始めて本當に明確にする事が出來るのだ。

もう一つ、そればかりではない。博士は更に進んで其の無何有的社會的理想を說いてゐる。『進化と人生』の中の『理想的團體生活』を見よ。

『斯樣な動物の生活狀態を詳かに觀察して見ると、多數力を協せて、誠實に全團體の維持繁榮の爲めに働いてゐる有樣は實に理想的と稱すべき程で、我々人間の如き不完全な團體生活を爲すものから眞に羨ましく思はれるものがある。』

『先づ昆蟲類の國を見て、第一に氣のつく事は、國內に一定として無職業のもの、働かぬもののない事である。……食物に剩餘の生じた場合には、總て之を一國全體の所有として適宜に利用するのみで、決してそれを別けて一定づゝの所有を定める如き事はない。……貧富の區別もなく、資本家と勞働者との區別もなく、富の壓制もなければ貧の苦しみもない。……多數集まつてゐる個體の中には、神經筋肉ともに、多少の優劣

のあるは免れぬが、優者は優者だけに、劣者は劣者だけに、夫れ〻其の分に應じて國の爲めに働くのみで、…又其の職業による貴賤尊卑の區別がない。』

『以上の事は暫く措くとしても、我等が苔虫の國を見て、眞に羨ましさに堪へぬのは、國内の各個體間に少しも爭ひのない事である。私有財産が無い位であるから、各個體が相爭ふ理由が少しもなく、相互に己れの欲する所は他に施し、己れの欲せざる所は他に施さぬ。…罪惡を防ぐ爲めの設備は毫も入要がない。修身道徳と云ふ樣な事は彼等の國民には何の必要もない。…』

『斯く苔蟲の國には、罪惡がない故罪惡を未然に防ぐべき宗敎道徳が入らぬと同じく、罪惡を已然に制すべき法律も全く必要がない。隨つて法律に關係したものは一つも入らぬ。…裁判官もなければ辯護士もない。…また罪惡の無い世の中には警察は全く無用であり、政府なるものも殆んど用はない。』

そして博士は、其の間に『我等は長く苔蟲類の生活狀態を見慣れた結果として、往々自身を苔蟲の地位に置いて、人間界の出來事を觀察する習慣が生じ、何事を見るに當つても苔蟲的見地から批評を下すを禁じ得ない場合がある。帝都の中央に大審院や司法省の大厦高樓が巍然として立つてゐるのを見、又それを寫眞に取り繪葉書などに造つて誇つてゐる世上の有樣を見て、斯かる立派な建築物を要する程に司法事業の繁盛するのは、誇つていゝ事か恥ぢていゝ事かなどゝ考へ、偶々其の近傍を通行する際には、蟲の思はん事も恥しなど、思はず獨語する事がある』と洒落れてゐる。

斯く博士の議論の中には、先きに云つた志士的憤慨と、此種の犬儒的冷笑とが充ち滿ちてゐる。

しかし『總て理想的と名のつくものは一として直ちに實現せらるべきものはない。…苔蟲類に見る如き完全なる團體生活は現在の人間に取つては到底不可能である。若し今日直ちに苔蟲類の如き理想的社會を造らうと思ふものがあつたら、それは人間生來の缺點を忘れて潜上の沙汰と云はねばならぬ。…しかし

ながら理想的なるものは向上の目標としては必要なもので、之によつて日々の進歩の方向を定める事の出來るもの故、動物の中には斯かる理想的の團體生活を爲してゐる種類がある事を承知して置くのは、一身を修めて行くに當つても、社會の制度を改良するに當つても一の參考となり、又目標ともなるであらう。」

博士の論旨に對する僕の諸疑點

これを要するに、博士が切りに詳説し强調する人類勃興の原因其者が直ちに其の滅亡の原因となると云ふ謂はゆる博士獨得の發見は、博士自身の暗示する他の一面卽ち社會制度の改革と云ふ事によつて、殆んど全く若しくは少なくとも著しく其の價値を減ぜられる。

理想は、直ちに實現され得ない。しかし、直ちには又現在の人間には不可能であつても、何れは又將來の人間には實現され得るかも知れない。

然るに博士は、先きにも屢々云つた如く、更に他の一面に於て、人間の謂はゆる根本的性質たる利己心が到底此の理想の實現を許さないと斷言してゐる。そして其處に博士の奇妙な生存競爭說が現はれて來る。

博士の生存競爭說には相異なつた二つの方面がある。其の一つは、從來の殆んど總ての進化論者が主張する如く、個人對萬人の容赦のない生存競爭である。もう一つは、同一種族の各個體が相互扶助によつて結合しつゝ、他の種族に當る矢張り容赦のない生存競爭である。生存競爭は利己心と排他人とを生み、相互扶助は愛他人と團結心とを生む。そして此の相互扶助は種族の繁榮と優越との重要な一要素である。そして博士の社會的理想は此の相互扶助が完全に行はれ得べき社會制度の實現にある。

若し博士の說が單にこれだけの事であれば何んの奇妙もなく不思議もない。然るに博士は、此の二つの生存競爭をごちやまぜにして使ふと共に、議論の都合によつて其のどちらかの一つ殊に前者のみを出すと云ふ甚だ惡い癖を持つてゐる。そして又、此の生存競爭と

云ふ文字に就いても、ダアヰンの警戒した廣い比喩的意味と、斯くみづから警戒しながらもダアヰン自身が常に誤まり陷つた狹い意味とを、博士は矢張り其の議論の都合によつてどちらかの一つ殊に後者のみを使ふと云ふ甚だ惡い癖を持つてゐる。

今其の例を擧げれば限りがない。人間が生れながらにして利己心、排他心を持つてゐると云ふ事は何人も承認する。『人間の性質として彼れの欲する物を我々が持つか、我々の欲する物を彼れが持つかすれば、忽ち爭ひの起るは當然の事で、これは三歲四歲の子供等に數種の玩具を與へても明かに知れる。』しかし此の性質があつたからとて、どうして『若しも人間に聊かでも生れながらにして他人の迷惑を顧みて己れの欲せざる所を他人に施さぬと云ふ性質があつたならば』などゝ云へるか、又少なくとも此の利他人なり團結心なりが後天的に發達しないと云へるか。現に博士自身も、幾度か、他の場所で、利己心の壓へ隱し得る事を說いてゐる。此の矛盾は、明かに、博士の生存競爭說の矛盾から來る。

博士の生存競爭說に就いては僕は猶、云けはなればならない多くのものを持つてゐる。又、それを云つて了はなければ、博士に對する僕の質問は本當には徹底しない。なぜなら、僕の見るところに據れば、先きに云つた博士の人生社會觀の中の曖昧と矛盾とは多くは此の生存競爭に就いての觀察の粗漏と推理の誤謬とから來る。

『此の程度まで進んだ以上は、最早人類の敵として恐るべきものは一つもなく、自分に危害を加へる獸類は悉く退治し、自分の種屬は漸々蕃殖して全世界に擴がり、遂に戰と云へば人類相互の戰のみを意味する今日の有樣までに進んだ。』そして將來は益々此の勢が激しくなるに違ひない。と云ふ博士の民族間若しくは人種間の戰爭必然論は、博士の議論の中の理論上及び實際上最も重要な結論であるが、これなども、生存競爭の意味を極く狹く戰爭と云ふ事にのみ限つて了つた結果ではあるまいか。

しかし僕の與へられた豫定の紙數が既に盡きた。僕は結末に急がなければならない。

博士に對する僕の第一の質問は、先きに云つた人類退化の三原因が、其の間にどれだけの交渉を持ち、又其の中のどれが最も重大であるか、と云ふ事であつた。僕は、今已むを得ず、僕の質問を此の第一の質問だけにとゞめる事とする。即ち博士の結論の曖昧と矛盾とを指摘するだけにとゞめる。そして此の曖昧と矛盾とを生ぜしめたと思はれる、次ぎに列擧する諸疑點に就いては、博士の懇篤な示教を待つて、更に詳論したいと思ふ。

果して博士は、何事に對しても先づ『觀察し實驗して其の事實を確め、似寄つた事實を蒐め、實驗によつて出來るだけ廣く蒐集し、力の及ぶ限り精密に觀察して、寸法があれば物指で計り、目方があれば秤を用ひ、時を計るならば精確な時計を用ひ、斯くの如くして微細な點にまで注意して』博士自身の理法を確めて見たか。

果して博士は、此の實驗と觀察とによつて確められた理法を更に進めて推理する時、其の推理の結論の當否を再び前述の如き精確な實驗と觀察とによつて試驗して見たか。懷手式推理を試みはしなかつたか。『江戸へ來て見た所が毎日非常に風が吹いて往來が砂だらけである。斯う砂が舞へば必ず人々の眼に砂が這入つて盲目になる人が大勢出來るであらう。盲目になれば退屈であるから必ず三味線を彈くに違ひない。左様すれば三味線が澤山要るから猫が皆な殺されるに定まつてゐる。猫が皆な殺されゝば鼠が暴れ出して箱を殘らず嚙み傷けるに相違ないから、箱商賣を始めたら必ず大繁盛をするであらう。』と云ふやうな膝栗毛の中の六部爺的論理をやりはしなかつたか。

殊に人生社會の研究に於て、少なくとも生物學上の事實の研究に於けると同じ心持ちで、博士の主張するが如き實驗と觀察と推理とを試みる事を怠りはしなかつたか。生物學者たる博士に、同時に心理學者たれ、社會學者たれと望むのは無理であるかも知れない。し

かし苟くも一科學者が、よし其の專門以外の科學に就いてゞあつても、兎に角それを議論するに當つては、矢張り其の專門の科學に對すると同じ心持ち、同じ態度は持たなければなるまい。果して博士に、此の用意に於て、缺くところがなかつたか。

人間を一生物として見るのはいゝ。人間の社會を生物の一社會として見るのはいゝ。けれども人間と他の動物とを、人間の社會と他の動物の社會とを、全く同一視する傾向が博士には餘りに多すぎはしなかつたか。人間と他の動物とを又人間の社會と他の動物の社會とを比較するのに、其等の前者に餘りに重きを置きすぎはしなかつたか。生物學と社會學との境界を忘れはしなかつたか。

そして最後に、博士自身が『進化と人生』中の一篇『腦髓の進化』に說いた如き大腦の働きが外界からの影響を蒙つて著しく變はる事に、博士自身に本當の自覺が足りはしなかつたか。博士の社會上の地位が、それを飮むと如何なる人も忽ち陽氣になり上氣嫌になつて浮かれ出すと云ふ亞酸化窒素一名笑ひ瓦斯の如き作用を、博士の大腦に及ぼしてゐやしないかと云ふ事に、博士自身に十分な反省があつたらうか。

又、一歩を讓つて、よし其の反省があつたとしても、博士が其の社會的地位を維持して行きたい爲めに、科學者としての良心に背いてわざと議論を曖昧にし、若しくは知らず知らずの間に相矛盾する議論をしてゐるやうなところが見出されないだらうか。

『進化と人生』の序文にもあるが如く、『不十分なる經驗を基とし、未熟なる腦力を賴んで考へた事故、足らざる所、誤まれる所も、決して少なくはなからう』は勿論であるが、それにしても餘りに不十分、餘りに未熟な點が餘りに露骨に現はれてはゐないだらうか。

『凡そ議論なるものが如何樣にも出來る事は裁判所に於ける檢事と辯護士との論辯によつても明かに知れる。』と云ふが、檢事と辯護士とは最初からの立場が違ふ。博士と僕との間には議論の相異すべき殆んど何等の必然性もない。僕は博士の忠實なる弟子である。博

士の科學的研究法、博士の生物學的の物の見方は、等しく又僕の研究法であり、僕の物の見方である。若し相違があれば、それは主として、實驗なり觀察なり推理なりの行程に、二人の何れかゞ若しくは二人とも間違があるからである。僕はたゞ此の間違ひを正したいのだ。

猶、博士の生物學的人生社會觀が吾々青年に與へた、そして僕自身が甚だ有益な且つ眞實のものと觀た、多くの教訓に就いては、更に筆を改めて博士の功績を說きたいと思ふ。

南宗畫に就いて

中川忠順

一

董玄宰が容臺集に南禪北禪の差別と同じき見地より畫にも南北兩宗の二大區分を爲せしは、これ偏に自家の本領とする南宗を發揮せんとの底意からで、北禪が常時主として支那の北方に在りて曹洞宗を鼓吹し、形式的に泥づむ傾向あるに對して、南方特に蘇杭を中心として法脉を維持せる臨濟禪の直指端傳的なるに憧憬しての議論である、北方禪の勢力は南方禪の敵ではなくて、北方の文化は到底南方の文化に及びもないから、南北の名稱の差別は之を耳にするのみで、文野の距離と盛衰の間隔とに想到して、優劣の差別を付せられた感がある、固より南宗と標榜するものはありながら、自ら北宗と名乘つて立つたもの無く、玄宰獨りで南北を差別して自尊するものとも思はれるが、玄宰が此差別語を立つるに至るまでの徑路を辿つて見れば、其處に否むべからざる理由もあつて、南宗畫の立場もまた

自ら判然してくるのである。

六朝の時南齊の謝赫が畫品錄を作くつてから、張愛賓の歷代名畫記朱景玄の唐朝名畫錄等がいろ〳〵著述されて來たが、畫品の差別を論じ前代の遺品を擧ぐるのみで、畫品を上下すとは云ふもの丶、其著錄したものは悉く當時寳重せられてゐた名品ばかりで、品位の高下も敢て排斥すべきものを收めたのではない、無論多少の好惡は自ら其間に存するかは知らぬが、褒貶の感情を驅つて正否を議するには至らなかつた、之を初めて發表したのは北宋の光元章である、米襄陽志林に收められた彼の意見には素直に感情を述べたものもあるが、較々自尊の態度に陷つて、前代の遺品や作家に就いて甚だしい酷評を試みてゐる、その酷評も當時の一般的嗜好と尊崇とに反して、鮮明に自家獨特の論評を下して、それで以て其主張と批判の評準とを示したのである、蜀の黃筌を排して南唐の徐熙を擧げ、一世其名を賛嘆する趙昌さへも指彈して寄せ付けない、米襄陽の如き畫家にして批評家を兼ね、他人の畫を遠慮なく批難して、一方には其主張を實現した作家は、これより後盛に倣ふて多く起り、意見として微細な部分に異なる所はあるが、大體に此人を學んだもので、甚だしきは其繪風から書風までも模倣した大家がある、此等は畢竟學問文章に熟達して繪畫を餘技とする人の立場で、わざと隱遁主義をとるものは格別、學問文章のみで立派に榮達することが出來て、繪畫の技を以て宮仕し、之を賣つて口を糊するが如き小器量の人ではなかつた、卽ち綽々たる餘裕からの繪畫三昧で、技能本手の稼ぎ主義ではなかつた、斯る大器量を具して論評と製作とを兼ねたもの丶前には、何人も立向ふこと無く、唯これ呼ぶに高士を以てし只管叩頭するの外はないのである、董玄宰の如きも其一人で、明季文運極盛の際に處して天禀の多能から米元章主義を遺憾なく發揮したのである、一方の繪所風の盛なるを見て反對主義を煽つた形跡もあるが、これで以て同嗜味の立場を明かにしたのである、此繪畫以外の學問文章は、其畫論の發表を容易にするのみでなく、自家の推

賞する繪畫に對して、親しく其畫面に筆とりて其美を謳ひ、或は別に文を作りて其人と其技とを賛嘆するの自由ともなつて、同嗜味同範圍の作品は其文雅風流と共に益々世間に紹介せられて、啻に技能憧憬の熱を鼓吹するのみでなく、人物其物も敬慕の的となつて、名聲彌々喧傳するのである、米元章の名は鎌倉足利時代を通じての僧侶の往來によつて、其作品と共に我國の藝林を賑はし、次で趙文敏子昂を傳へ、降つて文衡山董玄宰を將來し、これが唯繪畫のみに止まらず、其詩文と墨蹟と苟も當時の我が文化を裨益する材料は、悉く擧げて將來したのであるから、時によりては墨蹟を尙び、或は詩文に或は繪畫に其價値と必要との認められ次第之を吸收し模倣したのである、我國に移植された藝術の中、彼土に名なくて此土に後繼者の顯はれたのもあるが、其名の彼土を風靡したものなら、其我國を動かすことの多かりしはまた多言を要せない、この南畫系のものが文人畫の俗稱あるが如く、論評と製作とを兼ね、文章と人物との併せ稱せられたのは、即ち名を博する所以であつて、彼土の盛名は則ち我國の敬慕となつて南畫流行の基をなしたのである。

二

南宗畫の祖先とする所は唐の王維で、五代の荊浩關同北宋の李咸熙郭忠恕なども尊敬せられてゐるが、遠く其餘澤を及ぼして、殆ど大宗師の觀あるは實に董北苑である、王維の影響を與へたのは其詩文に其生活に、後の文人畫家が憧憬する資格を備へてゐたのでもあるが、其畫技としては實に當時の詩文より根柢した感想を具象したからで、自然美に對する微妙の剔發は詩の形式に現はされることの研究は、當時其盛を極め、廣大なる自然の局面より詩的の分子を收拾し、從うて自然の變化に就いて鋭敏なる想察を凝らし、僅に廿字若くは五十八字已むを得ざれば長篇を用ゐるが、含蓄の大なるを尙びて、寧ろ字句の少きに諷詠の永きを貴してゐる、此自然の要領收拾と變化の妙用とを詩想よりして繪畫化したものは、則ち摩詰が畫景を主とせし山水圖で、構想と云ひ體形と言ひ皆前人未發のも

のである、これより自然の變を天象の變に求むるもの多く、雪景は其最も妙なるものとして、李成の如きも雪山行旅の圖を作り、雪に由つて景を構ふることと廣く畫界の流行となつて、院體は勿論文人畫家も皆其趣味を雪に求めてゐる、此自然觀は更に董北苑を待つて擴張せられ、同じ氣象の變化中に自然美を求むるにも、煙靄模糊の景に之を求むるの妙を悟り、煙靄によつて山水圖を形成するに至つた、煙靄の美を主張する者は他にもあるが、北苑の描法は最も後世までも深き感化を與へ、其作品と思はるゝもの二點は幸に京都羅叔蘊氏の藏となつてゐて、過眼したこともあるから特に強き自信が與へられるのである、此南宗の宗師と知られた人の作品を、切角の博物館の特別陳列に見ることの出來なかつたのは種々なる事情の存するにもせよ實に胴體のみを列らねて其首を刎ねた觀があつて遺憾に堪へない次第である、北苑の藝術は米元章によつて大に推賞せられ元代に及んで益々聲價を高め、明に至つては沈啓南一派の如きも爲に啓發せられたる所あり、特に董玄宰は北苑の大心醉者にして其作數點を藏するを以て誇り、口を極めて激賞して之に追隨したのである、明末文人畫家の北苑感化の畫風は則ち淸初の四王を動かした所以であるから、我國の畫風も自ら其流風に支配せられたものと云はねばならぬ、北苑の濕的山水は更に米襄陽の發見した米點なるものに由つて益々煙雨の妙趣を發揮して技法を大成することゝなり、自然の粹を集めたと云はれる瀟湘八景中にも、雪と煙雨とは其二要素として取扱はれてゐるのである、濕的山水の北苑襄陽によつて大成せられてからは、殆ど文人畫の金科玉條となつて、手法の摸倣のみで內容の乏しき所謂文人畫家の生活を助けることになつた、須く此二大宗師に對して叩頭禮拜を忘れてはならぬ。

北苑が濕的山水に興趣を感じたのは、或は先天の自然趣味に開發されたとも云へるが實に彼は濕的妙趣を感ずべき實景に接觸するの境遇に在つたからで、所謂江南の山脈多く水流漲る天地を日夕に逍遙して、其深の妙諦を得たからである、自然を描くものは親灸する

景趣に支配されるは當然の事であるが最も美はしき自然を備へたものは彼と略同時なる關同の關中の山にあらず、また范寛が恒岱の景にあらずして、かゝる高山派の山石磊砢、巍々突兀の自然の偉大なる變化であるが、山水併せ得て溫秀の妙を呈するのは、最も自然の拗ねざる自然の狀態であるから、彼は幸に江南平遠の景に觸目して、自ら溫秀なる平遠山水を作り得たのである、宣和畫譜に北苑を評して、董源工秋嵐遠景、多寫江南眞山、不爲奇峭之筆と云つてある、江南の景、平遠の山水、溫秀にして幽遠なる情趣は、始めて北苑と江南の天地との邂逅から生れたのである、北苑を宗とする者の東吳餘杭の地に多く、東吳餘杭の地、一は則ち江南の地區、一は則ち直に江南に密邇する地方で、勞せずして北苑の畫趣を味はひ其山水と契悟するを得て、畫を嗜むもの、北苑を奉じ之に倣ふものゝ多きは當然の結果である、江南餘杭の地の物資豐富繁華の都會でまた行樂の中心であつたことも、自ら其風氣と一致した現象と云へる、天は江南に磊塊を散して其山を作り、更に大江の水を其間に注ぎて、眺めもあかぬ景色を潤飾したのである、江南の天地、北苑と江南、此意義よりしても南宗の稱を文人畫に與へられたのは、强ち董玄宰の附會したのでなくて、自ら其然るべき所以の理あるを首肯される宋南渡後馬遠夏珪また錢塘の山長江の水を畫くも、南宗の人々よりも見れば北方の山水よりして生れた描法を以て江南の天地を寫さんとしたもので、其間に甚だしき矛盾を免がれないと排斥するのである。

三

江南地方を中心とし、學問文章の素養ある人士に依つて畫かれたものに、文人畫南宗畫の稱號を與へることは異議なしとするも、其主張に就ては有力なる論據なくてはならぬ、趣味の中心に關して何等かの說明を要する、其第一條件となるべきは筆の問題で、筆の運用に就いては最も必要なる見地がある、此に於てか所謂書畫一致論が唱道されるので、筆の運用の妙は書が筆を基礎とする如く、書に於て運用の自在を修熟せるも

のにあらざれば、畫に於てもまた運用の宜しきを得ずと云ふのである、書の一劃一線は繪畫上に於ける界線とは別であつて、機械的の巧妙を商量するものでなく、其間に複雜なる筆鋒の運用即ち無限の妙趣があつて、作家の銳敏なる感情作用が現はされるので、均しく一線一劃と云ふも其運用の粗密に非常の懸隔あり、從つて外觀的にも內面的にも其人を移さぬこととなる。王右軍の書跡の賞美されるのは、剛に陷らず粗に流れず、含蓄の優妙にして所現の溫秀なるからである、これが同じ人格を議するにもそれ〴〵特色あつて各長所を有するが、藝術として渾然玉の如きを推すので、筆路の運用もまた此の如きを尙ぶのである、かやうに書は古來六藝の一となつて、人格修養の道に數へられ、書を能くする人は即ち人格に秀でた所あるからとも考へられてゐる、此故に筆に覇氣あるを喜ばず、圭角あるを避けて、草率の線と雖も渾然玉の如き感あるのを第一とする、この點よりすれば無意識に形式を摹するの無作法たるは勿論であつて、心なき人の動作擧止の如く、何等の品位即ち人格の反影を認めぬこと〻なる、この心持で僅かの線より形成せられる書に對して極力の注意を要すると同じく、繪の一線一劃に對しても愼重なる筆を操つるの必要を說くのであるから、書畫の一致を論ずる上に於て一應の道理がないではない、古昔を能くする者にして初て畫を善くすべしと說くのも已むを得ない事である、それで古來南宗畫系の人と目せられた中には、當代に於ける繪畫の名手でまた能書の聞え高き人が多くある、米老と云ひ元季の四大家と云ひ將た文衡山董玄宰と云ひ皆書畫道の達人である、筆に次では墨であるが、墨も筆も其描くべき材料を俟つて運用されるので、其材料とは即ち絹か紙かといふことである、絹も後に至つて絖と發達して、運筆と墨色とを併せ發するに便になつたが到底紙の感受性に及ばないのみならず、必要に應じて之を變化せしむること筆に於ての自由に及ざるも、絹本絖本に優ること數等である、絹の種類としては其產地によりて多少其名を異にしまた長所を一にせざるものもあるが、紙の多樣多

種なると比すれば殆ど同日の論ではあるまい、これ紙の感受性の自由なるによつて、必要に應じて改鈔し得られる特色がある所以で、筆路の鋭敏なる畫を作るに當つては、其筆を選び墨紙を精くするに至るのである、從うて南宗畫家の多くは絹絖よりは寧ろ紙本に興趣發揮の自在を求め、筆墨紙等を文房の愛玩品として幾多の著述に種々なる研究を發表したものである、文房器具の愛玩は書畫彙修の南宗作家の狀態で、是に由つても歌舞の喧騷なる娛樂よりは、靜かなる趣味の養成が窺はれる、要するに書の趣味と云ひ其器具を愛するの情と云ひ、一は必要上よりの事とは云ひながら、其趣味としては溫秀靜肅であつて、其繪畫觀もまた同じ趣味の上に立つて成るべく自然と接觸せんとして、專ら山水畫に傾き、王維が雪景に興趣を求め北苑が煙嵐に合致するからで、大風暴雨の天候や徒に奇峭聳立の山嶽にはそれに相當する趣味と筆法とあつて各其妙所の存するも、南宗畫の氣分としては全く靜肅なる自然に傾倒したのである、今度の博物館陳列品中には清朝の湧貽汾の田舍樂と題した雪景の圖があるが、雪景の情趣の寒さと其降り積る感じとを全く前人未發の見地より現はして、降り積る雪の柔かさ重さは處々の岩影に少しの暈翳を施したのみで、樹木の點景もなく、赤裸々の雪を描いてある、他の紙の地を白く拔きて周りに淡暈を施し或は冬枯の樹木を添へて、雪景を說明せんとするのとは、手法を異にしたもので、彼の淡暈を施したものは雪其物よりは寧ろ暗雲の蔽へる天の描寫に其感を奪はれ、山骨土容に至つては雪景にも拘はらず、其地色の白きが卽ち雪なりとの說明を敢てして、降り積る雪の柔かき感想は少も現はされてゐないのが多い、此圖の積雪の感はまた能く其田舍家及人物と調和して、蕪村が五月雨の句に於けると同じき感想を提へてゐる、雪景の積雪を主として感じた靜肅の氣は卽ち此處に存するのである、端的に雪を描かんとしてかくまで成功せるものはあるまい、靜肅はまた枯淡となり蕭陳となる、郭忠恕は落木の枝柯に其感を求め、後には倪

迂また簫疎たる枯木二三株を畫くのみにて、其氣を寫さんとしてゐる、倪迂の法を傳へて之を雪景に巧みに應用したものは、菊地晋二氏の藏品たる中江杜徴の作である、杜徴の畫名は第一流たるに及ばざれども、此作品を以てせば彼は實に隱れたる大家である、北苑一流の濕的山水の平遠なる圖面に靜肅簫疎の感をよく捉へた人は米老を推すの外はない、米老の眞作は不幸にして未だ寓目の機會を得ないが、米元暉の傑作と思はるるものは大阪の博文堂主人の藏である、絹本に胡粉を交へた米點の山水卷だが、其雲蒸し雨結ばんとする墨氣は胡粉の雲と相俟つて、靜肅のうちにも一種嚴肅の氣に打たれる、元季四の大家にはまた此感境を別樣の筆で寫したものゝ過眼錄に著錄されてはあるが、不幸にして未だ眞蹟に接しない、黃鶴山樵のみは博物館で陳列されたが、一も感興を惹くもの無く、山本氏の所藏としてゝ今度陳列され無つた泉聲松韻圖の方が逈かに優品で、王叔明の眞面目を現はしてゐる、これも濕的山水で墨氣潤澤、山脉樹木に深厚の感を與へ、山峽に懸れる瀑布、溪間の水流も、この深厚なる山谷のあればこそ、かくも流水の源を蓄ふるなれと、眉宇を壓して森嚴の氣が襲ひ來る、其他關西には其名蹟を畜へないが東京には修竹遠山圖侶鶴圖等あつて、黃鶴山樵が趙文敏の外姪でありながら、叔父の畫法を一蹴して新機軸を現はさんとする氣象が見える、是等は何れも陳列の榮を得なかつた、北苑の風によりて嚴肅の氣分を最も善く現はしたものには幸に董太史の山水圖が陳列されてゐる、圖には玄宰自身と乾隆帝が御賞としての贊題と多くの印記を加へて賞鑑したもので、また確かに賞贊に値する作品である、惜哉陳列の場所當を失して、か程の名畫を紹介するの好地位でなかつた、これは玄宰が自題に明かなる通り雷雨陰霽の景を描いたもので、墨色と用筆とに甚大の注意を拂つて雷霆はためき猛雨襲來の淺薄な景色を描かず、天候陰險、雷起り氣蒸し、平和なりし自然は緊張して其異變に危惧するものゝ如く、萬象一切其已に反省した嚴肅の天地を寫したものである、畫面に漲る懊惱の氣分はまたこの嚴肅

の風景を引緊めてゐる、古來天候の變を畫くもの能くこの陰欝の自然を筆頭に上せたるものありや、この自然の嚴肅をかゝる機微の際に捉へ得たるものありや、淸初の四王また此氣分を別途の筆に寫したものはあるが、今度の陳列には代表作と思はるゝものは一も無かつた、寺内伯の王石谷の如きは唯其の尨大に驚くのみである、靜肅を尙び枯淡を喜び、森嚴なるを要し謹重なるを愛する、動くものゝ動く時は動く時に動くにあらずして、動かんとする時に動くのである、自然の變化は變化する時に變化せずして、變化せんとする準備が起るのである、自然は變ずるものとして、其平靜なる態を捕ふるも可、但し平靜なる中に自然の無窮の擴大が看取されてゐなければならぬ、卽ち自然の不斷の活動である、自然が變じかけた時として、其刹那の機微を捉ふるのも妙である、要は自然に粘着して平板なる含蓄なき觀を排することゝなる、自然と自己との合體は差別的のものでなくて、自然的のものであらねばならぬ、自己先づ渾然玉の如くなる修養を積んで、筆を運ぶこと愼重、常に自然と冥合して筆を運ぶ間に卽ち自然が浮び來るのである、南畫家が何々に倣ふといひ、何々を法とすといふも、徒に摸倣するの謂ではなくて、其筆法の愼重にして根據あるを自白するのみである、此南畫觀は筆法に重きを置くものゝ思想の自由も束縛されず發表の形式にも累を及ぼされないで、自然の印象を表はすを必要條件とする、筆は決して形式にあらず、唯畫の本源を愼重にせよとの秘訣に外ならぬ、この故に幸に江南の天地に發展した畫風なりとて決して此小天地に跼蹐するの要を說くの必要はない、唯其氣分の江南の天地に一部の冥合するものを認めたからで、これを說明の材料に供したに過ぎない、されば所謂南畫系に繫がる人々の作品中にも、形式に陷つた非南畫あれば、其中に數へられざる南宋禪僧の墨畫中にも最も南畫的の印象氣分を發揮したのもある、此に於てか南宗畫所謂印象畫が形式を說かないで筆を說くのに充分の理路を盡してゐないが、面白き節がないでもない、粉本の摹寫練習を說かないでもないが、讀書學問

して自然を看取するの思想を養へといふ所に、尤もらしき主張が認められる。

四

支那に於て山水は士太夫の餘技と目せられ、自然を味ふは山水を第一とすと云ふもの丶、必ずしも山水に重きをおかないで、自然を味はひ得て之を現はし得れば足りるので、要は自家領會の自然を筆頭に現はせよとの事である、白雲外史惲南田が王石谷の山水を見て其及ぶべからざるを悟つて花鳥に走しつたもそれである、南田の花鳥は殊に其花卉は彩色の濃艶以外、沒骨と線條との結合に自然の變態を極め、殆ど一莖の中一葉の同じきもの無き程、精妙自在の趣がある、この種の作品は今度の陳列中一點も存せず、我國の作家中に之を倣ふものあるも、殘念ながら筆力の行きかひのみに其氣を奪はれて、時に自然の喪神した感がある、王覺斯の最も放縦なる描寫と最も細緻なる描法との「コントラスト」より成れる花鳥の如きに至つては、遂に我國人の伺ふを許さなかつた、王惲と云ひて惲南田と並び稱せられた墨井道人吳歴の如きは西洋の法を借りて特殊の繪に長じ、頗る新規の描法を試みてゐる、この法に泥まず直に自家に轉用せしも、また南宗の精神であるが、今度の出品に對しては遺憾ながら此特色を味ふことが出來なかつた、その畫風の影響も終に我國に現はれ無かつた、淸朝は四王吳惲以後稍〻山水畫に變化を見ること少くなりしも、近世の趙魏叔の花菓に於ける大膽なる觀察と描法とは看過すべからざる手腕である、吳俊卿がまた同じ方面に筆を着けて魏叔の妙を見ないにしても、淸新の徑路を求めて印象本位を旨とせしは多少注意すべき事實である、此二人皆書を善くし篆刻に妙を得ながら、印象本位の畫に興趣を求めしは西洋畫の感化かは知らぬが、繪畫に對する自由研究の窺はれ其畫道に鍛へし筆力を移して、却て赤裸々なる自然の妙趣を傳へてゐる、この畫道の見地は畫壇を啓發するものと云はねばならぬ、我國に在つて眞に南畫の空氣を吞吐したものは大雅堂と竹田とである、此二人また共に書を善くし文を竭し其修養に務めて、畫

壇に新鮮なる氣風を漲らし、大雅は飄逸なる筆法で清素なる氣分を捉へ、竹田最も支那を摹倣したが、妙味は幾分の日本趣味を現はした所に存する、野呂介石の如きは紀州の眞山水より畫想を得んとし、支那人の筆にせざる山川樹木を多少南畫化し得たが、氣分よりもいくらか筆の人と思はれる、渡邊華山は思を寫生に潜めて、また一種の南畫氣分を捉へ得たが、不幸にして其終を早くした、南畫氣分は大に伸んとして幾多作家の苦酸なる經歷を經て來たが、徳川時代だけでは、末葉喈萎靡するのみで、遂につく芋山水の汚名を蒙るに至つた、然しこれ時代の罪で人の罪でない、今や聖代畫運の進興につれ支那の名畫も西洋の傑作も之を手にし之を味ふを得るに至つては、唯これ南畫的精神を以て、勇往邁進するの外なく、續々として其氣分の代表作を希望してやまない次第である、これ士太夫の餘技否智識階級に位する畫人の成すべき道である

總選擧後の寺内内閣の執るべき態度

▽總選擧後の寺内内閣の執るべき態度

法學博士　吉野作造

◉今度の總選擧の結果は新聞などの豫て豫想して居つたが如く、政府側の勝利に歸したとする。併し政友會は單獨ではまだ遠く過半數の域に達せず、所謂御用中立團と相合して議會に過半數を制し得るとする。明確なる結果は一兩日の後を待つを要するが、大體先づ斯く想像して、サテ寺内内閣の今後執らんとする態度を考へて見よう。

◉寺内内閣の腹を打ち割つて見れば、其第一の希望は内閣の存續であらう。其存續の爲めには總選擧の結果如何によつて恐らく臨機應變の策に出づるに相違ない。若し政友會が思ひの外優勢であつたならば、其要求を聽いて或は二三の椅子を其黨員に與ふるか、或は二三の閣僚を政友會に入黨せしむるか、不完全ながら「政黨を基礎とする内閣」といふ體面を取り繕ふを辭せぬであらう。併しながら、寺内内閣の本來の希望は恐らくこゝにあるまい。出來る丈けは「政黨を基礎とする内閣」といふ看板を掲げずして、政友會を我が思ふまゝに頤使せんことを欲するのであらう。それには所謂御用中立團を以て政友會を牽制し、政友會を餘り優勢なものにしたくないといふことになる。而して總選擧の結果は恐らく寺内内閣の希望するが如き形勢を實現するものであらう。

◉寺内内閣の爲めに最も都合よき政界の形勢は小黨の分立である。一つ若しくは二つの黨派が著しき優勢を示すことは其大禁物である。故に寺内内閣は政友會憲政會國民黨の分野の外に多數の御用議員を作り、之を一團として政府の爲めに犬馬の勞を取らしめんことに努めて居る。斯くせざれば、超然内閣の基礎が危い。故に總選擧後に於て寺内内閣の先づ第一に努むるところは、御用議員の結束擁護であらう。其結果同じく御用黨たる政友會との間に多少の暗鬪も免れまい。併し其暗鬪の結果政府と政友會と相軋るに至るやうな事はあるまい。政友會の策士は悧巧である。

◉各政黨間に於ける中立議員の爭奪は、何時でも總選擧後に、行はるゝ現象である。中立議員の中には純然たる御用議員ばかりではない、何れかの政黨と多少の因緣を有する者も少くない。殊に政黨の不人望なる

に於ては、中立を標榜することによつて當選するといふ不思議の現象に富む。けれども、政黨の應援なしには當選も一般に困難であり、又議員となつて後も政黨の外に居つてはいろ〳〵不便があるので、全然官僚政治の保護により辛うじて當選したるものを除いては、中立議員から進んで所屬の政黨を定むる必要がある。政黨も亦一人でも黨員の多からんことを欲して盛んに入黨を勸誘する。今度の選擧でも中立を標榜せるもの極めて多いが、其中にやがては公然若くは暗默の關係を政黨に結ぶもの少くなからうと思ふ。

⦿併しながら、中立議員が段々政黨に關係を結ぶことは、卽ち政黨の勢力を大ならしむるものであつて、現内閣の爲めには忍ぶべからざる苦痛である。從つて寺内内閣は此趨勢に對抗して盛んに中立議員の足停を講ずるであらう。玆に我々は國民として大いに警戒を要するものあるを思ふのである。何故なれば、中立議員の足停は自然の傾向に反するものである丈け、之を遂行するに無理があり、從つて其間にいろ〳〵の弊害を生ずる虞あるからである。換言すれば、中立議員の足停をなす爲めにいろいろ不正なる利益の提供といふやうなことがないと限らない。又此等の議員にしても政黨の所屬なき以上は、寺内内閣あつての議員にして政治家として永き生命を維持し得べき希望あるものではない。從つて堅實なる節操を彼等に求むることは困難である。現内閣の存續其事の是非は暫く別問題とするも、現内閣が其存續を計らんとして執るところの手段に對しては、我々は憲政の健全なる進步の爲めに多少警戒するところなかるべからざるを思ふものである。

⦿更に問題を一轉して、寺内内閣が今後の政局に當つて如何なる手段に出づべきかについては、格別の意見はない。何故なれば斯くの如き内閣其物の存續を予輩は希望せざる一人であるからである。けれども若し寺内内閣が今の儘で憲政の順當なる進步に今日の政界を導くの誠意があるならば、吾人は速かに政友會との關係を政治上公明正大なるものにせんことを希望したい。政友會が堂々たる一國の政黨として官僚政治の爲めに犬馬の勞を取るのは、何んと辨護しても醜陋の極である。政府も亦此醜陋を意とせずして政友會と馴れ合ふのは、恰かも密かに隱し妻を蓄ふるの類にして、政治上甚だ公明を缺くものである。寧ろ此關係を一變して公然誰憚らぬ關係に引き直すならば、獨り政治道德上好ましきのみならず、内閣其物の基礎をも一層有力にするものであらう。寺内内閣と政友會との關係を如何に結び附くることが、其關係を公明正大ならしむる所以であるかは、今日玆に說かない。只今日の儘で進むのでは、遠からず内部より破綻を來たすを免れまい。（四月廿一日）

▽總選擧の結果によりて寺内内閣の執る可き態度

慶大教授　田中萃一郎

四月二十日と云ふ今日は全國の津々浦々で百何十萬人と云ふ選擧人が思ひ〳〵の候補者に投票して居る。開票の濟んで總選擧の結果の判然と分明になるのは兩三日の後を俟たねばならぬが、畢竟するに寺内內閣が勝つか、憲政會が勝つか、二者その一を出でぬので、假りに政府黨と在野黨との勢力が相匹敵して居る場合には、臨時議會の召集までには政府は乾度弱腰議員を誘拐し籠絡して議會に多數を制することになるであらう。故に總選擧の結果引き分けとなつたと云ふとはあり得られぬとであるから、茲には在野黨の勝つた場合と政府黨の勝つた場合とを別々に想像して論じて見やう。

一

憲政會では總裁の加藤子でも總務の尾崎氏等でも英國流の議會政治を理想としつゝ、而も英國の立憲政治の、主義の爭ひ空論の鬪ひで樹立されたのではなく、政策の實際問題に對する賛否論爭の間に發達して來たのを忘れて、第三十八議會に於いて輕擧盲動遂に議會解散の不祥事を招くに至つた。議會の過半數黨が隱忍自重、寺内內閣に秕政疊出して天下の人心を失ふに及んで之に肉薄するの方略に出でず、國民黨の提出に係る空論に基ける內閣不信任案に賛同したのを思へば、實に議會の解散せられて不自然なる多數黨の打破さるゝのは天意に出でたのもであるとも云はるゝのである。百九十餘名を有して居つた憲政會は新聞記者一流の熱心な聲援を受け自から言論戰に勝てりと吹聽しつゝあるにも係はらず、二百有餘名の公認候補の必勝を期するの自信なく、百六十名の議員を得可しと樂觀して居る。假りにこの想像が幸事に的中したとして扨て外に國民黨が三十名、中立を標榜せる政府反對の議員が十名當選したとするなれば合計貳百名で、前議會に內閣不信任案を提出した二百四十一名に比すれば頗る減少して居るが、而かもなほ且在野黨の勝利と云はねばならぬ。

さりながら假りに政友會を政府黨として、而して政府黨百八十名、純在野黨百七十名となつて三十名の國民黨が所謂キャスチング・ヴオートを握つた曉に、犬養氏が果たして三十九議會に於ても三十八議會に於けると同じく政黨に基礎を有せざる內閣なりとて再び不信任案を提出す可きやと云ふに頗る疑はしいのである。世間には隨分無責任な人物も乏しからず、隨て政界の攪亂底止する所なきを見て會心の笑を洩らすと云ふ危險人物も稀には見受くるが、昨今の國民黨は減税一點張りて衆愚を籠絡しやうとした時代とは餘程態度を一變し、戰後の國策確立の上に大に努力し度いと云ふ抱負も見ゆるやうである。して見れば憲政會が獨力內閣を組織するの實力無きに之と提携して內閣不信任案を提出するとは、徒らに政局を紛更せしむるものであるから國士たる犬養氏一派の敢てせざる所であると思はるゝのである。然し若し三十八議會の不信任派が再び提携して內閣の不信任を決議したる場合には勿論寺內內閣は總辭職を爲す可きもので、かゝる際に未練がましき舉動に出るとは之を避けねばならぬ。上杉博士の憲法論に從へば我國の憲政では解散に民意を問ふの意が無いから、總豫算の不成立になる迄は敢て衆議院の

決議に屈せずとも可いとのことであるが、かゝる理論に拘泥して政治家の出處進退を過るとは寺内伯以下閣僚の誠意誠心望まぬことである。再解散論の如きは敢て玆に取り立てゝ評するの必要が無いのである。

二

在野黨の豫想と反して政府側では政友會百六十名、御用中立四十名、合計二百名にて優に衆議院に過半數を制し得可しとなして居る。即ち憲政會は百四十を超えず、國民黨二十、政府反對の中立十名と見て居るのである。總選擧の結果かく政府の勝利となるに於ては寺内内閣が三十八議會に以て眞に民意を代表せずと斷じて解散を行ふた政治的見識の聰明であつたことを證明することに爲る。憲政會の尾崎氏は選擧演說に於て至る處解散を以て罪惡であると論じて居るやうであるが、若し開票の結果在野黨が敗北した時は氏は掌を反して寺内内閣の聰明なりしことを嘆美せらるゝであらうか、抑も亦泣言を唱へて選擧干涉呼ばりを爲すであらうか。

尾崎氏一人の言論にさまで重きを置くの必要は無いが、兎に角不自然の多數黨は調節されて衆議院の有力なる少數黨となり、國民黨と聯盟しても議會に過半數を制することが出來なくなれば、寺内内閣は國民の信任を得た譯であるから、そこで戰後に對する國策を攻究することも出來やうし、官界から前内閣の餘燼を一掃し去ることも出來やう。さりながら政黨に對する態度は果して至公至平の看板を塗り變へずして濟すことが出來やうか。既に憲政會に對しては撲滅的に攻擊を加へたが、その頭を下げ尾を掉れて來るに於ては再び一視同仁之を庇護し得るであらうか。苟くも加藤子に憲政會の前途に對する不安の念が起て弊履の如く之を棄て去らざる以上、かゝる朝に夕を測らざるが如き激變を見ることは無からう。さらば憲政會は依然として之を在野黨として政友會に對しては如何なる態度に出でたものであらうか。

憲政會側の政客は前回大隈内閣當時の總選擧に與黨が意外の勝利を得たるより自負心を起して、天下の人心我黨に在りと信じ、今回の總選擧を以て閥族政治對政黨政治の爭であると論じた。この主張をして果して信ならしむれば、總選擧の結果三十八議會の不信任派の百八十名に減ずるのは即ち政黨政治に對する閥族政治の勝利であると云はねばならぬ。併し今日の總選擧は憲政會派と同會打破派との爭で、更に狹義に解釋すれば憲政會と政友會との爭であつたので、三十八議會の不信任派の敗北は即ち憲政會打破派の勝利である。寺内内閣たるもの若し夫れこの理を曉らば總選擧後に於て斷然政黨に對する態度を一變して公然政友會と提携して耳目を新にせねばならぬ。内閣の一部改造も妙であるが眞道に總選擧に際して補缺政策で反對黨を威壓した法相や、東奔西走大に御用議補者の當選に努めた文相を棄てることも出來まい。幸ひにして參政官副參政官の椅子が空位で居るので政友會その他の中幹部連を迎へて之に就かしめ以て提携したら可からう。或は政友會にして百六十名の近い議員を得た場合には、又政友會相當の自負心が起つて進退の自由を保留して置いて寺内内閣に對する責任を回避しやう杯と云ふ悧巧染みた議論も起るかも知れぬが、餘り無い智慧を絞ると却て智慧負けがする。この問題

の起つた際は寺内内閣も政友會も餘りに小利害の打算に沒頭せずして提携の實を示したならば可からう。辭柄は閉口にすると、そんなことは無い。共に憲政併打破を標榜して居るでは無いか。國民黨と雖もこの點に於ては主張を等うし行動を平行せしめて居るのであるから、若し政府の干渉があつたなら枉げて是に應じたら可からう。かくなれば寺内内閣は黨分安泰であるが、若し官僚的策士の献策を容れて寺内内閣たるもの中立御用議員を中堅とし各政黨を操縦して以て一日なりとも壽命を永くせんと圖らば、必ずや次の通常議會に於て却て政黨の聯合攻擊を受け無協の最後を遂ぐるに至るであらう。

三

併しこの寺内内閣と政友會竝に出來得可くんば國民黨との提携は未だ許すに國家長久の策を以てすると能はずで、この點に關しては余輩に大に說がある。米國の政治を論ずるものが常に言ふてる所であるが、米國では憲法の制定者が當時流行して居つた三權鼎立相互牽掣說に動かされて立法行政司法の三部を全然獨立對等のものとした。それ故に三權互に自我を主張して一步も讓らぬ時は、國務の梗塞を招くことゝなる。然るに玆に兩大政黨が存して居つて政治的勢力の中樞を形成せるので三權を調和してその間の關係に氤氳杆格ならしむるのである。故に米國に於ては兩大政黨は即ち政治組織の主要機關であると云ふのである。この議論は英國にも當て嵌るので英國でも自由統一兩大政黨が多年政治組織の要素となつて居る。佛國の如き又伊國の如きは政界に於ける分野が英米に於けるが如く劃然と兩分されて居らず、即ち政黨の組織が今なほ完成せずして隨て政界の動搖も甚しいが、併し佛國では一九〇一年以來急進黨と社會主義急進黨とを中樞とせる大同團結が十有餘年間政界を左右し、伊國でも同じ頃からジオリッチーの自由黨が事實上政界の主人公であつた。兩國共に昨今殊に戰爭勃發以來は何れも十有餘年間政界を支配した政黨に對する反動時代と目す可きであるが、政黨が政治的勢力の中樞たるの點は毫も英米と異ならぬので、露國の現狀に於ても要するに自由主義者たる立憲民主黨が時局を左右するか、將た又社會主義者たる勞働農民黨と社會民主黨との聯合軍が勢力を得るかゞ問題になつて居るのである。

我國では勿論皇室中心主義であると云ふ、國體論形式論に於て皇室中心主義である可きは敢て多言を要し無い。世間ではデモクラシーを民本主義と譯して得々として居るものが多いやうである。成程欽定憲法を講ずる御用憲法學者が皇室中心主義を唱へつゝ、民本主義と云ふならば、專制政治の時代に於て君側に伺候する史官が民本を筆にしたと同じく、至極然る可きことであるが、民間獨立の學者が君主國體を認めつゝ民本主義を口にするは甚だ思慮の足らぬ言分である。民は本なりと云ふは君は末なりと云ふのである。余輩はデモクラシーの譯語は民主政治で差支無いと思ふ。國體論では皇室中心主義であるが政治の實際に於ては民主主義で決して不都合はない。但し余輩は民主政治であると云ふたからとて衆愚政治、民衆政治を謳歌するものでは無い。煽民家の徒は動もすれ

ば最大多數の最大幸福說を金科玉條視し、無產階級の向上のみが政治の極致であるかの如く考へて居るが、民主政治にして是を唯一無二の理想とするものであるならば、余輩は民主政治に反對せんとするものである。余輩の民主政治は即ち政黨を以て政治組織の中樞たらしめんとするのである。

維新以來薩長は多年政權を壟斷して居つた。是は否定す可からざる事實である。その餘力として今なほ元老は政治上に於て一種特殊の地位に立て居る。皮相的に考へると如何にも不都合のやうであるが、今日まで事實元老の着實な老成的勢力に依て放縱な當局者の失政を匡正し得たことも尠く無いので、公平に考へる時は一概に元老であるから迚排斥する譯には參らぬ。併し人に百歲の壽なく元老物故の後には是非共政黨に政治的勢力の中心點を求めなくてはならず、而して政治的勢力の中心點となる可き政黨は穩健着實な意見を懷抱して基礎鞏固な組織を維持せねばならぬ。大隈内閣が總選擧に大勝利を博した際與黨の勢力を糾合し得たならば或はかゝる一大政黨を組織し得たかも知らぬが、惜むらくは時機を逸して仕舞つた。天下の人心既に大隈内閣を去れる時に乘じて急遽製造した憲政會で政局の中心に立たんとは餘りに分を知らぬ計畫であつた。かゝる政黨もあるので、苟くも元老百年の後の政局を憂慮するものにして輕佻浮薄な憲政會打破を思ふものは朝と云はず野と云はず、貴族院と云はず、衆議院と云はず、官學と云はず、私學と云はず、悉く相合同して一大政黨を組織するの機運を造らねばならぬ。寺内内閣にしてこの機運を促進するに努めなば、國家百年の長計玆に立つ可く、戰後の國策如何の問題の如き刃を迎へて解けん。(四月二十日)

▽寺内内閣に對する希望

法學博士　浮田和民

總選擧を何遍繰返して遣らうとも、日本の今日のやうな遣方では立憲的總選擧には成つて居ない。立憲的總選擧なら政府が濫りに干涉したり、候補者が金錢を撒き散して運動員に投票の買收をさせたり、さうでないにしろ金の力で投票を掻き集めるといふやうな事の有る可き筈はない。今日のやうな遣り方では何遍遣つても、其結果が立憲的効果を揚げる譯には行かない。第一選擧を立憲的に行ふには、戶別訪問を排斥し、各有權者に葉書やら郵便やらで哀訴嘆願的な事を爲るのを根絕しなければならない。尤も非立憲な選擧は今に初まつた事ではない。昔の如く壯士が亂暴狼藉して、或は武器凶器などを用ひてまで爭つた事を思へば、今日のは稍立憲的に近付いて來てゐる兆候が見へるから、第三者として歷史的に觀察すれば、日本の立憲政治の前途を悲觀するには及ばない。何處の國でも初めから理想的に立憲政治が行はれた譯では無いのであるから。

日本には立憲政治其物がない。從て實はまだ立憲政治と云ふ事は行はれて居ない。だから何んな事があつても憲政の擁護とか、憲政の發達と

か云ふ事は日本には頭から無い。政黨員は自分の黨派が政府や政權に離れると、憲政の逆轉、憲政の衰退といふ事を云ふが、從來日本には立憲政治と云ふ事は理想としては有つて、今はそれに達する努力の最中ではあるが、嘗て實現された事は無いのである。故に今次の選擧がどんな影響を來たしても、前途は樂觀して宜しいのである。既往が暗黑な歷史を以て進んで來たから、今日の場合選擧の結果如何といふ事は、私に取つては論ずる價値が無い。形は稍西洋の政黨の競爭に成りかけて居るが、實は昔の源平以來、南北朝以來、關ケ原以來の、日本の豪族が全國に黨を立て類を集めて政權の爭奪を事としたのに異ひは無い。總選擧は詰り源平時代の武力的競爭を平和の間に完了するだけの事である。西洋人が所謂「人の頭を碎く代りに人の頭を數へて、戰はざる前に勝敗を決す」るといふ内亂即決法である。總選擧の度毎に金を濫用する事は莫大で、隨分無用の出費とは思ふが、之れも内亂即決の代價と觀ずれば決して無價値と言ふ譯には行かない。唯今日は敵も味方も平和の間に一時自分の首を敵に渡すやうなもので、次ぎの選擧には蘇生して預けて置いた敵の首を取ると云ふ望みがあるから、何處まで戰つても壇の浦には行かずに濟む。

今回の選擧の結果政府が勝つた事は決して無意義ではない。第一に寺内内閣は成立當時は超然内閣たる事を自白し解明して居たものゝ、本年初めの寺内首相後藤内相の訓示以來、政友會を比較的立憲的政黨と看做し、總選擧の結果之れに中立議員を加ふれば、必ず多數を得る。即ち

決して政黨内閣を無視せず、自ら政黨内閣となるものである。内閣成立當時の宣言標榜には戻るが、從來の藩閥や官僚の力許りでは不可で、矢張り議會に多數を制する必要を認め、衆議院に於ても貴族院に於ても政黨の上に立たねばならぬ事を說明したものである。故に新政會から見ては失敗だが、政黨全體から觀れば矢張り大勝利である。

第二は第一の自然の結果であるが、政黨の信用は將來に於て發展する事を、政府も民間も認めざるを得なくなる事である。政黨と云へば日々に罵倒する傾向が著るしく、又政黨員と云ふ中には罵倒すべき人が少くない。國會議員の素質が未だ日本では良くない。國民の選良には遊び無いが、も少し精選が出來さうなものであると思ふが、矢張り多數の人民を代表するものが國會議員になるのであるから、國民一般の素質が高められない限りはさう理想通りには行かないであらう。政黨員と云へば昔の代言人のやうにいかがはしき人物のやうに罵倒されるが、今日政黨は一選擧毎に其の勢力を加へつゝあるは爭ふべからざる事である。藩閥者へ元老も最早凋落し盡くさんとし、官僚は何等立憲的の勢力を持たぬから、眞の立憲政治が實現されざるに拘はらず、政黨政治が行はるゝのは疑ふべからざる事である。純然たる立憲政治の行はるゝには今日の薄弱なる政黨や政黨員では駄目であるが、兎に角時勢は政黨政治の代となつてゐる。日本の歷史を見るに上代は族長政治、奈良朝王朝時代は公卿政治、鎌倉以後が武家政治、維新から今日までが藩閥政治であつたが、今後は政黨政治より外に國政を料理する手段はない。我日本は萬世一系の皇室を戴い

てゐるが、政治の實權を握るは社會に於て有力なる或る階級又は地方的團體に外ならぬ。然し今日以後は一階級丈け、或は一地方團體丈けでは政權を握る事は出來ない。議會を中心とし議會の多數を占むる政黨が、内閣の基礎となり將來内閣を組織すると言ふのが必然であらう。尤も政黨政治の實現が即ち立憲政治の實現では決して無いが、而かも政黨を外にしては日本今後の政治の中樞と成り得る社會的勢力と云ふものが無い。

第三には、近頃は政權に關係を有し、又は政府に立つてゐる當局者が、何時の議員選擧にも勝利を博するのが例の如くに成つて來た。之は何を意味するかと云へば、一つは政府が昔のやうに凡ての政黨を敵に爲ないからである、もとは政府は政府の役人丈けを味方とし、人民を敵方に廻して政權の爭奪をしたが、政府がさういふ態度を取ると、民間のものは凡て一團結をせねばならぬやうになる。所が政府が政黨化して來たから、議會改選の際には民間の或政黨を應援し、官權を利用して選擧を行はしめるから、昔のやうな唯一團の在野黨はなく民黨はない。民黨が分裂してゐるから、政府は總選擧を操縱して勝を得るやうになつたので、畢竟議會の操縱が巧くなつたからである。昔は無暗に權力を以つて威嚇干渉をやつて酷く失敗した。要するに政府が悉く人民又は政黨員を向ふに廻した時は議會に於て政府は少數となる。政府が緩和すると政府に結托する政黨が、官權其他の便宜を有するやうになり、從て政府黨が多數となる。之れは政黨が未だ十分國民の信用を得ない結果とは云へても、強ち政黨が衰へた結果とは云へない。詰り政府が政黨の勢力を認めた結果で、之を以て直ちに政黨を輕蔑し、其前途を悲觀する必要は無い。然しまた政府が政黨の勢力を認めたからとて、立憲政治の實現が近づいたとも云へない。それは自ら別問題である。唯それ丈けの意義は今度の總選擧に由つて認められる。

第四は、何時も乍ら人民全體の政治思想の薄弱冷淡な事である。國民の態度は源平時代の人民を去る事遠からぬ。國民一般は勝つ方に服從する思想しか無いと見なされる。源平時代は一般の人民は最初から最後まで傍觀し、其爭ひを見る事國技館の相撲を見るが如く、勝つた方に服從する。此國民性は今に少しも改まつては居ない。教育社會の連中は南北正閏を正し、南朝を正統として大學校の先生も中學校の先生も小學校の先生も、皆南朝一點張りである。が實際に於ては國民は足利尊氏黨で、尊氏に服從する人民である。尊氏は後世でこそ逆臣と云はれるが、當時では逆臣では無い。公平な歷史家の眼から見れば、源頼朝にしろ、北條義時にしろ足利尊氏にしろ、徳川家康にしろ皆同一種の人間である。皇室を奉戴して天下の實權を掌握したものである。だから足利尊氏を定義すれば「上に皇室を戴き天下の政權を掌握するもの也」である。此意味から云へば明治維新の尊氏は薩長の藩閥に外ならぬ。今日では長閥の一派の人々が多く政權を握つてゐる時代で、立憲政治で無い以上は、頼朝尊氏の政治即ち武家政治に大して異なる處が無い。上御一人で政務を統べ給ふ事が事實として困難であるから、或る有力なるものに政務の施行を委すは大

化の革新以來定まつてゐる。將來立憲政治が成立つと政治の趣が變つて來るが、今日までは矢張り依然たる武家政治の世の中である。例令閥族内閣に代つて今日の政黨が内閣を組織しても、政黨政治即ち立憲政治では無いから立憲政治が實現されたとは云はれない。故に今日憲政會が勝を得ても未だ〲立憲政治ではなく、武家の政治であつて、日本人民は之れに服從する。此國民性が改まらない以上は立憲政治の實現は望まれない。今日の如く勝つた方にのみ服從するのでは、依然尊氏に服從する武家時代の民衆と隔りが無く、學者識者は過去の尊氏を否定しつゝ、現代の尊氏には服從してゐるのである。

立憲政治は行はんとするには、上杉博士の所謂三權分立があるといふ丈けでは駄目である。法律が惡法律であれば、法律を制定する機關と之を實施適用する機關とが別々であつても專制政治である。三權分立を立憲政治の本意と解するは十八世紀の謬說て、今日の政治學者の排斥する議論である。英國の如く三權分立が十分に行はれて居ない處でも、政治の運用を立憲的に行つてゐれば、今日立憲政治たるを失はぬ理由がある。立憲政治と云ふものは、三權分立の外に尙二つの要素が備はらねばならぬ。其一は立法機關が民意輿論に基き、法律が人民の意思を表現するといふ事である。之れが立憲政治の主要とする點で、即ち衆議院議員は公選されたるものを以て組織すと明文に示されてゐる。唯 天子の御諮詢に應ずる許りでなく、法律案に協贊すると云ふ内に人民の意思願望を代表する意味が無からねばならぬ。民意輿論を代表せねば法律の制定に協贊する資格を具備しない事になる。處で日本には民意輿論が薄弱故議院の信任が從て弱薄である。議會が人民を代表する時には、民間に有力なる輿論が無ければならぬ。然るに日本には新聞又は少數の政黨員が政治る論ずる位で、一般の人民には政治思想が無い。政黨が勢力を加へつゝあるに拘はらず世間の信用の厚くないのは、政黨員に國民を指導すべき見識人格が乏しいのも原因の一つであるが、指導される人民に指導さるべき發芽が無いからである。これでは日本に輿論の有る譯が無い。維新の當時には規模は狹いが六十有餘の藩が有つたので、各藩には有力な藩論が有つたが、廢藩置縣以來は無組織の民衆となり、之を指導すべき丈けの大人物も、其指導を受くる民衆もない。議會も政黨も自然其の力が薄弱である。之れが立憲政治たるには、人民が政權を握つた方に服從する源平式の態度を改め、人民の意思が議員の當落を決し、多數を制した政黨は民意輿論を代表するに至らねばならぬ。故に立憲的になるには一般人民が官尊民卑の弊風を脫せねばならぬ。法律が出る、人民は不服であるが、それを兎や角く云ふと矢釜しいから表面之に服從して密かに之れを潜る工風をすると云ふやうでは駄目である。例へば高い租稅を課せられた時には、陰かに脫稅の工風を凝すなどの事はせず、人民に對して其稅は重すぎると言ふ事を侃々諤々直言するやうにならなければならぬ。法律には服從し、高い稅も出すが、同時にそれが人民の爲めでなく、社會の公道に反し、憲法上の制定に戾る事を直言するやうにならねばならぬ。立憲政治の他の一つの要素は、個人の自由權利の保障である。憲

法第二條に臣民の義務を列記し、同時に其自由權利が列記され、法律を以て保障されて居る。此臣民各自の自由權利を理解するのでなければ立憲政治とは云へない。如何に三權が分立されてゐやうとも、民意が立法上に實現されず、臣民各自の自由權利の保障が形式に止まり實行されぬ以上は、立憲政治は實現されたと云へない。

此の立憲政治の實現を將來の理想として行く上に、寺内内閣の如きは最も望みなき内閣の一つだと云へる。成立當時は殆んど政黨を無視した内閣が議會政黨を認むるに至つたのは、寺内々閣に取つては一つの進化であるが、然し理想から云つて憲政の進步と認むべき事實は無い。寺内内閣從來の筆法では飽くまで官僚軍閥の内閣であるから、民意輿論や個人の自由權利などは眼中に無かつた。大隈内閣も個人の權利自由に違背した點もあつたが、之れは大隈内閣が官僚系の機關であつて、大隈首相の自由にならなかつたからである。大隈首相の思想が部下に行はれなかつた事について滑稽なるは、侯を主裁とする「新日本」までが、發刊されぬ前にもし發刊すれば禁止すると云ふ豫告を受けた事である。所が現内閣では首相の思想が能く部下の思想と一致し相通ずる。大隈内閣は力が足りない爲めに人民の權利を無視し、現内閣は力が有つて大隈内閣以上に言論の壓迫、個人の自由權利を蹂躙する。立憲政治の實現から云つて此儘寺内々閣を繼續さす事に人民も議會も滿足するならば、日本では立憲政治の實現は未だ遠い〳〵將來の事と締める外はない。

今日は軍國多事の際故内政の改革は望まれないが、歐洲戰爭及び其影響を受けて、日本は國内擧つて決定すべき國家問題がある。唯黨派問題に熱心し、政府を初としては政權爭奪に多忙なるは、軍國主義の首相内相にしては矛盾した事である。兎も角も寺内内閣は多數を制する見込が付いたから、第一に内閣を改造し、政策を一變し、國民的大改革を行はねばならぬ點が幾許もある。先づ日支問題の如きは黨派問題とせずして解決する必要がある。第二は國民教育問題である。之は多年の懸案で大學も中學も小學校でさへも機關が足らなくなつてゐる。中學以上の專門教育大學教育を受けんとする國民の要求は、パンに窮する歐羅巴の人民と同じである。今の中に之を救濟する方法を講じないと、國家百年の憂たるは勿論戰後の世界に處するに、今日の國民教育の體たらくでは當る事が出來ない。故に教育の大改革が必要である。第三には政黨は寺内内閣からも最早や其必要を認められてゐる。政黨を除いて皇室を擁護し天下を治むる機關が無いから、政黨を完全ならしむる事は、政府政黨共通の問題である。今までのやうな選擧の方法では、當局者の爲めには可いが國家の爲めには禍である。眞に忠君愛國の志ある者には今日の選擧は見るに堪へない。政黨を健全にし議會を淸潔ならしめるのは政府政黨の共同の役目である。此の次ぎからは政府政黨協力して腐敗選擧の行はれぬやうに、互に胸襟を開いて好模範を垂れたなら、現内閣の如きは第二の維新を實現する事も出來やう。陛下の大御心は國民の一部を其の藩屏となし給ふのでなく、國民全體の一致せる忠義心の上に國家を築き上げんとし給ふにある以上は、どうしても選擧權を擴張して腐敗選擧の行はれぬ

やうにするのが急務である。それには普通選擧にするのが一番で、さうすれば戸別訪問や投票買收の實際行はれぬやうになり、從つて政界を淸淨にする事も出來るのである。かういふ國家國民の大問題を解決する内閣が一度は出て來ねばならぬ。時機はまだ後れてはゐない。寺内々閣も此際能く過去將來を洞察して大英斷を施すべきではないか。

歐洲も程遠からず、少くとも明年位には平和會議となると思はれる。之に臨むは帝國永遠の運命を擴く好機會であるから、現内閣の功名を顯はすと云ふやうな吝な心からでなく、眞に政府國民を代表する全權大使を送らねばならぬ。大使の口から交涉提議する事が、我が國民一般の意思と世界に認識せしめたい。斯くの如く、改革せねばならぬ國家問題が目前に横はつて、國民全體が多忙なる秋に際しては、姑く政黨政派の爭を緩和して又は中止すべきが當然かと思ふ。敢て現内閣が豹變して立憲政治に數歩を近づけん事を切望する次第である。

▽超然主義を一擲せよ

早大教授　大山郁夫

總選擧の結果は、政府側が勝つか、政府反對側が勝つか、いづれの側にも勝敗がないかの三つの場合より外に、想像の仕樣がない。

政府側が勝つた場合の最も單純なるものは、御用中立候補者が絕對過半數を以て當選する場合であるが、斯の如きことは到底起り得べからざることであるから、問題にならない。

政友會議員と御用中立議員と合せて絕對過半數を制する場合は、最も起りさうなことであるが、此場合に於て政府が如何なる態度に出づべきかは、政友會議員の多數の割合に依つて定まることである。恐らく政友會は依然として、表面上是々非々の厳正中立とやらの態度を維持し、裏面に於て政府と密約を結ぶであらう。此密約の内容は、無論主として後繼内閣の組織に關することであらうが、其實現は一年後か、若くは少くとも平和克復後に於て行はるゝであらう。

政友會が單獨で絕對過半數を制した場合は、問題が極めて複雜である。併し乍ら政友會が單獨に政黨内閣を組織するが如きことは、當分萬々あるまいと思ふ。少くとも政友會の過去の歷史より判斷すれば、斯の如く結論するのが至當である。現今に於て一政黨が單獨で内閣組織の重任に當ることは、その黨の將來の運命より見て最も危險な遣り方である。殊に對支問題及び平和會議の問題の方面に於て、容易ならざる暗礁が潜んで居る。さればどこまでも實際的打算に長けた政友會が、自ら進んで單獨責任を以て此難局に當るべしとは、どうしても考へ得られない。故に此場合に於ては、官僚及び政友會の聯立内閣が樹立せらるべき可能性が最も多いと想像し得られる。

總選擧の結果、政府側及び政府反對側に勝敗なく、互に五分々々の引分となるべき場合とは、一方に於て政友會議員と御用中立議員の和と、

他方に於て憲政會議員と、國民黨議員と政府反對中立議員との和が、相拮抗する場合を謂ふのであるが、嚴密に謂へば、衆議院議員の總數が三百八十一名といふが如き奇數である間は、斯の如き現象は到底起り得べからざることである。只總選擧の結果、之に近き現象が起つた場合に於ては、兩側より曖昧議員の爭奪戰が行はれ、結局大勢は來るべき臨時議會までに第一の場合か、第三の場合に落ち附くであらう。

然らば第三の場合、即ち政府反對側の勝利を得る場合如何といふに、憲政會が單獨で絕對過半數を制するか憲政會議員と政府反對中立議員とで絕對過半數を制するか、憲政會議員と國民黨議員と政府反對中立議員とで絕對過半數を制するか、若くは單に憲政會議員と國民黨議員とだけで絕對過半數を制するかの四つに出でぬのである。この內、後の二つ場合に於ては、國民黨は所謂キャスチング・ヴオートを有する第三黨としての威力を縱ままに發揮し得る地位に在るが、順路としては憲政會と共に依然政府不信任の態度に出でねばならぬ。併し乍ら國民黨がどこまでも此順路を採るか、それとも意想外の態度に出でゝ、政友會と結托し、以て超然內閣の命脈をして一日の永きを保たしめ、將來の政友國民黨の聯立內閣出現の礎地を作るが如きことを試むるか、そこまでは局外者の揣摩臆測を許さない。

憲政會が單獨に絕對過半數を制した場合、若くは憲政會議員と政府反對中立議員とで絕對過半數を制した場合に於ては、政府は再解散を斷行するか、總辭職をして加藤內閣に政權を讓るか、二者其一を出づることはないであらう。寺內加藤の聯立內閣、若くは平田加藤の聯立內閣の如きは、此際最早如何なる事情があつても常識上不可能となつて居る。又憲政會が此際、如何に單獨責任を以て政黨內閣を作ることが不利であることを知つても、大命が一たび之に下る時は、最早之を避くることが出來ない破目に陷つて居る。

政府反對側が優勝を制した場合、殊に憲政會が單獨で絕對過半數を制した場合に於て再解散を行ふことは不可能でないが、政府黨に極めて有利なる狀態の下に於ける總選擧に於てさへ、其結果が非政府黨の勝利に歸する上は、幾度解散を行つても、同一の結果を見るより外はあるまいから、結局は政府が總辭職をせねばならぬことになるであらう。

以上は總選擧の結果として考へ得られる有らゆる場合に於て、政府が如何なる態度に出づるであらうかと云ふ問題に關し、常識的解答を與へたものであるが、由來我國の政界には常識以上と言ふことが出來なければ、常識以下、若くは常識以外の事件が突發するを恒例として居るから、右の記述以外の結果が現はるゝことがあらうとも、筆者に何等の責任がないことは、無論であらねばならぬ。

□

若し夫れ總選擧の結果として政府は如何なる態度を採るべきかと言ふ問題中の『べきか』を單なる未來を指示するものと解釋せずして、『べからざるか』と云ふが如く、一種の義務を課するものとして解釋する時は、問題は自ら目的論(テレオロギー)の範圍內に落ち來るものであつて、之に對する解答に、

無論單なる自然科學的實測より與ふべきではなく、我等の政治的信條の立場より與ふべきである。

此立場より此問題に對して解答を與へよとならば、我等は先づ第一に現內閣に對して、其超然主義を放擲することを要求せねばならぬ。無論極端なる超然主義が成立すべきものでないとは、現內閣と雖も今となつては之を認めて居るには相違ないが、單に之を認むるに止らず、下院に於ける政黨政派の勢力を無視する內閣の組織を改めることを、我等は現內閣に向つて要求せねばならぬ。今時に於て超然內閣主義の痕跡が少しでも存續することは、徒らに政治上の爭點をいつまでも憲法問題の上に置くことになる。而も我國民は、政治上の爭點を憲法問題にのみ留らしむることには十分倦怠して居るのであつて、之を政策問題の上に移さんことを熱望して居る。我等は現內閣が此時勢の要求に着眼して、速に其超然主義の假面を脫せんことを切望せざるを得ない。

此立場より云ふ時は、總選擧の結果として政府反對側が勝利を占めた場合は、再解散などゝ言ふ野暮なことを言はないで、政府自ら堂々と處決すべきである。

但し現今までの情報に依れば、今回の總選擧に於て政府側が勝利を得ることは、最早疑ふ餘地がない樣である。若し此豫想通りに政府側が勝利を壟斷すれば、現內閣は第一に下院內に於ける政黨政派の勢力を基礎として、其閣員の更迭を斷行せんことを望む。現內閣員自ら政黨に入ることが出來ないまでも、せめては政府與黨より數名を入閣せしめて、政黨內閣に漸進的に接近する途を開くことも亦、姑息であるが一策たるを失はない。後日の內閣の明渡しを與黨に密約して現狀を維持するが如き暗黑を利用する奸策は、最早徹頭徹尾時勢後れの手段であることを悟らねばならぬ。情意投合とか一視同仁とかの支那臭い熟語を葬つて仕舞ふのは、今が正に其好機會である。

次に總選擧中に醜名を負うた閣僚は、斷々乎として之を馘首せんことを、我等は現內閣に向つて要求する。選擧干涉の如き嫌疑を蒙つた大臣を戴くことは、純良なる政治を慾求する國民の寸時も堪ふること能はざる所である。若し現內閣が何等の躊躇なく此國民の要求を實現すれば、寺內首相の日頃口癖にする『誠心誠意』にも幾分言ひ譯が立つことゝなるであらうが、若し然らざるに於ては、國民の現內閣糺彈の聲は、更に猛烈を加ふるに至るであらう。

總選擧に於て政府側が勝利を得た曉には、討閥運動が再發しないとも限らぬと思ふが、之に對して政府は無暗に權力を以て壓迫を加ふべきではなく、言論に對しては言論を以て當り、公明正大なる對抗に依つて、其雌雄を國民審判の法廷に於て爭はねばならぬ。

其他內治外交上に於て政戰勝利の曉に現內閣に要求すべきことは多々あるけれども、今姑く之を省略し、只當面の問題に關して最も緊密なる關係を有する事項のみに就て、我等の思ふ所を開陳すれば、大約右の通りである。

中央公論投稿規則

(一) 投稿はすべて個人宛にせず必ず中央公論編輯部宛たる事

(二) 投稿の採否に關する返答は事務の都合上相當の時日を要することあるべし

(三) 一々返稿及返信の義務を負ふは毎月數百の投稿に對して其煩に堪へざるを以て返稿料返信料添附のものにあらざれば其責に任ぜず。(且つ萬一紛失等の場合ある時は書留にあらざるものには其責を負はず)

(四) 本誌は毎月豫定原稿にて頁數を超過する位なれば投稿者諸彥を滿足せしむる程投稿を掲載する餘地少きことを御承知ありたし

自大正五年十二月
至大正六年一月
一卷、二卷合本五月一日發行

新聞年鑑

第一卷

四六判六號三段組
頁數七百七十五

定價金八拾錢
（本號二限リ）

送料 内地八錢
支樺朝二十二錢

▲本邦唯一の
世界日日の歷典

内容は主に東京大阪兩朝日紙及大每紙等に依り日日の記事を精撰網羅す故に尤も近き世界日日の歷典にして又天下重要日記として興趣尤深し。

至便重寶と能力增進

正確なる新聞記事の繼續拾集は何人も欲する所にして而も其煩に不堪本書は實に此不斷の精力と無限の不便不經濟を省略し得て遺憾なし特に其計畫成るに際し識者各位の贊助を得たるを感謝し且世の切なる要求に酬ん爲め江湖の御批判を乞ひ卷を逐つて完全を期す。

主要部門

歐洲戰亂
- 交戰國事情
- 中立國事情
- 各方面の戰報
- 海上方面
- 講和と各國の態度

兩米時報

支那及南洋
- 支那現勢（對外問題）
- 同（對內問題）
- 南洋方面時報

政治
- 議會
- 政黨
- 外交
- 内治
- 軍事
- 教育及宗教
- 地方行政及雜報

產業及財界
- 農工商事項
- 貿易
- 會社及銀行
- 海事
- 交通及通信
- 貨幣及金融
- 海外商況

宮廷錄事

飛行及運動
- 飛行界
- 運動及遊戲
- 相撲

文藝界
- 文學美術及學界消息
- 演藝能樂

雜錄
- 人事
- 集會及會合

株式市場
- 東京取引所
- 大阪取引所
- 地方取引所

米穀取引所
- 東京取引所
- 大阪取引所
- 各地取引所

生絲市場

綿絲市場

物價及各地商況

新刊と其批評

廣告の統計

官報目錄

發行所 東京市牛込區辨天町九八
振替東京二一九四三
宏遠社

大取次所 東京堂、北隆館、東海堂、目黑分店、至誠堂、上田屋、良明堂

（中付一の一）

ジャパン、アドヴァアタイザー
英字新聞社支配人
バチラー、オブ、アース
バチラー、オブ、サイアンス

エッチ、イー、ライデングス序（推薦）

長藤太先生著

再版

英語活用自在

（全國各地書店にあり）

四六判七百廿頁
洋裝美本函入

定價貳圓五拾錢

特價金貳圓廿五錢（郵税八錢）

虚榮の爲めに學び裝飾の爲めに學問するの時代は既に去れり、現代英語研究に從事するもの日に多きを加ふ、而かも克く英語を理解し、口に耳に或は筆に开か活用に練達せるもの果して幾許ぞ、英語に熟達する策は他なし、須らく之を活用するにあり、英語の活用は之を日常の用途に充つるに若かず、本書は著者が過去廿年間に於ける不斷の研鑽と海外留學拾參年間に於ける實驗とに鑑み、此等英語活用の目的に資せんが爲め編纂せるもの、英語熟達に必要なる萬般の注意、英作文、和文英譯、英文和譯に須要なる英文法及び英習慣は勿論、毎日の英語、家庭會話、學窓會話、旅行會話、時事問題會話、英文日記の書方、學生敎場日記、普通英文日記、英語書翰文の書方及び實例數百種、男女社交上の手紙及びラブレターの書方並に實例、英語商業通信、英文履歷書及び英文契約書の書方等、有ゆる實用的英語を網羅せざるなし、從て各種の中等高等及專門の學生諸氏官吏、銀行會社員、貿易商其他苟も英語を必要とする諸賢の机上に缺くべからざる良書也。

發行所 **啓心社**

東京本郷區弓町二ノ八
振替東京三四四九九番

（中付一の二）

ジャンヌ・ダルク

吉江孤雁譯

（新刊）

劍戟と兵火と硝煙との中から、荒廢せる祖國の闇を破つて輝き渡る太陽と現れた少女、野菊の花のやうに可憐な少女、そして又白蓮の如くに崇高な少女―それは美の國フランスの永劫の誇となるべき少女ジャンヌ・ダルクである。彼女こそは、正に人間史上の最も驚くべき奇蹟であり、處女の爲めに萬丈の氣焰を吐くものである。本書は、彼の文豪アナトール・フランス氏が、その卓拔なる歷史眼と無類の創作力とを傾倒して完成せるジャンヌ・ダルク傳を出來得る限り平易に移植せるもの、神々しき少女の面影が全篇に躍如としてゐるので讀者を感激させずには置かない。

四六天金布製一冊
五百五十餘頁
正價壹圓廿錢
郵稅金八錢

正史上のロマンス

好評再版

坪内逍遙補修
中島孤島譯述

アントニーとクレオパトラの徹底的耽溺、アベラールとエロイズの凄絕なる悲戀、瑞典の女丈夫王が殘忍なる復讐、政治家的なる處女王エリザベスの戀、多情なる蘇國女王メリー・スチュアートの悲劇、或は我が曲亭の意匠をも凌ぐ彼の烈女コルデーの義擧に殉ぜし一少年の戀、或はショーが名作「運命の人」をも壓倒する情婦に對するナポレオンが苦肉の魂膽、凡て是れ過去二千年間の西洋史中より戀愛ロマンスの粹を拔ける者、悉く情話なれども、悉く正史に屬して些の虛構なく、觀察は高潔、文章は雅健清新、如何なる家庭に讀まるゝも、教訓ありて挑發なし、洵に事實の小說より奇なるを見よ！

四六天金布製一冊
四百餘頁插圖入
正價壹圓廿錢
郵稅金八錢

發行所 東京牛込早稻田 振替東京一二三 **早稻田大學出版部**

（賣捌）神田東京堂　日本橋至誠堂　京橋北隆館　京橋東海堂　大阪盛文館　名古屋星野（其他）

西宮藤朝先生新著

哲人 高山樗牛

□定價金壹圓 送料八錢
□四六版 三百頁 布裝箱入頗美本

□飢ゑたる者の求るは麵麭也、麵麭の比較研究に非ざる也。
□法則の榮ゆる處そこには必ず生命の死滅あり。
□此生の憂苦を免る丶の道三あり、永き戀か早き死か然らざれば狂。噫吾人は孰れを擇ばざるべからざる乎。
□畢竟吾徒はお互に強からざるべからず、又強からざるべからず。……

■と叫びたる樗牛は近代日本文明に偉大な足跡を殘したと共に、現代に於ても尚幾多の青年の熱情に火を投じつ丶ある。ニイチエには幾多の評傳あれど我樗牛には一冊の傳も無いのは遺憾此上ない。本書は哲人として、はた文明批評家としての樗牛の面影を傳へ且つ彼の生活を批判したる最初の評傳である。日本近代文明を知らんとし且つ思想問題に與はる人々は是非讀んで頂きたい！

發兌　東京神田淡路町壹の壹　泰山房　振替東京九〇七九番



退位せられたる露國皇帝御一代の哀史

昇曙夢

一、國體の矛盾

ロシアの國章は誰も知る如く一つの王冠を被つた双頭の鷲を象つたものである。その鷲は一方の足に帝笏を持し、他の足で十字架を握り、各々別な方向に向つて居る。是れは明かに國體の矛盾を語るもので、帝笏は權威と武力と政略とを示し、十字架は和平と幸福と愛とを語るものである。之を一つの王冠の下に結合しようとしたロシャ一千年の歴史は畢竟無意義な謎語か、でなければ混沌たる幻想の流れである。我々がロシャに於て見る所の國民性の矛盾も、政治上の矛盾も、宗教上の矛盾も、將た實生活上の矛盾も、既に此の國章の中に明かに表象されて居る。此の矛盾を敢てして長い間自覺しなかつたロシャは夢の國と言なければならぬ。けれども此の夢は何時までも醒めない譯には行かなかつた。此の矛盾は何時までも自覺されないでは止まなかつた。則ち今回の革命はロシャ國民が過去一千年の夢から醒めて、矛盾の桎梏を一擧にして破つた自覺の發現である。されば結合し難き矛盾(双頭の鷲)を結合しようとして、長い間ロシャ國民の頭上を壓した呪ひの王冠が、此の際剝奪されたのはまた是非なき

次第と言はなければならぬ。則ち玆に皇帝の退位を見たる所以である。

二、運命の悲劇

榮枯盛衰は王家の常とは言ひながら、夜半人靜まれる汽車の中で僅か數分間のうちに最後の運命を決せられたロマノフ家三百年の歴史はまた餘りに脆く果敢ないものであつた。一六一三年ロマノフ家第一代の王ミハイルが民選によつて王位を踐んでから今回のカタストローフまで三百四年、ハプスブルグ家やホーヘンツオルレルン家と比べては未だ〳〵壽命が短かいようだが、我が德川幕府とは殆んど同じ年數である。然し比較的單調と言はれるロマノフ家三百年史も我が德川幕府三百年の泰平に比べては波瀾曲折に富んで居る。またこの長い間ロシヤは暗黑なる專制國であつたとは言へ、中には幾多の名君も現はれて世界に誇るべき光明なる歴史にも乏しくない。ピーートル大帝の改革、エカテリナ二世(カザリン女皇)の文明的施設、アレキサンドル二世の農奴開放、ニコライ二世の國民議會開設――是等は比較的平板なるロシヤ史を飾る寶玉である。殊に大ロシヤ建設の理想を着々と實現して、ロシヤをして今日あるを得せしめたのは偏へにロマノフ家歷代諸王の功績と言はなければならぬ。けれども是れは一面の觀察である。此の光明なる歷史と共にその裏面にはまた常に暗澹たる濁流が渦を卷いて居た。此の暗流は代々幾多の波瀾を重ね、暗殺、陰謀、不忠、奸策等幾多の悲劇を演じて、遂に今回のカタストローフに終つて居る。今回の變は帝王悲劇の終節としては聊か色彩に乏しい憾みはあるが、之をロシヤ宮廷といふ背景の下に見る時に於て始めて沈痛悲壯の色調を帶びて來る。なにせ地球の六分の一を占むる大帝國の支配者であり、二億萬の民に君臨せる治者であり、世界に於ける帝王中の最大富豪を以て許さるゝ帝王である。それが一朝にして帝位と財產と自由とを剝奪されて、たゞの一平民として離宮の奧深く監禁の身となられようとは、また如何なる運命の悲劇であらう。今より四年前ロマノフ家三百年の歷史的祭典に、皇位の無窮を

所つた二億萬の臣民中誰あつて今日の變を豫想し得たものがあらうか。

三、不吉の兆

けれども一種不吉の怪雲は既に早くからロシヤ皇室の上を蔽ふてゐた。それはロシヤ人の間に傳はる次の風説によつて證明される。廢帝ニコラス二世は結婚匆匆から頻りに皇太子の誕生を望んで止まなかつた。然るに皇后の腹から生れる御子方は第一がオリガ、第二がタチヤナ、第三がマリヤ、第四がアナスターシヤと何れも內親王ばかりである。皇帝は大に失望して深く憂ひの雲に閉され、一向樂しむ色が見えない。之を見た皇后は人知れぬ思ひに胸を痛めて、何うかして夫の君を慰め參らせんとはすれど、是ればかりは天命だから仕方がない。何うにかならないものかと頻に思案を凝らして居るうち、不圖思ひ附いたのが卜者である。皇后は早速一平民の婦に姿を變へて、卜者の小舍を訪ひトひ(うらな)を乞ふた。この變裝の婦人を后とは露知らぬ卜者は相手の手を取つて相を見ると、小首を傾げて言つた、

『あなたは非常に高い權力を持つてゐらつしやるが、あなたの前途には大きな災難が横はつて居る。あなたは現に四人の娘の母親でゐらつしやるが、この後まだ三人の子供が生れる。是等七人の子供の名前の頭字丈を取つて綴つて見るとオツマハイ（Otmahay 即ち吹き拂へといふ意）となる。これは非常に不吉の兆で運命の沒落を意味する、御注意なさらないと危險である。』との判斷であつた。それからは此のオツマハイが非常に皇后の氣にかゝつて、五番目に妊娠した時はＴの字を避けるために態と流産して了つた。（ロシヤでは子供の名は誕生日に相當した古聖人の名を取つて命名する習慣になつて居る。）次に生れたのが始めての王男子で今のアレキセイ皇子である。皇帝は非常に喜ばれたが、皇后は此度も矢張り卜者の豫言が應じたので、人知れぬ心配に沈み勝であつた。で、愈々七番目に妊娠した胎兒もＹの字を避けるために流産して了ひ、斯くして人工的ではあるが、兎に角オツマハイだけは遁れたといふ譯である。けれども天意は人爲の如何ともすること

が出來ない。切角皇后の心盡しの甲斐もなく、卜者の豫言は應じて、遂に今回の沒落を見るに至つた。想へばお氣の毒の至りである。

四、廢帝の性格

抑々ロシヤ皇室を斯かる悲慘な運命に導いた根本の原因が既にニコライ二世其人の性格に含まれてゐたといふことは彼の生涯を知る者の誰でも首肯する所である。

彼は極めて意志の弱い、臆病な溫順しい、女性的な人であつて、ロシヤのやうな複雜な事情のわだかまつて居る皇室には到底堪えられない人物であつた。だから彼は皇太子であつた時分再三即位を辭したのである。彼がラスプーチンのために籠絡されたのも、皇后に捲かされたのも、親獨派の爲に乘ぜられたのも、元はと言へば皆な廢帝の薄志弱行から來て居る。意志の弱いといふことは何時でも悲劇の種子である。ロシヤ人は一體に意志の弱い國民で、その點に於てニコライ二世は典型的のロシヤ人であつた。然し彼の薄弱な性格は國民性の弱點としての外、更に彼の生立と教育とに影響されて居ることを知らなければならぬ。

ニコライ二世はロシヤに於て虛無主義が漸やく跋扈し始めた時代に、恟々の間に生れた可憐な一王子である。祖父アレキサンドル二世が虛無黨の兇手に斃れたのはニコライが物心のついた十四歳の時であつた。此の恐るべき事件が幼少な親王の弱い神經に深刻な印象を與へたので、それ以來彼は何事にも恐怖心を起し、危險を感ずるようになつた。曾て印度を經て日本に渡られた當時も、サイホンのラムネがシューッと酒石酸の泡を沸騰させても、親王は爆彈ではないかといふ感じをされたといふことである。然るに父君アレキサンドル三世は指先で馬の蹄鐵を曲げたといふほどの傑物で、剛健一世に鳴つた人である。斯ういふ父の下で嚴格な教育を受けたから堪らない。餘りに多くの日課を課し過ぎて、親王の健康を損はしめた嫌ひもある。それにも拘はらず、ニコライは帝王や皇族の修養には一向氣が進まず、常に平民の生活に憬がれ、父君の叱責

を受けたことが幾度あつたか知れない。と、言つてニコライの平民主義は持つて生れた性質であるから之を如何ともすることは出來なかつた。或時破れ目のある靴を穿いて、斯うした生活の方が氣がおけないで好いなど〻語つたこともあつた。英語の研究をされながら好んでシェクスピーヤ、スコット、スチーブンソン等を愛讀し、殊に『湖上美人』の中で、民衆が『平民の國王萬歲』と呼ぶ邊りは得意の美音で『平民の國王―俺もさうなりたいものだ』と、いつも言はれたといふことである。從つて形式といふことが何より大嫌ひで、友人などを食事に招いても、禮儀は止めにして服裝は略式にして居られた。要するに幼年時代のニコライは溫厚柔和な、氣の弱い、然し極めて平民的な快活な、談笑好きの人であつた。それが一朝皇帝の極に登ると、宮中のいろ〳〵な宿弊と舊習慣の權威とのために害はれて、その晴やかな眉間には忽ち深い愁ひの雲がか〻り、昨日の快活な靑年紳士は今日の無言陰忍な君主と變つて了つたのである。

ニコライ二世がまだ皇太子の時分、我が日本に旅行されたことは例の大津事件によつて深い記憶を止めて居る。然しこの旅行には父君の計略が潜んでゐたのである。それはその當時ニコライがクセシンスカヤと熱い戀に陷つたことがある。之を知つた宮中の驚きは如何計であつたらう。殊に父君の驚きは譬ふるに物なきほどであつた。それもその筈、ロシヤでは一旦平民の婦と所謂左手結婚（不正な結婚をいふ）した者は帝位に卽くことが出來ないことになつて居る。で、皇太子とクセシンスカヤとの仲を割くためにいろ〳〵な方法が講ぜられた。その中でも父君は、一計を案じてニコライを暫らく外國に旅行させることにした。そしてこの旅行によつて、皇子の氣を紛らはせて、その間にクセシンスカヤの事を思ひ止まらせる考へであつた。その結果として實現したのが卽ち一八九四年の日本旅行であつた。

五、若いヘツセンの姬君

極東旅行中にクセシンスカヤの事を思ひ切つたか何

うかは暫らく措いて、兎に角大津事件の爲めに旅行も半ばにして歸國しなければならなかつた。歸つて見ると、最早宮中ではニコライの結婚問題が持上つて居る。相手は獨逸ヘッセン侯國のアリサ內親王といふ英吉利と西獨逸との血統を受けた美しい姫君であつた。が、この結婚は宗教上の關係や露國宮廷の複雜な事情などが邪魔となつて、容易に決定しなかつた。所が面白いことにはカイゼル・ウイルヘルム二世が躍起となつてアリサ姫を說得し、改宗はしてもロシヤへ行つて未來の露國政權を握つてはどうかと勸めたのが、若い姫君の好奇心を唆つたらしい。そこで問題は忽ち決定して婚約が愈々成立した。その年の十一月一日に父君アレキサンドル三世は病を發して崩御され、四週間も經たないうちに結婚式が擧げられた。玆に於て新后は正敎に改宗し名もロシヤ風のアレキサンドラ・フェオドローヴナと改めた。

　新后の性質は有繫に獨逸の血を受けて居るだけに、夫の君の弱いのに引きかへて、意志が强く、勝氣で、何所までも我意を通さなければ止まない。その堅く締つた口は剛腹を示し、何とも言へない愁ひに曇つた眼はヒステリイの女であることを語つて居た。それでも打解けた時には隨分滑稽をやる性質ださうで、ポンチ繪を描くのが得意だといふことである。何でも少女時代には隨分快活な性質であつたのだが、六歲の頃母を失つてから彼女の軟かい腦裡に暗い曇りを生じ、それが後々までも彼女の性格に影を指したといふことだ。露國宮中の女主人公となられた當時は姑の皇太后に對し、皇族方に對し、貴族や貴婦人方に對して隨分と苦心されたものである。

　御入內の時、冬宮を兩陛下の御住居と定めて、充分の設備を施してあつたにも拘らず、皇后は、「アニチコフ宮殿にゐらつしやる母君がさぞお淋しからうと思ひますから、私共もアニチコフへ參つて母君をお慰めまゐらせては如何で御座りませう」と仰せられ、皇帝と共に、皇太后の宮殿へ住はれることになつた。皇太后の御滿足は察するに餘りある。けれども隱した牙は何

時か現はれずには居ない。數ヶ月の後にはそろ〳〵獨逸流の堅苦しい若年の皇后に對する惡口非難の聲がそちこちから聞えて來た。それは主として交際社會に於ける皇后の態度に慊らない貴婦人達の口からであつた。その上皇太后との仲も次第に惡くなつて行つた。左なきだに、プロシヤ嫌ひの丁抹出の皇太后は、ニコライのためといふよりも先づ第一に自分のために嫉視の眼を若い皇后の上に注いだのである。それに皇太后も皇后に劣らない非常に勝氣な人で、何時も主動的に正面から社會的事業などに活動されたので、國民の人氣も母后の身邊にのみ集中した。それが皇后に取つては甚だ不滿足であつた。斯くてロシヤの宮中は二人の女主人を戴いて、その周圍に奸者佞臣黨を成して、陰謀奸策至らざるなく、爾來宮廷の内部は一種の伏魔殿のように見做されるようになつたのである。

六、皇太后の隱謀

皇太后マリヤ・フェオドローウナはアレキサンドル御在世の間は態と政治に容喙しなかつたが、ニコライ二世の代になつてから盛んに宮中に威力を張つて、政令二途より出るの觀を呈した。パベトノスツェフ、ムラウィヨフ、プレーウェなどいふ名は誰でも聞いて居る名だが、彼等は皆皇太后の寵臣であつた。今は皆この世の人ではないが、彼等が生前一國の政治を執つてゐた時代には、皇太后は隱然女帝たるの實權を握り、ニコライは名のみの帝王に過ぎなかつた。だからニコライとアレキサンドラとは不平で堪らなかつた。或時ニコライが宗務大臣パベドノスツェフを老體の故を以て辭職させて、他の人物を任命しようとしたことがある。之を聞いた母后は火のようになつて『パベドノスツェフは此の家の重臣で、彼が居なければロシヤはバラバラになる。私が死んだら兎に角、私の眼が明いて居るうちは決して出させない』と、怒鳴つた。すると溫順しいニコライもこの時ばかりは默り兼ねて、『誰がロシヤの皇帝ですか、私ですか、お母樣ですか、私は一體上なのですか、下なのですか』と、怒鳴り返した。と、あとは暴風雨のような立廻りとなつて、大變な場

面を演出したといふことである。

然し皇太后の野心は斯んなことだけではなかつた。彼女の陰謀はその殘忍な手を益々深い所へ延ばした。それは皇太子アレキセイ親王暗殺の陰謀である。然しそれを述べるには、廢帝の弟君で現に今回皇位繼承の詔勅を受けたミハイル・アレキサンドローウィチ太公の御身上を少し話さなければならぬ。太公は一八七八年生れで今年四十歲であらせられる。若し皇帝に皇太子の誕生がなかつた場合には露國皇室典範によつて皇位を繼承すべき方である。斯かる高貴な責任の地位にありながら太公は身分の賤しい女優と熱い戀に陷つた。それには實兄に當る皇帝が嚴しい意見を加えたにも拘らず、思ひ切ることが出來ず、戀人と相携へて駈落し、墺國の首都ウィンで所謂左手結婚を行ひ、その足で英國に渡り、ロンドンの片邊りに長い間世を忍んでゐた。所が今回の露獨戰爭勃發するに及んで、日頃の勇氣鬱勃として禁ずる能はず、匆卒歸國して皇帝の前に前非を悔ひ、過去の罪を詫び、戰線に立たん覺悟を述べた。で、皇帝もその健氣な氣象に免じて今迄の罪を許し、新たに陸軍の高い地位に任じて戰線に送つた。その後太公はカーパシアン戰線に於て幾度か敵と干戈を交へ、その度毎に武名を輝かし、國民的英雄として廣く聲望を博するに至つた。斯樣に太公は兄とは異つて父君の性格を多分に受繼いだ武人肌の勇士である。この氣象が少年時代から母后の氣に入つて、その寵愛を獨占してゐた。世の母親といふものは末のいたづらつ兒を却つて人一倍も愛するものである。その愛が嵩じて、母后は豫てから何うかしてアレキセイ皇太子を亡き者にして、その後に愛子のミハイルを据えようといふ野心を抱き、寢ても起きても頻りにその機會の到るのを待つてゐたのである。所が數年前ニコライ皇帝は皇太子と共に皇室附屬のヨット『シュタンダルト』號に乘じてバルチック沿岸に舟遊を試みたことがある。その時船長として操縦の任に當つたのがチャーギンといふ皇太后の腹心の男であつた。チャーギンは日露戰爭にも參加し、長崎に住居を構へ、日本の女を

妻に迎えて、子供もある身であるが、豫てまた宮廷の或る女官に戀してゐた。皇太后は疾ふからその事を感づいてゐたので、それを機會にチャーギンを傍近く呼寄せて胸中の陰謀を漏らし、若し今度の舟遊中に皇太子の生命を取つて呉れたら屹度その女官を取り持つてやると言ひ含めた。で、チャーギンは早速この大事を引受けて、その手筈を取つた。所が隱謀は不成功に終つて、皇太子は檣塔から墜落したが僅かに足を負傷したに過ぎなかつた。そしてチャーギンは其の場で自殺した。それはこの事件の責を引いてのことでなく、隱謀が不成功に終つたので、皇太后への申譯に死んだのである。當時此の事件は虛無黨の隱謀であるかのように傳へられたが實は皇太后の隱謀であつたのだ。

斯んな風で皇太后は餘程宮廷裡の平和を攪亂してはニコライと其妃とを苦しめてゐた。斯んな重苦しい、薄暗い空氣の中を潜つて來られた兩陛下が次第に陰鬱に傾いたのは寧ろ當然のことであつて、露國宮廷に闇の力がひとり威を振ふようになつたのも無理はない。

斯くして氣の弱いニコライの權威が蔽はれ易い所に、一方には皇太后の野心が發展し、他方には皇后の放肆が增長して行き、之に點ずるに數多い奸者佞臣の術數を以てして、ロマノフ家三百年の歷史を背景としつゝ演ぜられたロシヤ宮廷悲劇が何うして大なる犧牲者を見ないで濟まされよう。

七、皇后の不安

皇太后の壓迫が强かつただけに、皇帝と皇后との仲は睦まじく、極めて平和であつた。たゞ皇帝は飽まで感じの鈍いのに引かへ、皇后は過度に神經が銳敏である。日露戰爭の敗報も、皇帝を驚かすことは出來なかつたが皇后はその敗報の度每に、人一倍心を痛められた。此の心痛の中には帝位の前途に就いての不安が大部分を占めてゐたさうである。

この敗報の眞最中、一九〇四年に始めて皇太子の御誕生があつたので、兩陛下は勿論、宮中の歡喜は譬ふるに物もないほどであつた。然し、この喜びと共に同じ不安は矢張り皇太子の身の上にも及んで、皇后は益

々神經過敏になられた。皇后は元來豪氣な性質で、宿命主義の人ではなかつたのだが、皇帝の暗殺とか皇子の前途などに心を勞せられた結果、次第に氣を病んで遂にヒステリイに陷つたのである。」それに獨逸流の神秘的傾向が餘程彼女の心的生活を支配して迷信に傾かれた。それ以來祈禱者は宮中に於ける重要な人物となり、國家の大事も此の祈禱者の言に左右せられるようになつた。それと同時に華やかな宴會や舞踏會のようなものは一切退けられて、宮中の生活は彌が上にも堪え難い淋しいものとなつた。如何に隱遁的な皇帝であるからと言つて、斯んな單調な生活には到底堪えられるものでない。で、彼にも矢張その淋しい心持を慰むべきものが他にあつた。それは二人の愛妾である。

八、皇帝の愛妾

その一人はクセニヤ・バーウロウナといふ婦人であつた。この婦人との關係は、恰も皇后が第一の皇女を産んだ時から始まつてゐた。その皇女が生れた時、皇太后は早速ダシコフ男爵を呼び寄せて、この事件の始末を一切委託した。男爵は宮中から一人の乳母を物色し、矢張り一定した普通の職務のやうに相當の俸給を與へることにして其の乳母を特別な舍宅に棲はせた。間もなくクセニヤは或る期待の裡に一人の赤子を生んだ。此の事は直ぐに男爵の耳に入つた。男爵は皇太后に上告した。皇太后は此の事を聞いても、少しも驚ろいた樣子を見せず、寧ろ非常に冷靜な態度を保つてゐた。其の時皇太后は男爵に斯う言つた『親愛なる男爵よ、妾は卿に赤子の財産のことや、洗禮のことを御願ひします。何分とも宜しく』と。この匿れたる産婆の役を引き受けた男爵は、洗禮や教父選定のことなどで面倒を惹き起さない爲に、自から教父になつて一切の始末を隱密の裡に片附けて了つた。此の赤子は今年で最う二十一歲になる。そしてクセニヤと一緒にペトログラードで壯健に暮してゐる。

も一人の愛妾は例の舞踏の名手クセシンスカヤである。皇帝は皇后を迎えられた後もクセシンスカヤの事は思ひ切れず、彼女に百萬圓以上もするカメンスキイ

大通りの離宮を賜はつて、皇后の眼を偸んでは時々茲にも足を運ばれたといふことである。そして彼女との間にも本年十四歳になる子供がある。所がクセシンスカヤは今年二月の或晩、晩餐を濟ませて直ぐに自分の息子や、その他多くの舞踏手や執事などを引き伴れて外出した。出かける時に彼女は下婢に茶を支度して置くやうにと言ひ附けて行つたのであつたが、遂々それつきり歸つて來なかつた。後で家宅を捜索すると種々な事情が發覺した。第一に發見されたのは廢帝の寫眞であつた。それは海軍服を着けて寫したもので、下の方に「ニコライ、一八九五年」と署名してあつた。その他の金銀類は皆な殘らず、ユレーウィチ教授の勸告によつて帝國銀行に入れることになつた。それからなほ玻璃箱に入つてゐる黄金の冕冠（一フント半）も發見された。これなども確かに皇帝から贈られた品物の一つであらう。また其處で發見された書簡や、その他の秘密書類は殘らず市廳へ運ばれたが、其の中からはクセシンスカヤの日記も出た。此の日記は彼女の出納ともいふべきもので、それには、Cから一萬八千圓貰ふことなつてゐるとか、一萬五千圓受領したとか、二萬圓の手形を受け取つたなどゝ書いてあつた。秘密は猶ほ茲にも潜んで居る。

九、怪僧の素性

ロシヤ皇室の中心を形造る人々の性格やその込み入つた關係は以上述べた所によつて略々明かになつたと信ずる。今や進んで、宮中に渦卷く暗流の眞相を描き、最後の悲劇に至るまでの複雜なる徑路を語る時となつた。が、その前に先づ宮中陰謀の黒幕となり、革命の導火線となり、引いて皇室の悲劇を促がした怪僧ラスプーチンの事を述べなければならぬ。

彼が昨年十二月三十日の朝彼を憎む青年皇族の手にかゝつて殺害されたことは當時の電報や露都通信によつて知らるゝ通りである。彼の殺害の報道が一度露都全市に傳はるとロシヤ人は誰も彼も双手を擧げて喜んだといふことである。彼の死は露國の政治界に重大な意義を有し、露國將來のために非常の幸福を齎らす

らである。然らば彼ラスプーチンの正體は果して何者であつたか。彼は露國の宮中府中に如何なる怪腕を振つたか。ラスプーチンは露國で親獨派の本城と目せらるゝ宮廷派の總大將であつて、この派は獨逸の出身たる皇后を頭に戴き、ラスプーチンが一切の采配を揮つてゐる。露國皇室の事は言ふに及ばず、總理大臣各大臣高位顯官の任免は大抵彼の手を經て實現されたと言はれる。換言すれば露國の政府は恰も彼の傀儡であつた。彼が露國宮中に儼然として一大勢力を成してゐたことは全く吾人の想像以上である。彼は一種不可思議の魔力を有し、現代の醫學が治癒し能はざる難病苦患を平癒せしむる怪力を持つてゐたと言はれる。彼はこの不可思議な威力を以て上流貴族社會を魅惑した。歴々たる貴族社會は若きも老いたるも令嬢も奥樣も旦那も相率ゐて彼の膝下に參集し、彼が神秘力に歸依し、不思議な靈驗に隨喜渇仰した。彼は活る神として貴族社會の信仰を受けてゐたのである。怪僧ラスプーチンは西比利亞トボルスク縣チユメン郡ポクロフスキイ村の百姓で、千八百七十二年生れとあるから四十四歳で死んだのである。彼が兩親は漁夫で、彼の一家は代々大飲酒であつた。彼も其例に漏れず青年時代には飲酒に耽溺して仕事をせずに懶けてばかりゐた。兩親がどんなに誡めても彼は親の苦言を馬耳東風に聞き流し、酒をあふつては遊んで暮してゐた。酩酊しては亂暴を働いてゐた。加之、彼は竊盜罪で告發され、白洲に引き出されたことが度々であつた。馬を泥棒して告發されたこともある。青年時代に彼は馬車屋をして生活してゐたが、或日のこと某高僧を馬車に乘せて行く途中彼は其高僧と談話を交へた。之が動機となつて彼は發心したのである。後彼はチユメン市に移つて頭髮鬚髯を長く延ばし、極寒の日にも跣足で歩いてゐた。チユメン市から莫斯科へ出て來て漸次莫斯科の上流社會に知己歸依者を得た。彼は好んで尼僧修道院を巡禮した。彼のために辱かしめられた尼僧は少くないといふことである。都に打つて出る前に彼は西比利亞の或る牧師の感化を受けて心に悟る所があつたと見え、それ

からは一心に聖書に關する著述を耽讀し、宗教上の問題に頭を惱まして、凡そ二箇年間彼は專ら宗教史や高僧の著書を繙いた揚句、愈々自ら傳教者として名乘りを揚げた。

十、篝火の周圍

ラスプーチンは其教説を宣傳するに當り次の樣な儀式を行ふた。日暮れて大空に星影の現はれるのを待つて、彼は善男善女と倶に薪を穴に積み重ね、之に火を點じて大きな篝火を作り、香を盛つた器を三本足の臺の上に置く。此の時善男善女打雜つて互ひに手に手を取り合つて、篝火の周圍をどう／＼廻りして次の歌を繰返し歌ふ。

『吾等が罪は悔悟の爲めなり、主よ、あゝ、悔悟の爲めの罪惡！』

初めの程はおとなしく廻るが、次第に歩並を早め、後には駈足で走り廻る。やがて息せき喘ぐ苦しい聲が聞えるやうになる。篝火が漸く燃えつきてぽつと消えると周圍が暗くなる。眞暗な闇の中に『爾等の肉體を顧みよ』と叫ぶラスプーチンの聲が響く。彼の聲に應じて善男善女の群は思ひ／＼に地上に臥すのである。斯樣に彼は人々を魅惑する一種の偉大なる魔力を持つてゐた。從つて獨特の催眠術を教義宣傳の上に利用して居たのである。而して彼は亦大の色魔であつた。彼が奥の手に罹つて其貞操を破られた貴婦人令孃は數限りなくある。彼は自分が婦人の肌に觸れば、それで婦人の罪惡は淨められると唱へた。斯かる突拍子もなき邪教に渇仰して罪の救ひを得んが爲めに女は爭ふて彼に接せんことを希ふた。彼が慘殺されたと聞いて潸然と泣いた夫人令孃は洵に尠くないのである。以て彼が如何に婦人を籠絡するに巧みであつたかゞ判らう。彼が露都ペトログラードに出て來たのは去る千九百五年で、露都で第一に彼に歸依したのは貴族ロプチン夫人であつた。ロプチン夫人に依つて彼は廣く貴族社會に紹介された。千九百七年ストルイピン首相が爆彈を投げられて手を負傷したことがある。負傷の爲め其の手が痲痺して名醫良藥も之を癒すことが出來なかつた

が、怪僧ラスプーチンの魔力に依つて見事に全治して手の自由が利くやうになつた。爾來貴族社會に於ける彼の地盤は漸次鞏固となつて各大臣を初め高位顯官紳士淑女の歸依する者が增加した。斯の如く彼れラスプーチンは賤しき匹夫より身を起し、露國宮廷派の領袖となつた怪僧である。だから無數の有力な歸依者が彼を活ける神として尊崇してゐる一方に於ては亦社會を惑はし世間を瞞着する妖僧として多くの人に憎まれてゐた。彼には多くの敵がゐた。彼を憎む敵は常に彼を暗殺せんと付け狙つてゐたのである。彼が暗殺されんとしたことは一再でない。千九百十四年彼が故鄕に歸省した時に一婦人から腹部を斬り付けられて重傷を負ふたことがある。當時彼は生命危篤と傳へられたが、元來體格が丈夫なので數週間の後に全治した。彼を殺害せんとした其婦人は審理の結果精神錯亂者と認定された。それから一九一六年一月には時の內務大臣フウオストフと其の共謀者ルゼーフスキイとが彼を暗殺せんと企てたが遂に失敗に終つた。惡運强く二度までも虎口を脫れた彼も仕舞には到頭靑年貴族の手に依つて斃れたのである。

十一、皇室と怪僧

ラスプーチンがロシャの宮中に勢力を占むるに至つた原因に就ては幾多の說明がある。或者は宮中の神秘的性質がこの感化の原因をなしてゐると言ひ、他の者は彼の感化力の秘密が皇帝自身の性格にあつたとする。然し今一つの說に據ると、皇帝は最初からラスプーチンを信用した譯ではなく、却つて彼を幾度となく宮中から放逐すると、屹度皇太子が急に病みついて甚だしき出血をする。で、あたりの者が是れはラスプーチンを放逐した神罰だと言つて、再び彼を呼寄せて祈禱を願ふ。と、妙に皇太子の出血が立所に歇み、健康が元に復する。是れは言ふまでもなく侍醫とラスプーチンとの共謀による一場の芝居であるが、それとは知らないお人好の皇帝はそんな事でラスプーチンの威力を信ずるようになり、終に彼は宮中に於て素晴らしい勢力を得

るに至つたのであると。然し皇太子のヘモフィリヤ(出血)に就いては玆に面白い異說がある。このヘモフィリヤは皇后のお里ヘッセンのアリサ家に代々傳はつた病氣で、而かも男にだけ遺傳する。ニコライ二世はこの事を知つてゐたか何うか分らないが、皇后自身はそれを知つてゐ、殊にビスマルク公は能く知つてゐた。で鐵血宰相は全く政略上の目的から、その體內に恐ろしい毒を含んだヘッセンのアリサ姬を故意にニコライ皇帝に推し付けたといふことである。

以上の外にラスプーチンが露國の宮廷に勢力を張るに至つた最も有力な原因の一つはアレキサンドラ皇后との秘密關係の裡に含まれてゐたことは言ふまでもない。彼は皇后の寵を恃んで專橫至らざるなく、彼が居らなければ宮中は納まりが附かないと言はれたほど、宮中の事は一から十まで一人で切廻してゐた。斯くラスプーチンの勢力が一旦宮中に蔓るや、彼の專橫は政治上にまで波及して、國政を左右し、大臣の任免、議會の開閉、外國との交涉一として彼の手の及ばない所はなかつた。かの單獨講和の張本人プロトポーポフを內相の椅子に据えたのも彼の周旋であつた。更に憎むべきは彼が閨門裡に於ける振舞であつて、彼は啻に宮中の女官と關係したばかりでなく、皇后や王女達との關係說まで傳へられた。そしてニコライ皇帝を呼ぶに「コーリャ」といひ、アレキサンドラ皇后を呼ぶに「サーシュカ」と呼び棄てにして、まるで同輩か手下の者に對するような態度であつた。この有樣を見たる各皇族方は非常に憤慨して、皇后とは形式一遍の交際をするやうになつた。近從の中にも皇后に對して次第に冷淡となり、遂に皇后を憎惡する者も出來たくらゐである。次に掲ぐる事實の如きは宮中に於けるラスプーチンの勢力を語る適當の材料である。

十二、怪僧の專橫

ツァールスコエ、セローの七十九號の病院は皇后のお氣に入りのウイルボワと云ふ女によつて建てられたものであるが、此の病院はラスプーチンの部下によつて常に占められてゐた。これはラスプーチン黨の俱樂

部であつた。此の病院の調度室には特別の電話があつた。ウィルボワは此の電話によつて絶えず、自分の愛人と話をし、その話も多くは秘密に屬することであつた。また、レショートニコフといふ男はラスプーチンの『右の手』と云はれた一人であるが、彼は其の過去に刑事上の犯罪を有つた暗い人物で、以前は莫斯科の商人であつた。疾ふに商業界を去つて、皇太后の名を冠した或る學校の幹事を暫く務めてゐた。が、其の學校で數萬留の金が費消されたことが曝露すると同時に、其の嫌疑はレショートニコフへ向けられた。が、「祈禱とラスプーチンに對する忠勤」とが彼を救つた。彼は赤い衣服を着る代りに、却つて五等官の位階を受け、ラスプーチンの運動によつてペトログラードへ移つた。それから戰爭が始まると、ウィルボワヤ病院の會計係によつて、ラスプーチンの手足として暗い舞臺に活動した。このウィルボワヤ病院の倶樂部を中心とするラスプーチン黨の外に、宮廷内には更に露西亞を獨逸の殖民地となし、「不和な戰爭」を目的とする獨逸黨があつた。その首領はベルギイに居つた。その一人はヤウィネルと言つて、ロシヤ銀行の支配人である。彼はロシヤの獨逸黨と、常に交渉してその隱謀の手を廣く廻してゐたのである。此の黨の者はラスプーチンをとりかこんで、その一歩一歩につき從つた。そして必要に應じて、色々の面白い事にかこつけては彼を利用した。黨の中には勿論軍事の秘密を敵に漏らす處の獨逸の間諜も居つたのである。

ペトログラードの人々は時としてラスプーチンが、「ウィラ、ローデ」の怪しい巷へ出掛けて、賤しいジプシイの女を總上げして、盛んに豪遊して居る所を見受けることがあつた。ラスプーチンは酒宴をやる時に、最初は豪農のやうな調子で遊んでゐるが、仕舞には醉つて來るに從つて十方風の遊び振りに移つて行つた。彼は皇后のお氣に入りになつてからも以前の放浪生活の味は忘れられなかつたと見える。『ウォルラ、ローデ』ではラスプーチンを下にも直かないやうに大事にした。此處で歌を唄ふ者は普通ジプシイのコーラスで

あつた。彼等は大袈裟な相場師に數百數千の金を投げさせた。其の金は大抵公金から引き出したものであつた。

十三、殺害當夜の光景

ラスプーチンの勢力は益々擴大され、益々專横になつた。同時に宮中の腐敗は堪へられなくなつた。で、百姓の正體を露はしたラスプーチンを王坐から退ぞけなければならぬと主張する人々が出て來た。太公達は殆んど公然ラスプーチンが王坐を穢す者であることを叫んだ。そして若い皇族方の中には皇室とロシヤとを救ふことを目的とする一種の盟約のやうなものが作られた。ラスプーチンが殺される十日ばかり前に靑年貴族の間には彼を殺さうと云ふ意見が密かに傳へられた。

遂に彼等はユスポフ公爵の家でラスプーチンを殺害した。誰が射ち、誰が殺したかは、ロシヤをラスプーチンの手から救ひ出すことに關係した人達の間に深い秘密を守られてゐる。彼等はユスポフ家に於て行はれた歷史的の一夜を秘密に守るといふ誓約をしたのであつた。

ユスポフ公爵(廿七歲)は露國貴族中の名門であつて、その夫人は露國皇族アレキサンドル・ミハイローヰチ太公殿下の姫君である。ラスプーチンと夫人との間に存在した醜關係が遂に此の悲慘なる結果を生ぜしめたのだといふ噂さもあるが、それは信ぜられない。是れは全然愛國心から迸しつた献身的行爲であつた。殺害當夜の光景はラスプーチン黨のミーチヤ・カリャープといふ啞者の老人の身振話によつて察することが出來る。彼は宮中でラスプーチンの後盾に据ゑられるだらうといふ噂さのある老人であるが、三月モスクワで民兵の爲めに捕縛されたのである。彼の話によると彼とラスプーチンとは殆んど十年來の知人であつたらしい。彼は皇帝も皇后もよく知つてゐた。彼はラスプーチンが殺される以前、幾度もツァールスコエ・セローに行つたことがあつた。彼は「お父さん」(彼は皇帝のことを斯う云つてゐた)からは非常に寵愛されてゐ

たが、「お母さん」(皇后)からは餘り愛されてゐなかつた。戰爭の始めに「お父さん」はカリヤープを呼んで祝福して吳れと言つた。皇帝とカリヤープとは一緒に長い間祈禱をしたり、伏拜をしたりした。「お母さん」は彼を迎へる事を望まなかつた。ラスプーチンの死後「お母さん」は彼を憎み出した程である。

ラスプーチンが殺された事に就いてカリヤープは斯う云つた。彼の叔父はユスポフ家に使はれてゐたのであの記憶すべき夜、彼は自分の叔父の許へお茶を飮みに行つてゐた。ユスポフ家の二階には大勢の客が來てゐた。室は明るく輝いて、樂器の音もした。夜中の三時頃ドミトリイ、パウロヴヰチ太公はラスプーチンに電話をかけて呼んだが、ラスプーチンは辭退した。するとユスポフは自働車に乘り、更に一臺の自働車を伴ふてラスプーチンの許へ行つた。三十分も過ぎると二臺の自働車はユスポフ邸へ歸つて來た。同時に邸内の燈火は悉く消された。ドミトリイ・パウロヴヰチ太公はラスプーチンを出迎へた。ラスプーチンはドミトリイ太公を見ると手を差し伸べたが、太公は其の手を握らずに、毒を混じた酒の盃をラスプーチンに差し出して『犬奴、死んで了へ!』と言つた。ラスプーチンは手を振り廻して太公の手から毒を盛つた盃を敲き落して了つた。これは階上に居つて此の光景を實見した人がミーチヤに話して聞かせたのであつた。

ミーチヤ自身も二發の銃聲が聞えた時に階上に駈け上つた。上つて見ると、二人の男が大きな袋の口を縛つてゐた。と、ドミトリイ・パウロヴヰチ太公はミーチヤに近づいて其の肩を撫でながら『彼方へ行け、ミーチヤ、彼方へ行け』と言つた。口髯の生えた二人の男は袋を採つて、自働車に乘つて何處かへ行つて了つた。皇后はラスプーチンが殺されたことを知ると、直ぐに自分の頭髮を引掻り、ヒステリカルに泣き喚いた。ミーチヤはツアールスコエ、セローへ呼ばれた。皇后はミーチヤから詳しい話を聞かうとしたのであつた。が、ミーチヤは何にも話をすることが出來なかつた。で、皇后は躍起となつて皇帝に直ぐドミトリイ・

バウロウヰチとユスポフと、ミーチャ・カリャープとを處罰するやうに要求した。ミーチャはこの事件を知つてゐながら共れを豫め言はなかつたからである。が、「お父さん」はミーチャを罰することは出來ないと言つた。

十四、墓上の奇顕

露都の警察では此の重大事件の急報に接し、直ちに疑問の自働車の行方を搜索すると同時に、屍骸の所在探索に着手した。一月一日露都の町端れペトロフスキイ島とクレストフスキイ島とを連絡するペトロフスキイ橋の側でラスプーチンの屍骸は發見された。橋の側の氷結せる降雪の中に滴つてゐた血が屍骸發見の手掛りとなつた。屍骸は半結氷せるネワ河に投入されてゐた。氷に附着せる血痕を傳つて河水の結氷を打碎き、結氷の下から漸やく屍骸を引出した。屍骸は甚だしく破壞され、毛皮の襟は半引裂かれ、毛皮外套の裏には眞黒な血が附着し、兩足は固く縛られてあつた。屍體には三箇の銃傷があつた。頭部と胸部と腹部に傷が見當つた。屍體は病院で解剖に附することになつた。解剖する前、夜の十一時にラスプーチンの二人の娘と喪服を着けた一婦人とが來た。その黑い幻影のような婦人は皇后であつた。屍骸を輸送する爲に、ウォエィコフとプロトポポフとを乘せた宮內省の自働車が派遣せられた。解剖後屍骸はツァルスコエ、セローに輸送され、直ぐに皇后のお居間に運ばれた。彼女はそれに身を臥せて、悲痛に沈んだ。そして『私共は一切の希望を失つて了つた』と繰返した。が、あとは死者の上に泣き沈みながら共の善事を算へ始めた。

皇帝は當時戰地の大本營に居られたが皇后からの急電に接して、直ぐ露都に御歸りになつた。民間に於ける惡い風說を遠ける手段としてラスプーチンの死骸を故鄕に葬る爲にポクロフ村に發送する樣侍臣は皇帝に勸告した。けれども皇后は之に反對して言つた。『私から生きた人を奪ひ取つた。死者まで取り上げるのは酷い！』そこでツァルスコエ・セローに葬埋することに決定した。墓穴は普通よりも念を入れた。ラスプーチン

の死體は縮んで、膝は曲つて居た。無理に引張れば眞直にすることが出來たが、その樣にすることは、聖體を愚弄することであるといつて、皇后は望まなかつた。

夜明前に宮廷では埋葬の鐘がしめやかに鳴つた。行列は宮廷附屬の聖堂から出た。皇后は墓地に自分のお居間の庭を選んだ。棺を運んで行つた人は皇帝と、ウォエコフとプロトポポフとフレデリックスとである。棺は銀製であつた。その後から喪服を着けたアレクサンドラ皇后が言ひ知れぬ悲みの面持で跟いて行つた。他には誰も居なかつた。

屍體を埋めた。ラスプーチンの墓上は宮廷の溫室に咲いた花で撒き散らされた。人々は歸つて了つてあとには墓の上に泣き沈む皇后の姿ばかりが殘つた。

彼女は墓に耳をあて丶「彼」の聲を聞かうとした。それから不思議な事が行はれた。それは夜中に墓上の花が無くなつて、墳墓は黃ろい臭い泥の層で蔽はれたのであつた。明方にはその泥を取りかたづけた。そして又花の丘となつた。

皇后はまた墓前に姿を現はし、身を臥せて彼の聲を聞かうとした。

屍體が辱められない樣に、墳墓の傍にはスウォドヌイ聯隊の兵卒を番兵に立てた。

然し奇蹟は依然として繼續した。翌朝になると矢張り薔薇と一緒に墓上には泥が被さつた。それが益々濃くなつて行くのである。

斯樣にして數日續いた。そして、その奇蹟は、皇室の禍根を絕つ爲に地中からラスプーチンの屍體を掘り出して、彼の故郷トポリスク縣に發送する爲の計であることが後に解つた。

十五、連累者の處分

ラスプーチン殺害事件の連累者はユスポフ公爵の外に青年皇族ドミトリイ・パウロヴヰチ太公とイオアン・コンスタンチノーヴィチ太公と、議員プリシケヴィチと云ふことであつた。が、ツァールスコエ・セローでは此の四人の中からユスポフ公爵とドミトリイ・パウロ

ヴヰチ太公との二人を犯人とした。皇后の憤怒は此の二人の上に降りかゝつた。ユスポフ公爵は誰かの審問を受けたが、ドミトリイ・パウロヴヰチ太公は一時自邸に監禁され、其處から降誕祭の前夜、何の審問も受けずに侍從武官クタイソフに伴はれてペルシャ戰線へ追放された。そして如何なる事があつても親戚知己と書狀の往復を嚴禁された。武官クタイソフは始終太公を監督すべき役目を仰せ付けられた。皇族方も此の殘酷極まる皇帝の復讐を見て尠からず憤慨した。皇帝が罪もない青年皇族を斯く嚴罰に處せられたのはラスプーチンの暗殺で烈火の如く怒つた皇后の要求に屈したからである。で、各皇族は憤慨の餘り皇族會議を開き大要次の如き意味の建言書を皇帝に送致した。

「皇帝陛下、私共はドミトリ・パウロウヰチに對する處刑を緩和せられんことを請願す。陛下も御承知の如くパウロヴヰチは性來蒲柳の質にして且つ平素陛下を熱愛し居たるを以て彼の所領地に謹慎することを許給しはんことを乞ふ云々。」

然るに皇帝からは右の請願に對し何等の沙汰もなかつた。そればかりでない、皇后はパウロウヰチ太公とユスポフ公爵とを軍法會議に附する考へであるといふ噂が皇族間に傳つた。と、若干日を經て皇帝から次のやうな回答が來た。

「朕は何人にもラスプーチンを殺害すべき權利を與へたる亦なし。此事件に關係せしものはパウロウヰチ一人にあらざるが故に多くの者が不安を抱くは當然なり。朕に減刑を請願するとは以ての外なり。」

皇帝が一怪僧の暗殺の爲め皇族全體に其嫌疑を掛けられたので爾來皇帝と皇族方との關係も面白くないやうになつて、今日迄皇帝に伺候して居つた皇族方もそれ以來は全く皇帝と緣を絶つに至つた。

十六、前皇后の陰謀

以上述べた通りユスポフ公爵と二三の青年皇族とによつて、宮中に潛む親獨派の巨魁は遂に滅ぼされて了つたが、然しその中心勢力たる皇后が軍國の政治を左右して居る以上、露國に於ける親獨派の根柢はまだまだ牢乎たるものがあつた。皇后は自らエカテリナ二世（卽ちカザリン女帝）を氣取つて、閣中から黑幕とな

て露國の政治を操つた。曩に單獨媾和で名を賣つた前首相シチュルメルが解職された時、皇后は臆面もなく近侍の者に向ひ『愛らしい善良なシチュルメルが辭職したのは私が大本營に馳付けるのに半時間程遲れたからである』と告げたさうである。此の一事以て皇后の勢力が如何に絶大であつたかを想見することが出來よう。彼女は獨探宮相フレデリックスと共に魔藥を酒中に投じ、之を露帝に勸めて昏睡狀態に陷らしめ、其の間に秘密の地圖及書類を竊取し、尙甚だしきは自ら製作した作戰命令に半ば昏睡狀態にある露帝に署名を乞ひ、該命令を戰地の諸將軍に送ると共に一々之を暗號電報で獨逸に通知してゐたことが發覺した。それは前外相サゾノフ氏罷免の爲め該電報が同氏の手に落ちた結果であると傳へられて居る。尙露獨戰爭開始後間もなく露國の三個軍團が獨逸の爲めにトウフに於て全滅の悲運に會つたのも全く皇后と獨探等の奸策に基くものであることは既明の事實として知られてゐる。

皇帝と皇后との第一の犯罪は、疑心と內應とであつた。『獨逸女（ネムカ）の夫』と『獨逸女（ネムカ）』とは、ロシヤの軍隊や勝利よりもロシヤの捕虜になつてゐる獨逸人の境遇を良くしてやることに努めた。例へば前農務大臣リッチフが三萬四千人の獨逸の下士俘虜に勞働を命じた時に、皇后はそれを許さなかつた。そして彼女の書記官はリッチフに獨逸の下士は勞働に堪え得ないのだと說明した。獨逸に捕はれてゐるロシヤの將校達は桶を擔いでゐる。が、ロシヤでは獨逸の下士官等がロシヤ農民の脛を嚙つてゐる。『獨逸女（ネムカ）』は新聞の中にロシヤ軍がヘッセン軍を追擊したと云ふ記事が載つてゐるのを見て憤然として叫んだことがある『之は大變な僞だ！ ヘッセンの兵卒は決して敵に背中を見せない！ それはロシヤ人の作り事だ！』と。

『獨逸女（ネムカ）(皇后)が大事を過るんだ』とは軍隊の狀況を說明する通用語であつた。『神よ、獨逸女（ネムカ）を去り給へ、獨逸女（ネムカ）と共にする時我等は亡びるであらう。』との國民の祈禱は實に神の祭であつたと云ふべきである。

獨逸女（ネムカ）は果して總ての時を過つた。そして政治上に

大なる汚點を殘した。彼女は確かに皇帝を左右することを知つてゐた。或るオルデンブルグの皇族が、用談でアレクサンドラ・フェオドロヴナに面談しようとした時に、朝の十一時まで待つてゐたが、皇后は國事を夜遲くまで見たのでまだ眠つてゐて會はないと云ふ風であつた。で、太公ニコライ・ミハイロウイチはオルデンブルグの皇族に言つた。『皇后がどのくらゐ國事に干渉して居らるゝか、あなたは御存じですか？　皇后は各省の役人達の名簿を見て、自分の氣に入りの官吏にはプラスを附け、嫌ひな者にはマイナスを附けるのです。』彼女は『自分の國民を知つてゐる』と確信してゐた。けれども國民も矢張り獨逸女(ネムカ)を知つてゐた事は明かである。

十七、僞カザリン二世

彼女はまるで玩具のようにニコライ二世を左右し、彼をすつかり捲き籠めて、其の頭を御へてゐたのである。『アレクサンドル・デミトリエウイチの勸告を聞かなかつたのは私の過ちであつた。私は獨逸の短劍の助けによつて、あの木偶(でくのぼう)（皇帝を指す。）を打ちのめして、自分がカザリン二世にならねばならぬ。』斯う彼女は豪語したことが度々あつたといふ。軍隊の行動に就いての計畫が常に彼女の胸中にあつたことも周知の事實である。彼女は全然獨逸のために操られてゐたのである。

又彼女は宮中に內應と密偵の巢窟を作つて常に獨探を保護してゐた。千九百十四年の秋、軍事檢察官がペトログラードや其の近郊などの大きな建物や、密偵の無線電信發信所などを搜索した時など、獨逸密偵の本陣がツアールスコエ・セローにあることが發見された。それが爲めに搜索さへ中止された程であつた。

獨逸皇室とロシア皇室との關係は戰時中に於ても止まなかつた。その事はアストリヤ旅館で捕へられた女官ワシリチコワの一件によつて發覺した。彼女が捕へられた時、その胸の中に暗號で書かれた手紙を發見した。手紙は外務省の人と太公及び太公妃の或者に當てたものであつた。その中でマリヤ・パウロウナに當てたものは殊に注意を惹いた。此の手紙の發信者は後で明かになつたが、實に獨帝ウイルヘルム其人であつた。手紙の要領は、ホーヘンツオルレルン家とロマノフ家の間には仇敵の關係は無い。又あらう筈もない。たゞ戰爭は獨逸の惡化に反對する所のロシア國民によつてなさるゝのであると。そして手紙には戰爭と饑饉とに苦しむ貧しい獨逸の田舍の光景が書かれてあつた。然し是等の密書を携へたワシリチコワは遂に囚れの身となつて獨探の巨魁アレクサンドラ皇后にもラスプーチンにも會ふことが出來なかつた。

前政府の內相プロトポーポフの監禁後、その家宅搜索を行つた結果、

彼と皇后との間に取交はされたいろんな秘密書類が發覺した。それに據ると皇后が内相を手先に使つて單獨媾和の陰謀を巡らして居つたことは明かな事實である。それが爲めに内相は出來得る丈の手段を盡した。戰線に送るべき八百挺の機關銃は彼の指令の下に憲兵隊の手に依り、露都及莫斯科の敎會堂の屋上及び兩市の有名なる旅館の屋上に配置され、又其敎會及び旅館の地下室には腸詰肉罐詰其他の食糧品を十分に用意し、單獨媾和に對し、詔勅發表に對し、國民の反抗を受けた場合に備へてあつたといふことであるが、斯んな事實を擧げたら際限がない。

十八、退位の刹那

前皇室と前政府の反逆的行爲は革命前殆んど極度に達して、皇帝は在つて無きが如く、一國の大事は凡て皇后を中心とする親獨派の左右する所となつてゐた。斯んな狀態に於て何うして革命が起らずに居られよう。革命は既に豫定の事實であつた。國民は國家多事の際とて忍びに忍んでゐたのである。然し最後の緊張に達した形勢は到底抑ゆることが出來ず、遂に革命となつて爆發し、其結果皇帝の退位を見るに至つた。退位刹那の光景に就いては時事新報紙上に播磨君の通信が詳細を盡して居るから、それを引用することにする。

『露都の天地が既に革命軍の手に歸した時、ツアールスコエ・セローに居られる皇后は大本營なる皇帝に至急露都に歸還あらんことを乞はれた。皇帝を乘せた宮廷列車が露都を距る程遠からぬウイセラ驛まで達したのは、三月十四日の拂曉三時頃であつた。汽車は二列車で、前の列車は隨員用で、鐵道隊長ツアーベル少將が鐵道聯隊の半個中隊と混成聯隊の二十名の兵と共に乘つてゐた。後の列車には皇帝自ら乘つてゐられた。

之より先き露都の革命が容易ならざる形勢を呈するや、國民議會議長ロッヂャンコは皇帝に向ひ至急電報を前後二回程發して、露都の革命は軍隊が内應した爲に破竹の勢を以て露都を占領しつゝある。政府は最早爲す所を知らない、一刻も速やかに國民の信望を荷ふ人に内閣の組織を命じ給はざる時は皇室の運命に關するといふ意味の電報を打つて皇帝の決斷を促した。又各軍司令官も議長と同一意味の電報を皇帝に發したが、何れも皇帝に届いてゐなかつた。此の時皇帝の側にゐた者は唯年老いた宮内大臣フレデリックス大將と有名なニロフ提督と宮廷列車長ウオエイコフ將軍丈で、外には誰もゐなかつた。然も此等の侍從はしたゝか酒を飮んでゐた。ニロフ提督の如きは皇帝に無理に盃を勸めたさうである。

皇帝が革命暴動のことを露知らないことを知つて非常に恐れを懷ふしたのはウオエイコフ將軍とニロフ提督であつた。で、ウオエイコフ將軍は時既に深夜であつたにも拘らず、途中の疲れで寢に就かれてゐた皇帝を起して、露都には革命が蜂起し、若い兵隊が暴動を始め、兵隊は議會

に赴いて議員等を蹴し付け、議長ロッヂヤンコも勞働黨議員チヘイゼとケレンスキイとから說き伏せられ、今や露都は革命叛亂者と暴叛せる軍隊との爲に占領されてゐる。が、正規兵の四箇中隊も差向けたら叛徒を平げるに充分であると言上した。

其夜の二時頃汽車がウイセラ驛に停車して汽罐に水を補給してゐる時帝は眼を醒して食堂車に赴き、ニロフ提督を呼んで『露都は何うなつたか』と問はれた。提督は『大變な騷動が起つてゐます、然し左程ではござりません、一日か二日もかゝつたら鎭定することが出來ましやう』と答へた。此時ウオエイコフ將軍が食堂車へ這入つて來て、『只今此ウイセラ驛に電報が參りました、それに依りますと、七百名の有勳騎兵がモギレフ市を發してツアールスコエ・セローに向つたといふことで御坐いますイワノフ大將も其騎兵と一緒に出發したさうで御坐います。陛下、勇敢なる此の騎兵が居れば陛下を始め私共隨員一同がツアールスコエ・セロに乘り込むに充分であります。陛下はツアールスコエ・セロー守備の軍隊を引率遊ばして露都國民議會議事堂に御進軍遊ばせ。露都の叛軍は陛下に對する宣誓を想起して叛心を飜がへし、そして若い叛兵や革命黨を打ち平げることが出來ませう。』と云つた。

此時、食堂車内にツアーペリ少將が入つて來た。少將は云つた『そんな事は皆噓で御坐います。陛下、皆陛下を瞞してゐるのです。此の通り電報が參りました。御覽遊ばせ、電報には陛下御坐乘の宮廷列車をウイセラ驛に於て差押へツアールスコエ・セローへ送らずに、直に露都へ回送せよとあります。署名は露都驛長官グレーコフ中尉になつてゐます。』

皇帝は之を聞くと、吃驚して席を蹴つて起たれた。そして『何ッ！叛亂？ グレーコフ中尉が露都を指揮してゐるつて？』と叫ばれた。其の時ツアーペリ少將は言つた『陛下、露都にある六萬の兵は將校全部と共に臨時政府の方に附いて了ひました。陛下に對して廢帝の宣言を降してゐます。議長ロッジヤンコは全國に新政府成立の布告を布達しました。鐵道沿線には新政府から命令が廻つてゐますから此の處から先へはもう一歩も動くことが出來ません。』

驚愕と忿怒と自失との極、帝は『何故それならば早く朕に其の事を告げなかつたか、何故取返しの付かない今となつて朕にそれを言つたか』と絕叫されたが、然し萬事休せること〻諦めて直に氣を落付け、『今更どうしよう。朕はこれからリワヂヤに行かう。若し國民が望むとあらば朕は露都を退かう。そしてリワヂヤ離宮の庭園に歸らう。朕は花卉が大好きだから』と言はれた。ツアーペリ少將は兩手を垂れて食堂車を出た。

斯う云ふ事情で、宮廷列車はウイセラ驛から引返して十五日の未明にボロゴエ驛に着いた。が、列車がドノ驛附近まで來た時に皇帝は、ツアルースコエ・セローの守備隊も叛旗を飜して革命軍に參加し、四面楚歌の裡に陷つた皇后はツアールスコエ・セロー宮室長官を通じて議長ロッヂヤンコ及び國民議會に向ひ、皇室一族に對し保護を與へんことを請願したと云ふ電報に接した。帝は頭を傾けて思案した揚句、『莫斯科へ行か

かしら、モロゾノスキイは朕に向つて莫斯科は常に陛下の味方ですと言つたから』と言はれたが、此の時ドノ驛にも電報が來て、莫斯科の守備隊も全部擧つて革命軍に投じ、官憲は捕縛引致されたと云ふ報道を齎らした。今や宮廷列車は進退維谷つて、ドノ驛からボロゴエ驛に逆行し、再びボロゴエ驛からドノ驛に引返さうと云ふ具合に兩驛の間を行きつ戻りつ何處かに血路を開かんと焦つた。が、遂々ドノ驛でイワーノフ將軍座乘の列車に出會つた。イワノーフ將軍は革命に就いて詳しく帝に物語り、更に『宮廷は總て革命黨に掌握されて了ひました。で、今は戰線に赴くより外救濟の途が御坐いません』と言つた。ウオエイコフ將軍は之を聞いて、『最う斯うなつてはミンクスの戰線を獨軍に開放して獨軍に不忠者を平定させるより外に方法がありません。』と叫んださうである。ニロフ提督は酩酊してはゐたが、ウオエイコフ將軍の言を聞くと、憤然として『そりや怪しからん。さうなつたら獨逸は露國を占領して了つて、それ限り露國を返しはしまい。』と言つた。帝もウオエイコフの意見に對し、『さう言へばあのラスプーチンが始終さう言つてゐたけれども朕はそれを聞かなかつた。獨軍がワルソウ市に攻め寄せて來た時分であつたら然うしても可かつたが、然し朕は決して露西亞國民を裏切るやうなことはしない』と言つて男泣きに泣かれた。それから稍々少時默つてゐて何ほ言はれるには、若し朕の子供や妻が此等百姓の手中にあつて無事でさへあつたならば、朕はリワヂヤ離宮に隱退して平和に一生を終り度いものだ、後はミハイルが代つて國を治めるだらう。ミハイルは國民に愛されてゐるから』と。それから更に帝は、『朕は退位令に署名をしよう。戰線に行つて軍隊に訣別しよう。それからは彼等の欲するが儘に如何でもするが可い。朕は何人にも邪魔はしない。』と言はれた。

帝がスターラヤ・ルッサ驛の附近で列車の昇降臺に姿を現はされた時には、毛帽子を後ざまに被り兵卒の外套を纏ひ、蒼白い土のやうな顏色をし、幾度か手で額を拭きながら茫然として驛の建物を凝視された。帝の側には酩酊したニロフ提督が蹌踉めきながら立つて何だか鼻唄を歌つてゐた。暫くして帝は再び車內へ這入られた。宮廷列車は行くべき道を失ひながら不安の裡に辛うじてプスコフ市に辿り着いた。

三月十五日の午後十時頃シュリギンとグチコフとは露國議會執行委員會の委託に依つてプスコフの皇帝を訪ふた。帝の顏付は平日と毫も變りがなかつた。帝は宮廷列車中へ皆を集め、愛嬌よく一同に會釋して座を勸められた。グチコフは帝と並んで座し、シュリギンは帝と向ひ合ひに座を占め、宮相フレデリクスは少しく離れて座し、列車の隅には將軍某が小さい机に凭つて筆寫してゐた。此時ルーズスキイ大將も這入つてシュリギンと並んで座した。先づグチコフは國內の現狀を詳述して、如何にして今日の如き破滅に陷つたかといふ理由を說明した。そして最後に唯一の處決は位を皇太子に讓つて皇弟ミハイル太公を攝政たらしむる外ないと申上げた。グチコフが語り終つた時、帝は口を開き、落着いた態度で、恰も日常茶飯事に就いてでも話すやうに、『朕は昨日から今日にかけて終日考へてゐたが、退位することに決心した。朕は今日の午後三

時前に既に嗣子に位を讓る筈であつたが、善く考へて見ると、朕は我子と別れるに忍びない事情がある。』と言はれ、『で、朕は弟に位を讓ることに決心した。』と結ばれた。一同はミハイル太公に讓位のことを同意した。此時帝は若し退位さへすれば國内は何事も起らずに無事に納まるかと念を押された。皆な目下の豫想では別に面倒は起らない積であると答へた。帝は、座を起つて退位詔勅に署名すべく隣室に出て行かれたが間もなく手に大形の用紙を持つて、這入つて來られた。帝は『これが退位書です、お讀み下さい。』と言はれた。皆小聲で讀んだ。唯一箇所字句を挿入した限りで、退位詔勅は立所に出來上つた。退位書は大形の用紙にタイプライターで印刷した。帝は其れに署名された。退位書は二通製作し、一通はグチコフ等によつて露都に携帶され、他の一通はルーズスキイ大將が所持することによつた。帝の署名の傍に宮相フレデリックスがペンで署名した。退位書の受授が濟んだ時帝は一同に握手された。其の時時計を見ると、丁度十一時四十八分であつたから、此の歴史的重大事件は三月十五日の十一時から十二時の間に起つたことになる。見受けるところ、帝は冷淡と言はんより寧ろ友情的で、そして極めて落着き拂つて居られた。』

十九、廢帝の近狀

三月廿二日廢帝はモギレフ停車場内の列車中にあるアレキセーフ大將から拘禁の旨を通ぜられ、午前九時寢床を出て、十時列車の食堂に現はれ、從者一同を招いて、一緒にお茶を召された。そして僕婢に至るまで一々接吻を與へ、是迄世話になつた禮を述べ、別辭を告げられた。そこへ議會から送られた四名の委員が到着した。帝は從順に『如何なる決定にも從ひ、何地へでも赴く考へである』と答へ、其場に居られた母君マリヤ・フエオドロヴナと訣別を告げられ、一時間の後には堵をなせる黑山の如き群衆に送られ、露都に護送された。出發の際侍從武官ニロフ海軍少將が隨行を乞ふたけれども委員は之を許さなかつた。やがて露都のツアールスコエ・セロー停車場に着し、露都衞戍總督ケルニロフ大將に迎へられ、自働車に同乘して監禁所たるツアールスコヘ・セロー宮殿に向つた。廢帝は此日哥薩克聯隊の服裝に聖ゲオルキイ勳章を帶びて居られた。從者としては只ドルゴーロフ公一人が附添ふてゐたに過ぎない。その前にケルニロフ大將は前記宮殿にあつた皇后に會見し新政府の決定を告げ、從來の自由を剝奪する旨を告げたが、皇后は何も言はず承諾され

た。唯病に臥せる皇子等の看護のために從來の使用人若干を其儘留めておきたいと願つたので大將は之を許した。斯くて先帝の一家族は前記の宮殿に囚れの身となり、新政府の決定を待つて居る次第であるが、新政府も其の待遇には十分注意し殘忍のこと等は決してない。けれども宮殿内には監視兵の外國民議會の議員を各室に配置して、前兩陛下及び病室に惱んで居らるゝ皇太子殿下の一擧一動に注意して居る。また前帝の内意が他に漏れるのを恐れて、革命黨に好意を有つて居る皇族方でも出入の自由を嚴禁されて居る。何にしても二億萬の民に君臨し、富は世界帝室中の最大を以て誇つて居られた皇帝が一朝にして監禁の身となられたのであるから、その不自由は察するに餘りある。聞く所に據ると、近來は餘程悲慘の境遇に慣れ、左まで不自由にも感じないと、警衛の武官に物語られたとのことである。何れ本文の終節は露國々體の決定を待つて廢帝の最後の運命が決まつた時に更めて草することにする。(完)

(本文は余の嘗て傳聞せる事實の外は凡て近着の露字新聞「ルースカヤ・ウオーリヤ」に據つたのであるが、旁ら時事新報紙上の播磨君の通信をも參考したことを辭つておく)

心中の唄

田中貢太郎

村の通りになつた唯ある四辻に、夫婦連らしい讀賣が來て立ち停まつた。二人とも手拭を姉樣冠にして、尻を端折つてゐた。男の方は、痩せた中背の男で、黄色な小さな顔に黒い眼鏡をかけてゐたが、眼鏡の下の片方の眼は、瞼が赤く爛れてゐた。女は亭主と釣合のとれないやうな體格をして、平べつたい顔に白粉を厚くつけてゐた。そして男の背には、油團掛にした汚れた淺黄の風呂敷包があり、女の背には、靑い毛系の頭巾を著た嬰兒が眼脂の出た眼をつむつて靜に眠つてゐた。二人の頭の上には、ほか〳〵する明い春の日があつた。

やがて男のしやがれた聲と、女の甲高い聲とが縺れ合つて起つた。男は白い甲掛をした右の手に古い扇を持ち、女は賣物の半紙を二つ打りにした數へ歌の刷物を持つて、それで口を掩ふやうにしてゐた。「ひとつとせ――ェ、ひとつゥしんぷんッ名も高さ――ィ、ところァ――、かうちのゥかゞみがはァ、めうと心中のあァはァれさよ――ゥ」

歌はその地方にあつた情死を綴つた數へ歌であつた。それを歌ひ出すと、村の人は集つて來た。鍬を擔いで畑に行つてゐる者が先づ足を停めて耳を傾ける。縁側に腰をかけて煙草を喫んでゐた親爺がノッソリ出て來る。飯の仕度をしてゐた婦が菜切庖丁を持つたなりに出て來る。裁縫してゐた娘が草履を爪先に引かけて出て來る。散髮屋の亭主が鋏を持つたなりにヒヨロ長い姿を門口にあらはして、遠くの方から見はじめる。駄菓子屋に寢そべつて無駄口をきいてゐた若衆が出て來る。子供が走つて來る。子供の後から黑犬が隨い

來ると云ふやうに、みる〳〵中に、讀賣の姿は、村の人の圍みの中に隱される。

　數へ歌は多く二十節になつてゐた。『三つとせ、見れば見るほど綺麗なお千代、德治がほれたも無理はない』と云ふやうな露骨な文句が、節を追うて歌はれた。人人は暢氣な間の延びた顏をして之を聞き聞きした。煙草が燃えて無くなると、吸殼をコツ〳〵と掌に移して、あとの煙草を詰めながら、靜にそれに吸付けた。何處かでのんびりした鷄の聲がする。

　數へ歌を刷つた木版刷の薄穢い刷物は、一枚二錢か二錢五厘であつた。これを賣り歩く讀賣の姿は、未だ日淸戰爭を知らなかつた私の故郷に見かけたものであつた。この讀賣に關聯して、私は忘るべからざる悲しい一つの追憶を持つてゐたが、三十年に近い時の流れは、何時の間にか、その奧に燃えてゐた種々な感情を洗ひ去つて、今では繪卷物のやうな綺麗な印象として了つた。

神戶から汽船に乘つて高知市に往來した人は皆知つてゐるだらう、土佐の東南端、太平洋の怒濤と不斷の爭鬪を續けて、磯に潮霧の晴れた事のない室戶岬を廻つた船が、それから二時間ばかりも行くと、半月形に彎曲した海岸線が彎曲し切つた所で、左に小丘が突き出て岬角をなした陰に、狹い港灣の入口が見えて來る。それが浦戶港で、高知市はその奧にあつた。丘の上には、小さな燈臺も見える。港の右側は、松林の斷續に續いた平地で、白い砂濱をなした磯には、綺麗な波が這ひ上つてゐる。私の家は、その林の陰になつた所で、背後には入江の水があつた。

　村は三部落に別れて、私の家はその中央になつた仁井田と云ふ所にあつた。戶數も七八百、其所には村役場も小學校もあつた。東にある部落を池と云つて、其所はもう浦戶港の左岸に突起した丘陵に抱かれてゐた。西になつた部落を種崎と云つて、港入江の咽喉元に三百の人家を並べてゐた。

　明治二十三年頃の事であつた。私の父の從弟なる彪

次と云ふ若い男があつて、種崎の鍛冶屋に年季奉公に行つてゐたが、ふと、その土地で一人の女と關係が出來た。

一體種崎は、帆船の建造地として、若狹の小濱などと共に一寸知られた所であつた。今は無くなつたが、その頃は船體檢査の上に除外例があつて、船主の方に便利が多かつたので、それが爲に造船は可成りに盛であつた。隨つて同地は、造船所に集つて來る大工や、鍛冶の職人や、船乘やの類で繁昌したので、それ等の人々によつて作られた猥雜な空氣があつた。

その種崎は、土地の習慣として、秋の末から春にかけて蕎麥屋が出來た。その蕎麥屋の中で、薄暗い掛行燈の片側に、「あはや」と云ふ屋號を記した家があつた。阿波の方から流れて來たもので、其所には姉妹の綺麗な娘があつて、若い男の客を引きつけてゐた。

この邊の蕎麥屋では、主にもり蕎麥と、しつぽくと云つて竹輪や椎茸などの種物を入れた蕎麥とを賣つた。顏に薄痘痕のある狹い額の禿上つた亭主が、土間に上つて、釜の下の薪を氣にしながら、笊に入れた蕎麥を温めて汁をかけると、二人の娘がそれを客の前に持つて行つた。その時女房は、裏口の方に姿を見せて、蕎麥の藥味にする葱をチョキ〳〵刻んでゐたり、勝手の長火鉢の傍に腰をかけて、羅宇の長い煙管で煙草を喫んでゐたりする。客に惡巫山戲をされて、『お母はん、あれ――』と云つて娘たちが艶かしい聲を立てると、女房は人の好ささうな顏をニコ〳〵さして、その方に眼をやつた。

その『あはや』の客の中で、二十二三の眉の濃い、年寄にも子供にも冗談口を利く若い男があつて、輿に乘ると、銹のある好い聲で義太夫をやつたりした。その男が何時の間にか姉娘の繁野と關係して了つた。それが虎次であつた。その結果虎次は、未だ二年の年季が殘つてゐるにも係はらず、女を私の家の物置に付いた四疊半の室に連れて來て、自分は二日置き三日置きに、夜々種崎から歸つて來るやうになつた。

繁野は輪廓の柔かな暖な感じのする女で、阿波女の特色を具へてゐた。母親似の肉のある顔の右の頬に可成り目立つ黒子があつた。その黒子のある綺麗な顔は、その時十一二位であつた私の眼にとまつた。

『あれは何人』と母に向つて聞くと、『あれは鍛冶屋の小父さんのお嫁さんよ』と母は無雑作に答へた。

繁野は黒繻子の半襟のかゝつた半纏を著たりした。朝から母屋に來て、母の傍で針仕事をした。虎次の股引を繕つたり、足袋を縫つたり、仕事のない時は、『姉さん手傳ひましよう、』と云つて母の仕事の手傳ひをした。虎次の歸らない時は、夜も遅くまで母屋にゐた。晝飯なども何時も一所に喫つた。私は肉身の姉が出來たやうで嬉しかつた。

『小姉さん、小姉さん、』と云つて學校から歸つて來ると、その傍に附きッ切りで、猫のじやれるやうに、肩に抱きついたり、膝に凭れたりした。横になつて頬杖をついて、じつとその顔を見入つたりした。それを母が見かねて、『そんなにしちや、小姉さんが煩いぢやないか、』と云つて叱つた。すると繁野は、『何、ちつとも煩さかありませんよ、』と母の方に向いて云つた後に、私を抱寄せて、『好いはねぇ……』と私の顔を覗き込むやうにして莞爾と笑つた。さうせられると、私は嬉しくて泣きたいやうな氣になつた。

その内に、何時の間にか若い男が私の家に來るやうになつた。それと共に、繁野が數へ歌を口にするやうになつた。讀賣は月の中に一二度は必らず來た。

『繁野さん、又數へ歌が來たよ、』土用竹の垣根を押し分けて、垣の間から顔を出して知らしてくれる人でもあると、表座敷の縁側で、母と針仕事をしてゐた繁野は、手にしてゐた衣を捨てるやうに置いて、急いで下駄を衝つかけて通りに出て行つた。赤い針箱の引抽には、刷物の紙が増へて行つた。

歌の上手な人を見かけると、『歌うてごらん、』と云つて歌はした。そして歌の中の男女の魂に引ずられるやうな眼付をして、之に聞きとれてゐた。そんな時には

繁野は、しかけてゐる仕事も忘れてゐるのみか、殆んど世の中の事は忘れて了つてゐるやうに見えた。『ひとつとせーエ』と云つて囁のやうなおつとりした聲を出して、自分で歌つてゐる時にも、自分で自分の聲に聞きとれてゐるやうに見えた。昔氣質な母には、それがこの上もなく淺間しかつた。『小姉さん、小姉さん、早く縫はないと、著る間が無くなるぢやないか。』と云つて注意した。

歌の間には、何時も歌にあらはれてゐる情死した男女の話をした。『心中した者は、棺を並べて埋めて、心が通ふやうに、棺と棺との間に、竹の管を通すつて云ふぢやありませんか。』と云つて繁野は傍にゐた若い男に云つた。其所は表座敷で、三分心の洋燈が點いてゐた。靜かな生暖な晩で、波の音が幽に幽にしてゐた。私の耳には、繁野の言葉が美しい不思議な智識となつて聞えた。

『死んでから後にも、口を利くの。』と云つた私は、手繰つても手繰つても手繰り切れない紙鳶の糸のやうな物を手繰つてゐるやうな氣持になつてゐた。

『利きますとも、何時までも何時までも、二人で口を利きあつて居りますとも。』と繁野は何か物を見詰めるやうにして云つた。

傍で木綿糸を枠に捲きつけてゐた母が、『阿房らしい、死んでしまや、土になるぢやないか。』とさも馬鹿馬鹿しい事だと云ふやうに云つたので、繁野も口をつぐんで了つた。私は母が憎かつた。

翌年の正月頃から、繁野の周圍に集つて來る者の內で、幾衞と云ふ若い男の輪廓が濃くなつて來た。

ある晩、繁野が種崎の實家に行くと云ふので、私がついて行く事になつた。暮れて間もない戸外には、薄月がさして、風が寒かつた。私は白い襟卷をして、提燈を持つた繁野に添うて歩いた。

通りを西に少し行つて、左側に船板塀がでつ張つて、路が曲つた所まで行くと、その塀の角の薄暗い所から、背の高い男が出て來た。ヒヨイと此方を見た白い顏は、

幾衛であつた。

『おや、幾衛さん、』と繁野は嬉しさうに云つて、幾衛と並んで何か小聲で話してゐたが、やがて私の方へ向いて、『幾衛さんが種崎へ行くさうだから、幾衛さんと一所に行きます。あんたは寒いから歸つておくれ、』

私は繁野が勝手な事を云ふやうに思つて憎くなると共に、幾衛に對しては、繁野を奪られたやうな氣がして、腹が立つて泣きたいやうになつた。で、何も云はずに、いきなり我家の方へ駈け出した。繁野が少し追かけて來て、何が云つたやうであつたが、『そんな勝手な人に、もう口を利くものか、』と云ふやうな氣で、一埒足を早めて歸つた。

歸つてみると、母は茶の間の火鉢の前で、夕飯の跡仕末に冷えた手を溫めてゐた。『なにしに歸つたの、』と母が問いた。

『幾衛さんが來て、幾衛さんと一所に行くから、歸つても好いと云つたから歸つて來た。』と私は餘憤を母に持つて行つて、突つかゝるやうに云つた。

『左様、』と母は不快な顏をして默つて了つた。

私も何だか氣がさした。そして繁野の事を惡く云つては、繁野を母に惡く思はすやうになると思つたので、口をつぐんだ。

その時分から母の繁野に對する態度が變つて來た。母は冷たい眼で、繁野を見るやうになつた。同時に繁野の足も母屋に遠のいて、物置で一人で仕事をするやうになつた。一時は牡丹の花の咲いたやうに明るかつた私の家は、又もとの淋しい陰氣な家になつた。

その當時の事であつた。ある日、晝飯に學校から歸つてみると、勝手の緣側に母と繁野とが並んで腰をかけてゐたが、繁野は母に何か云はれたのか、顏に指を當てゝ俯向いてゐた。母はとみると、重苦しい眼付をしてゐた。

私は氣になるので、飯を喫ひながら、『小姉さんは、何うしたの、』と問いてみた。

『何うもしないよ、』

『何うもしないたつて、泣いてゐたぢやないの、』

「泣くものかね、……お前がそんな事に口を出すものでない、」と母は叱るやうに云つた。

　神戸高知間を航海する汽船に乗つてゐる父は、四日目毎に歸つてゐたが、その父が歸つて晩酌をやつてゐる時であつた。父と向合つて酒の相手をしてゐた母は、ふと何か聞きつけたので、小聲で父に向つて、「足音のやうですね、」と云つて父の顔を見た。父の座つてゐる左側に角な小窓があつて、父の頭の影がその障子に映つてゐた。窓の外は、門から一直線に這入つて來る庭で、庭の突當りが物置になつてゐる。父は窓の方に耳を傾けて、手にした盃を控へ、「どうも左様だね、」と云つて、母と眼を見合はして意味ありさうに頷き合つた。

　幾衛は可成りな農家の三男であつた。年は二十歳位で、繁野から見れば一つ二つの弟であつた。母が二人の間に疑ひを挾んだ時には、二人はもう取りかへしの付かない破目になつてゐた。虎次の歸らない夜などは、幾衛が物置に忍んで來るらしい形跡があるので、母は心を痛めてゐた。

　白い勢の宜い雨が降つたり止んだりした。何でも日曜であつたらしい。母はその頃汽船を休んでゐた父と一所に、海岸の畑に甘薯の蔓をさしに行くと云つて、朝から二人で簑を著て行つたので、私は右隣の友達の所へ遊びに行つてゐた。虎次の兄の家で、魚の仲買が家業であつた。其所には私と同年になる熊太郎と云ふ少年がゐた。私はその友達と二人で遊んでゐたが、飽いて來たので、小さな傘をさして歸つた。併し家の内には、何人もゐない事は分つてゐるので、繁野の傍で遊ぶ積りで、勝手の竈の傍に疊んだ傘を立てかけて置いて、母屋と物置との軒合せになつて雨のパラ〳〵と落ちてゐる所を一跨に飛んで、物置の土間に這入るなり、閉めてあつた障子を開けた。狹い座敷の中には、幾衛と繁野とがゐて、繁野は右の半身を幾衛の膝に投げかけるやうにして、左の袂を顔に當てゝ泣いてゐた。幾衛は兩手を繁野の肩に乘せたなりに啞然としてゐた。

二人は不意の闖入者に心を震はしたやうであつた。繁野はあたふたと起き直つた。私はその容子が氣になつたので、「小姉さん、何故泣くの、」と聞いた。繁野はチラと振返つて、「幾衛さんから、可愛さうな話を聞いたから、それで泣いてゐる所よ、」と云つて莞爾と笑つた。涙に濡れた顔が艶かしく綺麗に見えた。

私は上るのが極りが悪いので、そのまゝ引返さうとした。「―さん、」と幾衛は私の名を云つて呼んだ。「何、」と云つて立ち停ると、幾衛は袂から何時も持つてゐる鹿皮の蟇口を出して、「これを―さんに、片見にやらう、」と云つた。

私には片見と云ふ意味は分らなかつたが、何處か旅へでも出るやうな氣がしたので、「何處へ行くの、」と聞いてみた。

「何處か遠い遠い所へ行くからつて、私の所へも來てくれた所よ、」と繁野が傍から云つた。

「左様、」と云つて手を出すと、幾衛は寂しさうに笑つて、蟇口を掌に乘せてくれた。私はそれを持つて出やうとしたが、中に金が這入つてゐるらしいので、口を開けて覗いてみた。銀貨と銅貨が六七枚這入つてゐた。

「錢はいらん、」と云つて突然疊の上に移した。

私はそれから雨に濡れるのも忘れて、又隣家に行つて、「こんな金著が出來たぞ、」とバネをパチンと云はして、口を開けたり締めたりして熊太郎に見せびらかしてゐたが、幾衛が懐かしくなつたので、物置に引返してみると、もう幾衛は歸つて了つて、繁野一人が平生二分心の洋燈を据ゑてある隅の古机に凭れて、何か考へてゐた。

「幾衛さんは何處へ行くの、」と聞いてみた。

「さア……」と繁野は吃驚したやうに顔をあげて、「何處か、東京か大阪でしょうよ、」

それから四五日しての事であつた。空が晴れて暑い日がギラ／＼する日の午後、私は物置の前の日陰で、鉈を持つて何か小枝を削つてゐた。

通りを隔てた向ふ隣家の老婆が來て、勝手口で母と

何か話してゐたが、歸らうとして、一足戻つて、物置の口を斜に覗いて、『小姉さん何をしてゐるの。』と云つた。

すると内から繁野の聲で、『遺書をしてゐる所ですよ。』と笑ひ聲で云つた。

『まア』と老婆も笑ひ聲になつて、『そんな緣儀でもない事を云ふのは、よしなさいよ。』

『ぢや艶書々々。』と繁野は輕く云つて笑つた。

私は耳に入れなかつた。老婆は尻を振つて歸つて行つた。物置の中では、書き直すのか、一二度紙を破る音がした。

その時分は、縣下に虎刺烈が流行してゐたので、その夜、私の村へも郡役所から衞生係が來て、豫防に關する講話があつた。

夕飯がすんだ所で、繁野が勝手口から這入つて來て、『――さん、講話を聞きに行かう。』と云つた。白い浴衣を著て、赤いメリンスと黑繻子との腹合せ帶を締め、頭髮も新しく結ひ、近頃は滅多につけなかつた白粉をつけて、綺麗に化粧をしてゐた。

父の酒の相手をしながら、片手に團扇を持つて、バサバサ蚊を追つてゐた母は、冷かな眼でジロジロ見てゐた。

私は嬉しいので、急いで玄關の方から下駄を履いて降りて行つた。

講話の場所は、直ぐ近くの菓子屋であつた。衞生係は二人來てゐた。表座敷へ涼臺をあげて臨時に作つた席に、麻の洋服を著た身體を窮屈さうに置いて、かはるがはる虎刺烈の恐るべき事に就いて話した。

私は繁野の前に坐つて聞いてゐた。繁野は手にしてゐた團扇で、時々風を立てゝくれた。私は衞生係の口から出る意味の分らん言葉に飽いて、欠伸をしたりしたが、何時の間にか睡つて了つた。そして何かに驚いて眼をさましてみると、自分は家に歸つてゐて、父や母と蚊屋の中に枕を並べてゐた。繁野が負つて來てくれたものであつた。戸外では大きな雨がザアザアと音を立てゝゐた。一つ二つ遠くで雷の音もした。母の聲

りに寢てゐた父は、煙草盆の火入をコツ〳〵云はして煙草を喫んでゐたが、その煙草の火が暗い中に一つぽつかり光つて淋しかつた。

その頃私の村では、野菜や菓物を賴まれて、高知市の野菜市場に賣りに行く者があつた。この荷物を入江の岸から小舟に積んで行くので、「運賃」と云はれてゐた。

講話のあつた翌朝、勇吾と云ふ運賃の一人は、小雨の降る中を通つて、一軒の農家に貨物を取りに行つた。其所は一軒離れて、畑の中にある家であつた。畑には砂糖黍があつたり、里芋があつたり、甘藷があつたりした。

勇吾は簑を著て跣足になつてゐた。目差す農家の掘立門を横に見て、右に甘藷畑、左は人の脊丈けよりも高い砂糖黍の植つてゐる間の狹い小路を通つて行つた。日和續きの時に水を汲み上げてかける爲の井戸があつて、撥釣瓶の親木が砂糖黍の葉のザラ〳〵と當る路ぶちに立つてゐた。

勇吾の眼は、ふと親木に添うて或る者を見た。それはダラリと垂れた人の兩足であつた。彼は震へ上つて、二足三足あとずさりした。

白い浴衣を著た若い男が、親木から垂れた帶のやうな物で、首を釣して死んでゐた。

勇吾はやゝ氣が落付いたので、死人の顏をみた。それは今、自分が行かうとしてゐる家の三男であつた。

「大變だ、大變だ、幾衞が死んだ、幾衞が死んだ。」と大聲を立てた。

すると農家の門口に、年取つた女が走り出て來て、ウロ〳〵しはじめた。これは幾衞の母親であつた。

「此所だ、此所だ、」と勇吾は撥釣瓶に指をさした。

老婆は狂氣のやうにして走つて來た。

勇吾は、ふと足もとを見た。撥釣瓶の並びの甘藷畑の中に、蛇の目の傘が斜にさしかけてあつた。死人の傘だらうと思つて、よく見ると、傘の下に紺飛白の著物を著た人が仰向になつて倒れてゐる。黑い長い頭髮

の亂れた容子は、女らしい。蒼白い右の手が頭の近くにあつた。『ヤア、此所にも死んでゐる、』と云つて彼は立ち縮んだ。

老婆は傍に來ると共に、『幾衛、幾衛、幾衛……』と吼えるやうな聲を立てゝ、淺間しい我子の姿を睨みつめてゐた。

勇吾は傘を足で轉がしながら、死人の顏を覗いた。死人は繁野であつた。紺飛白の下に水色の襦袢を重ねた胸を寛げて、鳩尾の所を二寸ばかり傷つけてゐた。傷の内部からはみ出した膜が薄赤く血に染つてゐた。傘を差しかけてあつたので、洗ひざらしになつてはゐなかつたが、畝に溢れた雨水の爲に、著物はぐつしより濡れてゐた。右脇の甘薯の葉の上に、一尺餘りの刄物が光つてゐた。

幾衛の兄で家をとつてゐる銀造と云ふのが何時の間にか來てゐた。『銀さん、繁野さんと二人でやつたやうだね、』と勇吾が云つた。

老婆は勇吾の聲を聞くと、氣が付いたやうに繁野の頭の方に廻つて行つて、泥のついた瘦せた片足をあげて、二三度その頭を蹴た。『鬼ッ……乃公の子を殺した……』

銀造は驚いて、老婆を抱き縮めた。老婆は凄い聲を出して狂はうとした。

小さな雨は未だ降つてゐた。

私の家では、親子三人が向合つて朝飯を喫つてゐた。開けた小窓の傍近く坐つた父は、思ひ出しては細かい雨の降つてゐる戸外を見て、その日の天氣模樣を考へてゐるらしかつた。

門口から恐ろしく周章てた足音をさして這入つて來た者がある。それは虎次の娌であつた。『姉さん、姉さん、繁野さんが大變ですよ、』と云ひながら窓の下に立ち停つた。

『何うした、』と父は窓へ顏を突出すやうにして聞いた。

『幾衛さんと、舟戸で心中してゐるさうですよ、』と

は呼吸をはづませながら云つた。
母はもう口も利けなかつた。茶碗の落ちるのも知らずに、眞蒼な顏をして坐つてゐた。父はさすがに家長たる態度を失はなかつた。靜に殘りの飯を喫つて了つて、物置の方に行つた。

私は待つてゐた芝居の愈々はじまつたやうに思つて、急いで玄關口から通りに出て見た。簔を著たり、傘をさしたりした隣家の者が其所此所に圍つて、繁野の噂さをしてゐた。虎次の兄の姿も、その中に見えた。父も出て來て、それ等の人々と何か話しはじめた。

これを見ると、私は馬鹿に嬉しくなつて、人々の間を彼所に潜り、此所に潜つてゐると、何時の間にか熊太郎が出て來た。『オイ、小姉さんが心中をしたぞ、』と私が云ふと、熊太郎は得意さうに、『ウン幾衛さんと心中をした。』と澄まして云つた。

二人は連立つて、又人々の間を潜り潜りした。母が來て、私の肩を摑へて、『熊さんと二人で、稲崎へ行つて、鍛冶屋の小父さんを呼んでお出で、』と云つた。

私は熊太郎と一所に、一二度行つた事があつて、路もチヤンと知つてゐるので、一言の下に承知して、渡された傘もさゝず、熊太郎と一所に驅け出した。路の上には、雨の爲に所々潦（にはたづみ）が出來てゐた。二人はわざわざその上を飛び越へて走つた。

そして顏を知つてゐる人に出逢うと、立ち停つて、『我家の小姉さんが心中をした、』と云つた。聞かされた者は眼を瞠つて、『えゝ心中、』と云つて驚いた。この人の驚く容子を見ると、自分の言葉の中には、何かしら强い大きな力が籠つてゐるやうに思はれて來た私は、身體まで大きくなつたやうな氣になつて、昻然として步いた。で、若し驚かない人でもあると、言葉が分らないのであらうと思つて、二度も三度も繰り返して云つた。

仁井田から稲崎に行くには、殆んど一直線になつた村道があるので、それを西へ西へと行きさへすれば好い。虎次の奉公してゐる所は、その村道の行詰から左に少し行つた氏神の森陰にあつた。門口に一畝ばかり

の畑地があつて、桑の葉が茂つてゐた。虎次の日々仕事をしてゐる工場は、その門口を這入つて、見付にある母屋の玄關口を左にして、右に折れ曲つた所にあつた。

私と熊太郎とは、母屋に聲もかけずに、そのまゝ工場の入口に行つた。木炭の粉末で、天井も壁も土間も柱も、皆一様に眞黒になつた工場では、四五箇所に鞴(ふいご)を備へて、それ〲仕事をしてゐた。

虎次は入口から左の隅になつた所にゐた。顏を眞黒に汚して眼ばかり光らした小僧に、源翁のやうな大槌を持たして前打ちをやらし、自分は小槌を持つて、釘にするらしい赤く燒いた鐵片を金床(かなしき)の上に乘せて鍛へてゐた。

二人は虎次を見付けると、『小父さん、小父さん、小姉さんが心中した。』と聲を揃へて云つた。

『何……』と虎次は振上げた片手の槌を控へて、二人の方を見た。

『小姉さんが幾衞さんと心中した。』と私が又大聲に云つた。

『……よし、分つた。もう云ふなッ。』と叱り付けるやうに云つて、槌を投げるやうに置いて立つた。前打ちの小僧は、呆氣にとられてゐた。

虎次は草履を引かけて、二人の前に來て、『此方へ來い。』と手招ぎしながら、先に立つて工場を出て行つた。

二人は默つて隨いて行つた。工場の横手の澤山の木炭俵を積み重ねてある所に行くと、虎次は立ち停つて、小聲で容子を聞きはじめた。二人は情死したと云ふ以外に何も知らなかつた。

『昨夜はどうしてゐた。』と虎次が云つた。

『お菓子屋に衞生の話しがあつたから、聞きに行つた。』と私が返辭をした。

『お前も一所に行つたか。』

『あゝ。』

『歸りにも一所であつたのか。』

『歸りは眠つてゐたから、小姉さんが負つて來てくれた。』

「左様か、……ぢや、乃公は跡から直ぐ行くから、お前達は前へ歸れ。」と虎次が云つた。

二人はそのまゝ歸つて來た。

歸つてみると、虎次はもう熊太郎の家に來てゐた。私の父や母も我家をカラ空にして其所に來て、虎次と何か話してゐる所であつた。

繁野の死骸も取つて來てあつた。母屋と物置との間の軒下に、古い雨戸に載せて寢かしてあつた。それは變死者を家に入れると、その家から又變死者を出すと云ふ迷信の爲めであつた。胸の傷も見えてゐた。亂れた頭髮には、青い草の實がついてゐた。その物凄い容子を一眼見て、私は急に恐しくなつた。

丁度雲きれがして、二時頃の若い日の光りが見えた。繁野の妹の勝野が這入つて來た。勝野は淺間しい姉の死骸を見るより、地べたに膝を折つて、泣き出した。私は見てゐられないので、母屋の方に行つた。

母屋では、私の家の物置にあつた繁野の遺書を探して來て、それを開けやうする所であつた。

「何んと書いてあるね。」と虎次が云つた。遺書は、虎次の兄が見てゐた。

「……フン、これを見よ、こんな事を書いてある。」と兄は口にするのも穢はしいと云ふやうに、一尺ばかりの卷紙に、下手な平假名ばかりで書いてある物を差出した。

虎次は手に取つて、假名を拾つて讀んでゐたが、これも嘲けるやうな顏をして、默つて下に置いた。

「何んと書いてある。」と虎次の右にゐた私の父が聞いた。

「一所に埋めてくれと書いてあるよ。」と虎次の兄は忌忌しさうに云つた。

「へッ、一所どころか、別々に埋めるさへ穢はしい事だ。」と父は腹立しさうに云つた。

私は土間に立つてゐた。三人の話で、遺書には一所に並べて、棺と棺との間に管を通してくれと書いてあるだらうと思つた。そして切なる女の願ひを聞いてや

るらしい容子のない三人が恨めしかつた。私は土間をくるくる歩きながら、何うかして二人を一所に埋めてやりたいと思つた。

背の高い駐在巡査が這入つて來た。虎次の兄が出て行つた。

巡査は上框に腰をおろして、何か聞きはじめた。虎次の兄は、『はい、はい、』と云つて之に答へた。

やがて虎次の兄は、繁野の遺書を取つて來て巡査の手に渡した。遠くの方にゐた私も傍へ寄つて行つた。

巡査は遺書を讀み終つて、『遺書はあるし、現場には、二人の指環をくゝり合はした物があつたし、合意の上と云ふ事は間違ひないが、世間には、兩方を殺して置いて、心中のやうに見せかける惡漢があるから、警察では好く詮議する事になつてゐる。』と云つた。

私は子供心にも、なる程と思つて、警察の注意を感心した。

巡査が歸つて行つたので、私は勝手の方に行つた。其所には私の母をはじめ、隣から手傳に來た五六人の女が手を別つて、それぞれ油揚を拵へたり、蒟蒻を切つたり、高野豆腐に味をつけたりしてゐた。母は釜の下を焼いてゐた。

矢張り手傳に來てゐる者で、何か買物に行つたゐた小柄な女が、小さな紙袋をさげて歸つて來た。それが母の傍へ行つて、『嫁さん、今朝、幾衛さんのお母が、乃公の伜を殺した鬼ぢやと云つて、繁野さんの頭を蹴たと云ふよ、』と云つた。

『それは眞箇だらうか、』と母は振返つて聞いた。

『勇吾さんが見たと云ふよ、私は勇吾さんから聞いた。』

『左樣、それぢや私がこれから行つて掛け合つて來る。』と母は釜の下の火に薪を加へて置いて、そゝくさと帶の周圍を繕ひ、小さな圓髷に結つた癖のある髮を黄楊の櫛で掻きながら戸外に出た。

二人が約束して情死したものを繁野ばかり憐んで、

口の利けない者の頭を蹴るとは、物の道理の分らないにも程がある。それを母が掛け合ひに行くのは正當な事であると思つた。併し理屈に勝つても、女一人では、どんな目に逢はされるかも分らないので、私は母の加勢をする積りで、その後から隨いて行つた。そして歩いてゐる中に、素手で行つては、大人に逢つた時に叶はないと思つた。祖父の差料で、刄をひいて私の玩具になつてゐる脇差があつた。私はそれを思ひ出したので。默つて我家へ引返して、奧の机の下にあつたのを持つて、母を追かけて行つた。

母は人家の並んだ所を拔けて、早稻の黄いろく色づきかけた田圃の間にある土手を歩いてゐた。私はその中程で追付いたが、母は知らなかつた。

やがて路は、土手から右に岐れた狹い小路に這入つた。その路には竹藪があつたり、鼠色をした用水池があつたりした。一つの用水池では、二人の少年が釣を垂れて、水の上に浮いたウキの動くのを一心になつて見てゐた。ウキの傍には白い水草の花が咲いてゐた。

一町ばかりも行くと、小路は桑畑の角で二つに分れた。その桑畑は、幾衞の家を中に抱いた畑地の一部分であつた。鈍い夕日の光を浴びた藁屋根が桑の葉越しに見えた。二人はこの路を右に曲つて行つた。左に行くと幾衞と繁野の情死した方になり、右に行くと、其所の裏門口に行けるのであつた。二人は裏門の口まで行つて、其所から杉の生垣をした垣根に添うて本門の方に廻つて行つた。

門を這入る時に、母は初めて氣が付いたやうに、振返つて私の顏を見たが、何も云はなかつた。私も何も云はずに、その後から引添うて行つた。右側の垣根に寄つた方に、小さな花畑があつて、向日葵の花が二つ三つ咲いてゐた。鷄頭も見えた。

母は入口の緣側の前に立つて案內を請うた。障子を開け放した座敷には、三四人の頭が集つてゐたが、母の聲を聞くと、脊の高い小肥のした女が出て來た。それは銀造の女房で幾衞の嫂であつた。

「……平生は御無沙汰ばかりして居ります……」と母

は慇懃な挨拶をしながら、静に縁側に腰を下ろして、『‥‥今回は思ひも寄らぬ事が起りまして、お宅の方へもお氣の毒とも何とも申しやうも御座いませんが、承はりますれば、今朝、お宅のお母さんが、繁野の頭をお踏みになつたと云ふ事で御座いますが‥‥』と云つて開き直つた。

私は母の後に添うて立つてゐたが、今にも亂暴な奴が飛び出して來て、母を撲り倒しさうな氣がしたので、右の手を脇差の柄にかけて、眼を光らして注意してゐた。

『‥‥それは繁野は、幾衞さんから見ると、一つか二つの姉でありましたから、騙したと云へば、騙したとも云へましようが、一體幾衞さんが、私の家へお出でにならなければ、此方から追かけて行つて、あんな間違を仕出す事もなからうと思ひます。で、こんな事は、惡いと云へば、どつちも惡い事で繁野ばかり惡者にするは、チト可愛さうに思はれます。それも生きてゐる者なら兎も角、死んで口も利けない者の頭をお踏みになるとは、少し分りかねる所が御座いまして‥‥』と母の言葉は益々むづかしくなつた。

頭の綺麗に禿げた小さな老人が、チヨコ／＼と横合から出て來て、『ヤア、一寸お待ちを願ひます。』と母の言葉を押へるやうにして、嫂の前に坐り、『今、お話しなされて居る事で御座いますが、いや、はや、何とも申譯がありません。此所の母親が取り逆上せて、前後の考へもなくやりました事で、私の方でも、何とか一言御挨拶にあがらうと思つて居りますが、妙な具合になりましたから、いつそ葬式でも濟まして、お宅まででもと思うて居る所で御座います。』と穏な言葉で云つた。

さう云はれると、母も開き直つてゐる譯に行かなかつた。『さうお言葉が分りますれば、私の方には一言もありません。眞箇を云へば、あんな不心得な女子を嫁にしたばかりに、お宅の方へもお氣の毒をかけました。』と云つたが、その兩眼には涙があふれてゐた。

私は極りが惡くなつたので、急いで門の外に出て、母の出て來るのを待つてゐた。そして拔くともなし、

脇差を引抜いて、燒刃の所だけ白い刃で、眼の前の畑にあつた里芋の大きな葉に斬りつけた。

夕方から又大雨になつた。繁野の死骸を納めた松板の棺は、簑笠を著た四人の男の肩に擔がれて出て行つた。棺の後から、二三束の松明を抱えた父が跣足になつて尻を端折り、片手に番傘をさして隨いて行た。

私は母屋の軒下に立つて、雨に濡れて出て行く方を見送つてゐたが、思ひ出した事があるので、土間から這入つて行つた。虎次の兄と、虎次とが表座敷の方に坐つてゐた。「小父さん、幾衛さんの棺と並べるの、」と云つた。

二人は返辭をしなかつた。虎次は淋しさうに煙草を喫んでゐた。

男女が情死して原因は、私の母が二人の間を警戒しはじめたのもその一つであつたらうが、主なる原因は、幾衛が種崎の或る小料理屋へ養子に行く事になつたのにあるらしかつた。

繁野の墓は、種崎の海岸、今、千松公園となつてゐる松原の松の陰に立つてゐる。村の人はその當時、「繁野さんは、思ひ通りになつたから本望だらう、」と云つて、何人も繁野の死を氣の毒と云ふ者はなかつた。中には、「繁野さんの供養には、お經よりも何よりも、數へ歌が一番好いだらう、」と云ふ者もあつた。私もその當時、なるほど繁野の供養には、あの情死の數へ歌が好いだらうと考へた事があつた。

無代價で得らるゝヂヤスターゼ以上の消化劑

醫學博士　佐伯矩

食物を其成分から言ふと蛋白質、抱水炭素、脂肪、ヴイタミン、無機物其他のものから成つて居て、何れも身體榮養の上に必要缺くべからざるものであるが、就中其量的關係に於て最主位を占むるものは抱水炭素である。抱水炭素とは澱粉類、糖分等を總括した成分の名稱で、日本人の食物中米、麥、薯は勿論其他の野菜類中に主成分を成して居る處のものである。由來文明諸國に於て日本人のみが特に抱水炭素食を重用し、歐米人は之に反して肉類を主食とすると言ふが如き謬見が邦人間に行はれ、日本食を以て穀食或は植物性食を代表するもの、洋食を以て肉食或は動物性食を代表するものと考ふる者すら稀で無いやうだが、事實は決して然うで無い。例へば歐羅巴の中心である所の獨逸に於ては、一般人の食膳を飾るものは主として抱水炭素食である。又歐米諸國中最も多量に肉食を採ると稱せられる米國人の食物と雖も、抱水炭素が他の何物よりも大部分を占めて居るのである。

斯の如く食物中の抱水炭素と云ふものは、他の諸成分に比して最も大量從て甚だ重要なる地位を占めて居る。即はち抱水炭素の攝取は人體榮養上何物よりも大切なる事柄である。而して此抱水炭素が食物と共に攝取せられて身體の榮養分となり、身體の活力原として貢献する有らんとするには、必ず先づ消化管内に於て消化作用を受け、凡べて糖分と成つて、然る後に吸收され、其目的を遂ぐる事を得るのである。而して斯の抱水炭素を糖分に分解する作用を稱して吾人は之を糖化作用と言ふ。糖化作用を度外視して抱水炭素は決して身體の榮養の用に參與する事能はざるものである。

然らば抱水炭素食に對して必要缺く可からざる糖化作用は、身體消化管內の奈邊に如何にして營まるゝものなるかと云ふに、其關係たるや甚だ複雜であつて、暫く之を四つに分類することが出來る。卽ち此四つの者が順を追ふて働き、口腔に初まつて殆んど消化管の全長に亙るものである。以下順次に之を略說すれば、

第一には唾液の作用である。卽ち唾液中にプチアリンと稱する强烈なる糖化作用を有する酵素を含有し、各種の食物中に存する抱水炭素を消化して之を糖分と爲すものである。第二は膵液中の糖化作用である。膵液は膵臟から分泌せらるゝ所の重要なる消化液であつて、其中にはアミロプシンと稱せらるゝ糖化作用を有する酵素を含有して居る。第三は腸液の作用である。卽ち腸管粘膜より分泌せらるゝ消化液中に同じく糖化作用を有する酵素を有つて居る。第四は腸內に棲息する細菌であつて、此細菌の作用に依つて、一つには直接に糖化作用が營爲せられ、一つには他の消化液の糖化作用が助成せらるるのである。

以上揭げたる四つの者の働きに依つて食物中の抱水炭素は、それが飯であらうとも、パンであらうとも、又は薯であらうとも、或は其他の穀類野菜であらうとも、凡て消化せられて齊じく皆糖分となるのである。斯くの如くに食物中の一つの成分が、體內の一局部に於て簡單に其消化を營まるゝに非ずして、同一成分が消化管の殆んど全長に亙つて順次消化せらるゝと言ふ事は、非常に意味の有る事で、玆に天工の妙を思はしめる所以があるのである。論旨稍々複雜に亙るかも知れないが、興味を有てる人の爲めに今其一端を說明しやう。

前に述べた第一の食物の唾液の消化は、アルカリ性に於て行はれるものである。而し此のアルカリ性の唾液の作用に委せられて嚥下せられたる食物の、次ぎに到達すべき箇所は人も知る如く胃の腑である。胃の腑內には蛋白質を消化する消化液卽ち鹽酸ペプシンが分泌せらるゝによつて、軈て酸性の反應を呈するに至るのである。而して胃の腑內で酸性消化を了した食物は

更に進んで腸に移行し、茲に膵液や腸液の作用を受くるに及んでは更に再びアルカリ性に復する。此のアルカリ性と稱し、或は酸性と稱するは、液の化學上全く反對の性質を表現するものであつて、且つ互に相殺する事を得るものである。故に消化作用に於ても、例へばアルカリ性に於て作用を營む唾液の如きは、アルカリ性に於てのみ其作用を行ひ、酸性に於ては何等の作用を呈せぬのである。又酸性に於てのみ作用を營む胃液の如きは、酸性に於てのみ其能力を發揮し、之と反對なるアルカリ性に於ては何の作用をも呈せざるものである。されば上述の如く、食物が先づ唾液に於てアルカリ性の消化作用を受け、次ぎに胃液に於て酸性の消化作用を受け、更に腸内に於てアルカリ性の消化作用を受くるといふ現象は、食物中に含まるゝ所要の成分を食物分子の各部分に亙りて縦横に消化せしめ、以て其消化作用の運營を容易ならしめ、徹底せしめ、斯くて消化作用の成績をして遺憾無からしむる爲めに起つたものである。

第二には斷えず胃内に送り込まれる唾液其物が、胃内に於ける胃液の消化作用と如何なる關係が有るかと言ふ事に就ては、學者の研究も今日まで尚未だ積極的の事實を證明し得るに至つて居ないが、之に反して胃の分泌液と膵液の分泌との關係に就ては、學者既に兩者の間に密接なる關係の有る事を闡明し得たのである。即ち胃液中の鹽酸が腸に入り、腸壁を通過して血液中に移行する際、一種の膵液分泌作用を促進する成分を腸管粘膜から拉し來つて之を膵臓へ送り附けるのである。即ち今胃液の分泌がその宜しきを得、胃の腑内に於て消化せられたる食物が、漸次腸に移行するに及んでは、其包含する胃液の作用によつて、忽ち膵臓を鼓舞し、膵液の分泌を促し、以て食物を更めて次ぎの膵液消化に移らしむるに支障無きを得せしむるのである。又腸内に棲息する細菌に就ても、或種の抱水炭素は消化管内に分泌する消化液のみにては糖化作用を遂ぐる事能はざるにも拘はらず、其一度び細菌の作用を受け然る後に消化液の作用に委せらるゝ時には、極め

て容易く糖化作用を完うする事を得る例があるのである。斯くの如く消化管内各部の消化液は、各自に其消化作用を營爲する外、又互に相提携聯絡して以て其作用に遺漏無からしめんことを期して居るのである。

第三には凡べて消化作用を營む所の酵素なるものは、其作用始めは强烈なれども終りに近づくに從て緩徐となる。即ち消化産物の蓄積すると共に、消化作用其物は甚しく鈍麻するを常とする。食物中の一つの成分が一箇所に於て且つ一消化液に依りて其全部を消化せらるゝよりは、之を各所に分ちて別々の新たなる消化力に接觸せしめ、斯くて其時期を異にしつゝ新たなる消化作用に委せしめらるゝ事の、有効にして便宜なるは言を俟たざる所である。

上述の如く食物中の最も重要なる成分抱水炭素を消化して、其糖化作用を完うせしめるが爲めには、第一唾液・第二膵液・第三腸液・第四腸内の細菌と云ふものの力を俟たなければならぬ。而して是等四つのものゝ糖化作用が不完全であつた時には、抱水炭素の消化が即ち不完全となる。かゝるが故に是等消化管内に於ける糖化作用を補足せんが爲めに、別に身體外より糖化作用を有する諸種の物質を與へて、以て消化管内自然の糖化作用に代はらしめんとする企が生ずる。現今工業用又は醫藥用として用ひらるゝ所の、所謂澱粉消化劑として世に知らるゝヂヤスターゼ即ち糖化素之れである。されば人のヂアスターゼを服用することは皆體外より糖化作用を有する特種製品を拉し來つて、以て消化管内の糖化作用を代償せしめんとする目的に外ならぬのである。斯くの如きヂアスターゼ劑には、植物性のヂアスターゼと動物性のヂヤアスターゼとの二種類がある。

第一の植物性ヂアスターゼとは、植物界より分離製出したる糖化素である。其中(イ)麥芽ヂアスターゼは麥芽中に含まるゝ所のヂアスターゼで、其糖化作用を利用して飴を製造するに供したるは、古來周知の事實である。(ロ)タカヂアスターゼは麴中に含有せらるゝ糖化素で、之を用ひて米麴、甘酒等の製造に供す。高

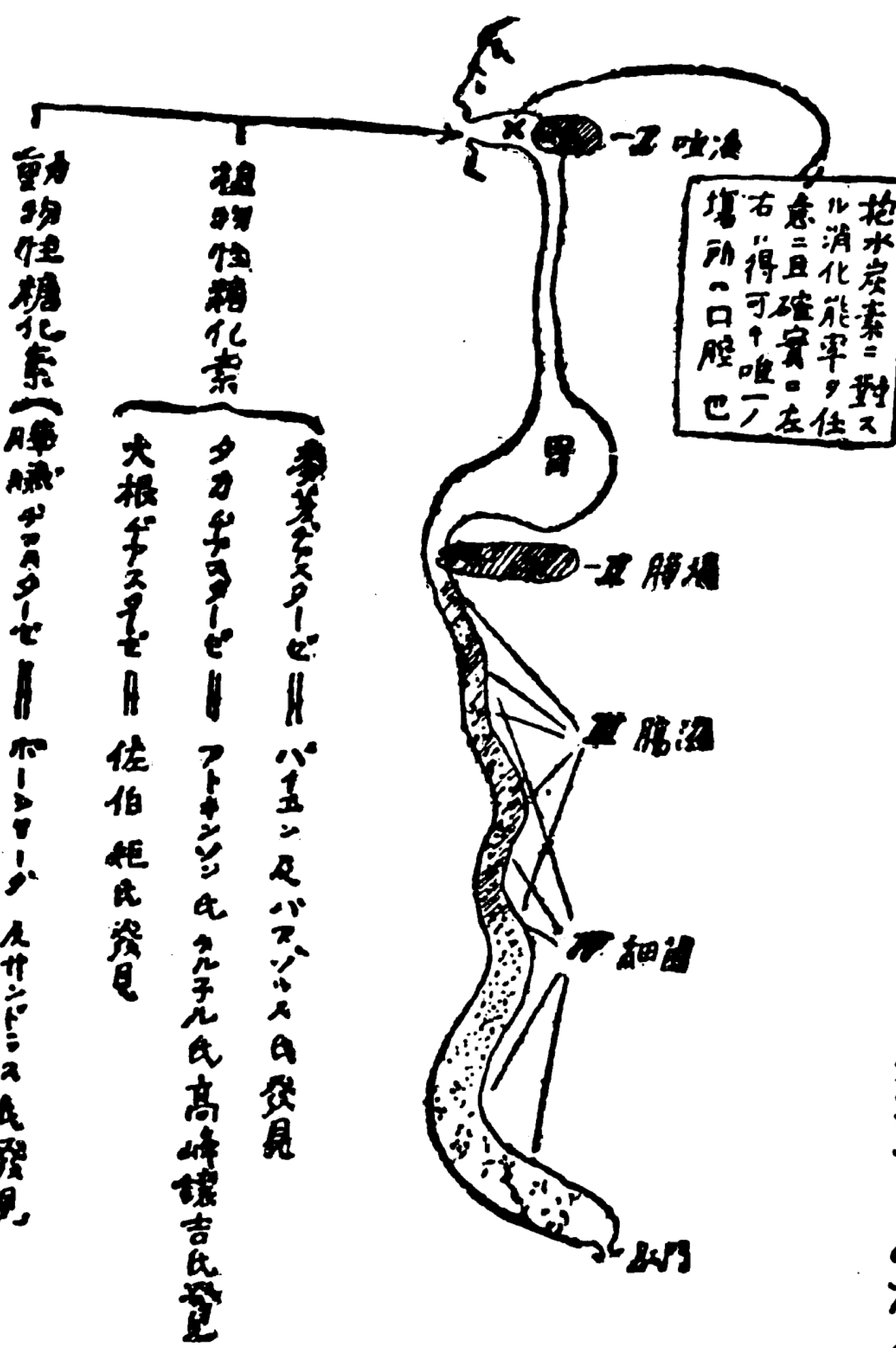
峰博士が此糖化素を用ひて消化劑タカヂヤスターゼを造つたのは有名である。此麹から作つたヂヤスターゼの製劑は、現今日本に於て夥しき多數に上つて居る。而して其製造者や製造所の異なるに從ひ種々の名稱が與へられて居る。(ハ)大根ヂヤスターゼは大根中に含有せられる糖化素である。植物性食物中には糖化素を含み、殊に大根中には强力なるヂヤスターゼの含存せられる事は、余の夙く發見唱導したる所である。此發見に由つて余は、古來我國に於て澱粉食の際、大根おろしを用ひて消化作用を助くる事の理由無きに非ざるを知るに至つたのである。第二の動物性ヂヤスターゼは動物の膵臟内の糖化素を以て製出する。

以上論述したる所に據つて、人若し食物中の抱水炭素の消化を完全ならしめんとするに方つて、之を如何に處理すべきやは、次の如く約言することが出來る。即ち第一體内の糖化作用を鼓舞するか、第二體外よりヂヤスターゼ劑を服用すべきかに歸すべきである。今第一の、而して最も根本的なる方法、即ち體内に於ける糖化作用を鼓舞するの途に就て考ふる時は、之を唾液に於てすべきや、膵液に於てすべきや、腸液に於てすべきや、將た又腸内の細菌に於てすべきやが、次に來る重要なる問題でなければならぬ。而して之を膵液に於てする事は事態容易なるものに非ず。腸液に於てする事も、腸内の細菌に於てする事も亦意の如くなるを得べきで無い。獨り人の自由に斟酌し左右し得るものは唾液である。唾液は消化管の劈頭第一に位する處のもので、且各人の意思が最も自由に之を支配する事を得るものである。體外より服用輸入せんとする各種ヂヤスターゼ劑の如きは、後段に詳述する如く、之を唾液に比して到底比較だも値へせざる滑稽事にして、結局抱水炭素消化の上には唾液の巧妙なる運用を以て、無害にして且つ最も有力なる唯一の方法とせざるを得ない。尙理解に便ならしめむが爲に添へられたる別圖解を參照するが良い。

唾液は耳下腺、顎下腺、舌下腺と稱する三對の唾液腺より分泌せらるゝもので、之が分泌は主として刺戟

に由つて促進せらるゝものである。乾燥したる物、又は固形物を食物として攝取したる時には其分泌量を增し、之に反して水分を多量に含むものを攝取したる時には分泌量が少い。

學者の研究に據れば、酸味あるものを目睹し又は之を食する時、或は肉片を咀嚼する時、美味を目撃したる時には、顎下腺よりする唾液の分泌を高め、乾燥したる肉片穀粉を攝取する時は、耳下腺よりする唾液の分泌を高める。斯くの如く各種の刺戟に由つて各樣の唾液腺が興奮せられ、其分泌作用に影響を與ふるものであるが、分泌されたる唾液について之を言ふ時は、其刺戟の性質に重きを置くよりも、其分泌されたる分量に重きを置くのが正當である。即ち今少量の醋酸を以て刺戟し分泌せしめたる唾液と、パヲフィンを咀嚼して分泌せしめたる唾液について、其糖化作用を比較するに、兩者の間に優劣を認める事が出來ないのである。



であるから醋酸を主成分とする酢であるとか、拘櫞酸(くゑんさん)を主成分とする梅干によつて多量に分泌する唾液は、食物の咀嚼によつて分泌される唾液と同等の糖化作用を營むべきの理である。而して斯くの如き唾液が、人に於て毎日分泌せらるゝ總量は驚くべき大量であつて、或る學者は一日千四百乃至千五百瓦(グラム)であると云ふ。即ち其量に於て尿に匹敵する所の大量である。又或る學者は一時間の

食物咀嚼中唾液腺一瓦に就て十三瓦の唾液を分泌する割合であると云ふが、人の唾液腺は歐人に就て總量少きも六十瓦、稍多きは八十瓦、大なるは百瓦にも達するが故に、其一瓦に對し十三瓦の唾液を分泌するの比例を以て之を推す時は、總分泌量は或は八百瓦千瓦にも達するの理である。千瓦は約我五合に相當する譯であるから、毎日分泌する唾液の分量の大なるは、人の聞いて或は意外とする所であるであらう。

翻つて坊間販賣する所のヂヤスターゼ劑は、其有力なりと稱せらるるものに於て、醫師は普通〇・一瓦乃至〇・三瓦を一回量として處方するのを常とする。而して是等のヂヤスターゼ劑の糖化力は、同量唾液の三十乃至四十倍なるが故に、醫師がヂヤスターゼ劑〇・一瓦を處方したる場合には、其消化力の全量は人の唾液三瓦乃至四瓦の有する消化力に匹敵する譯である。然るに人がパンを食する時、之を小口にすれば一回が五瓦、大口にすれば一回が十瓦を用ゆるを普通として居る。此の十瓦のパンを口中で咀嚼し、嚥下するに適當なる形態とするに至るには、二乃至三瓦の唾液を吸收するを普通とする。故に醫師が處方する〇・一瓦のヂヤスターゼ劑の効力は、一口十瓦のパンを攝取する事を二回反復して得る所の唾液の消化作用よりも劣等なものである。卽ち一口十瓦のパンを二回食用する事は、有力なるヂヤスターゼ劑一回分を服用するに優る糖化作用を得る譯である。況んや唾液の分泌總量は前に述べたる如く、甚だしく大量であるから、固より比較すべからざるものである。かゝるが故に凡そヂヤスターゼ劑の治療的應用は、之を熱があつて口中乾き唾の分泌不可能なる時、又は疼痛其他の原因によつて口中に於て十分咀嚼作用を營む事不可能なる場合にのみ制限される可きものである。少くともヂヤスターゼ劑を用ひて糖化作用を補足せんとするが如き場合に於ては、同時に食物の咀嚼を十分にして唾液の分泌を饒多ならしめる事を忘れてはならない。

之を要するに抱水炭素食の消化に共力を加へんと欲する場合には、之を膵液に於てせず、腸液に於てせ

ず、其他意思の支配の直接に到達し難き消化管の部位に於てせず、而も又之を體外に於ける消化の製劑に於てせず、之を唾液に於てすべきである。即ち食物の咀嚼に十分の時間を與へ、唾液をして遺憾無く食物に接觸するを得せしむるが最良であるけれども、尙食後に消化劑としてヂヤスターゼを用ひんとするが如き場合には、寧ろ次の如き法を以て之に代ゆるが賢明である。即ちパラフィン或は護謨を咀嚼する事其一である。米國人が頻りに用ゆる處のチユーイング・ガムの如きは、其用法宜しきを得ば此目的に叶ふものである。唯チユーイング・ガムを用ひて食物や食事に關係の無い場合、無聊を慰むる爲めに濫りに口を動かすのは誠に下品である。殊に米國の婦人の如く、數日前に吐き出して机の下や鏡の脇に貼附けてゐたのを再び口にするが如きは、不潔極まる不快千萬な唾棄すべき事である。日本に於ける酸漿の如きも亦唾液の分泌に善用する事が出來る。然し最も簡單なるは、非常に堅き肉片或は纖維の多い京菜の莖を頰張つて、それを嚥下する事なく約五分間も口中に於て轉々咀嚼するのである。これは極めて有効である。食後煙を喫ふ時間を此咀嚼運動に利用して、唾液の分泌を促し之を嚥下する事を得れば、以て高價なる大量のヂヤスターゼ劑を服用したると同等以上の効果を收め、抱水炭素の消化を完全にし、胃の負擔を輕減して榮養上に甚大の貢獻をする事が出來る。

以上は食物の諸成分中最位を占むる抱水炭素に關し、之が最上の消化能率を發揮せしむるの法を論じ、併せて最自然なる且つ有力なる無代價の消化劑を說きたるものである。

支那大陸より

小山田劍南

僕、支那より還つて、日本に蹈跡すること、一年有半矣。天空海濶、鳥翔魚躍の快に背くの久しき、氣欝し、心倦み、轉た髀肉の歎に耐えず。乃ち又た支那大陸の征途に上り、朝鮮より陸路、安東、奉天、北京、天津、濟南、徐洲等の地方を歴過して上海に出で、更らに大江を溯つて武漢に淹留し、今や返つて上海に向ふの途中、滯つて南京に在り。これより更らに楊州、蘇州の風光に親み、而して後に船を税して東歸を賦せんとす。此行、日を費すこと六十日、道程三千里、天下の勝景を探り、天下の駿髦と晤り、天下の實勢を視る。亦た以て男兒快心の事ならずとせず。こゝに見聞の主要なる者を錄出して、大方同調の玩看に供すと云ふ。

馬賊の天下

■一時、奉天將軍張作霖が、菊地軍事顧問の勸說に聽き、日本行きを企て、其旨黎總統に願出づること兩回に及んで、遂に其允許を得たりと傳へられ、世間或は彼れの本心より日本に遊ばんことを希望しゐたるやに揣摩する者少からずと雖も、其實決して然らず。

■奉天の形勢は一日も彼れの奉天を離るゝを許さず、離るれば即ち奉天は遂に彼れの奉天に非ず、直ちに取つて代る者あり、馮麟閣是れなり。

■馮、張の確執は今や其絕頂に達し、動もすれば干戈を以て雌雄の決を取らんとす。而して張の勢近ごろ俄かに振はず、奉天二個師團の軍隊を擧げて、望を馮に屬せるを以て、馮は隙もあらば、輙ち起つて張の權勢を擊滅せんとして、其計圖に餘念なし。張は一刻と雖も油斷は出來ず、その日本に閑游するといふが如きは、固より不可能の事に屬す。コレ唯だ日本の歡心を

博せんが爲めに演じたる一場の芝居のみ。決して其本心には非らざるなり。

■馮、張の確執は、私闘にして公爭にあらず、權勢の爭奪に出づる者にして、主義政見の主張に因るにあらず。其心事の陋劣なる、固より士大夫の唾棄に値すと雖も、支那現下の政界に於ける人物を歴觀するに、誰れか此二人者と其心事を同くせざる者有らんや。一人として全く權勢の念を離れて、眞個に天下國家を憂ふる者有る乎。會ま之れ有りとするも、復た人心の衰毛と社會の頽廢を奈何ともする能はず、滔々たる大勢は遂に此種の人士をして驥足を展ぶるに術なからしむ。故に今日支那に於て多少權勢の地に居る者は一として馮、張の類にあらざるなし。

■實に現下支那の大勢は野心家の政權壟斷に任かせて復た國士の出頭を許さゞるなり。看よ、今日支那に於て多大の權勢を掌握する者にして、一人の野心家ならざる者有る乎。段祺瑞にして野心家ならずんば、袁の帝位を狙ひたるときに於て、早く一決戰したる筈なり。張勳にして節義の士ならば、滿朝忠臣升允が宣統復辟の使命に奔走して、頃者上海に來り、張勳に勸說する所あらんとして會見を申込みたるとき、時機尚ほ早しとの口實の下にスゲなく擊退するの理由なし。馮國璋にして主義の人ならば、奚ぞ復た當年帝制派の深讎たりし民黨の人士に對して傲然たる態度を取らざるや。覆雨飜雨、只管自己の權勢增殖この見地より打算して、其去就を決する者比々皆然り。

■徐州會議は段祺瑞の武器にして、其勢力は直ちに段の勢力のバロメートルと言ふも決して失當にあらず。而して此勢力は、外國の武力干渉なき限り、將來支那の天下を支配すべき運命を有すること疑を容れざる所なるが、此勢力は畢竟幾多の野心の妥協的結合に外ならずして、其妥協の破綻せざる間は、何時までも繼續すべきものたること復た言ふを俟たず。

■支那の政治家は常に自己の權勢を增殖するに、個人的緣故を利用す。張作霖は張勳が以前奉天にて統領たりしとき、其部下に在つて營官たりしことあり。此等

の縁故は適ま以て兩者が互に相援引句結して各其權勢を増殖するに利便多からしむ。奉天と徐州と常に一道の氣脈相通じて斷たざるもの、亦た怪むに足らざるなり。

■張作霖は馮麟閣と同じく馬賊出身なり。而して其部下も皆馬賊出身なり。虎は哺乳時より人の家に飼育せらるゝも、終に野性を失ふ能はず。長ずるに及んで、動もすれば氣亂れて人を害す。馬賊の王者の治下に歸順したる者も、亦た終に馬賊の本性を能ふ失はず、久しきに及んで、動もすれば氣亂れて人を害す。

■今や、彼等の横暴、肆逞言語に絕し、遺憾なく其本性を發揮し、禮節を問はず、規律を辨ぜず、秩序を知らず、軍權の亂用せらるの甚しき、唯だ放縱有り、殺伐あり、掠奪、賭博、飲酒、漁色の外、復た他の課業なし。馬に上れば强盜たり、馬を下れば惰民たり。人の其勢に抗拒する者有れば、直ちに起つて之を殲滅せずんば止まず、頃者警務長王永江の驅逐されたる亦た其例なり。實に東三省は全く馬賊の天下なり。

■嗚呼、無辜の良民を擧げて馬賊の殘虐に苦ましむ。其責を負ふべき者、果して誰ぞや。段祺瑞以下幾多の野心家は卽ち其人なり。然れども此等の野心家をして志を得て勢を成さしむるは、支那現下の大勢なり。能く此大勢を打破して、拯救の實を擧ぐる者、我が日本を措いて、復た誰ぞや。若し夫れ張作霖を引張出して日本に游ばしむるなどは、末節のみ、枝葉のみ、深く意を煩はすを須ゐず。

支那大陸の春色

■青海雪消えて春水來るとき、長江一萬里、沿岸の風光頓みに發し、支那大陸の山河、到る處として駘蕩たる陽和の氣に包まれざるはなく、水村山郭、煙雨楊柳の朝、風月桃李の夕、春色の稱すべき者、古より其地に乏しからず。然れども其、最も秀逸なる者、僕唯だ梅の鄧尉と桃の桃花源とを推す。

■上海龍華寺の桃や、青島の櫻のトンネルを語るは、俗中の俗のみ。霸橋の柳、孤山の梅、亦た好からざるに非らず。然れども看て鄧尉と桃花源に到らずんば、

未だ共に支那大陸の春色を論ずるに足らざるなり。

■鄧尉は日本の月が瀬なり。江蘇省蘇州なる太湖々畔の山間に在り。十里の溪流、峭崖危岩の際を曲折して走る處、滿目皆奇崛蒼古の龍幹ならざるなし。花の結期は二月下旬と推す。月に宜しく雨に宜しく、風も亦た可なり。景に對して酒を把り、詩を賦するは、眞に天下の至快なり。

■桃花源は陶靖節先生の文章と共に、其名天下に著るし。四月中旬を以て花の盛時とす。湖南省常德府管下なる桃源縣より舟を賃して、沅江の水に掉し、風光明媚の間を行くこと半日ならずして、桃花の崖下に至るべし。舟を棄てゝ坡に上り、徑に由つて行くに隨ひ、人は歩むごとに清高の感に打たれ、壺中の天地、自ら人間に非ざること覺ゆ。滿山の竹樹、老蒼古翠の間、點綴するに桃花の紅雪を以てす。景致佝くまで幽邃にして其氣秋に似たり。古廟あり、僧老いて人事を知らず。人家あり、三五戶、漁樵を以て生を營む。

雲龍山下の豪傑

■支那の革命は常に不徹底に終れり。民主政治の大敵が袁の歿落に因て全く終焉を告げたりと思惟するは早計の甚しきものなり。看よ、幾多の小袁世凱は今猶ほ四百餘州の各地に割據して覇を稱し、國會政治を目して孺子の頑戲のみと嘲笑しつゝあるに非ずや。而して此等諸豪傑の中に就いて、徐州の大帥張勳の如きは、殊に卓異の光彩を放てるに非らざる乎。

■人若し北京より天津に到つて津浦鐵道に移乘し、南下すること一晝夜にして江蘇の徐州に到れば、爽氣氤氳たる雲龍山下、萬戶の雄城に虎踞したる好個の一豪傑漢有るを見るべし。辨髮將軍老張勳即ち其人なり。

■將軍、手に雲の如き貔貅を提げ、坐に山の如き黃金を積み、多く花の如き美姿を畜へ、超瘦鄉肥、祭として媚を競ふ。幕中の消遣、或は賭を佐くるに酒を以てし、興來れば夜の更くることを知らず。而かも一たび手に唾して風雲を叱咤し、起つて馬上の人となれば、猛氣三軍を壓し、群雄を麾いて乾坤一擲の活劇を演ずるに難からず。眼中曾て政府なく、其言は則ち法律た

り。天下復た怖るべき者有るを知らず。男兒生れて斯壯此の如くなるを得ば、假令(たとへ)敗亡の餘道途に困死すと雖も猶ほ冥すべからずや。

■張勳は江西奉新の人、年齒六十三、著しく阿片を愛用すれども、仍ほ甚しく健康を害するに至らず。體軀堅く肥えて風貌雄偉、人をして一見其襟度の闊大にして、末節に拘泥せず、纎巧細智に競々焉たらず、剛毅にして温情に富みたる將師の適材なるを首肯せしめずんばあらず。其の人に應接するや、悠揚迫らず、多く言笑せざるも、問へば卽ち之に答えて慇懃なるを惜まず。客をして腦底一種の好印象を留めて去り歸らしむ。亦た以て彼れの薄德の人にあらざるを見るに足るべき歟。

■徐州の土地たる、其開明の度に於て、之を上海漢口等の地方に比して、實に數世紀を落後したり。電燈電話の便なきは言はずもがな。乘物といへば、人力車さへ無く、唯だ驢馬と轎子の便あるのみ。其他は推して知るべきのみ。張勳が西來の文明と相隔りたるは、徐州の土地が西來の文明と相隔りたるに比擬せり。試みに唐紹儀、孫文の徒を以て新派劇中の人に比すべくんば、張勳は以て舊劇中の人に比すべけん。實に張勳と語るは水滸傳中の豪傑と語るの感なくんばあらず。要するに張勳は新らしき男に非ず。

■彼れは今猶辮髮を留めて滿朝時代の服裝を改めず。其麾下の人々をして亦た己れの爲す所に倣はしむ。之に就いては世間種々に說を爲す者あれども、僕を以て彼れの心事を度るに、清朝の回復は天下の大勢に照らして、必ずしも其計圖に加擔し難きも、大丈夫一たび人臣として其祿を食みたるからには、一旦にして其恩義を忘るべからずとの微衷に出づるのみ。一片高風の欽ずべきものなきにあらず。

■張勳麾下の辮髮軍は概ね皆山東河南の土民より募集したる兵卒を以て成り、其數三萬と稱せらる。訓練不十分にして規律なく、亂雜甚しと雖も、方今支那各地の新式軍隊なる者を見るに、其外形は暫く措いて問はず、其實質に至つては、則ち張勳の軍隊と比較して何

れも皆五十步百步のみ。況んや、山東河南の兵は古より天下の至强と稱せられ、氣性粗豪にして體軀頑健なるを以て、其の實戰に臨んで强勇なるは、南方兵の遠く及ばざる所なりとす。

■水滸傳の梁山泊は山東の曹州なり。旅人に對する强盜保險の業を營むものは曹州一帶の地方に多し。亦た以て此地方の民風の强悍なるを見るべきにあらずや。

■張勳が中央政府の命に背いて、飽くまで徐州を棄つるを肯んぜざるは、徐州の地勢が、坐がらにして南北支那の大局を控掣するに利便なるが爲めにも因るべしと雖も、抑も亦た山東河南の强勇を操縱するの利便を掌握せんが爲めならずんばあらず。兎に角張勳の徐州を保てるは、虎の翼を得たるに異ならず。敵人の心肝を寒からしむる所以なり。

■之を支那現下の形勢に照らして、最も注意すべき人物を見るに、徐州の張勳の外、尙ほ三人者を數ふべし。曰く河南の袁克定なり。曰く、奉天の張作霖なり。曰く、瓊州島の龍濟光なり。此等の人士は各一方の雄强を提げて、天下を睥睨し、其勢誠に侮るべからざる者有り。而して袁克定は睡れる虎の如く、張作霖は病める虎の如く、龍濟光は負嵎の虎の如く、張勳に至つては則ち野に放たれたる猛虎の如く、直ちに起つて千里橫行の快を取らんと欲せば、固より其意に任かせざるなし。然れども此等の人士が、能く此勢を成し得る所以のものは、究竟別に一大野心家の存するあるに因らずんばあらず、國務總理段祺瑞は實に其人なり。

■段にして若し此等の人士を權勢の地位より蹴落さんと欲せば、之を彼れが現に掌握する所の實力に看て、決して至難の業なりと言ふべからず。而かも彼れが飽くまで民黨の意に反して、或は彼等に對する迫害を防衞し、或は彼等の橫暴を寬假する等、彼れが眞意の存する所、歷然として讀むべきにあらずや。知らず、此等の諸豪たるもの、果して能く段の藥籠中の物たるべき乎。

■彼等の行動は支那今後の事局に影響すること極めて重且大なる者有るを以て、頗る吾人對支外交に懸念す

る者の刮目に價せずんばあらず。而して段祺瑞と張勳との關係を計量するは、此間の消息を窺ふに於て、殊に利便多きを見る。

■北京政府は張勳に對して全く控御の力を有せず。其傍若無人の行動を奈何ともする能はずして、徐州は宛然たる一獨立王國たるの觀あり。徐州會議の決議は、動もすれば民國議會の決議を蹂躪せんとす。吾人是に於てか益々段の心事を疑はざるを得ず。

■張勳は果して如何なる程度まで段と結托し居るか、これ俄かに判知し易からざるの事に屬すと雖も、武力を以て民黨の勢力を撲滅し、以て元首萬能政治（必ずしも帝王政治とは言はず）を樹立するの意志堅固なるに至つては、段と其軌を同うするを見る。

■僕、徐州を訪うて張勳と會晤す。談じて支那の政局に及ぶや、彼れは、國會は無用の長物なり、議員は口舌の徒のみ。書生唯だ議論するを知る、事を行ふを知らず、と痛罵し、評して黎元洪の人物に到れば、黎君は誠に結構なる人物なりと揶揄し去り、心窃に孺子何事をか成さんやと笑殺するもの丶如し。[illegible]れは以來我國の少壯政治家が、屢に支那の少壯者と結托して支那の國情に不適當なる企圖を遂行せんとしたるは甚だ遺憾なりと慨語し、今後は成るべく兩國の老實なる分子が互に相提携して事を共にせんことを希望し居たり。

■張勳の所謂老實なる分子とは果して如何なる分子を云ふにや。コハ支那には果して如何なる政體が適當せるかといふ問題に關する彼れの主張を知るを得ば自ら分曉するに難からず。彼れは飽くまで民主政治を斥けて武斷政治を欲する者なり。議院の掣肘を受けざる元首の專制政治を欲する者なり。其名目の如きは固より問ふ所に非ず。之を大統領と曰ふも可なり、帝王と云ふも亦た可なり、唯だ貴ぶ所は其實權の強大なるに在るのみ。然らば則ち彼れの所謂老實分子なる者は、明かに民主政治を主張せざる分子を意味するや必せり。

■支那の人民は張勳の所謂老實分子の手に出るに非ずんば、終に之が統治の實効を期する能はざるべき乎。

此問題に關しては、論者の間頗る見解を同うせず。吾人亦た確乎たる主張なきに非らざるも、今こゝに論議するの要を見ず。但だ此の老實分子なる者の勢力如何を研究するは、苟くも對支外交に從事する者の一日も忽略に附するを許さゞる至重至要の吃緊事たらずんばあらず。而して人一たび徐州に游んで、親しく張勳の盛威を目撃し、更らに蚌埠の倪嗣仲、江西の李準、江南の馮國璋、武昌の王占元等、張勳の亞流たるもの實に其人に乏しからざるに看到せば、支那に於ける老實分子の勢力が如何に强大にして、民黨の前途が如何に心細きかを推見するに難からざるべし。

■徐州は目下軍隊の天下にして、城内城外到る所として、三三五五、兵卒の横行濶歩するに逢はざるなく、宛照戒嚴地帶を行くの感なき能はず。而して此等の兵卒は皆張勳の頤使に任ずる忠僕なるを知らば、亦た以て老實分子の勢力の如何に强大なるかを見るべきに非ずや。

■僕が張勳の人物を叩くべく、北京より徐州に赴きたる際、津浦鐵道の列車内にて端なく一奇事を發見したり。亦た以て張勳が如何に北京政府を無視せるかを見るべきなり。

■僕は僕と同乘の支那人の所持せる乘車劵が、殆んど皆白色にして、僕の乘車劵の靑色なると異なれるを怪み、乃ち鄰席の客の天津より浦口に赴くと云ふ者に就き、請うて其乘車劵を手にすること得て親く之を看るに、コレゾ張勳が發行せる無賃乘車劵にして、劵面に次の如き文言を認めたり。

軍用乘車劵執照

勳一位、定武上將軍、定武軍統、長江巡閲使、安徽督軍張、爲發給執照事、茲有沈綸煦、由津浦鐵路天津總站、前往浦口站、公幹需用貳等車位一座、爲此發給執照、所有經過沿途各站、卽希査照放行、須至執照者。

中華民國六年三月

勳一位定武上將軍定武軍統長江巡閲使安徽督軍張乘車許可票を下附す、茲に沈綸煦なる者有り、公用の

爲め、津浦鐵道天津總驛より浦口驛に赴くに因り、貳等車に便乘せんことを請む。因て本票を下附す。沿途各驛須く滯りなく通過せしむべし、云云。

■然るに此支那人は僕と談笑の際、彼れが六元にて此乘車券を他人より購入せる旨を語れり。然らば則ち此支那人は券面に記名せられたる沈綸煦其人に非らざるべき筈なるを以て、試みに彼れに向つて、其姓如何と問へば、果して孟といふ者なりと云へり。

■案ずるに天津より浦口までの二等客車の規定乘車賃約二十四元に對する六元は、僅かに其四分の一に當るに過ぎずして、格外の減價なれば、其恩典に浴したる乘客は誠に結構なりと雖も、本來無賃の乘車券に對して若干の賃金の支拂はれざるべからざるは抑も何の故ぞや。

■實に張勳は津浦鐵道局の收入の一部を割いて徐州王國の收入と爲さんが爲めに、自分勝手に無制限に無賃乘車券を發行しつゝ有るなり。卽ち其所謂無賃なる者は、唯だ津浦鐵道局に對して無賃なりと云ふの意義たるに過ずして、此乘車券は決して無償的にて下附せらるゝに非ず。規定の賃金以下の任意の價格にて買はさるゝものなり。而して券面に記名されたる者と所持者と其人を異にすることあるは、蓋し一度使用濟みとなりたる乘車券が、鐵道從業員の手に由りて、更らに他に轉賣せらるゝに因るのみ。券面に日附無きなども、惟ふに發行者が豫め此等の便宜を計らんが爲めに、特に意を用ゐたるものに相違なし。かくて同一乘車券は轉々として幾度となく流通せらる。

■中央政府は張勳の此の如き我儘なる行爲を知らざるに非らざるも、唯だ彼れの威を憚りて敢て手を下さざるのみ。政府既に此の如くなるを以て鐵道當局者が此等の弊事に對して、何等干渉するを得ざるは固より言を俟たず。況んや彼等は互に相結托して、巧みに此間に處して私服を肥やすに汲々たるに於てをや。

■尙ほ張勳は部下の吏僚將卒に對しては任意乘車の特權を附與し有りて、兵卒ですら二等車に坐乘し、勝手氣儘に振舞ひ、爲めに賃金を支拂へる乘客は却て隅の

方に小さくなりて畏縮し居るの奇觀を呈しつゝ有り。されば左なきだに支那の汽車は不取締に失し勝ちなるに加へて、津浦鐵道の車內とイッパ、亂雜にして不愉快なること殆んど言語に絕したり。

■外人にして徐州に下車する者有れば、無數の巡警其身邊に集來して、一々其携帶品を檢閱し、護照の有無を問ふて、若し之を所持せざれば、一刻も足を留むるを許さゞるなど、亂暴狼籍至らざるなし。徐州國王の武威も亦た盛んなりと謂つべし。知らず支那の大勢は民主政治の主張者をして、能く此等武斷派の勢力を打破せしむること許さゞる乎。

■聞說く、徐州には四人の張勳ありて、從來面識なき者は、容易に眞の張勳と會見するを得ず。民黨刺客の暗殺に備ふるなりと。およそ事を決するに、暗殺の手段に訴へさるを得ざるは、適ま以て、彼此の勢力の匹儔せざること甚だしきを示すに足る。知らず、支那の大勢は、終に民黨をして雲龍山下の豪傑と堂々たる旗鼓の間に相見え、實力を以て雌雄を決せしむるを許さざる乎。論者或は曰く、支那大陸四億の蒼生が、能く完全なる民主政治を行ふの時期に到達するは、前途猶ほ遼遠なりと。而して僕竊かに惟ふに支那は未だ此時期に到達せざるに、先づ國勢の決裂を來たすことなきを得る乎。僕、之を東亞百年の大計に顧みて、支那現下の形勢を憂ふるや洵に切なり。借問す、天下復た僕と同憂の人有りや否や。

端午の節句

臨風生

俳人盧元吟じて曰く、幟見や西は千本通までと。青嵐にさつと吹き流れた鯉や幟やは、矢車の音とゝもにまことに勇ましく、男らしく、見るからに快い。英一蝶に五月幟りの圖があつて、例の洒脱な輕快な奇拔な筆致を以つて、端午の氣分を現してゐるが、如何にもこれは一蝶の畠である。快濶で、賑やかで市井の氣分があらねばならぬ。三月の節句に歌の味がありとすれば、端午は俳句の領分だ。端午の幟は朝風に吹かれるところが善い、雛祭は夜、燭を秉つて遊ぶべきものである。

雛祭に桃があると、端午には菖蒲がある。一は花を以つて祭の華やかさを飾る。薄紅(うすくれない)の色は眞紅と燃える雛壇の毛氈と相映發して、白酒の香に醉うた乙女の顔にふさはしい。一は葉を軒にかけ、又は木太刀を飾る。錢湯を沼になしては菖蒲湯と呼ばれ、根を刻んで酒に浸しては、菖蒲酒と稱せらる。枕に菖蒲枕があり冑に菖蒲冑があり、茶に菖蒲茶があり、帷に菖蒲帷がある。端午と菖蒲とは離れられない。

端午に菖蒲を用ひた起源はいつの頃であらうか。續紀天平十九年五月の太上天皇の宣旨に「昔は五日の節常に菖蒲を用ひて縵(かづら)となす、此來(このごろ)已に此事停(や)む、今よりして後、菖蒲縵にあらざるものは、宮中に入る勿れ」と、して見ると、奈良朝以前既に此風俗があつたことが分る。弘仁式には「凡そ五月五日、藥玉料菖蒲蓬(總べて一輿に盛る)雜花十棒(瓮に盛り臺に居く)三日平旦内侍に申し、司南殿の前に列設す」と見えてゐる。屋に菖蒲を葺くことは、拾芥抄年中行事秘抄等に載つてゐるが、不吉の家は或は葺き、或は葺かずとあ

つて、七々忌の外は禁忌せずと云ふことである。其證は水左記にも見えてゐる。「承保四年五月四日、今日、菖蒲を葺くの日なり、而して喪に遭ふの家葺くや否やの條、暗に覺えざるを以つて、此由前大納言の御許に問ひ申すのところ、返答に云ふ、喪家四十九日中は葺くべからず云々、後一條院の御時、四十九日以後葺くところのものと、然らば今日は菖蒲を葺くところなり」とあるのが、即ちそれである。玉葉に建久三年諒闇の際にも、五月五日皇后閑院舊殿には菖蒲を葺く、嘉承の例に依ると見えてゐる。

枕草子の節はの條に、清少納言は例の筆法で、「五月に若くはなし、さうぶ、蓬などの香りあひたるもいみじうをかし、九重の内を初めて云ひ知らぬ民の住家までいかで我がもとに繁く葺かんと葺き渡したる、猶いと珍らしく云々」と云つてゐるが、昔は餘程多く葺いたものであらう。今のは告朔の餼羊で、ほんの眞似事に過ぎない。なぜ一體端午には菖蒲を用ふるのであるか、平舒王が殺した臣下が毒蛇に成つたのを、菖蒲で降伏させやうとした説などは、固より俗談で取るに足らぬ。一説には水草を以つて火災を除かんとするのであると云ひ（筵響錄夏山雜錄）、又一說には菖蒲の萬病を治するからだとも云ふ。ところで支那の風俗にも菖蒲酒を飲むことは見えてゐる。荊楚記に「五日、菖蒲を以つて、或は鏤し、或は屑して以つて酒に浮ぶ」とはあるが、屋に葺くことは物の本に見はれてゐぬ。菖蒲湯のことはないが、蘭湯のことはある。大戴禮に「五月五日蘭を蓄へて沐浴となす」とあり、楚辭にも「浴蘭湯兮沐芳」と見える。猶歳時記に「端午には菖蒲を刻んで人をつくり、或は葫蘆の形をつくり、之を帶びて邪を辟く」とあるところから見ると、端午に菖蒲を用ふる風俗は支那からの傳來であらう。世諺問答に「混明百節の菖蒲とて、一寸からとするに百ふしがある菖蒲あり、此菖蒲の根萬病を癒やすといへり、さればば百ふしなけれども、之を祝ひ侍るなり」とあるが如く、菖蒲が邪を禳ふと云ふ傳説から、端午に用ひたのであらうと云ふのは肯定すべきことゝ思はれる。滑

稽雜談に依ると、奥州あたりは菖蒲の代りに眞菰を屋根に葺くとあるが、之は土地からのことで、固より異例に過ぎぬ。

一體端午の字は何を意味するのであらうか。或は午は逆ふの義であつて、五月は陽極りて陰生ずる月で、陰氣が午逆するから爾か呼だと云ふ說もあるし（韻會拾遺記）、又は、端午は端五であつて、午の字となすのは誤であると云ふ說もある（珊瑚鉤詩話）。提要錄には「五月五日の午時を天中節となす」とあつて、もとは、曆學から來たものらしい。五雜俎に依ると、張九齡の文には開元十六年八月端午となり、宗璟の表には月惟、仲秋日端中にありとあつて、每月の五日を端午と稱してゐると見えてゐるが畢竟するに定說はないらしい。

菖蒲根合と云ふことが、古今著聞集にあるが、これは定まつた公事ではない。支那では、端午の日に、四民百草を鬪はすと云ふ戲がある。唐の中宗の時安樂公主が百草を鬪はせんとして、騎を馳せて、之を採らしめ、又他人の得る所とならんとするを恐れて、其餘を剪り棄てたと云ふ。負け嫌ひの公主のことであるからやりさうな藝當である。荊楚歲時記に依ると、此日は屈原が汨羅に投じた命日だとあつて、之を弔ふ爲に、舟の競漕をする、之を競渡と云ふと見えてゐる。唐の駱賓王にも競渡詩序と云ふものが傳はつてゐる。其舟の輕利なるを以つて、之を飛鳧とも名け、水車とも曰ひ、水馬とも云ふ。淮南の節渡使亞杜が競渡に當りて其舟を輕くして善く駛らせんとし、船底を髹し、篙人に油絲衣を衣せたことが唐小史に載つてゐるが、一種の端艇競漕とでも云つたやうなものだ、楚の地の遺風ではあつたが、吳江にも盛んであつた。

男子の爲に此日を祝するのは、日本の風であらう。支那には此俗がない。寧ろ五月五日に生れるを以つて凶としてゐたのは、異とすべきである。宋の王鎭惡は此日に生れたからとて、家人は之を棄子とした（宋書）胡廣も此日に生れた因果から、其父は盛るに葫蘆を以つてして、之を江中に棄つた（世記）。齊の孟嘗君も此日の出生であつたが爲に、父は之を殺さんとしたが、

母に依つて助けられた（史記）。宗の徽宗皇帝も此日の所産であつたが、俗忌の日であるからとて、十月十日に改めたと云ふことである（癸辛雜記）。

邦俗にても粽を食ふが、これは支那から傳來したのであらう。續齊諧記に云ふ「屈原此日を以つて汨羅に投じて死す、楚人之を哀み、此日に至り、竹筒を以つて米を貯へ、水に投じて之を祭る、漢の建武中、長沙の歐回、白日忽ち一人を見る、自ら三閭太夫と稱し謂つて曰く、君の常に祭らるゝは、甚だ喜し、たゞ常に遺るところ、蛟龍の竊むところとなる、今若し惠むあらば、楝樹の葉を以つて其上を塞ぎ、仍五色の絲を以つて之を縛すべし、此物蛟龍の畏るゝところなりと、回其言に依る、世人、五月五日に、糉幷に帶五色絲及楝糉を作るは、皆汨羅の遺風なり」と、之は眉唾の話であるがいづれ俗人どもの俗説、屈原こそ、泉下に苦笑してゐるであらう。序に俗説の中でも珍妙なものを紹介しよう。事文類聚に、「漢の武帝の時、端午の日蜥蜴を取り、之を器に置き、飼ふに丹砂を以てし、明年の端午に之を搗いて以つて宮人の臂に塗ると、洗濯しても消えず赤痣の如し、若し密通するところあると消沒す依りて守宮の名を得たり」とあるが、守宮と戀とは、とかく緣があると見える。但し此では、嫉妬の用に供されるのであるから、戀に取用ひらるゝよりは、氣が利かな過ぎる。此他風土記に依ると、端午には鶩を烹るだの、風俗通には、梟の羹を作るだの、郊祀志には梟の羹を食ふだの、歲時記には蝦蟆の陰乾を身に帶びるだのと、異俗を載せてゐるが、此う云ふ不快な風俗は我邦にない。日本國の端午はどこまでも男子的である。

兒童の遊戯としては印地打がある、所謂石合戰である。神を祭つては、賀茂の競馬がある。爲家の詠に云ふ、五月來て賀茂の社のあやめ草今日は駒さへひきくらぶなり。藤森社の例祭がある。蒙古退治の餘習として、此神幸には、甲冑を帶し、競馬を行ふ。左右近馬場の騎射がある。冑人形がある。幟を立る。日本歲時記に云ふ、「都鄙の童子今日菖蒲のかぶと、太刀を玩ぶこ

とも藤森の祭を學ぶとなり、されば此事昔は厚き紙に人形をほり付け、薄き板を冑の形にこしらへ、或は菰の葉にて鳥を作り、或は木を鎗長刀の如く削りなどして、戸外に立倚りしが、近年は風俗美巧を好みて、木を以つて人馬の形を刻み、又張子にして彩色を施し、或は甲冑を着せ、劍戟を持せ、戰闘の勢をなさしめて戸外に立て侍る、之を冑と云ふ、又紙旗は色々の繪をかきて、長竿につけ、是をも戸外に立侍る、これを幟(のぼり)と云ふ、或は絹を用ふるものあり、或は長袴をくはへて是を吹流しと云ふ、朔日より五日まで兒童の弄事歟」と。むかし〱物語には「六七十年以前までは五月の初、ときん、すゞかけ、法螺、菖蒲刀を賣りてありて、それを子供求めて、五月四日に子供菖蒲にて鉢巻し、ときんをかぶり、すゞかけ、菖蒲刀をさし、法螺を吹きあるく」とありて、當時の風俗は、又一段今と異るものがあつた。俳諧五節句にはけづりかけの冑と云ふものを記して、「しこゝに木をつぎ、かんなにて削り、短尺の長き樣なるを色染め、いくつとなくぶらさげる」と見えてゐる。斯くして武家時代にふさはしい節句となつたのである。支那の長命縷辟兵符に對しては藥玉がある。五月五日藥玉を獻じたことは、江家次第にも載つてゐるが、後世になると、其遺風が民間に傳はり、女子は頭髪に菖蒲を挿し、背後に藥玉を繋ぐなどの風俗となつた。

粽の外に端午になくてならぬものは柏餅である。雛祭の櫻餅に對してゐるが、三月の櫻餅の起原が古くないやうに、柏餅と端午の關係も遠くはなさうだ。又之も江戸のみの風俗で、他國にはなかつたと云ふ。寛文頃の洒餅論には「彌生は雛の遊びとて蓬の餅や(櫻餅はまだない)端午にはちまきの餅や、柏餅、水無月初の氷解、嘉定の餅や」とあるから、此頃にはあつたと見える。延寶頃の俳諧には端午の柏餅を結んだ句がある。

鍾馗のことは事文類聚に唐逸史を引いてあるが、これは唐の玄宗皇帝の夢に現はれたので惡鬼を捕へたと云ふところから、邪を辟けるために端午の幟に畫かれたのであらう。それが遂に鯉幟となつて、鯉とともに

端午に缺くべからざる景物となつた。如何にも之も勇ましい。三十六鱗の鯉は魚として尤も美的で男性的である。俎上に載つて從容たるところは、頗る男性美を發揮してゐる。

五月の空が紺碧に染めなして、風も和かに氣も晴れ晴れしたやうに、端午の節句はすべて快濶で、意氣の壯なるものを見る。唯武者人形や、幟や、甲冑やには限りがある。此點から云ふと雛祭の千紫萬紅なるには固より及ばないが、之が男性的の男性的たる所以であらう。

▼次號說苑▲

法廷悲劇「罪の女」二　藝者の大學生殺し……澤田撫松

最近の坪内逍遙先生の印象……中村孤月

右二篇は頁數超過の爲め之を次號の本欄に掲載することゝなれり

人物評論（八十四）

新横綱大錦論

▽氣力と腹力の力士

生駒翔翔



（一）

出世の早さに於て、古今無双と稱すべき大錦が、横綱の極位を獲得した資源は何かと云はゞ、彼れの異常なる氣力と腹力とに歸せざるを得ない。世人彼れの相撲振りを許して『頭腦で取る』と云ふ。寔に至言で、力本位の力士の中で、智識派の旗頭たる彼れの取口は、如何にも理智に富んだもので、其立上りの注文の甘

は、僅かに他の追隨を許さないものがある。

然し如何に注文が甘くとも、夫れ丈けでは決して勝機を捉ふることが出來ない。元の浪の音、玉椿、古くは黒岩などは、注文の名人で、其爲め時々大敵を倒して、殊勳を樹てた事があるが、餘りに注文に熱中すれば、却つて注文の裏を掻かれて、脆くも敗れることがある。

又理詰めの取口に偏すると、土俵に活氣を缺き、往々瓦全を期するの弊がある。綾川の最近に於ける不振は、其病氣にも依るが、一は餘りに理智に囚はれる結果と云はねばならぬ。我大錦の取口は、豪壯にして雄大、適々理智の閃きを見るが、些の嫌味と危氣を見ないのは、自から恃む所あるに依る。恃む所とは何ぞ。彼れが絶倫の氣力是れ！

（二）

凡そ力士に最も必要なのは、土俵上の精氣で、如何に立派な體格と、力倆(りきりやう)とがあつても、氣力が沮喪しては、到底勝味のある筈がない。常陸山が體格と力とに於て、梅ケ谷と徑庭なく、相撲の術に於ては、寧ろ梅に一籌を輸したに拘はらず、却つて梅を壓し、拔群の成績を擧げ得たのは、其氣力の旺盛なるに依りて、對手を威壓した結果である。故駒ケ嶽が全盛時代に於て、體格力量太刀山と伯仲したに拘はらず、凋落の早かつたのは、氣力を喪失したからである。西の海や、大[illegible]などは、體力に於て、大錦に勝るとも劣る所なきに、尙ほ且つ實戰に於て劣ること甚しきは、氣力の強弱に於て、數段の差異あるからだ。

氣力とは軍隊では士氣と云ひ、相撲道では元氣と云ひ、一般には勇氣と云ふが、勇氣に蠻勇と眞勇とあるが如く、力士の元氣にも無智と理智との二種あり。前者は自己の力倆を過信し、好んで强引相撲を取る結果、思はざる敗衄を招くことがある。朝潮の如きは其好例である。我が大錦の元氣は卽ち然らず。彼れは理智の上に其勇氣を養ひ、自己の弱點と長所とを計量して、全勝無敗の信念を確立し、此確任より湧出する氣力を振つて、土俵に立つのであるから、其勇氣の凛烈にして、其貫口の強力なるは、當然の結果である。

（三）

凡そ力士が最も氣力を集中するのは、其仕切りから、立上る迄の間にある。故に仕切つて居る間に、兩力士の態度、眼光を透して、其放出する氣力の強弱を較量すれば、略々勝負の豫想が出來る位のものである、劍道や柔道に氣合を以て、對手を壓する術がある如く、相撲道にも氣力の強弱が、未だ戰はざるに他を壓迫して、機先を制し、勝機を促ふるの便を與へるのは、當然である。

今の東西力士中に於て、最も氣力の旺盛なるは東は太刀山あり、西に大錦あり。太刀山は其巨砲の威力古今獨歩の稱あるため、對手は只管之を避くることのみに苦心し、一人として彼れに正面攻擊を加ふるの勇氣ある者なく、卽ち未だ戰はざるに、彼れの氣力に壓せられ、敗北を豫覺せざる者尠い有様である。

大錦には太刀山の如き飛び道具がないから、其對手は策戰上餘程壓迫を受けることが尠ないのであるが、其泰山の如き構へと、其爛々たる眼光

とに對し、猛烈たる氣力の溢れが、滔々として襲ひ來るに逢ふては、一種の壓迫を感ぜざるを得ない。

（四）

試みに彼れの仕切つて居る顏を見よ。ピリツと動く眉根、燃ゆるが如き眼光（まなざし）、一文字に結ばれた口元の締り、緊張の極、神經的に打震ふ顏面筋肉の動き、一として烈々たる氣力の發露を示さざるはない。此氣力、此勇氣、此元氣を以て、彼れは最初の一搏に、致命傷（フエータル、ストローク）を其敵に與へんとするのである。

然り最初の第一搏！、是れ彼の策戰の凡てゞある。彼れは此第一搏を最も有効に活用せんが爲めに、仕切に最も念を入れ、氣を練り機を窺ひ、以て巧みに機先を制せんとする。怪物玉手山が、元氣一杯の時代と雖も彼に對しては、全く潜入の機を得ず、常に枯木を倒すが如くに寄り切られるのは、彼れの立上りに寸分の隙なき證據である。又驍勇を以て鳴れる朝潮の如きも、栃木山に對しては七分の勝味（二戰二勝）あるに拘はらず、大錦に對しては一度も相撲らしき取口を見せた事がなく、立上りの一搏に其便腹を打ち付けられて、一溜りもなく寄り切られるのを常とする。是れ大錦の仕切りに缺隙がないのと、立上りの氣力充實して居る爲めてある。此呼吸の半分も宇都宮や、對馬洋や、大響なぞが學ぶことを得ば、彼等は逸早く大關の榮位に進み得たのであらう。

（五）

大錦の氣力の旺盛なのは、略々前述の如くであるが、相撲は氣力のみで取れるものでない。之に伴ふ實力がなければ、[illegible]元氣に終らざるを得ない。彼れに果して氣力に相應する實力ありや。然り彼れには、其異常の氣力を、縱橫に發揮せしむべき、天賦の利器がある。彼れの偉大なる腹力（ふくりよく）即ち是れ！

抑も彼れの腹たるや、寔に西儀罕れなるもので、之を同型力士に比するに、恩師常陸山と、高見山の腹が、稍々類似の點がある。而して常陸山が、其便腹を利用して、或は釣り出し、或は煽り寄りの戰法を用ゐたのは、未だ世人の記憶に新たなる所、鈍骨高見山を以つてして、尙ほ克く太刀山を寄り切り、荒岩を打棄り得た事あるは、皆な其便腹の賚賜（たまもの）である。而して大錦の腹は大さに於ては、稍々此二力士に讓る所あるが、堅靱にして、彈力に富む點に於ては、逈かに此二力士を凌駕するものがある。是れ彼れをして今日の榮位に上らしめたる、唯一の利器と云ふも敢て溢美ではない。

腹の大さに於ては、梅ケ谷は第一人者であつたが、彼れの腹はダブダブして彈力に乏しく、之を利用して、大剛常陸山をすら釣り出した事もあつたが、餘り腹が出過ぎた爲め、重力の中心を足趾（つまさき）より前方に落在せしむる結果、手繰（たぐ）られたり、叩かれたり、將た逃げながら小手を振られたりすると、出足が之に伴はずして、或は四ッ這ひとなり、或は膝を突いて敗れたことが屢々ある。彼れが駒ケ嶽や小錦（今の二十山）に敗れたのは、多く其便腹が累をなしたのである。

（六）

然るに大錦の腹は、如何にも體格と均齊を保ち、且つ護謨鞠的に緊張して、彈力が强いから、之に打ち付かると、忽ち對手の腰が浮いて刎ね返される。彼れは腕力に於ては、栃木山や、宇都宮にすら及ばないから、突張りは餘り用ゐず、突撃の場合に、多く腕の代りに、劍道に所謂體當りなるものを喰はして、其便腹を打ち付くるの戰法を取る。而して此肉彈を連發されると、兩體餘りに接近するので、對手は叩き引落しなぞの手を用ゐる能はず、忽ちズル〳〵と後退しつゝ、懸命に堪えて組み留めんとすれば、直ぐ釣り出されるのである。

彼れの此攻撃法を受け留めつゝ、克く攻勢に變じて、勝を制し得た者は、彼れが大正四年一月入幕の場所十日目に、大蛇潟が左り四ッに寄り切つたのと、昨年夏場所七日目太刀山が、彼れの叩きを殘し、次で彼れ得意の體當りを殘しつゝ、左りを差して寄り切つたのみで、其外一人として、克く彼れの寄り身や釣りを殘し得た者がない。

（七）

彼れが入幕以來五場所の內、負星は七個で、太刀山に二回、大蛇潟、眞砂石、鳳、浦の濱、鶴渡りに各一回であるが、其內正面から寄切られたのは、前記の大蛇、太刀の二回と、昨年夏場所の鶴渡りの時と三回で、其他に眞砂石の立上りの突張りを受け損じて突き出され、鳳にトッタリを打たれ、浦の濱に引落されたのみで、何れも立上りの油斷から出た結果であつた。而して鶴渡りに寄られたときも、對手の無能を蔑視して調子を下した爲めであつたのだ。

斯の如くにして彼れの腹力は、前場所に於て最も圓熟し、連日東軍の俊秀を腹櫓に懸け、特に九日目には、勝ち放しの横綱鳳と角して、先づ其便腹を以て、敵の腰を碎き、殘して寄り返す所を、素早く二本を差して高々と正面に釣り放して、其腹力の絕倫なるを示し、十日目には無敵大王太刀山と角して、立上りの策戰奇功を奏し、直ぐに二本を差して、疾風の如く寄り倒し、天晴れ十日間全勝の榮譽を收めて、一躍横綱の極位に登ることを獲たのは、一に其腹力に依ると云はねばならぬ。此一番に就ては、世上八百長說が高かつたが、吾人の見る所を以てすれば、決して八百長ではなく、全く太刀が敵に立つ氣なしと見て、空聲を懸けた所を猛然として立たれ、狼狽する所を、二本差されて便腹を當てられ腰が浮いてズル〳〵と寄り切られたのである。敵に立つ氣があるや否やは、其呼吸と眼を見れば分るのに、之に氣付かなかつたのは、太刀が敵を侮つた不覺と云はねばならね。

（八）

前場所六日目に、伊勢の濱が大錦に高々と釣り放たれた時、眼の前に居つた控えの太刀山が伊勢に向ひ『何と云ふ無様な負け方をするのか、釣られたときには、我胸で敵の胸を左右に擦れば、容易に殘るものだのに、足をダラリと下げて、苦もなく釣り放されるとは、あれでも大關の取口か』と嚴しく叱責したが、十日自分が二本差されて寄られたときは、タヂ〳〵と下りながら、釣られては大變と思つたものか、荐りに胸を擦り付けながら、左右に敵の差手を抱へて、一生懸命に小手を振らんとし

たが、錦の寄身が餘りに烈しいので、却つて陸の方へ出て立ち、其儘土俵際へ追ひ詰められて、寄り倒されたが、此時若し太刀の腰が碎けず、土俵を力に堪えると、今度は例の便腹に乗せられて、高々と釣り出され、一層無様な負け方をしたであらう。言ふは易く行ふは難しと云ふことがあるが、太刀程の大力士でも、實地に當るとなか〳〵思ふ様にはならぬものであると共に、大錦の腹力には大に敬意を表するに足ると思ふ。知らず彼れが今場所、横綱の初土俵に、其絶大の氣力と腹力とを、如何なる程度迄、利用し、活用し得るであらうか。是れ満都の好角家と共に、無限の興味を以て、見んと欲する所である。

▽春場所に立派に全勝した大錦

三木愛花

新横綱大錦卯一郎の品隲を中央公論誌上に書けとのこと、何を書たものか、大錦の横綱尙ほ早しとか至當とか云ふ問題は既に時機を失して居る、其取口の巧拙、體格の善悪を云ふことも月並みのやうに思ふ、ヘチ何を書かんかと思案の末に思ひ切つて書て仕舞ふかと極めた主題は、大錦が横綱を贏ち得た太刀山との一番が果して八百長であつたか、又は眞實の勝ちであつたかと云ふ重大の——大錦に取つて——疑義である、此疑義の解は予が一度に書て置きたいと考へたものであるが、世間が曾り決定的に評判して居るので、予が獨り之に反對の意見を右へ出しては、或は予を誤解して大錦の爲に辯ずるものと靑眼視さるゝであらうと、今まで筆を執ることを見合せて居たのであつたが、今は之を書く時機であらうと考へたので、世人が何と誤解しやうが、予は予の確信を以て之を書くことに極めたのである。

本年一月場所の十日目に大錦が太刀山に勝つや、尙ほ十分を經ぬ中に場所内で早くも今の勝負は八百長であると云ふ噂が其處此處に傳へられた、それから打ち出しとなつて或る料理店へ夕食に立ち寄つた處が、此處でも誰も彼も今日の太刀山、大錦の角力は八百長であつたと云ふことを話して居た、戀て用事があつて朝報社へ歸つて見ると、編輯局の好角家連が予を取り圍いて今日の太刀山、大錦の角力が八百長であつたと云ふことは早くも社の方へ聞えて居る、それは蠣殼町、兜町から歸つて來た社員が一様に聞て來た話である、然るに君の講評を見るに一言も其ことが書てない、君の講評は毎時も遠慮なく書てあるに此大角力を八百長と知つて書ぬと云ふは不可思議である、宜しく嚴重に兩力士の不都合を譴責してもらひたいものであると凄まじき意氣込みであつた、然し予は平然として答へた、彼の角力が八百長であると見れば夫は諸君に云はるゝまでもなく十分に譴責の筆を執るが、如何せん彼の角力は八百長などではない、全く大錦が勝つて太刀山が負けたに相違ないのである、或る程彼の勝負がつくと間もなく八百長の風說が立ち、又途中で逢つた人々か

らも八百長だ〳〵と云はれたが、夫等の人々は角力を眼で見ないで耳で見る人である、眼識で判斷しなくて想像で決定するものである、予は嗚呼ながら角力を眼で見るから人の噂や人の想像が何と云つても之に耳を假さぬのである、要するに予の眼で見た兩士の角力は決して八百長ではなく事實の勝敗である、故に予は之を譴責するの必要を認めぬのであると、澄まし返つて居た、其後も到る處で予に問ひをかける人があるが、予は只一言八百長ではないと答へて居たが、問ひ掛けた人は怪訝な面をして、デモ世間一般に八百長だと云ひますよと、予が本當のことを云はぬものと推斷して却つて裏面から獨り極めに八百長と極めて仕舞ふのであつた、中には蠣殼町邊の人などは意氣負ひ立つて彼の角力の八百長であつた證據には、彼の日尚ほ勝負のつかぬ中から今日は大錦が勝つさうだと云ふことが蠣殼町邊では一般に知れ渡つて居た、獨り太刀山との角力ばかりでなく、前日の鳳との角力も八百長であつたことは蠣殼町では早くから傳へられて居た、是がために朝の中は寧ろ鳳側から步を買て居たのが、正午頃には五分から大錦六分に移り、愈々勝負間際の頃となつては大錦七分、鳳三分と云ふ相場になつても、鳳側からは賣り人がなかつたのである、斯の如く證據がある上は大錦の勝は太刀山にも鳳にも振つて貰つたのに相違ないのであると、予に食つてかゝつた人も少なくなかつた、既にして此八百長說は次第に蔓延して東方びゐきは勿論、西方びゐきまでも此說に服從して、五ケ月を經た今日では世間一般に此說に雷同して百人が百人、千人が千人、彼の角力を八百長でないと云はぬ人は無く、若し之に反對すると却つて笑はれる程の有樣となつて仕舞つた、而して此八百長の原因は大錦の全勝を望むために、大錦の顧客某氏が莫大の金を投じて太刀山、鳳、伊勢の濱、黑瀬川等を買收したのに基づくと云ふのである、斯の若く世間一般の定評の如くなり、又種々の證據まで擧げて斷定して居る間に顯はれて予が獨り反對說を書くにつきては更らに予の立ち場を說明して置く必要がある、予は新聞紙に講評する場合は努めて私情を去り東西を眼中に置かざらんことを期し居る、然しながら個人としては全く東方びゐきである事は僞はらぬ言である、卽ち太刀山とは古き知り合ひであるが大錦とは口をきいたこともない程である。故に太刀山の負けたのは本當の負けでない、大錦の勝ちは振つて貰らつたのであると云ふことゝなれば、予は却つて之を喜ぶべきである、然るに予が太刀山が眞に負けたのであると云はんとするは、事實の掩ふべからざるものあるがためで、決して大錦のために辯ずるものでなく、殘念ながらも太刀山は眞に負けたのであるから、予はひゐきの如何に關せず男らしく大錦の勝を認めて、世間の八百長說を否認するのである、之れが卽ち予の個人としての立ち場である。

愈々予の意見を書く前に尚ほ八百長角力の總論の如きものを書く必要がある、凡そ力士が人間である以上は八百長角力を禁斷することは出來ぬ、他の動物は目前の利害位は知るも半年後の番附のことなどは氣がつかないが、力士は人間であるから能く半年後の次の番附の星勘定もする、其他にも種々なる勝手の打算をするだけの智力を備へて居る、故に集會

が如何なる警告を發しても師匠が如何なる注意を與へてもひゐき客が如何なる誡戒を與へても、表面だけは承服しても土俵上では平氣で八百長角力を取つて居る、特に十兩の出入、幕内の出入、三役の出入など際どき場合には最も盛んに八百長を發揮する、即ち星の貸借である、此外に義理で勝を讓るのもある、金のために負けるのもある、之れは今に始つたことではない昔からあることで、作物であつたにしても千兩幟の稲川が金のために負けさうになつたり、急に勝つたりするのでも昔からあつたことが想像される、況て今の力士には八百長が澤山ある、現に四本柱の檢査役すら誰が見ても八百長と極めのついた角力を眞面目になつて物言ひの交渉に奔走して居る、然るに近來觀客の目が肥へたと云つても、それは十人中の一人であつて、十人中の九人までは附和雷同の連中である、故に八百長でない角力を八百長だと騒ぐ時もある、又八百長の角力を力の入つた大角力だなどゝ賞めて居ることもある、之れは動かない引分でも取れば八百長だと考へ、大いに動いて危ない處を見せれば大角力だと思ふからのことで、事實は其反對で大に動いた角力にして八百長があつて動かない角力には大角力があるのが普通である。

八百長を觀破するには雙方の歴史即ち關係を辿るのも必要である、次には其時の事情を察するのも必要であるが、第一の要義は其取口と勝負の刹那とを吟味するのが肝腎である、番狂はせや風說に依つて八百長と臆測するやうでは八百長を觀破することは出來ぬ。

然らば何云ふのが八百長であるかと云ふに引分と預りと勝負をつけるとの三通りある、何れも取り口が違ふが其立ち合ひに早くも八百長の形式が現はれて居る、八百長を取ふとする時には立ち合ひに態と力の入つた仕切方をする、互ひに立ち遲いやうな樣子をする、故さらジラす如き態度をする、一方が怒つた風を裝る、之れ等は皆觀客を欺く手段である、いよ〳〵立ち上つてからは引分の時は土俵の眞中で突合はするが手先きだけで足は進めぬ、其中にガツシリと組む、弱い方が却つて不得手に組む（右四つの得意力士が左四つに組む如きもの）之れは敗れでは勝ち易いと思はせるためである、斯て雙方が十分に組み合つて土俵の眞中で吊合つたり投を打ちなどする、一方から寄つて行くと土俵ぎはまで寄らせて置いて今度は寄り返す、一方は又之を土俵の眞中の方へ引戻つて來る、一見する時は大に動いて大に力が入つたやうでも肝腎の詰める處で力を拔くから見る人が見ると、忽ち八百長と云ふことが分る、それで八百長を觀破されたと悟ると、今度は土俵ぎはで投げ合ひをやつて兩體に倒れて預かりとする、此場合は多くは足を掛け合つて一、二、三、の調子で掛け投げに行くから好い案排に兩體に前へ倒れる、それから一方が勝ちを讓る場合ひには負ける方は成るべく奇麗に負ける、如何にも怪我負のやうに見せる、勝つた方も僥倖であつたと云ふ如き勝をする、之れは負けてくれる人に花を持たせるためである、假へば甲から寄つて行て乙が危き處で土俵を廻り込み甲が誤まつて足を踏み出すとか、又は乙から吊て行くのを甲が土俵ぎはに耐へてウッチャるとか云ふのである、而して最も多く行なはれるのは敵の出鼻をイナシてハタキ込むのが一番奇麗

で世話なしである、即ち立ち上りに甲から鋭く突きかけて行くを乙が輕く横に開くので、甲は氷で土俵を割るか、又は直ぐに手を突くのであるから如何にも力を入れる暇がなく失策で負けたやうに見える、以上に記したのは彼等の紋切形の八百長であるが、其外に臨機の八百長があつても同じ意味で觀破し得らるゝのである。

太刀山と大錦の角力が前に記した八百長式に適合して居らぬことは姑らく問はずとしても、彼の角力は太刀山に油斷があつた、又少しく大錦を輕んじて居た氣味が見えた、之れは巡業中の申合ひに大錦は迚も太刀山に歯が立たなかつたので、太刀山も何なことがあつても負ける筈がないと自信してゐたからであつて、近來要心深くなつた太刀山が斯云ふ氣の出たのは即ち負ける運命であつて、一方が全勝する場合には一方に斯云つた油斷があることは幾等も例のあることで、勝負事に於ける一つの數理である。

仕切直し三回で何方からも仕懸けない、互ひにまだ立つ氣はない、之れら互ひに一二回仕懸けて見て漸く意の乘て來た處で本當に立つ場合となるのであるから、四回目に太刀山は更らに水をつけ直す考へらしく、乘てゼリフ同樣のつもりでオーと一つ聲を懸けたが、其時は太刀山は少しも力も氣も乘つて居なく、半心は水をつけに立たんとする位の虚心を示して居た處を大錦は咄嗟に其虚に乘じたのであつた、大錦の考へでは尋常に立ち合つては到底勝算が無い、又太刀山は化粧立ちの數重なるほど力を附して來ると云ふことも知つて居る、到底勝てぬ角力ならば敵の氣の滿たぬ中に立つて仕舞はんとの心の有た處へ幸ひに、太刀山に虚が見たから直立ち上つて突きかけて見た處が、太刀山は突き返す暇もなく棒立になつたので大錦の二本がツプと指さつて仕舞た、太刀山はサシツタリと周章て捲きかへんか寄返さんかと躊躇して居る中に、大錦は更らに機を逸せず腹を當て寄つたので、太刀山は少しも力を出さぬ中に土俵近くへ押されて仕舞つた、其處で太刀山は據ころなく棄ばちになつて小手を振て見たが、其小手の利かぬ中に大錦がアビせる如く寄り倒したので、太刀山は體を廻る猶豫なく忽ち大錦の下になつて倒れたのが彼の時の角力である、大錦の一月場所の角力は太刀山に對する計りでなく、何れの角力も悉く機先を制して敵をして少しも力を出すの暇無からしめたのであつて、太刀山に對する角力も大錦が獨りで角力を取つて、太刀山は角力を取らぬ中に負けて仕舞たのである、大錦の一月場所の角力は斯の若く機先を制するに努めて居た上に太刀山は虚に乘ぜられて大錦に獨り角力を取られたものであるから負けたとても少しも不思議はない。

今假りに太刀山が大錦に態と勝ちを讓たとすれば、立ち合に今少し故意に熱心の處を見せて觀客を迷はすのである、又負け方も手を突くか足先きを出すかに留めるのである、大錦に於てもモツト太刀山に花を持した勝ち方をするのである、横綱の太刀山が故意に負けてやる角力に彼の如くドマツと押されて仰向に倒れて敵の下に爲るなどゝ云ふ見惡い形をするものではない、大錦とても負けてもらふ敵の上へドシンと倒れかゝる如き不敬の取り方をするものでない、即ち大錦が寄つて來た處で太刀

肉は少し土俵に堪へると見せ、大錦は必死に押れ込むと見せて後に、太刀山が片足位で土俵を割つて笑ひながら土俵を下る位の處が花である、然るに土俵際に太刀山の振つた小手は太刀山の棄ばちながら必死の小手である、若し太刀山の體が半ば左に廻るの猶豫があるか、大錦の出足が一歩遲かつたならば大錦の體は土俵を飛び出して仕舞ふ處である、八百長角力に彼のやうな小手を振るものでない、多くを云はずとも太刀山が仰向けに倒れたのと土俵ぎはに必死の小手を振つた二つだけでも彼の角力の八百長でないことの斷言が出來る、宜しく角力は耳で見ずに目で見るべきものである、當日の角力を目で見た人があるならば必ず予の說を首肯することと信ずる。

太刀山に對する大錦の勝が八百長でないと首肯されたならば、其他の鳳以下の勝負も從つて眞實である事が首肯さるる筈であるが、駄目を詰めるために更らに鳳以下を追記して局面を明かにして置く、最も鳳以下の八百長說は太刀山に於ける如く一般的でなく又公定的でなく、多くは蠣殼町兜町邊の投機界での說であるが、其起りは鳳と大錦の勝負の日に朝の中は鳳に呼び聲が高かつたが、次第に大錦の步が高まつて終には七分三分となつたのは此日の勝負が八百長で鳳が勝ちを讓ることが知れて居たからであると云ふのであるが、兎角投機界には虛說が傳播し易く其ために相場の變動を來す事は彼の玄海洋の汽船沈沒事件の如きもので、根も無きことでも一人が唱へ出すと忽ち夫から夫へと廣まつて事實のやうに云はれるのであるから、縱令當日大錦と鳳の相場が非常に變動したからと云つても必ずしも事實とすることは出來ぬ、きめは何か爲めにする人が云ひ出したのが事實のやうに云ひ傳へられて偶然にも其通り大錦が勝つたので終に決定的となつたのであつて、素より根據のあつたものではない、而して兩力士の角力も八百長でないことは其取り口を見た人には了解さるる筈である、鳳とても横綱である、若し八百長で勝を讓るとすれば太刀山の處に書たやうに成るべく體裁の好い負けぶりをする、即ち手を突くか足を出すか位の處である、それが十分に腹の上に乘せられて正面土俵へ吊り出されると云ふやうな不體裁を演ずる見がない、鳳は前にも二回大錦に負けて居るが、それは何れも土俵を割つた丈である、然るに態々負けてやる角力に一番見惡き體裁で負けると云ふ道理がない、又大錦とても勝を讓つてもらふのであらば太刀山の時にも書た通り大に相手に遠慮して敵に花を持たした取り方をするのである、然るに彼の如き勝負のつきかたをしたのは全く勢ひに乘じた結果で矢張大錦が機先を制した爲である、其取口は互ひに一合しで左四つに組んだから大錦はグヅ〳〵して居ては鳳の肩透しか小手を食ふ恐れがある、と察したから組むが早いか褌を曳ふとせずに鋭どく腹を當てゝ押したのである、之が爲めに鳳は何をする暇もなく早くも腰が浮いたから、據ころなく右に廻りながら小手を振つたが其小手の振り切れぬ中に大錦の方が再び機先を制して體をつけて寄つたので大錦の指し手が深くなつて鳳の小手が效能を失し却つて益々腰が浮いて仕舞つたのである、其處で大錦の手が褌に屆いたから大錦は忽ち腹に乘せて拔き揚げ、鳳はモー力の出しや

がなく敵の爲すがまゝに吊り出されたのであつた、要するに一月場所の大錦の角力は熱心と元氣が充ちて居たので、總て先手に先手にと廻り敵が力を出すの暇のなき中に仕事をして仕舞つたのである、鳳の角力も大錦の取口に今少し遲滯があつて鳳に頭をつけられたならば恐らくは肩透しを食ふ乎、小手を振て十分に廻り切られる乎であつたらうが、鳳に其暇を與へなかつたのが大錦の勝つた所以で、八百長どころの角力ではなく誠に危機一髪の間に形勢の定つたものである。

次に伊勢の濱との角力は伊勢の濱が餘まり諦めた角力を取つて、一合の後に左四つに組むが早いか大錦が腹へ乘せたのを伊勢は少しも抵抗せず從順に持出されたので、此角力が一番に八百長らしく見えたが、之れとても大錦不思議の無い角力で八百長などゝ云ふものでない、伊勢は之れまでもには勝ち得なかつた、殊に伊勢は江戸子氣で一度水をつけて後は唯腮を摘みに行くだけで、決して二度と水をつけに行かぬ程のサッパリした力士であるから、之れまでも勝てなかつた大錦に腹へ乘せられては最早抵抗しても無益であると大悟徹底して從順に持ち出させたのであつて、之れ亦已むを得ざる角力である、之を八百長と認めるのは大錦の不服とする計りでなく伊勢ん取つても遺憾とする處である。

次に黒瀨川の角力も互ひに四つ角力であるから大錦の勝つたのも當然と認められるのである、然るに之れまでも八百長說の傳へられたのは巡業中に大阪の興行で黒瀨川が大錦に勝つたと云ふことが原因となつて、其時まで全勝の大錦が――特に其出生地に於て――黒瀨川に負けたと云ふのは多分黒瀨川は大錦の苦手であるだらうと推測され、從つて一月場所に大錦を全勝させるために太刀山、鳳、伊勢の濱等を買收した序でに、此黒瀨川をも某富豪が手を廻したのであると云ふのであるが、大阪で黒瀨川が大錦に勝てたと云ふは所謂時の拍子であつて黒瀨川も勝つ氣で一生懸命に取つた譯では無い、大錦も花相撲ではある、東京同志ではある、素より氣の緩んで居た處へ黒瀨川が一寸卷て見たのが時の拍子で案外に極つて仕舞つたので、黒瀨川も却つて氣の毒に思つたことである、此位のことで苦手と云ふ定めはつかぬのであるが、此事を聞た人が太刀山、鳳等の八百長說を出した序に黒瀨川を加へたものであらう、實を云へば大錦には黒瀨川の如き四つ角力よりも小兵でも眞砂石の如き機敏で出足の早い力士が危險である、故に買收するならば此邊までも買收する必要がある、然るに眞砂石等には八百長說のないのは却つて矛盾した買收說である、畢竟するに大錦の一月場所の角力は全く機先を制して敵の何ごともせざる中に勝つて仕舞たのであつて、今後も此通りの好成績を收め得らるゝや否やは疑問であるが、一月場所だけの大錦は立派に全勝したことを予は認むるに憚からぬのである。

斯の若く駄目を詰めて終局するに當り再び斷はつて置くのは、予は個人としては東びゐきである、太刀山、鳳以下の悉く負けたのは殘念と思ふものである、然るに上記の如く悉く大錦の眞勝を主張するのは世間に餘り八百長說が傳播して聞くに堪へぬからである、此刹那には予は東西は素より大錦も太刀山も鳳も忘れて單に角力界のために辯じて氣を吐い

たのに過ぎぬ。

▽大錦の短所

佐藤得齋

大錦は過ぎし一月場所に於て抜群の成績を表はし、一躍横綱の榮位を占めた者だから知るも知らぬも競ふて彼の非凡なる技倆を賞揚し、一人の彼に苦言を呈する者がない。元より彼れは入幕僅か四場所に於て横綱となつた位ですから尋常一様の力士と自ら其班を異にして居り、徒らに周圍の讃嗣に眩惑し自尊心を起す様なことは勿論なからうけれど、餘りに賞讃辭に浴した結果は必ずや多少の弛みを脳の一角に來さんとも限らない。故に私は彼に取りて最も大切なる此時期に於て彼に對する愛情の溢れたる餘り一の苦言を呈したいと思ふ。

一體物事は好きと云ふ半面には必ず心配と云ふ事が伴ふ者で、角狂でも其理に洩れずドーカして彼れに勝たせたいと思ふ反對には、若しや負けはせぬかと思ふ憂慮は必ず並び起る者です。殊に贔屓を通り越して最早彼自身の身體と同化せんとするに至れぞ樂觀は全く去り、寧ろ悲觀のみに神心を襲はるゝに至るものです。故に贔屓と云ふ者は常に彼の缺點に注告し、他人よりはより多くの弱點を見出し、自ら苦勞の種を増して居る者である。私も日頃其短所を研究しつゝある一人ですから、聊か其欠點を述べて彼に注告し、併せて之に添ふるの策を講じ、來る五月場所には天晴横綱振を發揮し其榮位を辱しめない様に心掛けて貰ひたいと思ふ。

誰でも氣が付いて居る彼れの第一の缺點は腕力が少く足らない點である。彼の體格を見ると四肢軀幹共に平均を保ち圓滿なる發育を遂げ如何にも膂力素に秀でゝ居る樣に思はるゝけれど、案外彼には腕の力は少ない樣である、故に四つ身に渡つたならば上手投又は下手投などを打つは彼に取りて不得意な許りでなく、寧ろ危地に陷る基である。利かない投を打て却て打ち返しを喰はんよりは矢張り自分の得意なる釣り出し持ち出しを突嗟の間に御眼に懸け、機先を制するの勝れるに如かない。其例は大蛇潟と初顔の時ガッシリ左四つに渡り投げを打つたが、利かず下手投を打たれて終に見事に土俵に轉投した事がある。この場合なども彼に腕の力が足らず、且つ腰に曰くのある爲である。されば其後の彼れは力の強い敵には四つに渡らずに離れて仕止むる策を施して居る。

第二の缺點は矢張皆さんの御存じの通り腰に申分がある。只是迄の彼れは熱心なる稽古の賜物によりて之を表面に現はさず、觀客の眼を誤魔化しては居るけれど、嘗て之を隱し切れずに敗を取つたことがある。前前場所眞砂石と顔の合ふた時立會に頭と雙手に猛烈なる押しを喰ひ一と溜りもなく土俵を割つてアッケなき負を遂げた事がある。若し彼れに腰の強さがあつたならば、假令二度目の押しに敗るにしても一旦は土俵際で堪えられなければならぬ。少しも堪ゆる力なく忽ち土俵を割りたるは

全く腰の弱い證據で、丁度一月場所同じ力士に西の海が一と押しに押し出されたと好一對である。大錦關よ、君若し橫綱の榮位に滿足し稽古を怠る樣なことがあつたならば、腰の弱みと腕力の乏しい結果は終に鶴渡りと化し、今日の讃辭は全く嘲笑の辭に交代せらるゝに至らん、宜しく心せられよ。

第三の短所は腹袋の出て居る力士に共通の缺點で、前に脆きことである。前橫綱梅ケ谷然り、小常陸然り、君も矢張り其傾きがある。君は幸に出足早きを以て稍此缺點を補ふことが出來るけれど、前々場所浦の濱に取ッタリを喰ふたのは卽ち此缺點を利用せられたと云はなければならない。あの力士は押す角力でもなく突張る力士でもなき故に、あの時の樣に猛烈に出て行かなくもよい。向の出た處を押え靜に引受けて四つに渡れば差支ないのである。君は餘りに烈しく突掛けた故苦しまぎれに取ッタリを打つたので、ツマリ全く彼に乘じられた爲めである。君よ、矢張君には前に脆き缺點は確かにある故に、其相手によりては此短所をも顧慮し大に備えなければいけない。

君の缺點は大凡此三つにある。然し私は序でに附記して置きたいことがある。ソハ引落し又はハタキなる手である。之は前の錠潟の樣に此手を專門として居る力士では間違はないが、稀に此手を用ふるは必ず敗を招く基となる。一體此手は角力を樂に取らうと云ふ橫着な考から來る者で、一旦腰のよい力士に遇ふたら之がきまらず、體に付け入らるゝか、又は足を取られ不覺を取る者である。聞く處によれば君は鹿兒島で駒泉をハタキ足を取られて敗けたと云ふ事である。又國技館の角力でも大蛇潟など每度此手を用ひ不覺を取て居ることは既に充分承知だらうと思ふ。宜しく若手新進の力士は敗けても進んで角力ひ、決して棄投とかハタキなどを用ゐないやう心掛けなければならない。

又前條に於て投げを禁ぜよと注告したが、顧みて考ふれば何時如何なる場合に投を打たなければならない破目に遭遇せぬとも限らない。故に稽古場及地方巡業中には此投げの手をも研究して置く必要がある。若し君に此投げをも充分利かしむる程の技倆を附け加へたならば全く以て立派なる橫綱で、如何なる敵に對しても決して遜色なき大力士を完成することが出來る。請ふ勉めよや。

▽其意氣氣魄に敬意を表す

瀧田樗陰

◎大錦のやうな力士は僕は餘り好きでない。組んでもよく、離れてもよく、腰も強く、足も利き、手に變化のある兩國の如き力士や、又角力上手（じやうず）の鳳や栃木山や玉手山のやうな力士の方に段々と興味が深くなつて行く僕には大錦のやうな相撲振りは見て餘り面白くない。只彼が勝たずんば卽ち死する底の眞劍な意氣込を以て敵に對するの態度丈けは全く敬服の至りで、此意氣、此氣魄卽ち彼をして榮譽ある橫綱の地位を贏ち得せ

しめたのみならず、又實に我國技館土俵上の一大精彩であり、且つ社會各方面の人士に向つて、意氣と氣魄が成功の第一義であることを深く感得せしむるに足るものがある。

◎彼の體格はもとより大力士として耻しからぬものである。其光澤のある赤黑き皮膚の色、其稜起れる肩、其便々たる腹、肥れるも堅く引緊れる肉附、餘り高くもないが決して低くからぬ其上丈、一として缺點といふべき程の缺點はない。けれども只體格丈けを以て論ずるならば、元の高見山でも今の大簪でも乃至鶴渡りでもさう大した逕庭がないかも知れない。只彼の此體格に息を吹き込んで、一個の烈々たる火の如き大肉彈たらしむるものは、彼の仁王の如き面魂を透して覗はるゝ彼の肚裏に燃えつゝある堅剛無比、强烈無二なる精神力の働きに外ならない。

◎僕は時々想像して見る。若し假りに大錦が場所運がわるくて、中日頃までに三つも黑星を取つたとしたら、彼に果して今のやうな意氣込が出るであらうか、又彼は果して十日間休まずに出場するであらうか。之が餘程面白い問題と思ふ。彼の今日の意氣、氣魄が何處まで好運及び好調子のお蔭で、彼の眞實の勇氣が何處まで根深きものであるかを知るには之が最もよき試金石である。

◎今度の五月場所に於て興味の中心となるものは云ふ迄もなく新横綱大錦の角力振であらねばならぬ。今の協會は興行本位であるから、勿論彼の如き人氣力士には容易に土を附けぬ工夫をする。即ち七日目位までは土を附けぬ爲めに成るべく安全な敵手にのみ取組まして八、九、十日目にならなければ本當の大敵と顔を合はさない。けれども此一月場所こそ全勝したれ、昨年の五月場所には彼も三つも黑星を頂いて居る。勿論彼は他の力士の如く横綱になつたからとて位負けがしたり、脆くなつたりすることはあるまい、否更に一層の勇氣を鼓して土俵に上るに相違はないが、然し敵手方にも亦是非共此新横綱に土を附けようとするの熱望が定めて猛烈な事であらう。今敵手方即ち東方を見渡した所、本當に彼に勝味のあるものは太刀山一人である。若し此場所に於て此兩横綱の對陣を觀たならば、今度は何としても太刀山の勝に極つてゐる。一月場所には錦に決死の覺悟あり、太刀に些か敵を輕ずるの態ありしが爲めに太刀の敗衂を見たのであるが、今度はどうあつても太刀の負けられぬ角力。さうなれば錦はまだ到底太刀の敵でないから此一番は必らず新横綱の敗と見ねばならぬ。鳳とは殆んど互角であるから此勝負は力倆よりも時の運に關することが多い。朝汐以下には彼は勿論勝味あるも、然し朝汐、大簪、眞砂石、大戸平等は彼にはなか〳〵安心の出來ぬ代物である。若し中日前に負けるやうな事があれば今度も亦三つの黑星は免れぬであらう。

◎彼の意氣精神と彼の努力勉强とを以てすれば今后兩三年の間は先づ彼の全盛時と見てもよからう。併し彼の如き體格は大正の角力道に於ては餘り永く有利の地位を占め得まい。變化自在、奇手縱横、俊捷輕敏にして勝敗を電光石火の裡に決するを以て最も有利なりとする現代角力道の大勢に於て、彼の體格は追々に重鈍に困み、寄身、吊寄の彼の專賣は大

策に躍悶に流れ、偸り久しからずして鼎の輕重を敵に問はるゝやうな事があるまいか。尤も今日の彼は稽古熱心の功によつて出足も早く、寄り身も早く、現代的角力の標本の如く見えるが、元來がさう早い技に適した體格ではない。物窮れば天に歸す、天成の體格は何時までも人力を以て掩ひ隱す譯には行かぬ。努力極り、全盛の峠を越せばソロ〳〵地金が出たがる。此點から觀察すれば、栃木山や、兩國などの取口の方が今后の角力道に於て彼よりも永續きしさうな氣がする。

◉彼に角力の手に於てはまだ〳〵稽古しなくてはならぬものがある。投げの如きは其隨一であらう。何時までも今丈けの取口では必らず窮する時あるに極つてゐる。然し彼に最も大切なものは矢張り、彼の意氣と氣魄である。意氣と氣魄が少しでも緩めば西の海たり大纒たるも難く、大いに緩めば第二の高見山鈍州君たり鍋渡の濟ちやんたらざることを誰が保障し得よう。若し彼からあの意氣、氣魄を除けば氣の抜けたビール所か、變味したビールにさへも劣る。若し彼の贔屓客などが、彼の負星を氣にし、中途にして休ましたり、大敵を買收したりする事があつたら、彼の彼たる所以と價値は全くゼロになる。勝負は時の運なり、横綱の空名何物ぞ。力一ぱいに角力つて他を顧るな。彼たるもの十日間全敗するとも出場せよ。些かの病氣位に怯むな。只今日までの意氣、氣魄を何處までも失ふな。然らば僕の如く彼を好まざるものと雖も亦彼に敬意を表するを辭するものではない。

▽近代相撲の代表者

時事新報記者　田中巖

今日の角力は、以前のやうな四つ身を主體とする力量本位、乃至は技巧本位では解釋されなくなつた。技巧よりは寧ろ立合本位、作戰本位、氣合本位といふ傾向を生じて來た。換言すれば今日の角力は、著しく實利的、巧利的になつて來て居る、『いくら角力に勝つても、勝負に負ければ何の役にも立たない』と云ふ感念が、力士をして巧遲よりも拙速を尊重させるやうになつて來た。従つて『技』よりも『勝』といふ側の研究が大に發達して來た、だから立上つてからよりも、立上るまでの角力が主になつてゐる、體形の上に表はれた爭鬪よりも、心術の爭鬪が勝負を支配することになつたのである。

而して私は、この新傾向派の代表者として大錦を上げる。太刀山、鳳、兩國、眞砂石などを始めとして、今の力士の大部分は此派に屬するものであるが、朝潮、綾川、玉手山等は過渡期を代表する人々であらう。

以前名力士と云はれた者は、皆な智の力士であつた、荒岩も、逆鉾も、兩國(入間川)も、梅ケ谷もそれ〳〵違つた方面に『智』を表現して能く名力士の稱を博した、併し彼等は未だ矢張り『力』を主とし『智』を從として、力の配下に智を働かしたに過ぎなかつた。然るに大錦に至つては恣に力を役使する智を有つてゐる、彼は智によつて何者をも解決しやうと

する、力はいつも智の役使に甘んじて動く。

大錦は世間に噂される程非力ではないが、併し其力量なり何なりは、鳳、朝潮等に比して決して優勢ではない、彼の今日あるは全く彼の聰明なる取口によるのである。彼は自己の力を最も有效に働かせる爲めに、必ず立合に於て機先を制する、先手の利は凡ての勝負事の第一要義である、一月場所の大錦對太刀山、鳳の角力を八百長だなどゝいふ者は、全然角力を知らないのである。

大錦はあの機を使用することに依つて最も安全な勝利を得られる、その機を有效に使ふには、どうしても立合に機先を制して敵の體勢を崩す必要がある、大錦は此の點に最も苦心しそして他人の企て及ばざる新發見をして居る、一月場所の敵手は悉くこの新發見の立合に依つて苦もなく破られて仕舞つた。

立合に『ヨーッ』といふ聲をかけるのと、立上つて攻勢に出る二ツの動作は、殆んど同時であるけれど、『立たう』と思ふ心持と、『相手が應じたらう、攻めやう』と云ふ心持との、二段の心理が動く間には、極めて短かい瞬間ながら一ツの空虚がある、大錦の發見したのは即ちこの空虚を窺ひ、空隙にその空虚を攻めるのにある。大錦を惡く言ひたがる人々の中には、ペテンに類すると云ふものがあるけれど、ペテンでは決してない、ペケン立とは相手が『誘ひをかけたけれど應じないな』と全然立合が終つてから立つのを云ふのである。大錦の立合はそんな陋劣なものではない。正々堂々たる立合である、故にペテン立ちは不可抗力であるけれど、大錦の立合は相手が大錦程の明敏な頭腦を有つて居るならば、決して常に機先を制せられる筈は無いのである。

▽予の大錦を贔屓にする所以

男爵　古河虎之助

私は一體角力はもとから好きな方ですが、特に大錦が好きになつたのは明治四十二年即ち彼が角力として初めて番附に載る前の年の事であつたと思ひます。それは彼が東京に來て間もなくであつて、確か彼の十八の年でした。其當時私等友人が自分達で角力を取ることが非常に好きであつたものですから、自分の家に小さな土俵を作つて、友達同志でやつて居ました。一日常陸山に逢ひました時に、極く下のものでよいから誰か君の所のものをよこして貰ひたいと話した。其時來たものゝ一人が即ち大錦であつたのである。

それから稽古をしたり、又いろ〳〵話したりして見ると、なか〳〵しツかりした所のある男で、學校生活をした事のある爲もあらう、恰度書生とでも話して居るやうな氣持がした。それから大變面白い人だと思つて當人の將來の希望などを聞くと餘程大きい志を抱いて居る。殊にあの男は親孝行で、親の事を話す時は何時も畏まつて話す。父は本當の産みの父で、母は違つて居るのであるから。父の事を思ふのは當り前と

も、感心な事には繼母に對しても深い敬愛の念を抱いて居る事である。繼母には非常に世話になつて居ると何時も話して居た。斯う云ふやうな事が私の氣に入つたので、それから段々心易くなり、今日に至るまで寧ろ友達のやうに交際(つきあ)つて來た。

彼が今日横綱になつても昔褌擔ぎをして居つた時分と一向氣分は違はない。横綱は此頃の事だから別として、幕内になつてもなか〳〵昔の事を忘れず、禮義を重んじ、時間といふやうな事もちやんと勵行して、約束なども一度も違へた事はない。

力士としての評論ですか。それは私の如き贔屓のものには出來にくい。人によつて非力だとか、横に弱いとかいふやうであるけれども、私共は贔屓目の方だからさう云ふ事は分らないが、確かに立派な技倆ある人とは思ふ。然し昔の雷電とか又は常陸山とか云ふ大力士になれるかどうか。之れ贔屓のものには却つて分らない。

私は大錦を茶屋などに連れ出すことを好まず、一所になれば偕樂園あたりで飯を喰ふことにしてゐるが、何時か私の先生の杉山三郊といふ人と大錦と三人で飯を喰ふた事がある。其時杉山先生は油斷大敵の四字を書いて大錦に與へ、且つ其意味をもよく話して聞かした。其後此語(ことば)は餘程深くあの人の頭に浸み込んで居るやうである。あの人は字も相當に書くが、時々自分で油斷大敵の四字を書くのを見ても如何に此事を深く考へて居るかゞ分る。

彼は又非常の師匠思ひで地方巡業中などは師匠(出羽の海)の留守宅へよく其地方〳〵の名産などを送るらしい。又あの人は酒も飲まず、平常無口の方であるから、非常に愉快に話すと云ふ事もないが、それでゝ時時ヒヨイと意想外の洒落を云つたりして我々を笑はすこともある。こんな取留めのない話で御免を蒙ります。

評論

内外時論

法學博士 古川學人

總選擧後の政戰と國民黨の責任

（一）

政府構成の形式を超然主義に取るべきか政黨主義に取るべきかは、憲政の發達上極めて重大な問題である。之を單に形式の爭なりといふ一言の下に輕視するは淺薄の見たるを免れない。假令戰時であらうが、疾うの昔に決せらるべくして而かも久しく決せられざりし此の重大問題が、茲に或は解決の端緒を見出し得べしとせば、今次の政爭は決して無意義なものと見ることは出來ない。只今度の政爭の結果、此の多年の宿題が、果して解決の端緒を見出すや否やが問題である。而して思ひ一度此事に及ぶ時、我々は自ら此際に於ける**國民黨の責任**の重大なるを考へざるを得ない。

總選擧の主題たる超然主義・政黨主義の爭を、政界今日の具體的問題となせるは國民黨の功である。無論、國民黨のイニシャチーブを取ることなかりしとするも、憲政會は恐らく同じく不信任案を提出したであらう。けれども國民黨の此問題について憲政會と提携することなかりしならば、反政府軍は、遂に議會の解散を導くに至りし程、其勢容を大にすることは出來なかつた。して見れば、國民黨は、兎に角、今次政戰の口火を切りしの功を認めらるべきものである。果して然らば、國民黨はまた今次の政戰に於ては勿論、總選擧

後の政局に立つても、同じく超然主義の潰滅の爲めには、飽くまで全力を注がねばならぬ政治上の義務を負ふて居ると言はなければならない。

（二）

總選擧後の政局は如何になるであらうか。本論文は總選擧の前日を以て起草せしものなるが故に、右の點は一に想像によつて推測するの外はないが、殆んど起り得べからざる「場合」は總て之を問題外に置けば、總選擧後の政局は、恐らく政友會と御用中立の一團と合して優に議會に過半數を制するか、或は憲政會と國民黨とが之に反政府中立の一團を加へて過半數を制するか、其の何れかであらう。而して政友會は已に政府黨を以て人も許し自らも任じて居るが故に、若し之が御用議員と合して議會に過半數を制するを得ば、超然主義は玆に立派に勝を制して、解散を賭して爭はれたる問題の解決は、一段落を告げたことになる。無論之は終局に安定したる解決とは思はれない。予輩の如き常に政黨主義を信ずる者の眼から見れば、超然主義の勝利は之を以て一時の變態と認むるの外はないからである。けれども、兎も角も次期の總選擧までを壽命として、超然主義の勝利を占めた事だけは認めなければならない。尤も今度の總選擧の結果、政友會のみで優に過半數を制するを得ん乎、問題は或は少しく違つて來る。卽ち例へば內閣の改造を迫つて閣員の地位若干を政友會に與へしむるか、或は現在の閣員の若干をして之に入黨せしむるか、之等を條件として寺內內閣を援助すること、宛かも彼の山本內閣の如くならしめんと要求するかも知れない。政友會は、過去に於て其絕對過半數を制し得たりし時でも、官僚閥族と妥協して其地位を維持するに慣れて居るから、政黨主義を以て徹底的に奮鬪せんことを求め難いやうにも思はるゝけれども、然し、官僚閥族を牽制して幾分政黨の勢力を張ることは全く期待し得ないこともあるまい。けれども政友會が單獨で絕對過半數を制するといふことは、殆んど想像することが出來ないから、若し政府側の勝利といふ時は、之を政友會のみの勝利と見んよりは、寧

ろ政友會プラス御用議員團の勝利と見るべき場合であらう。

之に反して若し總選擧の結果が政府反對派の勝利に歸せりとせば如何。此場合にも若し憲政會のみで絶對過半數を制するといふことになれば、問題は頗る簡單である。何となれば、彼が直ちに不信任案を提げて戰を現政府に挑むべきは疑を容れないからである。併しながら、多くの人の豫想するが如く、憲政會は國民黨と相合するに非んば、過半數を制する反政府團を現出せしむるを得じとすれば、不信任案を提げて挑むところの對政府の戰爭は、專ら國民黨の嚮背によつて其勝敗を決するものと言はなければならない。是に於て國民黨の態度は總選擧後の政界に於て最も吾人の注目を惹くことになる。而して超然主義・政黨主義の爭に多大の興味を感ずる我々に取つては、殊に此點が氣にかかるのである。

（三）

國民黨は多年平民の友として知られて居る。閥族官僚の最も熱心なる反對者として知られて居る。政黨政治は彼の理想、超然內閣は彼の宿敵、此等の點は總ての政黨に共通の題目なれども、特に國民黨の主張に於て最も鮮明に說かれて居つたのである。現に彼は今次の政戰に於ても寺內內閣を攻擊するには殆んど餘力を殘さなかつたのである。併しながら國民黨はまた憲政會を以て同じく不俱戴天の政敵と見做して居る。前大隈內閣の時には、彼の地盤は甚しく憲政會の爲めに蹂躙された爲めにや、彼は寧ろ却つて政友會に接近して憲政會に當つたのであつた。然るに今や元の友黨たりし政友會は現內閣に接近して來た。是に於て彼は其年來の主張を固執して超然內閣を打ち倒さんとせば、多年の政敵たる憲政會と提携せざるを得ないことになつた。茲に國民黨の苦心がある。此苦心に對しては吾人も大に同情を表するに躊躇せぬ。蓋し國民黨は、進んで超然內閣と戰はざれば、多年の主義に忠ならざるの譏を免れず、さればとて又超然內閣の打破に全力を注げば、少數黨の悲しさ、功名と利益と二つながら憲政

會に奪ひ去らるゝの恐がある。我々の如き局外の政治研究者をして言はしむれば、第三少數黨の運命は畢竟常に如斯きもので、是れ偶々憲政の運用に於て第三黨の結局存立し得ざるを證明するものであると思ふけれども、併し已に多年苦鬪の歴史を背景として多少の勢力を政界に占め來つた國民黨としては、勞せざれば世の譏を受け、勞するも亦功を他に奪はるゝといふことは、到底其の忍び得ざるところであらう。故に國民黨にして若し主義に忠實に且つ自黨の立場を十分擁護せんとするならば、一方には飽くまで現内閣反對の旗幟を振り廻はしつゝ、他方に於ては其點に於て利害を同じうする憲政會の勢力にも反抗するの必要に迫らるる。之れ現に國民黨の取つて居る態度ではないか。國民黨が先に不信任案の提出に於て憲政會を誘ひながら、解散と同時に殆んど掌を飜すが如く憲政會に反噬するに至つたのは、強ち兩黨の領袖間に多年蟠つて居る感情の阻隔にのみ因るものではあるまい。

以上の如き事情から、國民黨は今度の總選擧に於ても憲政會に向つては頗る烈しく惡聲を放つて居る。其結果として閥族打破を標榜する勢力が夫れ丈けそがれることは勢ひ免れない。是に於て人或は國民黨の態度を疑つて、彼の本來の意志は憲政會の打破にあつて閥族の打破にあらず、現内閣不信任案を提げて起ちしは、偶々之によつて憲政會の多數を破るの機會を促さんとせしにありと言ひ、又或は國民黨は已に政友會と通じ、來るべき政局に於て暫く現内閣の存續を許さんとすと誣ふるものあるに至る。併し之れ恐らくは表面皮相の見に非ずんば誣妄の評であらう。予輩は今仍ほ國民黨の反閥主義は終始渝らないと信じて居る。偶々憲政會に對する態度に於て世上の疑を蒙つて居るのは、只前述べた如き已むを得ざる事情に出でたものであらうと思ふ。若し否らずして國民黨が果して心から節を變じて閥族乃至政友會と聲息相通ずるに至れるものなりとせば、彼は最早精神的に其獨立存在を捨てたものと言はなければならないからである。

國民黨が少數なる第三黨の悲しさ、政界の波瀾に際

して常に明確なる態度を取るに多大の苦痛を感ぜしは今に始つた事ではない。今度の政變に際しても固より此感あるが、先年の山本内閣末年の政變の際も亦同樣であつた。總ての政黨が悉く政府に反對すること例へば最後の桂内閣成立當時の如き場合に於ては、彼は最もよく其能力を發揮する。併し常に多數の横暴に反抗するを以て生命となし來りし彼は、今度の樣な、兩大政黨の相爭ふ場合に於ては自ら其去就に迷はざるを得ないのである。現に今度の政爭に於ても、犬養氏の言論に既に徹底的の意見を認め難きのみならず、二三領袖の言説には爭ふ可らざる明白な矛盾がある。即ち甲某は來るべき新議會に於て亦必ず率先して不信任案を提出すべきを説くに拘らず、乙某は政府にして政友會と提携し、所謂超然主義を形式上撤退する以上は、强ひて反對するの理由はないと説いて居る。斯く領袖間の意見が既に矛盾して居る以上、世上一般が國民黨の態度に多少の疑惑を抱くのは、亦無理からぬ次第と言はざるを得ない。

（四）

國民黨の立場として、紛糾せる政局に際して明確なる態度を取るに苦むものあることは予輩之を諒とする。併しながら我々の切に國民黨に望むところは、常に其根本の大義を離れざらんことに在る。黨の利害も大事でないとは謂はない。

勞して功を他に奪はるゝも心外であらう。況んや功を奪ふところの他黨は、多くの點に於て彼と相容れざるものなるに於てをや。併しながら、餘りに此等の點を顧慮することによつて、最も大事な對閣運動の鋒先を鈍らすが如きは、吾人の斷じて國民黨に望むところではない。況んや對閣運動の勝敗は、實に國民黨の嚮背其物によつて決せらるゝの運命にあるに於てをや。而して超然主義・政黨主義の爭が、我國憲政の發達の上に極めて重要の意義を有するものなる以上、國民黨は須らく此大義の爲めに總ての感情と行掛りを放擲して、其全力を傾倒するところなければならぬと思ふ。

予輩は國民黨の誠意を信ずる。彼は官僚閥族の打破

の爲めに、一度忍ぶべからざるを忍んで憲政會と提携した。是れ國民黨に取つては實に大なる讓步であつたらう。對閥運動に提携したからと言ふて、他の總ての點に於ても憲政會との提携を强ふるのは餘りに蟲が善過ぎる註文である。故に解散以後、國民黨が直に憲政會に對して全く從前の反抗的態度に復し、總選擧に於ては大に責むべきを責めて毫も假借するところなかりしは、之れ必ずしも咎むべき事ではない。尤も閥族打破といふ大事の爲めに、恨を呑んで彼此相援けん事は、予輩の私に希望せしところではあつたけれども、選擧提携などゝいふ事は、今日の大選擧區單記の制度の許に於ては到底出來るものではない。現に味方同志ですら、互に暗鬪を恣まにして居るではないか。故に選擧で互に惡聲を放つて居るのは、感情問題といふよりは或は制度の罪に歸すべき問題であるかも知れない。故に予輩は今度總選擧に於て、國民黨の憲政會に對して執りし態度をば必ずしも責むるものではない。けれども閥族打破は天下の大事である。故に總選擧後の來るべき政局に於ては、他の一般の問題については兎に角少くとも閥族打破の運動に於ては、國民黨は再び憲政會と提携して其年來の宿志の到達に努むべきである。斯くせされば國民黨の國民黨たる面目も立たない。理屈は如何樣にもつくものであるが、政府は既に政友會を友黨としたるが故に不信任の口實消滅せりなどゝ言ふのは、以ての外の變節である。予は國民黨の面目の爲めに討閥の旗を藏めざらんことを切望する。而して國民黨が斯の如き態度に出づることは、獨り國民黨多年の苦節を全うする所以たるのみならず、又實に我國憲政の發達の爲めに大に貢獻する所以でもある。

米國參戰の文明的意義

四月六日大統領ウイルソンは米獨兩國間に於ける交戰狀態の成立を宣言した。取りも直さず宣戰の布告で

ある。二月三日國交斷絕を聲明してより玆に二ヶ月の間隔を置いて居る。當然到るべき處に落ち附くにかゝる長月日を費したのは如何にも緩漫であるけれども、之れ民主國の常として止むを得ない。唯緩漫なれども其踏み進む一歩々々の、極めて堅實であつた事は之を認めざるを得ない。何と云つても國民の輿論を此處まで持つて來た大統領の忍耐と努力とは見上げたものである。

二月三日國交斷絕を聲明してより以來、米國は暫く獨逸の反省を求むるの態度を採つて居つた。獨逸の態度に何等改むる所無かりしを見るに及んで、大統領は愈々米人の權利を保護する爲め必要なる最後の手段に出づるの決意をなした。二月二十六日兩院に向つて獨逸潜航艇の威嚇に反抗する爲めに商船の武裝をなす事に合意を求むるの、所謂武裝中立案の提出は卽ち之れである。三月二日下院は十三に對する四百〇三の大多數を以て通過し、四日上院の討議に於ても無論同じ割合で通過すべく思はれたのが、非戰論者の妨害（オブストラクシヨン）によつて決定を見ずして閉會するの止むなきに至つた。此結果一時大統領は近々特別議會を召集し、先づ議事規則の改正によつて少數派の妨害（オブストラクシヨン）を防ぐの方法を講じ、其上にて武裝案の決定を求むるといふ風に評判されたが、其間大に民論の開發指導に努めたので、四月二日召集したる臨時議會に於ては、大統領の演說は非常に熱烈なる歡迎を受け、兩國間の交戰狀態の成立を宣言すべしとの案は、長時間の討論の後四日二に對する八十二の多數を以て通過し、六日下院を五十に對する三百七十三の多數を以て通過し、卽日之を天下に布告した。

米國の宣戰布告の直接の結果として起る所のものは、第一には軍事的協同動作である。聯合國と實際的に協同して獨逸を壓迫するの目的を達するに努むべしといふ事は、四月二日の大統領の演說の中にもあつた。又其爲めに必要なる協議は、海軍當局者の間には已に初まりつゝあるといふ噂もあつた。陸軍については新たに五十萬人を募集して、其幾分を歐洲に送る

いふやうな說もあつたが、要するに如何なる方法と範圍で戰爭に協同するやは、今日未だ明かならざれども、近く華盛頓に於て此等諸國の會議を開き、英國よりはバルフォーアが派遣され、四月十六日紐育に着いたといふ事であれば、米國が事實上戰爭に協同すべき事丈けは疑ない。第二には財政的援助である。米國は其豐富なる財力を以て極力聯合國を援くべしといふのである。七十億軍事公債案は滿場一致を以て四月十四日下院を通過し、同じく十七日上院を通過した。其中三十億は協商國に貸す爲のものである。而して米國の財政的援助は、單に其金高の多い許りでなく特に自國政府の信用引當に極めて低利の資金を融通するといふ點に特色がある。足元を覗つて高利を貪らざる所に、我我は米國民の高義を窺ふ事が出來る。第三に米國は政治上更に聯合國の同盟即ち單獨不講和同盟に加入するや否やは一つの問題であるが、今日の所米國は加入を欲せざるやうである。米國は獨逸に向つて宣戰はしたものゝ、戰爭によつて終局達せんとする目的は必ずしも協商各國と同一ではない。既に本年の初め以來屢々發表せる大統領の演說に於ても明かなるが如く、米國は戰爭の目的を達する爲めに如何なる程度まで獨逸を苦むべきやについては、大いに英佛側と意見を異にするものゝやうである。故に米國は固より決して姑息の平和を望むものでは無いけれども、聯合各國の未だ十分に滿足を得ざる前既に講和の期到れりと見る場合があるかも知れない。故に單獨不講和同盟に加入して協商各國の行く所まで引張らるゝといふ事は其欲する所ではあるまい。故に政治的同盟には加入しないと見るのが誤り無き見解であらう。

米國宣戰の結果が戰局を如何に影響するやは今日の所未だ分らない。米國の與へ得る實力的援助の程度が尙不明であるからである。然しながら其敵味方の國民に與へたる精神的の影響に至つては、固より極めて大なるものがあつたに相違ない。若し夫れ米國の蹶起に續いて中南米諸國の反獨的風潮に至つては、啻に精神的影響のみならず現實に獨逸との直接間接の交通を弱む

ることによつて、恐らく多大の物質的苦痛を與ふるものがあらう。併しながら此等當面の影響よりも米國の參戰について最も我々の注目を要するは、戰後に於ける、若くは少くとも講和時期に於ける米國の活躍である。今度の參戰によつて米國は兎も角も講和談判に於て、又戰後多くの世界的問題に對して有力なる發言權を得た。從つて今次の戰爭に關する米國輿論の主張は相當に重きを爲すと見なければならない。而して米國が今度の戰爭に關聯して最も強く主張せんと欲する所の題目は、四月二日の臨時議會の開會に際し大統領の爲せる演説にも有るが如く、第一には小國の權利を尊重して大國をして濫りに之を蹂躪せしめざる事、第二には平和の保障の爲めに有力なる世界的協同組織を建設する事、第三には軍國主義的專制政治の絶滅を期して、平和を威嚇する禍因の一掃を期する事、第四には海洋自由の原則を確立する事である。此等の思想のどれ丈け尊重せらるゝやは戰後の文明の進歩の上に非常な關係がある。

露國革命の戰爭に及ぼす影響

（一）

露國の革命が戰局發展の上に如何なる影響を及ぼすべきやは、今日のところまだ明白に斷言することは出來ない。革命の發生を促した一つの原因は、廟堂より親獨分子を一掃するといふ事であつたから、革命の成功は卽ち對獨戰爭熱を強むる譯であるけれども、官僚を共同の敵として戰つた革命主義者の中には、下層階級の間に勢力ある社會主義者の一派もあるので、此等の者の間には昨今段々講和論者が現はれかゝつて居るから、今日のところでは政府が果してどれ丈けの決心を以て戰爭繼續の爲めに盡力し得るやは聊か解らなくなつた。蓋し政界の狀態は混沌として未だ歸着するところを知らない。各種の勢力の間に介在する假政府としては、甲の説を排して專ら乙の説を取るといふ樣な

譯に行かぬ事情もあらう。されば戰局の發展についても、昨今段々色彩を鮮明ならしめつゝある立憲派——穩和なる中流階級に根柢を有する——と民主派——過激なる下層勞動者に根柢を有する——との對立の關係が、結局如何に歸着するやを見るまでは、今後の豫測は十分につけ難いのである。有力なる共同の敵の在る間は、同志の者の一致協力は十分に保たるゝも、一旦成功を見るの曉には漸く極端と極端との反撥が現はれ、それより漸次黨派的內爭の勢を馴致するは、總て此種の革命運動に共通の現象である。露國でも今や立憲派と勞働派との對立は明かになりつゝある。

所謂立憲派は、前にも述べた如く、比較的中流の階級に根柢を有するものにして、內政上に於ては止むを得ずんば共和國を妨げずとするも、出來得るなら君主立憲で行きたいといふ思想の傾向を有するものである。而して此派の戰爭に對する考は、第一には、飽くまでも協商國と步調を合はすことである。第二には、獨逸の軍國主義を破る爲めには最後まで戰ふを厭はないといふ事である。第三には、將來に於ける平和保障の爲めには、他國の內政に干涉するも已むを得ぬと認むる事である。即ち墺洪國の內政に立ち入りて其人種關係を整理するとか、又同じ趣旨を以て土耳古の內政に立ち入りてアルメニアを土耳古の勢力の外に置くといふが如き之れである。第四には、將來に於ける露國の安全若くは發達の名義の下に、外國領土の多少の奪取を主張することである。主として問題となるものは、ダーダネル、コンスタンチノーブルの支配權であらう。此方面の支配は露國の經濟發展の上には極めて重大の關係がある。近來露國の經濟的中心は段々南に向つて居る。從つてダーダネル、コンスタンチノーブルの安全な支配を得るは、露國の經濟的發展に光明ある將來を見る爲めに絕對に必要であると謂はなければならない。中流階級は即ち經濟的階級なるが故に、彼等が特に此要求を熱心に主張するは怪むに足らない。次に所謂勞働派は、下層社會に根柢するものにして、內政上に於ては急進的民主共和制を主張して居る。彼等

の思想上の指導者となつて居る社會主義の連中は、先に中央戰時工業委員會なるものを組織して、下級勞働者並びに兵士の間に活動して居つたが、革命後は勞働者兵士聯合委員會なる名稱の下に更に一段の勢容を張り、陰然として立憲派に對する一勢力を爲して居る。

而して今彼等の戰爭に對する思想を見るに、第一には、屈辱的に戰爭を終止するは好まざるも、然し戰爭の繼續は全然自衛の目的以上に出づべからずといふ事である。第二には、侵略的目的の爲めにする戰爭は絶對に之を認めずとする事である。從つて、講和條件の中にも領土の奪取とか、償金の請求とかいふやうな箇條は含まるべからずと主張して居る。從つて、ダーダネル、コンスタンチノープルの處分についても、此派は前派と全然其見るところを異にする。蓋し此等の地點の支配が露國經濟の發達の爲めに如何に必要であると云ふことも、所謂經濟の發達によつて主として利益するものは中流階級のみとするが社會主義者の迷信なるが故に、彼等は此等の地點の獲得といふ問題には甚だ同情を缺くのであらう。第三には、以上の趣意は協商國に對しても其同意を求むべく、若し其同意を與へざれば我等は最早之と歩調を合はすの必要はないといふ事である。尤も徒らに孤立するは固より彼等の望むところにあらざるが故に、同時に協商國内に於ける同主義者を促し、彼等をして各々自國政府を動かさしむるに努むべしといふて居る。從つて第四に、彼等が速かに戰爭を止めて平和の克復を急がんとするものなる事は云ふを俟たない。何故なれば、已に戰爭の目的を自衛に置き、總ての關係國をして一樣に侵略的目的を棄てしむるといふ事であれば、戰爭の繼續は全く無意義であるからである。

以上の二派の何れが今後の政局の中心勢力となるかは、戰局の發展に重大の關係ある事は、云ふを俟たずして明かである。前者が勝を占むれば、更に準備を整へ、一旦革命騷ぎの爲めに緩融したる士氣を引き締めて、一層活潑に戰爭を繼續するであらう。けれども若し後者が勝を占めん乎、交戰國としての露國の態度は自ら

全然消極的とならざるを得ない。尤も彼等は、後に述ぶるが如き理由により、獨逸と單獨講和を結ぶといふ様な事はあるまい。獨逸が攻勢を取る以上、彼等は之に對戰する事を辭せざるべきも、英佛と同じ熱心を以て獨逸に對して積極的逆襲を試むるかは、幾分怪しいと云はなければならない。目下此兩派の何れが假政府に對して重きをなして居るかは分らない。四月中旬の報によれば、假政府は一方には他國領土の無用なる奪取を避くべきを宣明すると同時に、他方には戰爭の遂行については飽くまで協商國と其歩調を一にすべき事を述べて居るといふから、如何にも双方に氣兼ねして居る様子が想像される。されば目下のところ疑のない點は、いよ／＼決心して活潑に戰爭を繼續するといふ事になるには、何れにしても今後中々時がかゝるといふ事である。一方に於て米國は大いに援助を與へると言ふて居る。現に特に此事を露國政府に申し込んだといふ報道さへもある。それでも露國は今後暫らくの間は、不活潑なる態度を繼續せずばなるまい。

(二)

露國の不活潑なる態度を見て、之と獨逸との間に單獨講和の成立を想像するのは恐らく謬であらう。無論昨今の新聞の報道には露國に於けるダーダネル、コンスタンチノープルの放棄説を傳へ、甚だしきは無條件講和説の流行をも報道して來るのであるが、然し予輩の見るところでは、假令社會主義を奉ずる民主勞働派が、近き將來に於て政界の主人公となつても、恐らく從來の儘の獨逸と單獨講和をするが如き事は、斷じてあるまいと思ふ。何故なれば、彼等が平和の理想を揭げて獨逸と單獨講和を結ぶといふ事は、其結果英佛を害して獨墺を利する事になり、益々全局に亙る平和の成立を困難ならしむるからである。彼等の平和論が、露國民丈けの姑息の平和を希望するものにあらざる限り、所謂平和論と單獨講和とは、全然相容れざる事項である。彼等の平和論が、戰爭に疲れた結果一刻も早く此苦痛より脫したいといふ窮迫の餘り前後の辨へもなく唱へたものならば格別、從來一般の社會主義者に

見るが如く飽くまで單純なる抽象的理論に基いて其年來の宿論を露骨に宣明したものであるとするならば、彼等が其平和論の前提として自ら捨て且つ協商國をも促して之を捨てしめんとする所謂侵略的目的は、同じく獨逸をして亦之を捨てしめずんば止まないだらう。敵味方總て之を捨てた上で、初めて平和を談ずべきである。其上でなければ單獨講和は問題にならない。而して彼等が心を安んじて獨逸と單獨講和をなし得るの時は、即ち凡べての國が獨逸と講和をなし得べき時に外ならない。故に獨逸が今迄通り官僚閥族の支配の下に立つて居る以上は、露西亞は到底之と單獨講和を結ぶの餘地を見出し得べき道理がない。昨今獨墺政府の旨を受けて社會黨の名士シャイデマン、アドラーの輩がストックホルムに來て居るとか、又瑞典の社會黨領袖が四月初旬露都に來り、次いで丁抹よりも一人の領袖來るべしとか、如何にも瑞典・丁抹を通じて露西亞の社會黨と獨墺の社會黨との間に連絡が有るやうに報道さるゝけれども、之に依つて我々は、露西亞の社會黨が獨墺政府の小策に乗ぜられんとして居るものとは思はれない。シャイデマンは獨逸社會黨の名士にして、其最も過激なる派に屬する人、絶えず議會の壇上より皇室を戒め、宰相を罵り、由來官僚政治の痛快なる攻撃者として知られて居る。若し夫れアドラーに至つては、墺國社會黨の中興の祖にして、彼の組織的手腕は、極めて不統一なる各派の勞働組合を結束して、官僚政治に對する有力なる一敵國たらしめた。墺國が先年普通選擧を布くに至つたのも、皆彼の盡力の結果である。されば此兩人は、最も自由思想並に平民政治の理義に徹底せるの人、容易に官僚政治の傀儡となるやうな人物ではない。故に予輩は獨墺政府が斯の如き人物を密使として之に國家の大事を托したといふ事それ自身を信じない。二三の新聞は、却つて、獨墺が露國社會黨を籠絡するよりも、革命に成功して今や活潑なる元氣に滿ちて居る露國の社會黨の方が、却つて獨逸の社會黨を動かすだらうなどゝ言ふて居るではないか。更にまた四月三日の電報によれば、露國の社會黨

は、英・佛・白・伊の社會黨と打ち合せをなさずしては、單獨講和などをしないと宣言したといふて居る。十八日の發電は、更に露國假政府の閣僚が英佛兩國の社會黨代表者を引見して其祝辭を受け、又熱心に之を歡迎したといふ事を報じて居る。故に予輩は思ふ。獨逸も亦官僚政治を顚覆して社會黨の天下となつて來なければ、容易に露國と和して此仲間に入つて來ることは出來まいと。

且つ又露獨の間に單獨講和の成立するは、前にも述べたるが如く、獨逸をして其東方に備へたる兵力を西に移す事を得しむるものであつて、事實に於ては英佛に敵對するの行動に等しい。斯の如き重大の結果を生ずる事を、親獨派の一掃を目的として革命を起した人民が之を默許する筈もなく、又革命に多少の援助を與へ、且つ其後の政局の發展に對し熱心なる監視の眼を瞪つて居る英佛が、之を袖手傍觀する筈もない。故に假令假政府が眞に單獨講和に意があつたとしても、之が實行は内外の形勢上頗る困難であると言はなければならぬ。

（三）

要するに、社會黨が動もすれば講和論を掲げて戰爭の終止を説くのは、一片の理想論に過ぎない。獨逸が現狀のまゝで居る以上講和の行はるべからざる事、場合に依つては此上尚獨逸と戰爭を續くるの必要あるべき事は、彼等とても全く知らぬ譯はない。然らば此際漫然平和などを口にして士氣の弛頽を來たすやうな事をしない方がよからうと思はるゝのであるが、斯かる情實を顧みず抽象的の主張を露骨に掲ぐるところに、實は社會黨の社會黨たる眞面目がある。先きに今度の戰爭の勃發に先つこと半月、即ち一九一四年七月半ば佛蘭西の社會黨は、或は起ることあるべき戰爭に對する態度を決定せんが爲めに大會を開いた事がある。從來社會黨は、其非戰論の立場から、政府の戰爭加入を妨ぐの最良手段は軍器彈藥の製造所となるが如き直接軍事に重大關係のある工場で大同盟罷工を起すに在りといふ事を年來主張して居つたのである。そこで今度

の戰爭でも、此態度を宣明すべきや否やといふのが、當時の大會の討論の主題であつた。此時集つた黨員の議論は、世界の總ての社會黨が皆同樣の態度を取るならばよろしいけれども、然らずして我國の勞働者丈けが此措置に出でゝは、佛蘭西丈けが非常に損する事になる、故に今度は之を宣言しない方がいゝといふ說と、いや事實はさうであらうが、然し年來の主張は之を一朝にして捨てる譯には行くまい、よつて「萬國の勞働者が同時に決行する」といふ條件の下に、我國の勞働者も此手段に出づるといふ宣言を發表しようといふ說と二つに分れた。前說はゲスド之を主張し、後說は有名なヂョレース之を主持した。而して萬國の勞働者が同時に決行するといふやうな事は、事實行はるべき事でないから結局兩說は事實に於て同じ事なのであるけれども、兎に角矢釜しく討論せられ、遂に後說が僅少の多數を以て可決せられたのであつた。社會黨が動もすれば抽象的の理論を掲げて之が實際の適用如何を省みざること、概ね斯の如きものがある。露國社會黨の平和論の如きも亦此類のものでないとも限らない。

唯露國社會黨の主張は、露國の容るべき最小限度の講和條件——而かも著しく思ひ切つて低い程度の講和條件——を提示するものといふ點に於て、將來の平和恢復の上に非常な意味があるといふ事は云へる。講和條件の程度については、米國も亦英佛側と共觀る所を同じうせざる事は別項に於て既に之を說いた。故に露國に於て社會黨が勢力を占むるといふ事は、米國が有力なる交戰國の一つとして參加し來ることゝ伴つて、將來英佛側の主張する講和條件を緩和し、以て平和回復の機運を速かならしむるの効は絕無ではなからうと思ふ。若し昨今の新聞が傳ふるが如く、獨逸も亦大勢に動かされて其政治組織を改め、漸次自由派の勢力を占むるに至る事が事實であるならば、平和回復は案外早く來ないとも限らない。

獨逸に於ける自由政治勃興の曙光

(選擧法改正の議)

(一)

四月一日の西電は、獨逸の帝國議會に於て、國民自由黨の提出に係る「憲法問題調査委員會設置案」が三十三票に對する二百二十七票の多數を以て可決せられたるを報じた。此案の目的とする所は民權伸張の着眼點より諸種の憲法問題を研究する爲め二十八名の委員を擧げて調査會を設置すべしといふに在り、就中最も力を入れて研究すべきは現在の帝國議會は果して完全に民意を代表して居るや否や、又現在の如き議會對行政府の關係は民意伸張の本旨に協ふものなるや否やの二點であるといふ事である。

更に四月九日の西電は、獨逸皇帝即ち普魯西國王が其政治機關改革の要求を容れ、殊に其下院議員選擧法に根本的改革を加ふるに同意し、新たに其主意の法案の起草及び提出を政府に命じたといふ事を報じた。

之より先き三月の末頃から、帝國議會に於てもプロシャの議會に於ても、それ〳〵改革要求の聲が頓と盛んになつたといふ事であつた。中にもプロシャ選擧法の改正は啻に普國議會に於てのみならず、帝國議會に於ても亦盛んに主張されたといふ事であつたが、以上二個の電報によつて見れば、今や從來の政治組織を根本的に改革して、民本主義の要求を今後の政界に徹底せしめんとするの思想は、帝國に於ても將た又プロシアに於ても、將に實現せられんとして居ることが解る。之れ實に獨逸の政界に取つては非常な大事件である。而して斯の如き大事件の突發を促した原因は、三月央ばに於ける露西亞の革命に在ることは亦多言を要しない。露西亞に於ける革命の成功は從來先づ墺國に波及し次いで獨逸に及ぶを常とするが、墺國より未だ格別の報道に接せざるに、吾人は今や獨逸が適確に其影響を蒙りつゝある事を耳にするのである。何れにしても

露國革命の成功は、今や世界に於ける最後の專制的文明國たる獨逸を促して、漸く多年の迷より覺め、眞個民本主義の國家たらしめんとして居るのである。

何を以て獨逸並びに普國今次の改革案が、同國の政界に取つての一大重要事件なりと言ふか。帝國并に普國に於ける今次の改革案は、共に選擧法の改正といふ事に觸れて居るが、元來此の兩者の現行選擧法は甚だしく舊式なものである。其結果は卽ち兩者に於ける官僚の跋扈を助け、獨裁專制政治の存續を便にし、從つて危險なる軍國主義の繁昌を促したので、爲めに何れ丈け內に對しては自由政治の發達を妨げ、外に對しては國際間の平和を脅かしたか分らない。されば若し是等の選擧法にして一度近世的に改正せられんか、獨逸は則ち一轉して他の立憲國と同じく名實共に眞の自由國となり、世界も亦其威嚇を免るゝを得るに至るのである。而かも此不都合なる現行選擧法は、實は官僚の據つて以て自家の利益を擁護する唯一の障壁と爲すものなりしが故に、從來彼等は極力其改正に反對し、遂に人をして尋常一樣の手段では自由政治の實現は到底絕望なりと思はしむるに至つたのである。而して今や政府並びに皇帝は、率先して之が改正を公約宣言せらる。之れ決して尋常一樣の事ではない。何となれば獨逸に於ける此點の改革は、實に官僚階級の勢力の顚覆を意味するからである。選擧法の改正などゝ言へば其意味甚だ輕く聞ゆるけれども、之が實行によつて生ずべき獨逸政界の變狀は、正に之を露國の革命に比するも必しも不倫ではないのである。而して斯の如き革命的變革を獨逸皇帝が此際率先して宣言するに至つたのは、是れ或は獨逸に於て露西亞革命の影響が極めて重大であり、從つて新に勃興せる民權の勢力の實に抑へんとして抑ふべからざるものあるを語るものではあるまいか。

然らば問ふ。何を以て帝國並びに普國の政治機關の改革が、獨逸現在の政界に取つて實に根本的改革を意味すると言ふか、次に少しく其評を說明しよう。

(二)

獨逸帝國に於て民意を表明する唯一の機關は帝國議會である。而して帝國議會の議員は、獨逸全國を通じて普く普通選擧の主義により、且つ直接・平等・秘密の原則によりて選出せらるゝから、此點に於て議會は完全なる民意代表の機關たるが如くも見える。併しながら、帝國議會の議員選擧法に於ては、選擧區の分割が著しく其當を得て居ないといふ難がある。其爲めに帝國議會は民意代表の名あつて其實に副はざるの現象を呈することゝなつた。而して此點の失當の原因は專ら同選擧法が帝國成立以來未だ一回も改められないといふ事に在る。

蓋し獨逸帝國議會の現行選擧法は、今より約五十年前の制定の儘である。當時獨逸の人口は三千九百七十萬で代議士の數は人口十萬人について一人といふ割合を以て三百九十七人といふ事に決め、之を三百九十七の選擧區に分配したのである。其始め各選擧區の人口は大概過不足なき樣に定められたのであつた。故に五十年前の制定當時には之で公平を得て居つたのであらう。が、然し其後人口の增殖と其移動とは實に甚だしい。されば當初の趣意を貫いて長く選擧權分配の公平を保たんとせば、時々人口の增加に伴ふ議員數の增加を行ひ、又人口の變動に伴ふ選擧區分割の改正を行はなければならなかつた。現に議員選擧法は此事を豫期し、人口增加に伴ふ議員定數の增加は法律を以て之を定むと規定して居る。然るにも拘らず政府は未だ一回も之が增加改正を行はず、又極力之を行はざらんと努めて居る。其結果として生ずる今日の不公平なる實例中最も甚しきもの二三を擧ぐるならば、シャウムブルグ・リッペは僅に四萬四千の住民を以て、又ラウエンブルクは僅に五萬の住民を以てして一人の代議士を出すに對し、同じく一人の代議士を出すに過ぎざるハンブルクの第五區は今日五十萬の人口を、又伯林の第六區は實に七十萬の住民を有するに至つて居る。總じて伯林は五十年前の人口六十萬より今日は二百數十萬に激增して居るから、依然代議士數を六人として置くのは正當でない。要するに今日、都市の住民卽ち商工業を

營む作民は、田舎の農業作民に比して、著しく不利益な狀態に置かるゝことゝなつて現れて居る。なぜなれば此五十年間に於て、第一には人口著しく都市に集中せるを見、第二には年々增加する人口は言ふ迄もなく田舎よりも都會に多いからである。而して此事實は實に全體の人口中の保守的分子が、議會に於て代表せらるゝ關係に於て、急進的分子に比し著しく利益して居ることを語るものである。

統計の示すところによれば、今日の獨逸帝國の人口は旣に六千萬を超えて居る。して見れば人口十萬人に付き一人といふ割合を立て通せば代議士の數は六百人以上に增さなければならない。今の儘で放任しては約十五萬人につき一人の割合になる譯である。而して十萬人につき一人の割合を貫く爲めに、假りに更に二百餘名の代議士を增加すとせば、其增員の多くが社會黨其他の急進主義の巢窟たる大都市に落つべきは明白疑を容れない。併し一擧に二百餘名の增員は餘りに急激である。そこで姑く此等の增員は急に之を行はないとしても、選擧區の分割だけは何うしても今日の儘に之を放任して置くことは出來ない。斯くて先づ此點を公平に改むるとすると、亦矢張り著しく社會黨乃至急進派の增加を見るべきは明である。何故なれば、人口の減少の結果廢され若くは合併せらるべき選擧區は主として農業的保守派の地盤であり、商工業的急進派の地盤は之に反して從來一區であつたものが二區にも三區にも分たれるからである。

今日の制度の許に於て如何に不公平なる結果の現はれて居るかは、一九一二年に行はれたる最近の總選擧に觀ても分る。此の總選擧で社會民主黨所屬の議員は一躍して百十名の多きに昇つたけれども、之を全體の議員數に比較すれば僅かに其二割七分半强に過ぎない。之を得票數の四百二十五萬を超え、全體投票數の三割五分弱なるに比すれば、不當に少いと謂はなければならない(票數の計算はすべて第一次選擧のに依る)更に其以前の總選擧の例を取れば、一九〇七年には得票數が二割九分弱なるに對して議員數は僅に一割、一

九〇三年には得票數が三割二分弱にして議員數は二割强といふやうな有様であつた。他の急進派も亦同様である。而して此等の急進的諸派が不當に損をして居るのは、即ち他の半面に於て保守派の不當に利益して居る事を語るものである。斯くして吾々は、若し帝國議會の構成が全然近世的に改造せられ、即ち一つには其代議士數の增加を見又一つには選擧區分割の改正の斷行せらるゝならば、政府反對の急進派は議會に於て優に絕對過半數を占むるに至るであらうと思ふ。獨逸帝國議會に於て今日尙ほ保守派が相當の勢力を占め、爲めに官僚政治の跋扈を助けて居るのは、畢竟制度の罪であつて國民の罪ではない。而して此制度たるや實に獨逸官僚政治家の據つて以て立つ所の唯一の根據なるが故に、彼等は從來頑として其改正の要求に耳傾けなかつた。然るに今や此點が民權伸張といふ題目の下に公然議會の攻究調査の題目に上せられて居る。之れ豈に獨逸に於ける自由政治勃興の曙光といふべきではあるまいか。

（三）

獨逸帝國議會の調査の題目に上つて居るものに、外に議會對行政府の關係といふ一項目がある。是れ恐らく帝國宰相の責任といふ年來の問題を意味するものであらう。之も亦同國に於ける自由政治の勃興には深き關係がある。

元來獨逸の帝國議會の內部に於ける政黨關係は極めて復雜である。其中には純然たる政府黨もあれば又純然たる反對黨もある。加之被征服地の住民（例へば波蘭人丁抹人佛蘭西人の如き）を代表する絕對的反獨逸主義者もあれば、中央黨の如き大體は保守的從つて政府贊成なれども天主教擁護といふ一事の爲めには如何なる者をも敵とするを辭せざる一派もある。從つて之等諸政黨を甲乙に兩分して、政府黨及び反對黨といふ風に截然區別することは六つかしい。從つて有力なる恒久的政府黨もない代りに、又有力なる恒久的政府反對黨もない。中間に問題に依つて或は右し或は左する有力なる團體の介在するものあるが爲めに、政府は玆に容易に議會を操縱するの餘地を見出すのである。是れ同國に官僚政治の行はれ得る一つの原因にして、又議會そのものに實際的勢力の加はらざる所以である。同國に於て帝國宰相が議會に對して何等の責任を負はずとするの成例が、民論の反對に拘らず、久しく樹立し來りしも、亦畢竟このためであらう。

帝國宰相の責任は實は帝國憲法第十七條に規定されてある。即ち同條に皇帝は帝國の名に於て法令を發し宰相は之に副署し依て以て其責に任ずといふ様な事が定められて居る。然るに玆に所謂責任とは如何なる種類の責任をいふかは明でない。之等はもと特別法の規定に依つて定めらるべきものであるけれども、その特別法は未だ制定されて居ない。從つて宰相の責任の如何なる性質を有するものなりやは、法律上未だ明白でないのである。否明白でないといふよりも、責任の根本規定ありて之を糺す所以の細目規定を缺くが故に、責任の規定は、あれども無きに等しく、宰相は全く行動の自由を許されて居ると謂つてよい。是に於て宰相は啻に法律上の糺彈を受くることなきのみならず、又議會に對して責任を有するといふ一般立憲國に通有なる政治的慣例をも無視して顧みない。彼は日本の一部の固陋なる學者政客が論ずると同じ様な事をいひ、皇帝の信任さへあれば議會が一致して反對しようが又は不信任の決議をしようが、其の爲めに地位を動かさるるの必要が無いと放言して居る。現に先年ビートマン・ホルウエッグが一年の中に二度まで議會の不信任決議を受けても平然として其職に留つて居つた。此點は不信任の決議を恐れて急遽解散を奏請したる日本の官僚よりも遙に徹底して居る。

斯くして獨逸には宰相の責任を議會が糺すといふ途が付いて居ない。斯くては到底民意の伸張は期せられ無い。そこで從來宰相の責任といふ事は、頗る八釜しい政界の大問題であつた。たゞ政府側は離合常なき議會によりて左右せらるゝを國家の不利益なりと稱し、責任論に對しては其都度極力反對し來つたのである。蓋し此事亦實は官僚政治に取つては其金城鐵壁とする所にして、若し宰相が議會の決議によつて其地位を動かさるべきものとならん乎、帝國議會其物の自由化すると伴つて、獨逸の官僚政治は根柢から崩壞するの外はない。然るに今や政府側はまた卒先して宰相の責任を攻究すべしといふ。是亦政府に取つては民權に對する一大讓歩と謂はねばならぬ。

（四）

次に普國の選擧法改正の事を調べて見る。帝國議會が如何に自由化しても、宰相が頑として動かない以上は、獨逸に到底自由政治の行はるゝ見込は無い。獨逸を自由國にする爲には、帝國議會よりも宰相其者を自由化することが先決問題である。然らば宰相の議會に

對する責任を明にし、議會の意思に依つて彼の地位が、動かさる丶事となれば、夫れで獨逸は直に完全な自由國となるかといふに、必ずしもさうではない。何故となれば獨逸の制度の上に於て行政上の實權を握つて居るものは、皇帝を外にしては、帝國宰相に非ずして、實に各聯邦政府の代表者より成る聯邦參議院であるからである。然らば獨逸を自由國に變ずる根本の要點は、この聯邦參議院の自由化であると謂はなければならない。

聯邦參議院は如何にすれば之を自由化することが出來るか。之に對する答案は頗る簡單である。曰く普國を自由國にすること即ち是れ。今其故を説明せんに、抑も聯邦參議院は、制度の表面上は成る程帝國庶政の發源地であるけれども、實際の作用は全然普國政府の意の儘に動くので、同國の意思に反しては何事も出來ない。畢竟獨逸帝國の萬般の政治は、聯邦參議院を通じて實は專ら普魯亞の自由に動す所となつて居るのである。帝國宰相は法律上普國の總理大臣が之を兼任することになつて居り、彼は普國總理大臣たるの資格に於て聯邦參議院の一員たると共に、帝國宰相の資格に於て其議長となつて居るが、此事自身は普國が參議院全體を左右するといふ事の上にさして重大の關係はない。重大の關係あるは其組織の上にある。獨逸の聯邦參議院は、米合衆國の上院が各州政府より均しく代表者二名宛を出して組織せらる丶と異り、各聯邦の大小に依りて其送るべき代表員の數を異にして居る。而して普國は實に十七名を送りて最多に居る。十七名は全員約六十名なるに比すれば四分の一にしか當らぬも、併し此獨逸の諸邦中には普國の意思通りになるもの少からざるを以て、事實上普國は參議院の過半數を制して居るのである。而して帝國憲法の規定に依れば、憲法の改正は十四票以上の反對ある時は之を爲すを得ずとあるから、假令他のすべての國が一致して其改正を希望しても、普國一國が之を欲せざれば、現在の政治組織は絶對に之を改正することが出來ない。他の一般の政務に付ても大體普國が優に參議院の過半數を制し得る事は前述の通りである。從つて概して之をいふに、聯邦參議院の決定は取も直さず普國の決定に外ならない。是れ「獨逸は即ち普國の獨逸」なりと稱せらる丶所以である。否、斯の如きは單に理窟の上ばかりではない、事實上今日は帝國全般の政務は、便宜上普國の

政府に於て計劃せらるゝ事が多いのである。普國總理大臣が則ち帝國宰相なるが如く、帝國政府の各省と普國政府の各省とは同一若しくは隣接したる建物内に在るを見ても、這般の事情は察せらるゝのである。之等の點は獨逸の人は能く知つて居る。故に從來一方には帝國を普國の支配より解放すべしと主張するものありしと同時に、他方には本來地方的問題たるべき普國の政治組織の改革を以て、獨逸全體の政治上の問題たるが如くに取扱ひ、屢々之を帝國議會の問題に上せるものがあつた。要するに獨逸帝國の政治を十分に自由化せんとすれば、何よりも先づ普國其物の政治組織を自由化することが實質上必要なのである。

然るに普國の政治組織は、極端に保守的にして、到底普通尋常の方法では之を自由化するの見込は無い。元來獨逸政治の官僚的にして且つ專制的なるを極むるは、實は普國の政治組織が極端に保守的にして、其專制的官僚的政治を萬全に擁護して居るからである。而して普國政治組織の今日尙ほ依然として保守的なるを得る所以のものは、實に其特異なる選擧法の御蔭である。そこで普國の選擧法を近代的に改正するといふ事は獨逸帝國に於ける自由政治の興廢に至大の關係あることゝなる。是れ予輩が今夫の普國選擧法改正の議を非常に重要視する所以である。

（五）

普國の議會はいふ迄もなく上下兩院より成つて居る。上院の事は姑く措いて問はない。下院議員の全數は四百四十三人で、選擧權の資格は二十五歲以上の男子にして市町村會議員の選擧權を有する者となつて居る。大體先づ殆んど普通選擧に近いと謂つてよい。一選擧區より二人を選出するを原則とし、時として一人又は三人なる事もある。こゝまでは可い。けれども其選擧の手續きを見るに至つて、我々は其極めて不都合に組み立てられ居るに驚かさるゝのである。其第一の弊根は間接選擧の方法を採れる事である。即ち一般人民は先づ選擧委員を選び、其選擧委員が集つて代議士を選擧するので、即ち二重の手數を要するのである。第二の弊根は三級制度を採れる事である。即ち各選擧區に於ては人口二百五十人につき一人の割合を以て選擧委員を選ぶ事になつて居るが、其選び方は、一選擧區を更に澤山の支選擧區に分ち、其の各支選擧區に於て所謂三級制度に基いて選擧委員を選ぶのである。詳しくいへば、各選擧權者を納稅額の標準で三級に分つ

こと恰かも我國の市町村會議員の選擧に於けるが如くし、各階級に於て同數の選擧委員を選ぶのである。但し其區に於て擧げらるべき選擧委員の數が三で割り切れない時には、殘餘一人ならば之を二級に與へ、二人ならば一級と三級とに分配する。斯くして擧げられたる選擧委員は、更に中央に集つて、改めて所定の代議士を選ぶのである。第三に最も甚だしい弊根は口頭選擧の制である。選擧は之を選擧官吏の面前に於て口頭を以て爲すといふのである。此方法の民意の順當なる表現を妨ぐるは三級制度よりも遙に甚しい。此事は多くの人の其見る所を同じうして居る點である。

斯くの如き天下稀なる極端に保守的の選擧法なるが故に、結局普國衆議院に於ける代表關係は、保守黨其他の政府側に著しく多くして、過激なる在野黨は殆んど其代表者を出すことは出來ない。一九〇七年の調査に據れば、全國人口の僅かに三分が一級に屬し、九分五厘が二級に屬し、三級は實に全人口の八割七分五厘に達して居る。されば第三級は全體の人口の約九割を占めて居り乍ら、僅々選擧委員全數の三分の一を選び得るに過ぎない。而して一級と二級とは、略ぼ利害關係を同じうするが故に、動もすれば相提携して第三級に當るので、爲めに普國の下院は、政府黨全盛にして民間黨は殆んど驥足を延ばすことが出來ない狀態に在る。餘りに不都合な制度なるが故に、社會民主黨の如きは、斯かる惡法の下に選擧を爭ふを欲せずとて、一八八三年來、棄權の態度を執り來つたのであつた。社會民主黨が初めて態度を一變して選擧を爭ふやうになつたのは、一九〇三年からであるが、此年保守黨の得票は三十二萬四千餘、社會民主黨の得票は三十一萬四千餘であつたのに、議員數は前者に於ては百四十三人、後者は零であつた。一九〇八年始めて僅に七人の議員を送るに成功したが、同黨の得票に至つては實に全體の二割四分に上つたのであつた。最近の選擧たる一九一三年六月三日の夫れでは議員數は更に增して十名となつたけれども、得票數と遙に釣り合はぬことは言ふ迄もない。

斯くの如くにして普國下院に於ては、獨逸帝國議會の場合と同樣に、下層階級の勢力は不當に少く代表されて居る。否、帝國議會に於けるよりも其不當なる程度が甚しい。何故なれば、獨逸帝國議會に於ては、一九〇三年の選擧には社會黨の議員は八十一名を算し（得票は總投票數の三割二分弱）、一九〇七年の總選

擧には大いに減じたるも尚四十三人（得票數は二割九分）を得、一九一二年には一躍して百十名（得票數は三割五分弱）に昇つたのに、獨逸國中最も社會黨の優勢なる普國に於ては、一九〇三年には一人の議員もなく、八年と十三年の選擧でヤット七人から十人に上つたに過ぎぬからである。以て如何に同國選擧法の不當なるかゞ解るであらう。民間に改革の要求の高いのは亦怪むに足らない。

併しながら、此不當なる選擧法が實に普國の官僚政治の立て籠る金城鐵壁である。若し之を改正して學者の所謂單純なる普通選擧若くは普通・平等・直接・秘密の原則を採用するならば、普國乃至獨逸の政界は一躍して平民的勢力の横溢する所となるべきや疑ない。最近の一九一二年の帝國議會の總選擧に於ける各黨派の得票數を見るに、社會民主黨は單獨で四百二十五萬を算し、更に常に政府反對の側に立つ諸黨派の得票を通算すれば約二百二十萬となり、之を社會黨の得票と合すれば六百四十五萬（議員數は約百八十）の多きに達する。之に反して純然たる政府黨の得票は僅に合計百七十萬に過ぎない（議員數は約七十）。此外に問題によつては或は政府反對となり或は政府贊成となる者の得票は合計三百七十萬ある議員數は約百四十）假りに此票を政府側に立たしむれば、議員數は二百名を超え優に過半數を制するに足るも、得票數は約五百四十萬に過ぎずして遙かに政府反對黨の夫れよりも少い。普國に於ては此等の關係は尚一層甚しいのである。故に獨逸に於ては、帝國議會の選擧法にしろ、普國議會の選擧法にしろ、之を近世的に改めると否とは、取りも直さず專制的官僚政治の根據が顚覆さるか否かの問題である。故に官僚閥族は從來選擧法の改正には極力反對して來たのである。

如何に彼等が選擧法改正の問題を重要視したかは、近年に於ける改革運動の歴史を見ればよく解る。茲には只普國選擧法の方だけに就て述ぶる。改正論の八釜しく唱へられた始めには、一八八三年並びに一八八六年にある。この時秘密投票主義採用の議が議會の問題となり、激しき討論後遂に政府側の排斥する所となつた。此種の要求は其後も屢々繰返された。近くは一九〇六年にも改正の議があつた。併しながら政府側は、議員數を十名丈け増すといふことゝ、少しばかり選擧區の分割を改めるといふことに承諾を與へたに止り、直接選擧並びに秘密投票の兩主義の採用には極力反對して

其通過を妨げたのである。一九〇八年一月には、此問題の爲めに社會黨は全國に亙る大示威運動を行つた。けれども時の宰相ビューロー公は、明に現制の缺點を認めつゝ、尙帝國議會議員選擧法と同一の程度に改めることにすら反對なる旨を明言した。此年また左黨より一改正案の提出を見たけれども、無論否決された。六月の總選擧後の議會に於てもまた改正決議案の提出を見たが、是亦否決するところとなつた。之より社會黨の示威運動は頻々として起つた。爲めに政府の態度も幾分改つたと言はれた。其爲めにや、一九一〇年一月の開院式の詔勅に於て、遂に國王は改正案提出を約束するに至つたが、併し乍ら其結果としてビートマンホルウエックの提出に係る一案は、最も露骨に官僚的臭味を帶ぶるもので、更に民間の要求する根本點に觸るる所は無かつた。現に此案は間接選擧を直接選擧に改めた丈けで、秘密投票の主義は全く採用して居ない。三級制度も五千マルク以上の納税者を總て第一級にするといふやうな些細な改正を加へた丈けで依然之を存續せんとして居る。故に此案の提出に接するや社會黨は勿論他の自由派は均しく冷笑を以て之を迎へたのである。二月下旬同案の調査委員は直接選擧の主義は採用しなくてもよろしいから、秘密投票の制度だけを採用して欲しいといふ意味で、原案に修正を施し、三月此修正案を通過したのであるが、四月に至つて上院は下院の修正を排して却つて原案の儘を通過したので、結局遂に成立を見なかつた。此間社會黨の一派が示威運動などを以て政府の威嚇を試みたこと其數を知らぬ。けれども政府は斷然此點に於て讓歩することを肯んぜなかつたのである。

　普國に於ける選擧法改正については、實に右の如き沿革がある。然るに今や政府は率先して改正を斷行すべきことを宣言した。而かも普通・直接・平等・秘密の主義によつて選擧法の根本的改正を加ふべき旨を宣言したとある。是れ同國に取つては尋常一樣の改正と見るべきではない。從つて此報道は一面に於て獨逸に於ける民論の勃興が、今や旭日沖天の勢を以て進み、將に全然官僚を屈伏せんとして居ることを語るものではあるまいか。是れ予輩が此報道に接して獨逸に於ける自由政治は今や其曙光を放てりと言へる所以である。只氣に掛るは今後の成行である。

文豪美辭名句集

定價各十八錢 郵稅各一冊二錢

- 夏目漱石美辭名句集
- 尾崎紅葉美辭名句集
- 高山樗牛美辭名句集
- 三宅雪嶺美辭名句集
- 德富蘇峰美辭名句集
- 森鷗外美辭名句集
- トルストイ美辭名句集
- ニイチユ美辭名句集
- ゲエテ美辭名句集
- イブセン美解名句集
- ツルゲネエフ美辭名句集
- ダスタエウスキー美辭名句集

旅行案內叢書

神社佛閣名勝古蹟案內

定價七十錢 郵稅八錢

世界の大公園とも稱すべき日本國土の美は、實に其の秀抜なる山川と、佳麗なる花木と、清澄なる空氣とに在り。而して其の秀麗と佳麗と清澄とに包まれたる、幾多の建築、幾多の堂塔、幾多の歷史、幾多の傳說、徐ろに之を歷訪し、具さに之を巡遊する人生の愉快は、乃ち我が六千萬國民の獨り享樂感受すべき特權なり。本書が全國の神社佛閣と名所古跡とを網羅して、玆に之を讀者に提供するの微意亦以て知るべきなり。

轉地療養地案內

定價七十錢 郵稅八錢

不幸なる諸種の病客、固より轉地療養の必要あり。而も單に疲勞を感じ或は多少の衰弱を來せる人、時に地方に轉じて靜に其身心を養ふ、亦頗る其要あり。閑散の人は勉めて其閑散の善用を期し、忙劇の人も亦其此中に寸閑を求め、病氣と體質と季節と時間とに應じ、或は溫泉に、或は山間に、或は海濱に、豐富なる日光と清新なる和氣とに接するは、洵に人生の重大要件なり。而して本書は實に之が最好侶伴にして亦最善顧問たり。

南洋印度濠洲渡航案內

定價七十錢 郵稅八錢

日本の海上勢力が今後に大發展を遂ぐべきの方面は、必ずして印度、南洋、濠洲に存するを知る。所謂帝國南進問題はなるもの此に於てか絕大の意義あり。而も邦人の此方面に關する智識が猶未だ幼稚を極むるは、識者の深く憾みとする所。本會は乃ち此の緊急なる國家的事業に應じ、苟くも南洋に志ある者をして、一見の下、忽ちにして渡航自在往來隨意、眞に內海近海に於ると全く同一の智識、便宜と感興とを兼有せしめんことを期す。

家庭醫學叢書

專門諸大家述 定價各一冊十五錢（郵稅各二錢）

- 吾妻醫學博士述 ●お產の話
- 唐澤醫學博士述 ●小兒病の話
- 千葉醫學博士述 ●耳鼻咽喉病の話
- 山田醫學博士述 ●神經衰弱の話
- 額田醫學博士述 ●肺結核の話
- 岡村醫學博士述 ●皮膚病の話
- 佐藤醫學博士述 ●婦人病の話
- 廣川醫學博士述 ●淋病の話
- 佐藤病院長述 ●黴毒の話
- 森肛門病院長述 ●肛門病の話
- 杉江醫學博士述 ●ヒステリーの話
- 南醫學博士述 ●胃腸病の話
- 中原醫學博士述 ●外科療法の話
- 森醫學士述 ●呼吸器病の話
- 竹中ドクトル述 ●性欲教育の話
- 森醫學士述 ●病人看護の話
- 中村醫學士述 ●精神病の話
- 菊地醫學士述 ●脚氣とリウマチスの話
- 齋藤ドクトル述 ●寄生蟲の話
- 豐福醫學博士述 ●小兒傳染病の話（上卷）
- 豐福醫學博士述 ●小兒傳染病の話（下卷）
- 竹中ドクトル述 ●盲目と肋膜炎の話
- 岡崎醫院長述 ●有益なる食物と危險な食物の話 附食合せの話
- 阿久津醫學士述 ●男子生殖器病の話
- 森醫學士述 ●良藥と毒藥の話
- 高橋醫學士述 ●妊娠と避妊の話
- 杉本醫學博士述 ●便泌と下痢の話
- 森醫學士述 ●注射の話
- 井上醫學士述 ●眼病の話
- 落合ドクトル述 ●醫學的美容法の話
- 額田醫學博士述 ●糖尿病と腎臟病の話
- 土田醫學博士述 ●腦病の話（上卷）
- 同 ●腦病の話（中卷）
- 同 ●腦病の話（下卷）
- 岡崎醫院長述 ●有効漢藥療法の話
- 竹中ドクトル述 ●肺病有效療法の話
- 衞生新報社編纂 ●物理的健康增進法の話
- 同 ●化學的健康增進法の話
- 同 ●精神的健康增進法の話
- 同 ●滋養食物と滋養品の話

カード式 卓上用 五十音引 日用語辭典

定價六拾錢（郵稅八錢）

本器一ケを卓上に備ふれば日用語約一萬五千語を檢出する事を得

カード式 卓上用 日用語 和英辭典

定價六拾錢（郵稅八錢）

本器一ケを卓上に備ふれば日常必要の漢字と英字とを檢出する事を得

◉發行所 東京市銀座通新橋際 振替東京二〇〇番 電話新橋一九九一 新橋堂

（中付二の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

德富健次郎著 （大好評）

第八版

死の蔭に

人生の旅の中途に、何時とはなく死蔭の谷に迷ひ込んだ旅人の著者が片手を死神にとられつゝ、日本の西半部から滿鮮かけて蹌々踉々とさまよふた其道行きを、父の死の後三年生きながら埋れた墓の中で思ひ出して書いて見たものです。

普通製 定價壹圓八拾錢
上製 定價貳圓參拾錢
送料各貳拾錢

新刊豫告

世界の過去現在未來

山路愛山先生の絶筆

發行所 東京日本橋西河岸町十五 振替口座二二九四六 大江書房

（中付二の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

無慘や男一匹

「腦神經衰弱、生殖器障害の爲」

業不成惱む男女!!・田中博士の福音を聞け

費すはハガキ一枚―得る物は無限の幸福

一口に腦病とか神經衰弱とか云つて極めて輕い病氣の樣に思ふて居るが恐らく世の中に此疾患ほど恐るべきものはあるまい。一度此病に犯されると……神經は過敏となり　頭は重く頭痛を感じ……眩暈や不眠に惱まされ……記憶力無く今聞いた事もスグ忘れて了ひ……疑神疑ひ深く常に杞憂煩悶する……何事にも倦怠易く執務、勉強等はとても出來ぬ……時々耳鳴りしが動悸亢ぶり呼吸は切れ．自分の位置職業家庭等が常に不滿に思はれる……何容態が進めば名譽も財産もイラヌと思ふ程苦悶の極に達する……と大體以上の如き容體となるのであるから迚も活社會に立つて奮闘し成功する事は出來ず常に浮世の敗北者となつて失意に泣ねばならぬのである、殊に生殖器神經衰弱と云つて男女共に最も恐るべき生殖器障害を來たした場合には男は多く陰萎、早漏、夢精、遺精抔と云ふ不愉快に陷り又女は不感症と云ふ恐るべき狀態になつて人間天與の機能を失ひ又大切なる子寶が得られぬと云ふ此上もなき不幸に陷つて了ふ實に恐るべき厭はしき病である。今回斯界の大家前帝國大學醫科大學教授醫學博士田中先生が本病を憂ふる事多年種々苦心研究の結果遂に者大の効驗ありて且つ何人にも自宅に於て最も手輕に最も安價に人知らず治療し得べき獨特の新治療方法を完成せられ、之を今回私の手に依りて弘く社會へ發表するに至つたのである、右博士の新治療法と博士が特に研究せる本病治療上缺く可らざる最新藥物「神惡錠」の詳細なる内容說明等を細大漏さず記述せる治療書を何人に限らずハガキにて申込次第直に送呈すべければ本病を癒して最も幸福なる人生を送らんと思ふ人は先づ一枚のハガキを以て博士の偉大なる言を聞かれよ本書は世間アリフレたる引札的ビラ紙に非ず患者を益する事眞に千金の價値ある者、今や無代價送呈の機を逸し給はず世の不幸なる男女速に申込て絶大の幸福を得られよ。

東京市芝區田村町百番地愛宕下電車際△電話芝一六一四番　**橋本德次郎**

(中付二の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

興味ある文字を滿載して五月號出づ

早稻田文學

■アルツィバシェフ論……廣津和郎

■文學上より見たるロシヤ革命……昇曙夢

■未來派の發足……加藤朝鳥

■戰爭と現婦人問題……エレンケイ

■島崎藤村氏の『海へ』合評
●『海へ』を讀んで……秋田雨雀
●湯河原のN君へ……前田晁
●藝術家の生活……中村星湖

■『桐一葉』及び史劇の本質に關する二三の疑ひ……楠山正雄

時評

自然主義から傳統主義へ……本間久雄

四月の文壇を評す……田中純

繪畫の科學的誤謬の問題……森口多里

第二次の新劇運動……島村民藏

■接待者聖ジュリアンの傳說（小說）……中村星湖譯

■夜行列車（小說）……加能作次郎

■姉（小說）……葛西善藏

詩歌

■紐育にて 佐々木指月
■古き日の歌 兒島[illegible]人
■詩三篇 齋藤米學
■星と民衆 福田正夫
■自然と言葉 白鳥省吾

□俳句 井泉水

附錄

■大愚良寬 相馬御風

最近思想

□チエホフに關する評論
□逝ける心理學者リボオ
□米國に於けるトルストイ
□諷刺畫家ブラッドレー
□歐洲戰癈兵の技藝品
□ロッツェの誕生百年祭
□來朝する米國の二詩人
□童話文學の新傾向
□婦人參政權の問題

定價廿八錢 税一錢五厘

發行所 東京神田表神保町 東京堂 振替東京二七〇番

（中付二の四）

重荷

田山花袋

一

R共葬墓地の小さな式場では、今、式が果てゝ、棺が穴の掘つてある方へと人足にかつがれて運ばれて行つた。あとから人々がぞろ／＼と續いた。古ぼけた流行おくれの山高帽、塵埃(ほこり)で色が褪(あ)せた中折帽、不恰好なフロックコオト、かと思ふと、髮を綺麗に分けた色の生白い若い屬官らしい男もゐれば、八字鬚をしかつめらしく生(はや)して、さぞ權威を部下の者に浴せかけるであらうと思はれる課長らしい紳士もゐた。白無垢を借衣で間に合せた未亡人の周圍には、羽織袴の息子や施主や親類の人達などがそれを取卷くやうにして歩いてゐた。

　墓地には椿の紅白の花が咲いたり、桃と櫻が點綴されたりして、多い墓石の並んで立つてゐる向うに、欅の大きな林の碧い空を透(すか)してゐるのが見えた。人々は

話しながら後からついた。

「遠いんですな、あんな處だ」

かう若い男が言ふと、それに並んで歩いてゐる中老の屬官は、

「此處も廣くなりましたな。もとは、墓地はごく入り口だけでしたがな。すつかり墓になつて了つた……」

前に歩いてゐたこれも矢張小鬢の白い屬官は振返つて、

「Sさんのお墓も此處ですか」

「私のは青山ですが、親類のが此處にありますもんですから」

「さうですか……」

また同じやうにして歩いた。

其處でも此處でも、死んだ人に對する物語や哀悼の言葉や同情や生前の追憶や乃至は誰も一度は邂逅されなければならない死に對する考などが一緒になつて、しめやかに、嚴そかに、且つは佗しくあたりに巴渦を卷いてゐた。誰もI屬官がさう急に死なうとは思はなかつた。一週間ほど前までは、例の口鬚の濃い、頑丈な、赧ら顔をした、いつもいくらかは酒氣があるやうな姿をあたりに際立せて、算盤をはじいたり事務を執つたりしてゐた。長崎の税關から來て今の役所にもう二十五年！　二十四圓の俸給から六十圓！　役所でももう古參の方で、四月の大整理には、いつも內々では胸を躍かせて、『もう俺も古狸だからな…。しかし、今やめられちや困る。せめて正男が一人前になるまでは、何うしても噛り附い

てゐなくつちや……』など〻思つた。それも何うやら彼うやら切り抜けて來た。一人息子の重男は、今では早稻田の商業の方を出て、これも矢張多年自分の上官であつた人の其の大きな會社の理事になつてゐるのに縋つて、兎に角そこに入れて貰ふことになつた。Iは長い間持病の痔に苦しんで來た。尻の痛いのをおさへながら、しかも好きな酒の盃を手から離すことが出來なかつた。『そんなにまでしても酒がやめられませんかね』かう妻はいつも言つた。それを昨年の春、芝あたりの病院に行つて切つて貰つた。

Iの病名は腸出血であつた。『矢張、去年、痔を切つたのがわるかつたのですね。痔つて言ふものは滅多に切れないもんだつて言ひますからね』會葬者の中にはこんな話をする人もあつた。ある人は、『私も勸められたんですよ。大變に好い上手な醫師ですつてね。痔の專門で、大學の博士でも駄目な奴をドシドシ治すつて言ふ評判でしたから、I君と一緒に私も餘程やらうかと思つたんですよ……』など〻言つた。

Iは五日ほど床に着いて、そして死んだ。昔からの同僚で殊に飲仲間であつたPが見舞に行つたのは、死ぬ一日前であつたが、その時はまだ元氣で、床の上に身を起して、『なアに、もう二三日も經つたら治るでせう。……皆さんに忙しい思ひをさせて氣の毒だ……』かう言つてゐた。それを、全く思ひがけずに突然死が襲つて來た……。息子が會社から歸つて來るのも間に合はなかつた。

人達は人夫のかついで行く棺を目當てに靜かに歩いた。それは欅の林の向うになつてゐるやうな處で、新たに開いた墓地には、新しい墓標だの石碑だのかなめの垣などが、丁度世の中の借屋住居か何ぞのやうに小さく劃られてゐるのが見えた。やがて人々はその周圍へと近く集つて行つた。

墓を築く間、人々はひらいた野の吹晒しの風に顔を背けた。春はまだ寒かつた。土を埋める人足があやつり人形か何かのやうに動いて、白無垢の未亡人の低頭いた姿と、それに並んだ息子の姿とが浮彫のやうにあたりに浮び上つて見えた。

Iの甥で、矢張同じ役所の若手の屬官になつてゐるKといふ色の白い、頭を綺麗にわけた、背の高い羽織袴の男が、やがて其處から此方へと出て來て、忙しい中を遠く送つて來て吳れた禮を人々に述べた。親類の禮拜のあとで、生前懇意にした同僚連の二三が水を灌いだり手を合はせたりしただけで、大抵の人達は、そのまゝ廣い野を思ひ思ひの方へと急いだ。風がまた一しきり墓地の柔かい土を吹き捲いた。林に添つた路を郊外の停車場の方へと歩いて行つた人達は話した。

「でも、あとはこまりやしないんでせう」

「さア、金つていふ金も殘しちやないでせうけれども……。息子は兎に角、M會社の方へ出てゐるし、下つた金だつて少しはありますから、滿更、困るやうなこともないんでせう」

「あの息子はM會社に勤めてゐるんですか」

初めて聞いたと言ふやうにして、色の褪めた羽織を着た老いた屬官は言つた。

「でも、まだお婆さんが生きてゐるさうですね」

「さうですか、I君の母さんですか」

「え……」

「それは未亡人は氣の毒ですな」かう言つて、

「いくつ位になるお婆さんです？」
「もう八十でせう」
「それは氣の毒だ。逆さごとに逢つた年寄は可哀相だ」
道はだら〳〵坂になつてゐた。桃の花には午後の日影が明くさして、料草地を前にした大きな洋館が、その窓を、窓のカーテンを、尖つた屋根を、瀟洒なバルコンを碧い空にくつきりと捺してゐた。人達は猶話しながら靜かに町の方へと出て行つた。

二

ある小さな華族の門番のやうな家、昔の名殘の古びた窓が溝を隔てゝ通りに面してゐて、姓だけを書いた古い小さなＩの表札が、華族の大きな瀬戸物の表札とは別の方の門の袖のところにあるかなきかにかけられてある。くゞりを明けるとやがて格子戸、狹い上り端、二疊の玄關、その奥に六疊の座敷があつて、それが猫の額のやうな小さな庭に面してゐる。そこには長い間の下級官吏の生活が種々なものに形を殘してゐて、鉢植の松、楓、欅、神樂坂の緣日や大久保で買つて來た躑躅や海棠、それももう大きくなつて、やがて來る春を待つやうに蕾が赤くふくらんでゐた。床にかけてある某貴顯の書いた筆蹟、横額には飲酒養其神といふ字がいぢけて古くなつてかゝつてゐて、障子の傍の机の上には、本やら半紙やら硯箱やらがゴタ〳〵と一杯に置いてあつた。
そこで、その床の間の方を枕にして、かれは五十八歲の一生を、平凡な、無意味な、赤く爛れたやう

な一生をかれは終つた。大きな足と、大きな顔と、鬚と、半白くなつた頭とを横へて‥‥。

呼吸を引取る時には、三十五六年連れ添つて來た妻と、今年八十になる老母としかそこにゐなかつた。かゝりつけの醫師は、往診に出て留守だつた。「やれ、やれ、政行は死んだかな、南無阿彌陀佛」と言つて、老母は猫のやうに丸くなつた體を愈々丸くして、皺の多い頬に涙を流した。

この座敷の隣が四疊半、それも暗い四疊半で、簞笥や道具や長火鉢が置いてあるので、三疊位の廣さしかなかつた。その隅の窓に面したところに老母はいつも坐つてゐたが、役所から歸つて來てからのおしきせの二合の酒にIは醉つて、いつも種々と昔のことを言つて管を卷いた。「お常、酒をもう少し持つて來い」かう言つて、Iは燗德利を高く持上げた。

「もう、好い加減にしたら、何うぢやな」

見かねて、老母が言つたりすると、

「お婆さんなんか引込んでゐなさい‥‥。口を出す場所ぢやない。世話になつて、食はして置いて貰ふのも好加減だ‥‥。一體、お婆さんはな‥‥私が世話する人ぢやなかつたんだ。死んだ兄貴の家で世話をしなけりやならないんだ。餘計な口をきく隙に、佛さまに、一刻も早くお引取下さいつてな、お願ひでもする方が好いでな」

かう言つて赤い顔で其方を睨んだ。

Iに取つては、その晩酌の二合の酒、それより他に心も興味も注ぐに足りるものはなかつた。餘りに退屈な人生だ。餘りに平凡な人生だ。妻とは伴れ添はなければならない爲にのみ伴れ添つてゐると言ふ

やうにして一緒に長い間を住んで來た。役所でももうこれから上に立身しやうとする望もなかつた。唯、出勤して、事務を取つて、歸つて來て、酒を飲んで、そして日が日と經つて行つた。時には、大きくなつた息子に心を注いで見ることもないではなかつたが、學校の成績やら青年としての態度やらを注意して見ることもないではなかつたが、何うせ十分に仕込むことの出來ない身には、その方に望をかけて見ることも出來なかつた。息子も矢張自分のやうにして慘めな貧しい一生を送るものとしか思へなかつた。『貴樣なんか、何になれる！　何うせ碌でなしだ！』かう言つて、醉つて、かれは常に息子の正男に怒鳴つた。それも、一昨年までは、總領娘のKが生きてゐて、父親が訪ねて行くと、困つた中からも、好きな酒を取つて來て、種々と構つて呉れたけれど、それが死んでからは、一層Iには樂みがなくなつた。

それに下級官吏の生活では、この晩酌の酒ですら十分には買へなかつた。酒と言ふと、お常はいつも身震ひした。日曜とか大祭日とかには、大抵家に引籠つて酒を飲んでゐるのが例だが、漸くそれがすんで、寢ないと言ふのを無理に座敷に寢かして、ほつと呼吸をついたところに、お客——ことに飲客でもやつて來ると、お常は殊に困つた。『酒を持つて來んか、こら！』かう言うてIはいつも怒鳴つた。あとでお常は燗德利に湯を混ぜて一杯にして出したりした。

——しかしそれも終つた。滿じ難い心や不平や焦燥や、さういふものから起る低氣壓、いつも蔽ひかぶさるやうに家の内に漲つて來る低氣壓、それも今は晴れた。お常はがつかりしたやうな氣がして、一日ゆつくり床に就いて寢た。

お常は今年五十三だ。夫の死についての悲哀、これから獨りでやつて行かなければならない不安、さ

ういふものが常について廻つてゐるけれども、それよりもかの女は唯休みたかつた。これまで押へに押へられた壓制と束縛、暴王のやうな夫、いやないやな酒、さういふものから解放されたのが何よりの氣安いやうな氣がした。お常はぐつすり寢た。

ふと、眼がさめると鉦の音がしてゐる。見ると、初七日がすんで佛壇に納めた新佛の前に、老母は腰を曲げたまゝ立つて、鉦を鳴しては念佛を唱へ、念佛を唱へては鉦を鳴してゐる。ふとある實在がはつきりとお常の心に映つた。

それは以前からも、絶えず起つてゐるものではあるが、通夜、葬式、初七日、種々なことがゴタゴタと巴渦を卷いてゐる中にも、時々起つては消え、消えては起つたものであるが、時にはそんなことを考へたッて仕方がないと思つて自分で自分を打消したりしたものだが、それが今、はつきりその鉦の音に、その腰の曲つた姿に、その汚ない白髮頭に蘇つて來た。

お常は首を上げて、じつとその佛壇の方を見た。佛壇には燈明がついて、花の供へてあるのが微かに見え、線香の微かに細く靡いて來るのが見え、その下に、こゞむやうに立つて頻りに念佛を唱へてゐる老母の小さな姿が見えた。

鉦の者が續いてした。

「九十まで生きる人もあるんだから……」かうお常は思つてうんざりした。

それに、何うしてあゝ丈夫かと思はれるほど、老母は健やかであつた。やれ腰の曲つた、やれ呼吸がきれて歩けなくなつたと言ふけれど、N區にゐる長女の處や、S區にゐる次女の許や、それからぢき近

くて小間物商をしてゐる一番總領の息子（それはとうに死んで、あとはその孫と嫁とがやつてゐる。孫はIの世話でIの役所へ雇ひで入つた）の家などへは、杖をついてひとりでよく出かけて行つた。それも、此頃では、電車の乘降が危いと言つて、遠い二人の娘の方へは滅多に行かなくなつたけれど、それでも若いものが見て不思議がるほど、體は健やかで、齒もまだ奥齒が殘つてゐるし、耳もあんなことがきこえたかと思ふほどよくきこえるし、眼もはつきりと人並すぐれて見えてゐる。「お婆さんも、力を落したらう。ほんとうに逆まごとはねえ……。ほつくりあとを追つて行くかも知れない」かう孫娘の一人が言つたが、何うして！　何うして！　力なんかちつとも落してゐやしない……。

「あのお婆さんを片附けてしまはなければ、正男の嫁だッて來やしない」

かう思つたが、今度はそのいやな暗い心持から離れて、息子や生活の方へとお常の考へは移つて行つた。息子はまだ海のものとも川のものともわからないけれど、あればかしの俸給では、二人食ふにさへ十分でないのは知れてゐるけれども、それでも其方の方から、これから先の幸福は來るやうにお常には思はれた。これからは少しは樂をしなければなどゝも思つた。と、續いて、Iの死後に役所から下りた金のことなどが思ひ出されて來た。それが一番力の綱になるやうにさへ思はれた。Iが死ぬと、役所から下りた金が三百圓、同僚達の寄せて呉れた金が百圓、葬式でちつとはかゝつたけれど、兎に角それだけの金はある。むしろ今まで手にもしなかつた大金が……。それを二三日前、正男に吩咐けて、ある銀行に、當座預けにして置いた……。

それに、その他に、お常が苦しい中から、長い間かゝつてこつそり貯めて來た金が貯金の通帳に百圓

と少しある。夫の生きてゐる間、かの女はその通帳を置く場所に苦んだ。見附けられたが最後、理由なしに夫に掠奪されるのが眼に見えてゐる。掠奪されないまでにも、苦しい生活では、すぐちややぶちやに使はれて了ふにきまつてゐる。で、お常はそれを箪笥の著物の底に敷いたり、葛籠の底に藏したり、又は誰も氣の附かない長押のかげに藏したりした。そして、無理をして餘ましては、五十錢、一圓と、こつそり近所の郵便局に預けて置いた。

しかも、かうひた隱しに隱してゐるに拘らず、親類の娘や、二人の小舅や、姪のあるものなどは、何處から聞いたか、皆なよく知つてゐて、それをお常のわる口の材料にした。『お客に行つたッて、お菓子も出さないで、貯金してるんですもの、あの伯母さん』など丶ある姪は言つた。ある姪は、『本當に、Iの伯母さん位張合のない人はありやしない。私なんか行つたつて、お鮨一つ取るぢやなし……。午時分になつても、伯父さんが言はなければ、默つてすましてゐるんですもの』など丶言つた。小間物屋をしてゐる娘には、ある時、お常の郵便局に行つてゐる處を見られた。それに、夫も内々は知つてゐるらしかつた。『お常、貴樣の貯金を出せ！　出さないか。しぶといあまだな。亭主より子供より金の方が貴樣には大事なんだ』こんなことを醉つて言つたことも度々あつた。さうした危い中を漸くにして護つて來たその貯金通帳は、今は靜かに箪笥の底に藏はれてあつた。

まだ鉦の音が佛壇の前でしてゐた。

お常は起上つて、

「お婆さん、いつまで鉦を鳴してゐるのさ」

かう言つて其方へ行くと、

「今、な、お經をちよつと上げやうと思つてな、」

「お經なんかよして下さいよ。餘りお婆さんが鉦を鳴らすので、すつかり眼が覺めて了つた、」昔、情夫(いろ)にした坊主から教つたお經なんか上げて貰はなくつても好いとお常は思つた。

「さうかな、それぢや後(あと)にしやうかな」

かう言つて、老母は素直に鉦を叩くのを止して、いつも自分の坐つてゐるところへ行つて、背を後に向けて坐つた。「もう、むつとしたんだよ、あの婆ア……」かうお常は思つたが、默つて、長火鉢の前に行つて、煙管を取上げて煙草を一服吸つた。

遠い昔が思ひ出されて來た。櫛、笄、化粧品、さういふものを小さな箱に入れて、それを淺黄の大風呂敷に包んで背負つて、「今日(けふ)は入らんかな、何うぢやな」かう言つて田舍の家々を廻つて歩いた。背の低い、元氣な、よく戲談を言ふ面白い中老婦であつた。何でも屋敷の士族の女房で、御維新になつてから、身を落して、せつせとさうして挊いで歩くといふことであつた。お常は矢張その箱の中の櫛や笄やねがけや化粧品に見惚れた娘の一人であつた。それがかうして未生きてゐるといふことは、又、それが自分の姑でこれから死ぬまで世話をしなければならないといふことは、不思議なやうに思はれる。つゞいて、自分がその老母の眼にとまつて、その次男息子に望まれるやうになつた時のことも浮んで來れば、その時分、老母は道樂で、亭主がまだ生きてゐたのに拘らず、ある寺の坊主の說敎ぶりにひどく打込んで、大騷ぎをして、とう／＼それと好い仲になつたことなども思ひ出されて來た。

「皆な、お婆さんがわるいんだ。A町の姉が士族の娘でありながら、鐵砲鍛冶の職人と駈落をするやうになつたのも、S町の姉があゝなつたのも、皆なお婆さんに見習つたのだ。子供のことなんか、ちつとも構はなかつた人なんだからな、お婆さんは――。だから死んだ兄貴だつて、養子になんか行つちやつたんだ』

老母の話になると、いつでもIがから言つてゐたことなども思ひ出されて來た。

A町の姉と言ふのは、今年五十九で、今はN區に住んでゐるが、その駈落した鐵砲鍛冶の男との間に四五人子供があつて、始めは深川あたりで辛さに艱難を嘗めたが、總領の娘と次ぎの娘とが容色好しで、矢張老母と母との血統を受けついだらしく、年頃になつて、A町で藝者になつて全盛を極めたので、すつかり生活を立直して、今では抱妓の三四人もゐる大きな藝者屋のお母さんになつてゐた。今では互に交際して、時々その次の娘の方の藝者がやつて來たりした。Iはそれでも矢張昔の紛糾を忘れてゐなかつた。『なんだ、貴様は、猫ぢや。猫を姪には持たん筈ぢやつたがな』こんなことを言つて、その姪達をいやがらせた。

この間のお通夜にも、葬式にも、姉妹二人ともやつて來て悔みを述べた。姉の方は四十二三で、もう駄目だつたけれど、妹の方は今が年増盛、容色もすぐれ、藝も達者で、わざと目に立たない扮裝をして來たけれども、大島の着物や羽織や、指にはめたダイヤの指環や、それだけでもすぐ唯の女でないといふのが誰にも知れた。

三

其處に入口の格子の明く音がした。

「正かえ？」

「あゝ」

靴を脱ぐ音がして、やがて座敷に入つて、何かごた〳〵してゐる氣勢がしたが、暫くすると、年にしては身丈の大きい背廣姿の息子が其處に莞爾(にこ〳〵)した顏をあらはした。で、母親は立つて、衣紋竹にかけてある羽織と重ねた着物を取つて、服をぬいだあとにかけてやる。足袋を取つてやる。そして息子の脱いだ洋服を長押にかけて、そのまゝ元の處に來て座つた。

「何うだつたえ？」

「何うでもない……」

正男は今日始めて會社へ出勤したのであつた。父の死の後の用事は、まだ片附かずに殘つてゐるものが澤山あつたが、さう〳〵休んでは、役所とは違ふからと言つて、初七日がすむと、正男はすぐ出勤した。M會社ではかれは庶務の手傳をして、簿記をつけたり算盤を彈いたり卷煙草をふかしたりした。そのかれの居るところから長い廊下を通つて、大きな階段を上ると、其處は同じ會社で大きく經營してゐるデパートメントストアで、東京のあらゆる色彩が、人に、又は物品に、呉服物に、金屬類にすつかり集つて來てゐるやうな光景を呈した。その小賣部にかれの友達が一人ゐた。で、退屈すると、かれは其處に出かけて行つた。今日もかれは其處に父親の葬式に來て呉れた禮を其男の處に言ひに行つた。ふと美しい派手な扮装をした女がそこを通つた。長い細い襟足、垂れ髮の艶な顏、細い白魚のやうな指、さういふものがかれの眼に留つた。かれは眩しいやうな氣がした。『藝者だなア。藝者に相違ない』かれは

電車を下りて家に歸つて來る時にもそんなことを考へてゐた。

　今日に限らず、正男に取つては、そのデパートメントストアの派手な賑やかな光景は、眩しい、めまぐるしい、又はアットラクチイブなものであつた。客の種類に美しい人達がゐるばかりでなく、物を賣つてゐる娘達にも、食堂で働いてゐる女達にも、白い襟足や涼しい眼や黑い髮や細い指が澤山に澤山にあつた。美しい高貴な贅澤な着物や帶や襟が、きら〱と輝く貴金屬の指環や櫛や時計や、さういふものと一緒になつてかれの眼の前に輝いた……。父親の生きてゐる中にも、かれは家で押へられ、社で押へられ、同僚に押へられた心を、よく其處に開きに來た。かれがその友達の忙しがつたゐる傍で、じつと立つて、あたりの賑やかな派手な世界を眺めてゐるかれの姿を、小賣の女達はよく見かけた。

「皆なによくお禮を言つたかえ?」

「あゝ」

　面倒臭さうに言つて、自分で茶をついで飮んだ。丁度其時厠から老母の姿があらはれた。老母は厠の戸を閉めて、手を洗つて、此方へ入つて來たが、

「正男、歸つたか」

　かう聲をかけた。

　しかし正男は何も返事もしないので、接穗(つぎほ)がないと言ふやうにして、佛壇の前に行つて、又鉦をチン、チンと三つばかり鳴らして、又いつもの處に同じやうに坐つた。今度は背を此方に向けなかつた。

「その中、すつかり葬式の費用や何かを、勘定しなけりやならねえ……」

かう母親が言ふと、

「あゝ」

と言つたが、そのまゝ立つて座敷の方へと行つた。夕飯を濟ました後には、「ちよつと、Kまで行つて來る」から言置いて、其處からさう遠くない小間物店の從兄の家へと出かけて行つた。

しかし正男は母親の相談相手にならないのでもなかつた。時には二人額を鳩めて、金の勘定や、貯金の話や、將來の話などをした。さういふ時は、お常は、「向うで……」かう顋で指して、老母の見てゐない座敷の方へ息子をつれて行つた。そしてお常は息子の耳に顏を寄せるやうにして話した。葬式の費用の勘定をした時には、母親は一々それを帳面につけさせた。そして算盤を持つて來て、自分で金額を讀んで息子に彈かせた。葬式に入つた金がいくら、初七日までにかゝつた金がいくら、香奠がへしがいくら、四十九日までに要る金の豫算がいくら、かういふ風に母親は勘定させた。

「大變かゝるねえ」

かう母親は溜息を吐くやうにして言つた。

「だつて、仕方がない。その位はかゝるよ。さうかと言つて、さう吝にするわけに行かないから……」

「此方の方をこれにして置かうよ」

かう母親は香奠がへしの計畫の一品を減じた。

「それを減らしたつて、いくらもないぢやないか」

「でもね、……お前まだ三十五日と四十九日があるからね。成たけ、儉約にしなけりや……。お前と私

きりなら、何んなにでもしてやつて行けるけれど、お婆さんといふ人があるからね」とかう言つて、後を振返つて見て、小聲で、「何うして、お前、いつまで生きるかわかりやしない。九十、百まで生きられて御覧な。それは慘めだよ」

「そんなことを言つたつて仕方がない」

かうは言ふものゝ、正男の頭にも、此頃その老祖母の實在がはつきりと映つて來てゐた。父親の生きてゐる間は、それは別に何でもなかつたけれど、「いつまで生きてゐるんだらう。丈夫だなァ」位には思つてゐたけれど、又、父親が醉つて、早く死ねがしの言葉をその老母に浴せかける時には、父親も父親だ、ひどいことを言ふと思つたけれど、さてそれが今になつて見ると、何だか重い荷が自分の身に加つて來たやうなると感ぜずには居られなかつた。それはかりではなかつた。老母の方でも、それを自覺したといふやうに、父親が死んでからは、俄かに御世辭笑ひなどをして、「正や、正や」などゝ言つてかれの機嫌を取つた。それが不思議にも堪らなく厭な不愉快な氣を正男に起させた。若い心はすぐ突詰めて焦燥した。白髪の頭、皺だらけの顏、皐斯のやうな脚、掻くとボリボリ落ちる白い肌のふけ、こすさうにイヤな風をして此方を見る眼、さういふものを見ると、正男はゾッと惡感を催した。

しかし父親の死が、かれから暗い厭な低氣壓を取除いたことは、それは母親以上であつた。かれは晴晴とひろいところへ出たやうな氣がした。これからは翼を伸して何處へでも自由に飛んで行かれるやうな氣がした。初めて自分の世界になつたやうな氣がした。當座預けの三百圓の金のことなどがをりをりかれの頭を掠めるやうにして通つた。

それにしても厭なのは、不愉快なのは、その家だ。その室だ。その茶の間だ。上り端のせゝこましい空氣だ。其處には、其家には、父親の壓制と束縛と酒とが沸つても沸つても纏り附き絡み附いてゐた。「正男、遊んでゐないで庭掃け」幼ない頃からから怒鳴られてかれはよくその狹い庭を掃かせられた。茶の間では殆ど毎夜のやうに母親と父親と老母との睚み合ひが始まつた。それをかれは玄關の二疊で、机に噛り附くやうにして默つて聞いた。そして父親の床に入る氣勢を聞いてほつと溜息を吐いた。さうした氣分は、いかに障子を明放しても、いかに室の隅々を掃除しても、新しい明るい春の空氣を漲らせても、深く纏りついてゐて、容易にそのあたりから去らなかつた。長押の横額、床の幅物、黄く汚れた壁、其處にも此處にも父の怒鳴つた聲と氣分とが殘つてゐた。盆栽の鉢にも、緣日で買つた海棠の花にも……。

四

四十九日が濟んで十日ほど經つた後には、一家は其處から郊外のある家に移轉することになつてゐた。郊外と言つても、町ゝ通からずつと入つた長屋のやうな中の一軒で、矢張青い草木や新しい空氣は無いけれど、それでも厭な不愉快な狹い古い家よりは好いとお常も正男も思つた。屋賃も今の家よりもいくらか安かつた。電車の便も好かつた。で、新綠の美しく日にかゞやいたある日の午後に、二臺の運送車は、その長年住んだ小さな華族の門から出て、電車道を通つたり、濠端を通つたり、郊外近い靜かな新開町を通つたりして、その新しい家の方へと行つた。老母はN區の娘の家に二三日前から泊りに行つて

みで。其處からぢかにその娘に送られて來た。『さつぱりして好いともね‥‥町中に住むよりも何うしても空氣が違ふから』鐵砲鍛冶と駆落した總領娘は、こんなことを言つた。二人の藝者の娘達の爲めに出世したやうなかの女は、小さなダイヤ入の指環などをはめて、何處に出しても立派な意氣なお袋さんといふ扮裝であつた。歸りには、『お婆さん、好きな物を何か買つてお上り』かういつて内所で金を一圓老母に握らせた。

其家にはS區にゐる老母の二番娘もやつて來れば、小間物屋をしてゐる總領の嫁もやつて來た。役所へ出てゐる若い色の白い正男の從兄もやつて來た。

月と日は經つて行つた。何も變つたことはなかつた。老母は自分の居間として宛がはれた南向の日當りの好い二疊の一間に終日背を丸くして坐つてゐた。そして時々立つて行つて佛壇の鉦をチン、チンと鳴した。お常は長年わるかつた齒を治すために、近所の齒醫者に毎日通つた。その時は、老母に、『それぢやお婆さん、行つて來るからね、お醫者に‥‥』かう言つて表の格子の錠を下して、此頃懇意になつた前の長屋の上さんにも頼んでそして出かけて行つた。お常は此頃新しい袷と羽織とを拵へた。

正男は正男で、新しいハイカラな夏服などを拵へて、意氣なネクタイを三つも四つも買つて來て、それを取換へ引換へ着けて出かけた。時の間に、ハイカラに綺麗になつて行く正男を誰も彼も見た。ステツキなども買へば、新しい帽子も買つた。

『贅澤をしてはしやうがないぢやないか。俸給が少いのに‥‥』

かうお常が言ふと、

「だつて、母さんの歯よりは安いや」

「だッて、お前、これは母さんが長年心がけて置いて、漸く、思ひがとゞいて治したんだから……」

「でも、歯に三四十圓もかけりや、矢張贅澤だ」

小間物屋の從兄も、此頃正男の變つて行くのを見逃さなかつた。年が四つ五つ違ふので、いつも目上取扱ひにしてゐたのだが、此頃では却つて正男の方から友達づき合ひにして、「これは」と思ふやうなことを正男はよく口にした。扮裝の立派にハイカラになつたのもあるが、それ以上に、從兄のKは正男の話す言葉の內容に驚かされた。此頃では、ちよいちよい社の歸りだなどゝ言つて夜遲く寄つて行くが、時にはいくらか酒に醉つてゐるやうなこともあつた。正男は吉原の燈籠の話をしたり、友達と一緒に何處かに飲みに行つた話などをした。Kはある人に言つた。「俸給は二十圓も取つてゐやしないんですがね。先生少し變ですよ。それにあゝいふ社だから、我々腰辨とは違つて、金の入るところがあるかも知れませんけども……。何うかしてるんぢやないかと思ひますよ。何うして中々生意氣になつちやつた」

山の手の奥で、裁縫などをして後家暮しをしてゐる從姉も、「本當だね。すつかり變つちやつたね。あいふところに勤めてゐると、何うしてもあゝなるのかね。伯父さんが生きてゐた時分とは丸で違ふよ。あの時分はゐるかゐないかわからないやうな子だッけれどもね……。矢張、皆な一人前になつて行くね』と言つて笑つた。

それに、家の方でも、此頃は社の歸りがいつも遲かつた。始めは母親のお常も、別に怪しみもしなかつた。あゝいふ社だから、忙しいところだから、役所のやうにきちんと時間通りには歸つて來られない

ものだと思つてゐた。それに、正男は醉つて歸つて來るやうなことがあつても、『今日は友達にさそはれちやつて……』などゝ言つて辯解した。

月と日は又經つて行つた。夏も過ぎ秋も過ぎた。郊外には寒い風が吹いて、工場の煤烟は凄じく此方へと靡いて來た。此頃、お常は正男が今までよりも一層老母を邪見にするのを見た。しかし、お常には、それは道理だと思はれた。もう息子も來年は二十四だ。俸給は安いけれど、相應なものがあつたら、身を固めさせてやつても、もう早くはない。『けども、あの年寄がゐちや——』から お常は常に思つた。『總領の兄さんは死んでも、あとがあゝしてちやんとしてやつてゐるんだし……、娘だッて、本當のが二人までゐるんだから……私達が世話しなくたつて本當は好いんだよ』こんな風なことを、何かにつけては、お常は正男に言つた。

正男は此頃では、その老母を見るのすら厭だといふ風を見せた。老母が口を利いても碌な返事もしないばかりか、身でも近くに寄せて來ると、げじげじにでも近寄られたかのやうにすつと立つて行つた。その癖、老母は、『正男や、正男や』と言つて賴りにした。歸りが遲いと、夜も寢ずに心配して、『正男はもう歸つたかや』と言つて、のそのそ起きて來た。

老母はよく腹を減らした。『何かないかやな……』から言つて出て來ると、お常は、『お婆さん、もうお中が空いたの！　今、午の御飯を上げたばかしぢやありませんか』と言つたり、『そんなに贅澤なおやつなんかありやしませんよ』とこつぴどくはねつけたりした。家中に誰もゐないと見ると、老母はいつもひとりで身を動かして行つて、戸棚をあちらこちらとさがして、砂糖を嘗めたり、芋の總菜をつかんで

食つたり、何もないと、味噌瓶から味噌をつかんで嘗めたりした。ある時は、砂糖と思つて嘗めたのが鹽で、皺の深い顔を一層皺深くして、そのまゝ勝手によちよちと歩いて行つて、柄杓に口を當てゝ水を汲んでゐるのを丁度外から歸つて來た正男に見られてしたゝか口汚く罵られた。

「戸棚にも、米櫃にも、家ぢや鍵をかつて置かなくつちやならない。本當にいぢの汚ない婆さまたらありやしない」

かうお常も言つた。

老母は今でも酒を飲みたがつた。四五年前までは、宅では父親が喧しいので、お三日にしか飲ませて呉れないので、自分でドブロクを五六錢ほど買つて行つて、小間物屋の店から上つて行つて、「お金、何も入らんがえ。漬物で好いがな。猪口を出して呉れんか。家だと、な、政行が喧しいぢやで、飲めんによつてな。そら、かうして酒は買うて來たぢや」かう言つて、ちよつとした肴で旨さうにしてチビリチビリ飲んだ。昔は醉ふと、卑猥な流行唄を唄つて、手拍子で、踊を踊る眞似などをした。二三年前まではNの方へに行くと、藝者達は面白がつて、老母に酒を奢つて、昔の唄などを唄はせた。

それが一度、「あの婆には、酒でもうんと飲ませて、早く片附けて了へ」といふ意味の言葉を聞かせられてから、急に、自分で金を出した買つて來た酒の他は、飲まぬやうになつて、「お婆さん、酒は?」などと姪達が言ふと、「もう、な、年が年ぢやでな、もう酒はやらんぢや」と言つて手を振つた。その癖、今でも誰もゐないと、自分は酒を一合か二合か買つて來て飲んだ。お常が歯醫者に行つた留守では、老母はソッと格子の錠を下して、徳利を持つて、Nの娘の呉れた錢で、こつそり通の酒屋に行つた。

此頃では、もう老母の財布にはさうした物を買ふ錢もなかつた。『NかSか誰か來さうなものぢやが……』かう思つて待つてゐても、誰もやつて來なかつた。折角小間物屋の從兄が來たから、ちやほや言つて、金でも置いて行つて貰はうと思つたが、生憎さうした金もなかつたか、從兄は老母には眼も呉れずに歸つて行つた。

『もう死ぬばかりぢや。俺のやうなものにはもう誰も構つて呉れんぢや。佛様に手をいくら合せても、伴れて行つて下されぬぢやなア』腹の立つた時には、悲痛な聲を出してこんなことを言つた。つい此間も、正男が餘り邪見にするので、腹に据ゑかねたと見えて、『正、おぼえてゐろよ。あれほど俺が世話をして、小さい時から面倒を見てやつたのに……おぼえてゐろよ。』かう言つて、涙を皺の多い顏に流した、父親の生きてゐる時にも、さうした意味のことを老母が言ふと、酔つた父親は、『世話した？　己はお婆さんにはちつとも世話にならんがな。お婆さんは自分のことばかりしてゐたがな』と言つた。その時にも老母は口惜しがつて涙を流した。それが今では孫と代つたのであつた。

五

『まア』

お常はかう思つてはつとした。これは大變だと思つた。體がガタガタと震へた。お常は半明けた簞笥の抽斗の前に立つて、手には貯金の通帳を持つてゐた。

虎の子のやうにして藏つて置いた自分の貯金帳を、今、何氣なしに出して見ると、二三日前の日附で、

二十圓ほど引出してある。

正男に相違ない……あれの仕業に相違ない。かう思ふと、自分達の生活に罅（ひび）が入つて、深い底に落ちて行くやうな氣がした。自分の貯金、それもあるが、それ以上に、銀行の當座預が氣に懸つた。この貯金に手をつけるほどだから、無論向うのにも手が著いてゐる。かう思ふと、赫として顔が青くなつたり赤くなつたりした。

此處に越して來た當座、夜遲く歸つて來たり、いやに扮裝（みなり）に贅澤をしたりするので、ある夜染々と親一人子一人の生活といふことに就いて話して、納得の行くやうに意見をした。あの意見で、了簡を息子が改めたと思つたのは、それは矢張甘い親心であつたのか。それにあれから後は、さう眼に餘るやうなこともなかつた。二三度泊つて來たことはあるにはあるが、さう始めのやうにひどくはなかつた。酒にも醉つて歸つて來るやうなことはなかつた。俸給は毎月きちんきちんと全部出した。そしてその中から小遣を貰つて行つた。金もないのに……友達などゝつき合酒を飲んだり何かしてと思ふには思つたが、自分の息子の體にさうした蟲（むし）が蝕（く）つてゐやうとは知らなかつた。お常は慌てゝ銀行の當座預の帳面をさがした。しかしいつも入れて置く處にはその帳面は見當らなかつた。いよ〱慌てゝお常は彼方此方と探し廻した。簞笥の抽斗といふ抽斗は皆な明けて見た。つゞいて息子の机の抽斗も手箱も何も彼も……。しかし何處にもその當座預の帳面はなかつた。

お常は何うして好いかわからなかつた。『呆れたねえ、まア！』と幾遍も繰返した。しかし思返して、自分の貯金の方だけかも知れない。ちよつと、金が入用で、それで出したかも知れない……當座の方は

そのまゝにしてあるのだらう。まさか正男にしてもそれほど大膽ではないだらう。それほど身知らず親知らずでもないだらう。かう思ひ返して見たが、何うもさうは思はれない……。

息子の歸つて來るのを、せき心、あせり心で待つてゐたが、しかしこの話を老母には聞かせたくないやうな氣がしたので……それは老母に心配をかけるためといふよりは、寧ろ息子の名譽のためにさう思つて、一人でやきもきして待つてゐたが、日が暮れても時間が來ても、正男の靴の音は門口にきこえなかつた。お常は夕飯の支度をする氣にもなれなかつた。老母だけにはそれでも飯を食はせたが、自分は何うしても飯が咽喉に通らないほどやきもきしてゐた。

靴の音は何遍となく來ては、通りすぎて行つた。しかしその待ちに待つた靴の音はつひにやつて來た。小刻な、それでゐて重々しい、疲れたやうな靴の音が……。

果して格子戸が明いた。もう十一時すぎである。いつもならば、長火鉢の前で、「お歸りかえ?」と聲をかけるのであるが、今日はそのまゝバタバタと立つて行つて上り端の障子を明けた。そして半は醉つて入つて來る息子の顏を險しい眼でじつと見た。

しかしお常はその息子の顏や樣子を觀察する餘裕もなければ、服を不斷著に著更へる間も待つてゐられなかつた。いきなり、捉えるやうにして、

「お前に聞きたいことがある!」

かう言つていきまいた。

正男は顏の神經をヒリヽと動かしたが、わざと落附いて、

『何です？』

『私の貯金をお前は出したね。太いことをしたね』

『知らない……』

『嘘をおつき、知らないことがあるもんか。お前でなくつて誰が出すものがあるもんか。あきれた子だ。太い了簡だ……』猶腕を放さずに、『當座の方もつかひやしないか。お前。使つたか。』

『使ひやしない……』

『嘘を言つたッて駄目だよ。使つたなら使つたッてお言ひ……』

『まア離して下さい……』

から正男は言つたが、そのまゝ母親の腕を振り拂つて、『知れたものは仕方がない』といふやうにわざと落附いて、そのまゝ服を脱いで、ワイシャツを取つて、其處の隅につかねてある不斷著に著改へた。

『使ひやしないなら、今すぐ、當座の帳面を見せてお吳れ』

『……』

『何うしたのさ』

母親の顔の興奮と不安に焦立つてゐるのに比して、息子はわるく落附いたやうな、しかし辛いやうな、腹立しいやうな態度をして其處に棒立に立つてゐた。

『何うしたのさ……本當に……』

母親は長火鉢の前に坐つて、嶮しい眼色をして、から疊みかけて答を促した。

『出して見せて、安心させてお吳れ、……私の貯金の方なんか何うでも好い。さあ、それを出して見せて安心させてお吳れ』

『……』

『何故、返事をしないんだい。それぢやすつかり使つちやつたのかえ？　お父さんのあの大事なお金を……これから私達が暮して行かなければならないお金を……』

母親は泣きさうになつた。

『出してお見せ！』

『銀行へ行つてゐるよ』

『何うして？』

『利子のことで……』

『譃をお言ひ、女だと思つて、馬鹿にするのかえ、お前は。利子なんか、今つける時ぢやない』

『……』

次の間に寢てゐた老母は、最初耳を疑ふやうにして聞いてゐたが、啻ならない早口と權幕と欷歔とを耳にして驚いて身を起した。お常の聲はいつものぐずに似ず猶立つて鋭く、これに對する孫の聲はいやに太く高くきこえた。『太い了簡』だの、『あきれた奴』だのと罵るお常の聲は、近所にもきこえる位に高く聞えた。『何うした事ぢやな』から老母は首を傾けた。

突然ピシヤピシヤと打つ音がした。

「打たなくつたつて好い、母さん」
「いくら打つたッて、蹴つたつて、足りやしない！」
かういふお常の聲がした。
餘りひどいので、老母は寢衣のまゝで、ごそごそと其處から出て、中しきりの襖をあけて「何うしたといふのだやえ、今時分、夜深けに、親子喧嘩なぞをして」から言ひながら入つて行つた。お常の泣顔と、そこから稍離れて、下を向いてゐる孫の顔とが老母の眼に映つた。
お常は氣でも狂つたかのやうに、
「お婆さん、正男がお父さんの金をつかつちやつた。つかつちやつた。私も、お婆さんも、もうかうしちやゐられなくなつた――エ、、エ、」と聲を擧げて泣いた。
「何んだやかしらないが、まァ夜遲く……近所にも見つともないぢやないかな」から言つて老母はその中に入つた。
お常の涙と興奮とは猶やまなかつた。お常は泣饒舌にしやべつた。老母にはしかし何が何だかそれがよく飲み込めなかつた。孫の正男が口を尖らして「何も打たなくつたつて好い」と言つて母親に押しかかつて來るのを老母は遮つた。
「そんなに、疑ふなら、明日持つて來て、見せてやらあ」
「見せてお呉れ、見せて安心させてお呉れ」暗黒の中に一道の光明を認めたやうに母親は言つた。
その銀行の當座預の帳面は、實は社の自分の机の底の底に藏つてあるのであつた。正男は既に二百圓

近くも使つた。月に三同位、十圓十五圓とちびちび引出しては、神樂坂の坂を上つて右に折れた處のRといふ待合に行つた。母親の貯金にまで手をつけやうとは始めは思はなかつたが、百圓位は自分で何うしても持つてゐなければならないと思つた。それに、かれの思ひ込んだ女を十分に引寄せるためには、その位の金はいつでも出來るやうにして置かなければならないと思つた。で、二三日前に、かれはこつそり母親の貯金帳を引張出して、元住んだ家の近所にある郵便局へ行つて出して、そしてそれをそつと元の儘にして置いた‥‥。

其夜はお常も正男も容易に眠ることが出來なかつた。正男はいろいろなことを考へた。兎に角、あの殘つた金だけは、明日は下げて了はなければならない。そして自分で隱して持つてゐなければならない。でないと、もうあの金も自分の自由にはならなくなる‥‥。金がなければあそこにも行くことが出來なくなる。あの綺麗なやさしい可愛い顏も見ることが出來なくなる。あの世にも稀れな歡樂を恣にすることが出來なくなる‥‥。かう思ふと、自分がわるいことをしたといふことよりも、その金がなくなつて家が必死に困るといふことよりも、其方の方が氣になつて、體中が燃えて、果ては自由にならない身が辛く辛くなつた。と思ふと、理性が夥しい力で蘇つて來る。母親の涙が體に染みるやうな氣がする。彼とて、この二月三月の間、金のなくなつた先のことなどを考へないではなかつた。行く時には體と心は誘はれるやうに飛立つやうにして行つたが、歸る時にはいやに悄氣て、『何うせ、あいつ等は稼業だ。商賣だ。それであんな眞似をして見せるのだ。今度こそ止さう、今ならまだわかりやしない‥‥』かう思つて、闇の中をとぼとぼと自分の宅のある巷路へと入つて來た。そして何も知らない母親の顏を見るに

堪えないほど濟まないと思つた。その癖、かれはその藝者を、二十になつたばかりの抱への藝者を、顔の丸い髪の濃い何方かと言へばおちやつぴいの藝者を、一度は歌舞伎座に伴れて行き、一度は新富へつれて行つた。自分の勤めてゐる社の小賣部から流行の襟だの財布だのを買つて行つてやつたりした。段々深みへとかれは入つて行つた。いくらの金があれば、體が自由になるといふ話なども女はした。『その位の金なら、無理算段をやれば、何うにか出來ないこともない。戀は金ぢやない。金のために互に思ひ合つたものが別れなければならない譯はない。……何うかして一緒になりたい……』今夜もこんなことを考へながら闇の路をとぼとぼ歩いて來た。此間も、家庭の事情を女から訊かれた時、『お婆さんがあるけれど、何ァに、それは他に世話しなけりやならないものがいくらもあるんだから』と言つたことなどをも思ひ出してゐた。正男は寢ながら溜息を吐いた。老母の白髪頭と、母親の興奮した顔と、女のにつこり笑つた顔とが一つになつてかれの頭を通つて行つた。時計はカンカンと二つ鳴つた。かれはまた深い溜息をついた。

六

それからの家庭の空氣はすつかり違つて了つた。その翌日、逸早くかれは銀行の金を引出して了つたが、その後へ母親がすぐに行つて、すつかり事情を聞いて了つたらしかつた。其夜も一悶着した。

お常は段々女の身の子供にも馬鹿にされることを痛感した。父親が生きてゐる中は、しほらしく猫を被つて居やがつた……などゝ腹立しくも思へば、唯それのみを頼りにした息子がさういふ陥穽に陥つた

のを情なくも悲しくも思つた。興奮と激昂との後には冷靜な沈默が續いた。

「お前が主人だからね……出來るなら、好いやうにするのが好いよ。母さんと婆さんとに酷い目を見せさへしなけりや、何をしたツて好いんだから」

こんなことをもお常は言つた。

泣いて見ても、喚いて見ても、乃至は染々と意見をして見ても、何うしても過ぎ去つたことは仕方がなかつた。朝は母子は大抵は默つて睨み合つて食事を濟した。もう出勤の支度の世話を母親は燒いてもやらず、歸つて來る時分にも、少し遲くなると、グングン先に飯を濟した。

お常は將來を心配して、好きな烟草も吸ふ氣にならず、唯ぼんやりとして日を暮した。時には、「これと言ふのも、嫁を持たせないからだ。月給が少いけれど、役所とは違つて不時の收入があるから、持たうと思つて持てないこともないのだ」などゝ考へた。しかしさういふ時には、いつもきまつて老母の姿が眼に映つた。

さういふことも少しも知らずに、知つても何處か風が吹くと言ふやうに、のんきに日當の好い緣側で鼻唄を唄つたり何かしてゐる老母を見ると、お常はむしやくしやせずには居られなかつた。時には、死んだ時には悲しみは悲んでも、寧ろ一方重荷の下りたのを氣安すく思つた亡夫のことなどが、今更のやうにお常の頭に往來した。父親さへ生きてゐたら……かう思つて、お常はいつも涙を流した。

「お婆さん」

かう呼びかけて、「お婆さんの世話をしたくつても、もう私達には世話は出來なくなつたんですよ」

それでも老母はそれを平氣で聞いてゐた。『困つたのう、正にも……』

『困つたのうちやありませんよ。お父さんの金なんか、もうちつともないんだから……私の金まで使つたんだから』

『困つた奴ぢやな……。女と年寄ぢやと思つて馬鹿にするぢやな……』

『お婆さんは、一體、本當は向ふの亡くなつた兄さんの家で世話するのが本當なんだから……。今度行つて相談して來なくつちやならない』

『お金の處へ行くのかな……』

『さうする方が好いんですよ。』

その悶着があつた當座は、四五日正男は落附いて歸る時刻に歸つて來たけれど、それも長くは續かなかつた。ある夜は遲く醉つて歸つて來た。ある夜は、とうとう明方まで歸つて來なかつた。

近所では、越して來た當座は、仲の好い母子、父親を失つたさびしい家庭と思つてゐたが、此頃になつて、俄かに大きな騷しい聲を夜中に立てるのを度々聞いた。從つて、井戸端ではその噂がをりをり出た。『何うしたんでせうね、さうでしたね、十二時過ぎでしたね。えらい騷ぎでしたよ』から職工の嬶が言ふと、『さうでしたね。それも昨夜ばかりぢやありませんよ。此頃は度々ですよ。何うかしたんですね、息子さん』一番近くに住んでゐる瓦斯の方へ出てゐる人の上さんが言つた。息子が道樂を始めて夜遲く歸つて來ることなどを人々は噂した。

お常は時々は息子の關係してゐる女の狀態を知りたいと思つて、わざと言葉をやさしくして其方の方

の話を訊いて見たりした。日を經るにつれて、息子と女との狀態なども段々わかつて來た。お常は里――里と言つても、貧しい生活をしてゐる兄があるばかりだが、そこに行つて、その話をして、『もう、性根が腐つてゐるだから駄目ですよ。何でも、不見轉らしいが、何うせ、騙されてゐるのにきまつてゐるんだから……。私は私で何うかしなけりやならない。私は一人で、お針でも何でもして暮すより他仕方がない』などゝ言つた。

熱したり冷えたりするやうな空氣は矢張續いた。ある日はNの總領娘が訪れて來た。そして正男がある夜、その土地の待合に女を伴れて來て、拂ひが出來ないで、金を少し借りに來た話などをした。

『困つたねえ、お常さん』

『本當に、もうしやうがないんですよ。私もお婆さんも、まご〳〵してゐると、干ぼしになつて了ふんですよ』

『何うして、そんな了簡になつたもんだかねえ。おとなしくッて好いと思つてゐたのに……矢張あゝいふところに出てゐるとね。他が他だから』

『いくら他がさうだつて、しつかりしてゐさへすれや、そんなことにはなる筈はないんだけども、あいつが馬鹿だから』後にはお常は喧嘩をした話や、此頃では碌に口もきかない話や、女だと思つて、いくら言つても馬鹿にして、此頃では、何か言ふと、すぐぷいと怒つて出て行く話などをした。

總領娘はお常の言葉の中に、ある考のひそんでゐるのを察せずにはゐられなかつた。こつちかち、餘り深く入つて行つたり、餘り多く同情したりすると、思ひもかけない重荷が自分の方にやつて來るかも

知れなかつた。でかの女は成たけそれに觸らぬやうに、好い加減になだめて、老母に小遣などを置いてそして歸つて行つた。

親類の人達にも、それからそれへとその話が傳つて行つた。「まア、呆れたもんだね。それおやすつかりお父さんに出た金を使つて了つたのかえ！」から山の手の奥にゐる從姉は目を丸くした。小間物屋の店でも、『困つたものだな』と言つて、從兄の母親は顔を曇らせた。從兄は從兄で、「何うも幾だと思つた。酒も飲むし、女の話もするし、そんなことでもなければ好いと思つた。此頃ぢや、正男は本當に生意氣になつたんだからね」などゝ言つた。S區にゐる老母の二番目の娘もそれを聞いて眉を蹙めた。

七

死んだ父親の一周忌の通知は、親類の何處へも行かなかつた。「何うしたんだらう、Iでは？　一周忌のお祭もしない積りかしら！」から人々は言つてゐたが、しかも別に深くそれを氣にも留めてゐなかつた。と、ある夜、お常は困つたやうな顔をして、小間物屋の店を訪れた。

丁度嫂、嫂と言つてももう六十先の老母が店にゐて、「まア、お常さんかな。久し振ぢやな」から言つて莞爾して迎へた。嫂はその店をもう二十年近くもやつてゐた。此處に越して來た時分には、長兄がまだ達者でゐて、鼻の隆い、色の白い、今役所につとめてゐる息子にそつくりの顔をして、店へ出て客に應對してゐた。お常の夫も、「兄さん、兄さん」と言つては、よく其處に來て酒を飲んだ。時はいつの間にか過ぎた。その長兄もその長火鉢のある室に蒼白い顔と細い腕とを横へて死んだ。夫ももう今では此

世の人ではなかつた。

お常は低い聲で話した。娘は始めは『ふん、さうかえ、さうかえ』と言つてきいてゐたが、お常のやつて來た話の要領がわかつて來ると、急に眞面目になつたといふ風で、『困つたな。さうかな、まだやめんかな。困つたもんぢやな』と言つた。お常の持つてゐる要求が娘の胸にすぐ響いて行つた。

お常の話すところに由ると、父の金どころか、借金取が一日に二人も三人も來るといふ話であつた。父親の愛藏した軸物も持ち出して賣れば、いくらかあつた本なども、そつと持ち出して行つては賣つた。家には何も置いては置かれない。それに、此頃では月給も碌々渡さない。……米屋にも酒屋にもかけがたまつて、とても生計を立てゝ行かれないから、正男は正男で下宿するなり何なりするがよし、自分は自分で間借りでもして、お針でもやつて暮して行くつもりだ。その決心を今きめて來たといふのであつた。

「困るな」

娘は考へて、「それで、正男さんは何つて言つてるぢやな。自分でも、それが好いつて言ふのかな」

「好いもわるいも、もう仕方がないんですよ、お金さん」

かうお常は言つて、「それについて、お婆さんが困るんですがね。こちらで世話をして貰ひたいと思つて……」

「それは困るな」はたとその急所に觸れたやうに、「本當にさうなら、それは何うにかせにやならんぢやらうが、NもSも、あゝいふ本當の娘がゐるんぢやでな……」

「でも、此方は兄だから、宅よりも、此方にゐる人だつて、宅でも始終言つてゐましたからね」

「そんなことはあらせん。」急にいきまくやうに、『定さんの世話するやうにちやんときまつてゐたんぢや。それに、お婆さんも、定さんに世話になるんぢやと言うて前から御座らした」

それはさうでせうけれど……」

「慶三が歸つて來て、何と言ふやら、わからんが、私の考ぢや、さうぢやな。世話する譯がないぢやから」かういくらか色を作して言つた嫂の胸には、昔のことやら、自分の夫に對して冷淡な行爲をして老母のことやらが雜然にして思ひ出されて來てゐた。

それに、一方では、お常の言ふことが、どれだけ本當であるかゞ疑はれた。目の前に見てゐる事ではなし、狡猾で食へないお常は、何をやつてゐるかわからなかつた。お婆さんが邪魔なので、正男とぐるになつて、さういふ狂言をして、重荷を此方に押附ける算段をしてゐるのかも知れなかつた。それに、實際の狀態から言つても、今老母を押つけられては大變だと思つた。

「それもな、宅で生きてゞもゐればな、世話もしなければならんかも知れんが、嫁では血ぢやないからな。血を引いた娘がちやんと二人もゐるんだでな」

「それは、向うにも相談はするつもりですけども、兎に角、此方は本家で、總領の兄さんの家ですから……」

「本家ぢやあらせんがな。宅は養子になつて來たんぢやがな。それにお婆さんのことは、すつかりまかせる、一切世話は燒かせないつて言つて、金を出して、その話は、すつかりとうの昔にちやんときまつ

てゐるんぢやがな……さがせば、その證文があるわ。」

小間物屋では、嫁と姑との仲が面倒だと言つて、この春、息子のKは嫁と子供二人とを伴れて店からさう遠くない處に一軒家を持つてゐた。お常の腹では、お婆さん一人位何方に置いて世話をして呉れても好ささうなものだと思つた。お常は猶小聲で、一家離散の苦しい話を嫂にした。

猶NとSとにも相談した上でと言つて、お常は歸つて行つたが、今度は息子のKの家に正男がやつて來た。そして、年寄同志ではわからない、君と僕とで打割つて話をしなければわからないといふやうな、何方かと言へば、高飛車な調子で、正男は從兄にその話をした。Kは非常に神經過敏になつた正男を見た。何方かと言へば、Kは溫順なやさしい思ひやりの深い質であつたけれど、「だつてその位のことはしたつて好い。今日役所に出て、かうして暮して行けるのも、皆な僕の父のお蔭ぢやないか」といふ語氣が正男の口から出てから、Kは俄かに激昂した。「そんな無法なことを言つたつて駄目だ」からKは後には怒鳴つた。

正男はさまざまの苦痛、生活の苦痛、女の苦痛、さういふ苦しい巴渦の中に氣が焦立つと言ふやうに、「僕の方にだつて、それなら考へがある。勝手にするからさう思ひ給へ」かう言つて出て行つた。

平生はお互に深く藏して、ひどいと思つても滅多に言はなかつたやうなことが、無限に並べて、洗ひざらひ言はれるやうな時が來た。N區の娘が小間物屋の店に訪れて行つた時は、Kの母親との間に、老母とお常との話が盡きずに語られた。やれ、お婆さんは、昔から子供のことを構はなかつた人だつたの、勘當されてゐた時分は、ひどい目に逢つても、ちつとも同情して呉れなかつたことだの、お常は薄情で、

底は冷めたい女だの、さうでなければ、かうした場合にも、もつと息子をしつかりさせる道があるなどと相槌を打つて話した。

「困つたねえ、あのお婆さんも、餘程罪つくりだ。あの年になつて、かういふ眼に逢ふのは――。それも平常の行爲がわるいからだ」Sは又Sで、老母が寺の坊主と通じた時の話などをした。

遠い昔は皆な生返つて來た。多い孫達すら餘り多くの同情をその老母に持つてゐなかつた。ある孫は、

「私はまだ、こんな小さい、おかつぱさんでしたがね。お婆さんによく打たれたもんですよ。その時分から、餘り愛情のあるお婆さんではありませんでしたよ。丁度櫛や笄なんかを負つて賣つて歩いた時分ですがね」と言つた。ある孫は、「でもね、可哀相には可哀相だけども、何處の家だつて困るわねえ。いつまで生きるんだかわかりやしないお婆さんなんだから」と言つた。お常に關しては、「あの伯母さんは、本當に自分のことしか思はない人なんだから……。伯父さんの酒をつめたり、お客へ出す菓子を儉約したりして貯金した人なのですからね」などゝ批評した。

八

小さな行李と老母とを載せた車は、ある日の夕暮、小間物屋の店の前に留つた。

丁度、其時、Kの嫁が子供を伴れて店に來てゐたが、

「あ、お婆さん！」

かう言つて奥に驅け込んだ。

續いてすぐ母親のお金が出て行つた時には、老母は行李を店先に置いて、これから上にあがらうとする處だつた。
「お婆さん、何うしたの？」
「來たぢやよ」
かう言つて莞爾した。
「來たぢやよぢやない……何うして來たの？」
「だつて、お常や正男が行け、行けつて言ふぢやで……」
「だつて來る處ぢやないよ。此處は、お婆さん！」
「何ぢやかしらんが、お金の許へ行けつて言ふぢやで……」
載せて來た車夫が車を曳いて行かうとするので、母親の指圖を受けた嫁は慌てゝそれを呼び返した。
「何ですな」
かう言つて車夫は引返して來た。
「車屋さんには、氣の毒ぢやが、このお婆さんは私の方で引取る人ぢやないから、すぐ載せて歸つて行つて下さい」かう母親は言つて置いて、「お婆さん、本當に、お前さんのゐるところぢやないんだから、宅では、さういふことでは置けないから、すぐ車で歸つて行つてお呉れ」
「だつてな、お金……」
何か言はうとするのを押へて、

「何が何でも受取る譯には行かないから、歸つて貰はにや……。呆れたものだ、本當に！　車夫さん、一體、何ッて言つて賴まれて來たんです」

車夫は不思議さうにしたが、「いや、別に、何うッて……。いつもの處で出てゐたら、書生さんのやうな人が來て、此處まで行つて來て呉れッて言ふから、きめて、やつて來たばかしです」

「歸りの車賃は出すぢやでな、元の家へ伴れて行つてお呉れな」

お金は顏を眞赤にして、興奮したやうにして言つた。

「歸るのはいやぢやぞな、俺は……」

「お婆さん、何ッていふ性根なしぢやらうな。何うして出て來たんぢやな。お金の家へ行けと言つたので、それで出て來たのかな。そんな馬鹿があるかな。話もつきもせんのに……、お常さんが行けつッて言つたのかな、正男が言つたのかな？」

「お常も言つたし、正男も言つたぢや、お金、後生だに由つて、さう言はずにな。歸つて行つたッて、家はあつても誰もゐないぢや。お常と正男が毎日のやうに喧嘩してな。俺には食ふものを食はせんぢや。」皺の深く寄つた顏からは涙が流れた。

「だッて、お婆さん、そんなことがあるもんかね。話もすつかりきまりもしないのに、行けと言つたッて、さうですかッて言つて來るものがあるもんかね。お婆さんのゐる家は此處ぢやない。ちやんときまつてゐるんだから。お婆さんを一人ほつたらかして置いて行くまで、しつかりして、其處にゐなくつちやいかんぢやないかな……」

『だッてな、おのし、正男が打つたり蹴つたりするぢや。もうな、すつかりな、金をつかつてな。借金取が來てな。それはもうお話にも何にもならせんぢや。お金や、後生ぢや、置いて呉れ……』

涙はぽろぽろ落ちた。

『置いて上げたいけどもな、さういふ譯なんだから、話がきまらないんぢやで、あのお常と正男との狂言かも知れんぢやで、今、受取つて置いて上げるッて言ふわけに行かんぢやで……。それに、慶三はまだ歸つて來ないしな。』考へて、『お常と正男がお婆さんを放つて置いて行つたら、また話をするがな。

NとSとに相談をして、お婆さんの困らないやうにして上げるぢやで』

『後生だ、お金、さう言はずに置いて呉れ……賴むぢや』

かう言つて老母は手を合せた。

ふと氣が附くと、店の前には、人がもう大勢集つて立つて見てゐた。面白い光景、少しでも變つた光景をめづらしがる人達は、八十以上の老母が手を合せたり、六十位の婆さんが眞赤になつてそれを店に上げまいとしてゐたりするさまを不思議にせずには居なかつた。車夫は、『なアに、私が曳いて來たんですがね。連れて歸つて呉れッて、こゝの年寄が言ふんでさ』などゝ小聲で話した。

嫁もきまりがわるさうに店に出たり奥に入つたりしてゐた。老母は老母で、容易に歸らうとはしなかつた。子供達はびつくりしたやうな顏をして、大勢段々集つて來る人達を眺めた。

嫁が母親に、『ぢや、今夜一晩とめて、明日歸してやつては』と小聲で囁くと、

『飛んでもない。それこそこつちが引受けて仕舞はにやならなくなる！』

から語調を強めて母親は言つた。

そこに、ヂャラヂャラと劍を鳴して、若い巡査が入つて來た。すぐ前に交番があるので、何事かと思つてやつて來たのであるが、一方黒山のやうに集つて來る群衆を制しながら、一方そこの母親からその一伍一什を聞いた。母親は顔を眞赤にして一生懸命にその話を巡査にした。

「ぢや、お前さん、嫁ぢやな…」

「はい…」

「なら、兎に角送つて來たものだから、素直に一夜泊めるなりして、歸してやるとにしたら好いぢやらう」

「一夜泊めるのはわけはありませんけれど…いゝえ、いつでも來て、泊つては行くんですけどもな。向うのやり方がわるいしな。今日とめると、此方で世話をしなければならなくなりますぢやで…。本當の娘も二人まであるんで御座いますから…」

「お前のつれ合は死んだんぢやな」

「とうに…」

巡査は考へてゐたが、「その娘の宅は何處だ?」

「N區とS區ですが…」

「困つたな、泊めてやれな。見れば、年寄りだ」

母親は乾として、「それは出來ませんな。折角ですけども、それは出來ませんぢや。それに、息子も歸つて參りませんし、私はもう隱居した館ですから…」

「息子は何處へ行つてゐるんぢや」
「役所につとめてをります……」
困つたといふやうにして巡査も考へてゐた。群集の中では、種々な聲が起つた。「嫁ぢやとよ。……ひどい嫁もあつたもんぢや」かういふものもあれば、「あの年になつて、行き場所がないんだとよ。可哀相だな」などゝ言ふもののもあつた。あとからあとへと往來の人々が立留つた。
「仕方がない。それぢや伴れて歸れ！」
かう巡査は其處に戸惑つたやうにして待つて居た車夫に言つた。そして、此處の母親に向つては、「兎に角、話によると、向うに誰もゐるかゐないかわからないさうだから、その時は世話してやれ。親類もあるだらうから……」
「いゝえ、居りますんですとも……。空屋になつてゐるやうなことは御座いません。皆な向うの手なですから……」
「兎に角、さういふことにして、……ぢや、な、面倒でもな、元の家に伴れて行け」かう巡査は車夫に向つて言つて、集つて來る群集を制して、そのまゝ向うに鳴を劒して行つた。
「お金……さう言はずにな……」
老母は猶くどいた。
「お婆さん、本當にしつこい……。お巡さんさへあゝ言ふんだからな。兎に角一度歸んなさい。それからにしなさい」かうして無理に老母を押出すやうにした。

で、再び小さな行李を抱へて車に無理やりに乘せられた老母の哀れな姿は、夜になりかけた薄暮の空氣の中に白くくつきりと見えた。車夫は『狐につまゝれたやうだな』などゝ言ひながら、靜かにその車の梶棒を上げた。『ひどい嫁だな！』かういふ聲も群集の中から聞えた。通り一遍の群集には、長い年月の上に築かれた感情などはわからなかつた。

人々はいろいろな感情と批評とを抱いて、やがて廣い世間に散つた。

九

それと同じやうにして、老母はNの總領娘の處にもやられゝば、Sにゐる二番娘の許にもやられた。しかし、何處でも同じやうにして送り歸された。

總領娘の家にやられた時には、『お婆さんも何うしてさうだね。そんなにお荷物か何かのやうにされて口惜くないかえ。よくそれで腹が立たないな。何故、落附いて、置いて行かれるまでじつとしてゐないんだえ？』かう言つて、頭から怒鳴りつけられた。いつものやさしい娘は何處にも見出すことが出來なかつた。そこの抱への藝者達や、孫娘などが、可哀相だから、一夜泊めてやらうと言ふのもきかずに、いつもやる小遣もやらずに、そのまゝ押出すやうにして追ひ返した。

二番娘の處では、それでも、上にあげて、茶などを飲ませて、車をも歸したから、まア此處に置いて貰へる。あのお常と正男の出て行けがしの無情な取扱から免れることが出來る。かう思つて、老母はいくらか安心してゐると、娘は靜かなやさしい聲で、懇々として、此處に置いて上げたいけれど、子供達

に世話になつてゐる身では、さういふことは出來ないといふことを嚙んでふくめるやうにして話した。娘の眼からは涙が流れて來た。『何うしてお婆さんは、さう因果なんだらう。長生すれば恥多しッて言ふが本當だ。私なんかも、つくづく長生はしたくない。』こんなことをも娘は言つた。そしていくらかの金を握らせられて、車に乘せられて、又、長い道を遠い郊外へと送り屆けられた。

かうしたことを經驗しない前には、自分の一身が、年を取つた明日にも知れないこの不幸な體が、かう重荷に、かう薄情に取扱はれやうとは老母は思はなかつた。正男などに邪魔物に取扱はれると、「覺えてゐろよ、正男。俺は小さい時分からあんなに世話をしたのにな……。お前達に、世話にならないたッて、お金もゐるしな、NとSもゐるんだからな、何處へ行つたつて、私一人位世話して呉れるぢや……」などゝよく言つた。現に、かうならない前には、お金にしても、誰にしても、易々と自分一人位引取つて呉れさうな口吻であつた。それがいざとなると、すつかり反對になつた。力と賴んだものも何も彼も氷か何ぞのやうに溶けて流れた。老母は長い間を車に揺られながら涙を流した。時にはまた眼が眩みさうになつて、世界も何も彼もぐるぐる廻るやうな氣がした。

「また歸されて來たのかえ？ 娘が、娘がッて言ふが、何が本當の娘だえ。お婆さん何故頑張つてゐないんだい！ 此方は、明日が日も食へないッて言ふのに、親類も何もありやしない」

生活の辛さと自分一人の始末とに絶えず興奮してゐるお常は、老母の送り歸されるのを見る度にかう言つて怒鳴つた。正男は正男で、何や彼やにむくしやくして、時には自分の體をも破壞して了ひたいやうに怒つたり、何うにでもなれと思つたりした。『業つく張！』かう正男は叫んだ。

「もう、俺は、何處へも行かんぢや。此處で死ぬぢや、眼が廻りさうぢや」老母はかう言つて其處に打伏した。

娘達と嫁との間にも、いつか暗闘默闘がつゞけられてゐた。嫁の方では、「本當の娘が二人あるのに：：」と思ひ、娘達の方では「兎に角、養子に行つたにしても何にしても、兄さんの家だ。あそこで世話すべきだ」と思つた。否、いろいろな昔の事情があるから、娘達はいくらかは知つてゐるから、さうは思はぬまでも、「困つたものだ。……しかし、此方から先に口を出せば、此方が何うしても重い責任を負はなければならない」と思つた。

しかし、さういふ人達も、老母一人をさういふ家に任せて置くといふことは氣懸りで、嫁も娘達も、車の音が戸口で聞えると、またお婆さん、送り附けてよこされたのではないかと胸を轟かした。中でも小間物屋の店では、殊にそれを恐れた。群集にあざけられ、巡査に變な眼をして見られ、隣近所にも薄情な人と思はれるのが辛かつた。「それならそれでちやんと相談をするが好いぢや。あのお常がわりんぢや。此方で引取るのが當り前のやうなことを言つて來さがる。あのお常がぐつちや。ぐつちやで、息子に金を使はれるのも知らずに居るぢや。あゝ長生はいやぢや。あのお婆さんぢやて、去年あたり死んでゐれば、こんな苦しみを見ないでもすむぢや」などゝ母親は息子に言つた。

息子のKにしても、困つてゐた。同じ巴渦の中にゐる身にしては、NなりSなりに、「さうして放つて置く譯に行かないから、親類して相談しやう」と言つても行けないやうなところがあつた。Kは相談するつもりで、Nの叔母の許に訪れて行つても、相談より先に、叔母は多い孫達もあるのに、さういふ眼

に老母を逢はせるといふことを聲高く激昂して言つた。「それはさうぢや。お前の宅で世話しよと言ふんぢやないが、一體、あのお常と正男がしつかりしてゐないからいけないぢや。親の金を遣つて、藝者買をして、一周忌も經つたか經たない中に、そんなことにして了ふなどといふことが、世間に話が出來る話か……」から叔母は言つた。相談にも何にもならなかつた。Kはすご〳〵引返した。

十

お常の家は何うしてももう一家離散する他に仕方がなかつた。お常は息子の賴りにならないのをつくづく思つて、里に行つて、身の振方を相談したり、金目のものは、息子に賣られない中に、自分で先に立つて、道具屋を呼んで來て金にしたりした。簞笥も三つあつたのを二つ賣つた。茶簞笥も賣れば、長火鉢をも賣つた。その癖、その賣つた金で、お常は米屋、酒屋の借金を拂はうとはしなかつた。その金はちやんと貯金帳と共に胴卷の中に入れて、自分で體に卷いた。指環などもそこに入れた。

長火鉢を賣つたのを見た時には、正男はひどい權幕で、母親に喰つてかゝつた。お常も負けてはゐなかつた。

「そんな親がこの世の中にあるか」

から正男が怒鳴ると、

「お前こそあきれた奴だ。親や婆にひもじい思ひをさせるやうな子とは思はなかつた。私は私で自分の始末をしなけりやならない。これから長い一生を自分でやつて行かなけりやならない。」

「好いから、貰つた金をお出しなさい」

「誰が出すもんか。……大切な金だ。私はこれで食つて行くんだ」

「出さないか？」

「出さない」

「よし……」

「何をする。お前は、親を殺す氣か。お婆さんをあゝいふ目に逢はせて、その上親まで殺す氣か」

餘り喧嘩が烈しいので、後には近所の人達が見兼ねて留めに來た。

しかし正男はそれどころではなかつた。正男の身の上にも、來るべき地獄は竟に來た。かれは社に出る氣にもならなければ、さりとて家にゐる氣にもなれなかつた。かれはもうすつかり金を費ひ果した。女はそれを知ると、すぐその後の髪を見せた。いろいろに誓つた言葉、深く言ひ交した言葉、そんなものは皆な溶けて流れて行つて了つた。正男は闇に震へながら、毎夜のやうに、女の出入する家の通りに立つてゐた。

四月の末頃までは、正男はまた時々樣子を見に、又は何か目ぼしい賣り物を探しに、家に歸つて來たが、五月に入つてからは、すつかり姿を見せなくなつて了つた。人を頼んで、樣子を聞いて見ると、社には矢張毎日出勤してゐるさうで、何でもI町附近の友人の下宿にゐるといふ事であつた。

新緑は郊外を美くした。葉といふ葉は皆な生きて日影に輝いた。垣添の路を通ると、鯉幟がばたばたと音を立てゝゐたりした。枳殻の芽は柔かく青く、をりをり遲い躑躅などが咲いた。お常はつひに老母

の始末に困つて――まさか老母一人をそのまゝ放つたらかして、家を疊んで了ふわけには行かないので、恥を忍んで、ある日、夫のもとの同僚であつたといふ屬官のRの家を訪ねた。

　夫とは一級上だつたけれど、酒も飮まず煙草も吸はない謹嚴な人なので、家庭も圓滿らしく、老母の上品な白髮頭も見え、子供達は皆々新しい絣の筒袖を着て、丁寧に客の前に來て挨拶した。通された室も、小ぢんまりとして、掃除が綺麗に行屆き、花なども挿してあつて、庭には夫の嗜好と同じやうに多くの盆栽が棚に載せられてあつた。お常は自分の慘めな生活と比べて、胸も塞るやうな氣がした。夫の烈しいわるい血、それを受續いだ息子のことなども考へられると共に、虐待された自分の一生などが犇犇と思ひ出された。涙が出て來た。

　夫の死ぬ前にも來て呉れたR氏、葬式の時にも種々に世話をして呉れて、下りる金のことに就いても心配して呉れたY氏、そのR氏にまだ一周忌も經つたか經たぬに、さうした話をしなければならないと思ふと、やがて出て來ていつものやうにやさしく應對する顏を見るのも面伏であつた。お常は持つて來た小さな土產物を其處に出した。

　お常が小聲で話す間、Rはふんふんと言つて聞いてゐた。時々煙管に煙草をつめて、それを靜かに鼻から出した。

　やがてお常の話が終ると、

「それはお困りだ！」

　から言つて深く考へるやうな風をして、『困つたことですな。息子さんのことが、一番困るな。それは

何うせ、若い中の過ちでせうけれど……。それで、社には勤めてゐるんですな。それならまだ、いくらか好う御座んすけれど……』考へて、『よう御座んす。K君によくお話しませう。毎日顔を合せてゐるんですから、今日もついさつき話をしたんですけれど、そんなことはちつとも知りませんでした。成ほど、さういふ具合になつては、娘さん達にも、ちよつと引受け惜いでせう。好う御座んす。K君にもよく聞いて見て、都合によつたら、娘さん達にも逢つて、よく話して上げませう。それはお困りだ』

『何うか、お願ひ申します、本當にもう……息子がわるいもんですから』かう言つたお常は聲を曇らせた。

『お婆さん、おいくつです？』

『八十になります』

『隨分御長命ですな』ふと言葉を改へて、『此間、ちよつと、あつちの方へ次手がありましたからI君に逢ひに行つて來ました。墓地は花が盛りでした。』

『さやうですか。私はまたそれやこれやで、一周忌も致す事も出來ず、お墓參も致さないので御座いますよ』悲しさうに恥しさうにお常は言つた。お常の胸はこれからの生計のさびしさ辛さや何や彼やで一杯になつた。

『しかし、息子さんが社をおやめにならないのが、何より結構です。若い中ですから過も御座いますからな。いくらさう仰しやつても、矢張親子は親子ですからな。息子さんだつて、わるいことをしたと思ふ時が屹度來るのですから。さう餘り御心配なさらない方が好う御座います。』

昔に變らないゆつたりした物に動じない落附いた態度がお常には羨しかつた。かうした同僚があるの

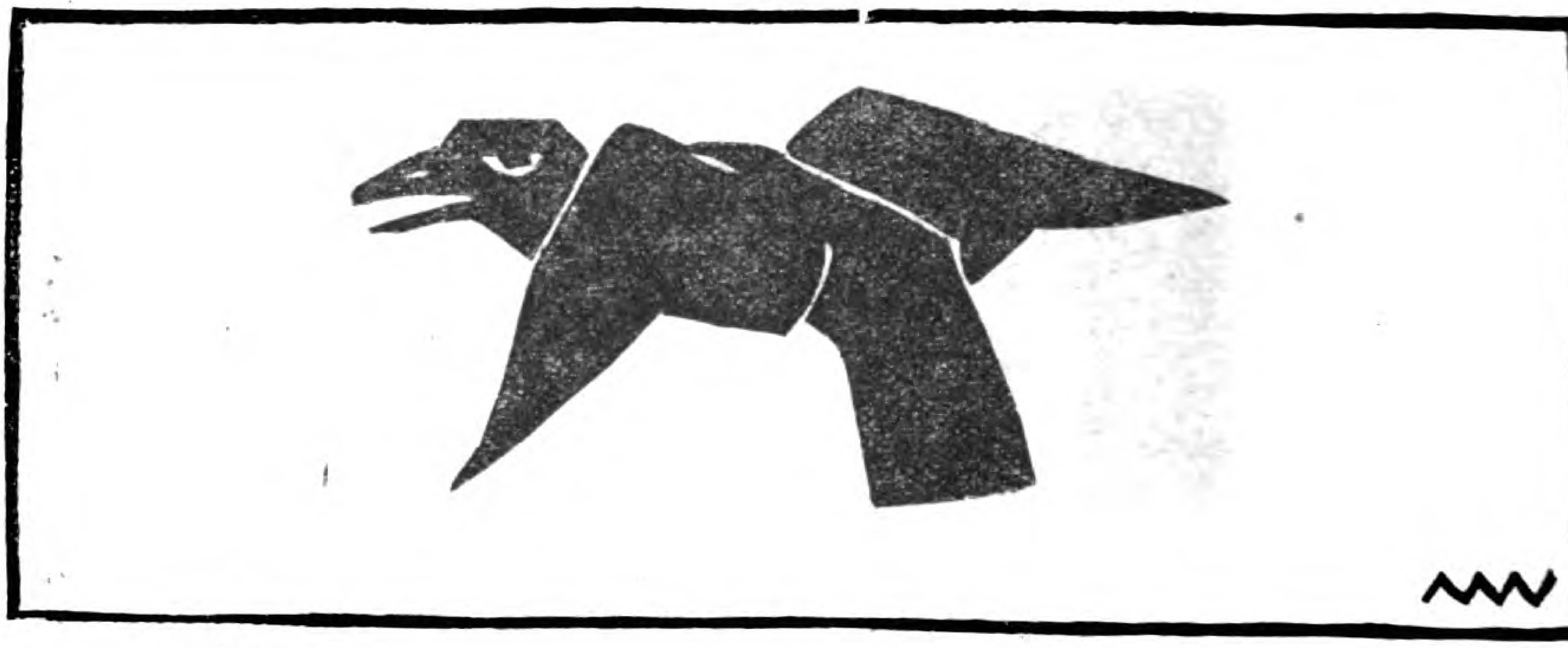
に、何うして、家のはあゝ性急で、旋毛曲りで、不平だらけであつたらうなどゝお常は思つた。お常はかうした自分の不幸は一朝一夕のことではないなどゝいふことを考へながら、其處から郊外の家へと歸つて來た。

R氏が入つてから、話はすらすらと運んで行つた。小間物屋の息子のKはきまりをわるがつて、『何うも叔母達も皆な勝手でわらかんもんですから』などゝ言つた。R氏はわざわざNやSにまで出かけて行つて異れたりした。

で、一月ほど經つた後には、嫁と娘達二人とで、取敢へず十日づゝ預ることになつて、老母は始めて世に浮び上ることが出來、お常はお常で、安心して一家を疊むことが出來た。しかし親類では、お常母子を決して好くは言はなかつた。絕對に交際しないことに親類達は言ひ合せた。

小間物屋の店や、Nの藝者屋や、Sの通りあたりに、その腰の曲つたひたと老いた丸い老母の姿がをりをり見えた。時にはお金の嫁がそれを伴れて、Sの方へ送り屆けるべく電車に乘つて行くのを人々は見懸けた。Nの藝者屋では、あのことがあつてから、お婆さんの貫目がすつかり落ちたといふやうに、もう抱えの藝者達は大騷をしなかつたが、それでも孫娘に當る二人の姐さんは、『お婆さんは鷄肉が好きだね』などゝ言つて御馳走した。

しかし十日間廻り持ちといふことも面倒になつたので、その秋には、娘、孫すべてを合せて十一二人の頭割に、少しばかりの金を毎月出させて、Sの娘に近いある家の一間を借りて、そこに老母を置くことにした。他人の大工の嚊が内職にその世話をした。



侮蔑

谷崎精二

一

春の半ばの薄曇つた、物憂ひ日であつた。△△新聞經濟部長の殿村はいつもの様に正午近くに社へ出勤して編輯室の机に向ひ乍ら其の日の事務を執つて居た。新刊の經濟雜誌の社說や時報欄を漁つたり、都下の重立つた各新聞の經濟記事や商況欄にざつと眼を通すのが彼の每朝の仕事であつた。而して其の日の自分の社の新聞に出て居ない新事實を發見すると、直ぐ青鉛筆で線を引いて置いてから後で部下のそれ〲の擔任の記者を呼んで注意を與へるのだつた。永年人を使ふ事に慣れて來た彼は決して無暗に小言を云ふ事をしなかつた。どんな重大な報道が係記者の不注意から洩らされた場合でも優しく責任者を呼んで、『こんな記事が此の新聞に出て居るが本當でせうか。△△通信から種が出たらしいから餘り信用が措けませんよ。今日あたり△△通信から取消しが來るかも知

れない。でも君の擔任だから一應調べて下さい。』と云ふ樣な事を述べるだけであつた。神經の鋭い記者はそんな優しい言葉を掛けられると、却つて自分の無能に對して烈しい嘲笑を浴びせかけられた樣に感じた。事實殿村は部下と用談をする時はいつも唇を平たく擴げて――さながらさう云ふ口の恰好をしなくつては言葉が自由に出ない樣に――冷かな笑みを浮べるのが常であつた。而して又そんなに神經の鋭くない者でも、殿村がきら〳〵光る險しい眼でぢつと彼の横顏を見つめて、青鉛筆で何度もやけに太い線を新聞の上へ引き乍ら話し續けるのを見ると、漸々其れが露はに叱られるのよりも却つて恐くなつて來て、『つい氣が付かないで濟みませんでした。早速調べる事と致します。』と云つて謝るより外仕樣がなかつた。而して其れが實に殿村が最初から期待して居る唯一の返事なのであつた。

此の日もいつもの樣に殿村は窓際の椅子に凭れ乍ら各通信社から送つて來た謄寫版刷りの通信を讀んで居た。歐洲戰爭以來漸々下落して來た露西亞のルーブルの相場が不換紙幣濫發の爲め此の頃になつて更に大暴落を惹起した事や、英吉利政府が戰時輸入禁制品の追加を發表した事や、支那政府が關稅を引上げやうとする樣子があるので關西の貿易商が早くも反對運動を始めた事などが讀み行くまゝに彼の注意を惹いて、それ〳〵のページが拔き取られた。やがて一通り通信を讀んでしまふと彼は不用の分を丸めてテーブルの下の紙屑籠へ投げ込み、ほつと一息ついてあたりを見廻した。而して未だ人が出揃はない、靜かな編輯室の向ふの壁際に女事務員ののぶ子がぼんやり佇み乍らふと彼と顏を見合せて目禮したのを見出して、『もう來て居るな。』と思つた。此の頃常に彼の意識の底に貯へられてある、或る秘めやかな想像が彼の氣持を明るい歡びへ引入れた。

彼は二十代からもう四十を越して頭が禿げかゝつた今日迄、廿年の間方々の新聞雜誌に記者生活を送つて居た。規則的な學校教育を受けない、從つて團體的勢力の後援を持つて居ない彼に執つて其れはかなり苦しい努力の連續であつた。世間並の賢こさとづうづうしさとを備へた彼は其の廿年の間機會が與へる便宜のまゝに從つて、さまざまの異つた勢力と結び着いては次第に自己の地位を高める事を怠らなかつた。幸ひ幼ない時分築地の居留地の近くに育つて或る露西亞人から露西亞語を敎はつた經驗があるので、彼は自分の無學を蔽ふ唯一の手段として露亞西語を勉强した。而して何處の社でも露西亞語の出來る人が寡なかつたので彼は割合に重寳がられて專門の經濟部以外にも相應に用ひられて來た。此の社へ這入つてからも直ぐ露西亞語の新聞を取る様に主筆に建議したのは彼であつた。經濟方面の專門的智識が甚だ貧弱であつたにも拘らず、世間的の賢こさと、年功と、而して編輯部內の一般の氣受けが良いため彼は二三年前の改革の際に經濟部長に拔擢された。其れは彼が久しい以前から望んで居た地位であり、而して又現在の彼の身分としては榮達の行き留りでもあつた。

「之れからもういくら勉强しても此の社では出世の見込みがないのだ。」

さう思ふと彼は急に今迄の努力を職務の上に倦まず續けて行くのが馬鹿らしく感ぜられて來た。だが此の社で地位の上る見込みがなくなつたにしても彼の生きて行く上の希望は未だいくらもある筈であつた。例へば相場に手を出して一攫千金の試みをする事や、月給の中から勸業債劵を買つて貯める事や、他の經濟雜誌に雜原稿を書いて小遣錢を儲ける事や、そんな事は皆小さい乍ら日々の希望となつて、而して其れが實現された時にはそれぞれの喜びとなつて、彼の生活を色どつて居た。

彼がさうしたさまぐの慾望の調和と按排とに苦心する事をいつしか日々の樂しい仕事と見出す様になつた頃、ふと彼の心には其等の小さい慾望を一時に壓倒する程の新しい、支配的な執着が萠し始めた。彼は社内の女事務員ののぶ子の可憐な姿に人知れず戀する様になつたのである。

のぶ子は三四年前、未だ肩揚げの取れない十五六の頃に電話掛りとして此の社へ雇はれて來たのであるが、おとなしいのと、勉强好きなのとで人々に愛されて、今では編輯の助手をして居た。西洋蠟燭と綽名をつけられて居た、色の蒼白い、餘り健康でなさうな、始終俯いて本でも讀み耽つて居る様に何も無い机の上を見つめて居る、淋しい少女であつたが、其れでも年を取るにつれて彼の女の「青春」が漸漸其の顔の表情や、四肢の肉づきに現れて來た。瘦せた胸はいつのまにか膨らんで、着物の肩揚げが取れた兩方の肩はなだらかな圓みを持上げ、頰は蒼白い乍らにほんのり光澤を帶びて來て、伏眼がちの双眼も長い睫毛の下から折々は物欲しさうに人の顔を見上げたりする様になつた。

「あの子は思ひの外美人になりさうだ。」

さうした評判が編輯部内の記者たちの間に擴がりかゝつた頃、四十を越した殿村の心も怪しく彼の女の方へ引きつけられて居た。

「年がひもない事だ。第一今の身分に對して恥ぢねばならない。」

彼はさう思つてのぶ子に對する愛情を幾度か抑へつけやうとしたが、其れは唯此の不幸な、惱ましい戀心を日に日に募らせるに役立つだけであつた。急がしげにペンを走らせ乍ら、部下の記者を呼んで編輯上の注意を與へ乍ら、ともすれば彼はそつと振返つて五六間離れた向側の椅子に凭れて居るのぶ子の

横顔へ視線を投げかけずには居られなかつた。而してどうかした機會に彼の女が無意識に彼を見返したりすると、――悲しい事にはいつも其れが無意識であつた――急に彼は青年の様に顔を赤くしておど〳〵し乍ら原稿の字を抜かしたり、話の筋道を間違へたりするのであつた。どうかして切ない自分の意中を察してくれる様に、さう思つて彼は餘りに繁々とのぶ子の顔を眺めやるのであつたけれども、彼の女はちつともそんな事に氣が付かないらしかつた。

『無理もない事だ。俺でさへ自分の氣持がわからない位なのだもの。』

さう思ひ返す度毎に殿村は情無い程しよげてしまふ自分を見出すのであつた。だが又かうして毎日顔を合せて居る中にはどんな僥倖に迎へられないとも限らない。彼の女が貧しい家に生れついたと云ふ事が何かの、彼の女に執つては不利益な、だが自分に執つては便利な機縁を授けてくれるかも知れない。さうした儚ない想像を唯一の慰めとして彼は不幸な戀に苦しむ自らを持て餘し乍ら其の日其の日を過して居た。

此の日も彼はそつとのぶ子の方を眺めやつて、此の頃頓に光を發する様にあでやかになつて來た彼の女の頬から、もう男の顔を平氣で見返し得る様になつた（其れが却つて殿村を大層不安にした。）兩眼から、或る暗い慾望を唆られ乍らいつもの様にぼんやりと考へ込んで居ると、其處へ突然受付の給仕がやつた來て一通の書狀を渡し乍ら面會者が來た事を告げ知らせた。手紙の差出人は彼の古い友人で、封を切つて急いで讀み下すと田舍の新聞社で經濟部の記者を勤めて居た知人Kが上京して就職口を探して居るから本人に面會の上、都合が良かつたら部下として使つてくれまいかと云ふ依賴狀であつた。

「又就職を求める青年か。會ふのも面倒だな。まあ仕方が無い、應接室へ通してお置き。」

彼は給仕を追ひ歸して用も無いのにわざと五六分煙草を燻ゆらして時を過してから階下の應接室へ行つた。

「私が殿村です。」

さう云つて扉の近くの椅子に腰を下すと、反對の側に腰を下してぼんやり薄暗い壁を見つめて居た青年が急に椅子の上から彈かれた樣に立ち上つて慇懃に禮をした。

「始めまして、私はK――と申す者でございます。お忙しいところをいろ〳〵御面倒をかけまして誠に相濟みません。」

青年は未だ禮をしたまゝの直立の姿勢で之れだけの事を一氣に述べ立てゝから急に口を噤んでしまつた。云ふべき事は澤山用意してあるらしかつたが、何とか一言殿村に受け答へをして貰はなくつては後が滑らかに出ない樣であつた。

「まあお掛けなさい、お掛けなさい。」

殿村は青年に椅子を勸めてから市場へ買物に出た商人の樣にぢろ〳〵と眼の前の品物を吟味し始めた。青年は年頃廿七八で小柄な、實直さうな顏をして居たが、眉毛がばかに太くつて唇が心持ち歪んで居るのが何處か堅意地らしい氣象を示して居た。綺麗に分けた髮の毛は女の樣に細く、柔かであつたが、首筋が大層短かくつて往來で後ろから吹いて來る寒風に抵抗しやうとする人の樣に後頭部が襟の中に縮こまつて反對に顎が少し持上つて居た。外見(ウハベ)はおとなしさうだが内心は本當に落着いて居るのではなく

つて、始終おど〳〵した眼つきをして居る樣子は、仕事を求める若い青年がいつも初對面の際に彼に示す姿であつた。而して殿村はやはりいつもの樣に冷かな態度で應對し乍ら不得要領な返事をして追ひ歸すのを自分の勤めにした。

「御手紙は今拜見しました。私の方でも實はなるべく若い、働きのある人を入れたいと思つて居るんですが今の處缺員が無くつてね。然し其の中に又人が要る樣な事があつたら早速お知らせしませう。」

そんな事を云ひ乍ら彼はいつ東京へ來たのだとか、田舍の新聞社には何年勤めて居たのだとか、どうして其處をよしたのだとか云ふ樣な質問を二つ三つ發して、青年の慇懃な返事を「ふん、ふん。」と云ひ乍ら聞いてやるだけの好意を示してやつた。青年はさうした取り留めの無い質問に其れから其れへと答へて居る中には又どう氣が變つて殿村が急に『では明日から此の社へ勤めなさい。』とでも云ひ出さないとも限るまいと想像して、尚も熱心に地方の經濟界や、田舍新聞の編輯の內幕やらを辯じ立てた。殿村は始めの中は『ふん、ふん。』を繰返して青年の話相手になつて居たが、漸々其れが馬鹿らしくなつて來て彼の興味は二階の編輯室で働いて居るのぶ子の方へと動き始めた。のぶ子は何をして居るだらう、あの白い手でペンを持ち乍らせつせと原稿でも書いて居るかしら? 其れとも若い社會部の記者たちとでも笑ひ乍ら冗談を云ひ合つて居るかしら?

「どうも御多忙のところを大變御邪魔を致しました。ではどうぞ缺員でも出來ましたなら御採用願ひます。」

青年は殿村の注意から自分が置きざりにされた事に氣が付くと此の上長居をするのは自分の不利益だ

と悟つたらしく、あわてゝ禮をして歸つて行つた。殿村は青年を玄關迄送つて二階の編輯室へ上ると、直ぐ待ちかねた樣にのぶ子の方へ視線を向けた。のぶ子の椅子の側には澤木と云ふ社會部の記者が机に凭れかゝる樣にして何やら頻りにのぶ子に談じ込んで居る樣子なので、殿村は氣懸りになるまゝに其の方へ近寄つて二人の問答を聞くと、其れは澤木が二三日中に催される編輯部員の宴會にのぶ子の出席を勸めて居るのであつた。

「明後日の六時からです、是非出席おしなさい。」

「でも私お酒を飲む會なんかへ行くのはいやなんですもの。」

「あなたには、お酒を勸めやしませんよ。是非今度はあなたに出て貰ふ樣にと云ふ編輯一同の希望なのですからどうしても出て下さい。」

「ぢやあ本當の事を申しますわ。私さう云ふ會へ出る樣な立派な着物を持つて居ないんですもの。」

のぶ子はかう云つて恥づかしさうに造り笑ひをし乍ら俯むいてしまつた。

「着物なんか何んだつたようござんす。お正月に着た縮緬の紋付があるぢやありませんか。あれで結構です。そんな口實はいけません。」

澤木は尙も熱心に出席を勸めて居たが、ふと側に立つて二人の話に聞入つて居る殿村の姿を認めると「はゝゝ。」と無意味な高笑ひをまぜ乍ら「ねえ、殿村さん、是非今度の宴會にはのぶ子孃の出席を强要しやうぢやありませんか。」と云つた。殿村は早速其の機會を利用してのぶ子に近づき、「さうとも、是非お出でなさい。着物が無ければ僕のを貸さうかね。」と冗談らしく云ひかけたが、彼の女が尙も恥づかし

さうに俯むいたまゝ口を噤んで居るので、云ひ繼ぐ言葉も無くつて其のまゝ自分の椅子の方へ歸つて行つた。だが其れは少しも彼を不快にしなくつて、却つて何か思ひがけない幸福の暗示であつたかの樣に彼を勇氣づけた。

「あの位な年頃には唯何もかも恥づかしいんだ。其れを此方で押し切るだけの覺悟が無くつちや。」

彼はさう思つて幾度か輕く頷いた。

二

其の日の夕方殿村は社の歸途に近所の行きつけのレストランで晩飯を濟ませてから、銀座の呉服店で派手な女物のお召を一反買つて電車で神田の末廣町へ行つた。彼は突然のぶ子の家を訪れて、家庭の樣子を其れとなく調べ、一方彼の女に贈物をして其の歡心を得やうと企てたのである。

「だが突然尋ねて行つてこんな物をやつたつて物堅い兩親なら受取らないかも知れない。でも折角買つたのだ、思ひきつて行つてみやう。此方がずつと目上なのだから案外喜んで受取るかも知れない。」

そんな事を考へ乍ら殿村は晝間社の編輯室で社員名簿を繰つて調べた『神田區末廣町△番地磯部のぶ子』と云ふ住所の記憶を頼りに電車通りから横町へ曲つてのぶ子の家を尋ね廻つた。廣い、賑かな電車通りの裏に暗い、ごみ／＼した露地が幾條も互に結び合つて居た。もう暗くなつて家々の標札がよくわからないので、彼は煙草屋だの、酒屋だので幾度ものぶ子の家を聞いて歩いた。而して車止めに入口へ大きな杭を二本打つた狹い露地の溝板の上をとぼ／＼と歩いて行くと、大きな邸の煉瓦塀へ突當る手前

の處にやつとのぶ子の家が見當つた。

「御免なさい。」

彼は低い二階建ての長屋になつて居るのぶ子の家の格子先に立つて案内を求めた。直ぐ突當りの塀の前に水道の共用栓があつて、其處で白髮の老婆が着物の裾をからげ乍らごし〳〵米を淅いで居る音に引込まれて殿村の聲は仲々家の中へ達しなかつた。彼はふと其の老婆がのぶ子の母親ではないかしらと考へると、急に何となく物哀れになつて來て老婆に振返られまい爲め顔を反けた。

「御免なさい、御免なさい。」

二三度さう繰返すとやつと聞えたと見えて室中から誰かばた〳〵馳け出して來る足音が聞えて上り框の煤けた障子が開かれた。殿村はびつくりして彼を見下して居るのぶ子の姿を見出して或る不安と、其れに打勝つ樂しい期待とに胸を顫はせた。

「突然お尋ねしました。」

彼が笑ひ乍らさう云ふと、のぶ子は『はあ。』と云つたきり暫くぼんやり佇んで居たが、やがて氣がついた樣に慇ろに殿村を室内へ導き入れた。

丁度晩飯が濟んだところらしく、長火鉢の前に座つて居た父親はあわてゝ膳を側へどけ乍ら疊の上に落ちて居る飯粒を拾つて膳の縁へ塗りつけた。而して臺所から母親が出て來てちらと殿村の顔を見やり乍ら其の膳を受取つて引下つた。其れが先刻水道の共用栓の前で米を淅いで居た老婆とは違つて居たので彼はほつと安心した。

胡散臭げな顔をして座つた兩親の耳許でのぶ子が小聲に殿村の身分を告げると、二人は急に畏まつて手を突き乍らおど〳〵した樣子でお辭儀をした。

「どうも娘が毎度大變御世話樣になりまして。」

「いや私こそ。經濟部は人が足りなくつて仲々忙しいものだからのぶ子さんなどにもいつも手傳つて貰ふので。其れで今日はまあ私の方からお禮に來た樣な譯です。」

そんな事を云ひ乍ら殿村は鷹揚な、だが親しみ深さうな態度を見せてのぶ子の兩親を相手にぽつ〳〵世間話を始めた。父親は或る劇場の道具方に勤めて居るので芝居の開いて居る間は毎日忙しい事や、夫婦の間にはのぶ子の外に今年十五になる男の子が一人あるきりだと云ふ事や、其の男の子も今年小學校を卒業したので近い中何處かへ給仕にでも出すつもりだと云ふ事や、そんな話を聞き乍ら殿村はのぶ子の一家の生活がかなり窮迫して居るのを觀察して、迅くからの彼の秘めやかな空想を實現する道が割合に容易であるかも知れないと悟つた。彼は時々のぶ子の方を振返り乍ら急に親しみが增して二人がもう今迄の樣な赤の他ではなくなつた樣に想像しては輕やかにほゝゑんだ。

小一時間許り打解けて兩親と話し合つた後、殿村は持つて來たお召の反物を取り出して「のぶ子さんにいつも働いて貰ふお禮に。」と云ひ乍ら差出した。彼の豫想通り兩親はそんな物を頂いてはと云つて堅く謝絶したが、彼は殆ど命令的に押しつけてそこ〳〵に立去つた。

「先づ今日だけは思ふ樣になつた。」

細い露地を電車通りへと歩き乍らさう考へた時、暗い慾望が急に彼の心の中で根を持つて來た。

其れから二日目の晩に京橋の或る大きな料理店で編輯部員の大宴會が開かれた。

殿村が夕方社を出て、大急ぎで刈込みをしてから會場へ行くと、百疊近い二階の大廣間に數十名の記者がぎつしりと並んで、正面の床の間の前に座を占めた主筆のLが丁度挨拶をして居るところであつた。彼は人々の後ろを擦り拔けて主筆の隣りの設けの席へ就くと、直ぐあたりを見廻してのぶ子の姿を探した。のぶ子は稍や色が褪せた紫縮緬の紋付を着乍ら末座の方に窮屈さうに控へて居た。

『何故此の間やつたお召を羽織にでも仕立てゝ來なかつたのだらう。』

殿村はさう怪しんだが、而して自分の席とのぶ子の席とが餘りに隔だたつて居るのを物足りなく思つたが、とにかく彼の女が來て居る事が彼を喜ばせた。此の多勢の男の中で空惚けて知らぬ顏をして居る自分だけが、實は一番彼の女に近づいて居るのだと云ふ意識が時々彼の口許へ微笑を誘ひ込んだ。彼の待ち構へて居た熱い幸福がもう今宵にも彼の前に落ちて來さうに思はれた。

主筆の挨拶が濟むと極彩色に飾り立てた四五人の雛妓が賑かな三味線の音に連れて廣間の中央で手踊りを始めた。其の踊りがやつと終つた頃、一座は盃の遣り取りですつかり陽氣になつて居た。主筆のL、社會部長のS、經濟部長の殿村、さうした重だつた人達は殊に諸方から集まる盃の處置に窮して居た。酒が好きであり乍ら餘り飮めない殿村は部下の若い記者たちに强ひられて盃を重ねて居る中にすつかり醉つてしまつて、床柱に凭れ乍ら苦しい息をついた。のぶ子の姿を眺めやうとして時々向側に並んだ人人の顏を見廻すのだけれども、眼の前の物象がぽつと薄赤く淀んで、視線を一個所に定めやうとする度に顳顬がちくちく痛んで眼が眩んだ。而して微かに人々の騷ぐ聲を聞き乍ら彼は其のまゝ抑へつけられ

た樣に身動き一つしないでうと〳〵と半無意識の狀態にさまよつた。

九時打つて家の遠い者がぽつ〳〵歸りかけた頃、殿村もやつと眼を覺して立ち上つた。若い記者たちは未だ居殘つて盛に飲み續けて居たが、重だつた人はもう大槪歸つた樣子なので彼も直ぐ身支度をしてぶら〳〵料理店の玄關を出た。而して電車通りへと七八間歩いて行くと、直ぐ自分の前にのぶ子が淋しさうに肩を窄め乍ら料理の折詰を大切さうに下げてとぼ〳〵歩いて居るのに眼を留めた。

「之れは良い機會が見つかつた。」

彼はさう思ひ乍ら後ろから寄り添つて「磯邊さん。」と聲を掛けた。のぶ子は振返つて殿村の姿を認めると、如何にも上長に對する禮儀を忘れぬ樣に殷懃に禮をし乍ら二三歩彼から遠ざかつた。

「今歸るんですか。女の人には餘りこんな宴會は面白くないでせう。」

「はい。其れにやたらにお酒を勸められるものですから。」

「其れはいけない、誰がお酒を勸めました。」

殿村は淡い嫉妬の情に動かされてから聞いた。

「いえ、別にどなたと云ふ事もありませんが。」

電車通りの明るい電燈の光が近い四つ角から直ぐ二人の足許へ流れ込んで來た。殿村は電車の停留場迄歩き着かない中に急いで自分の用件を話してしまはねばならぬと考へた。其れはふと今思ひついた事ではなくつて、久しい以前からの計畫のほんの第一歩に過ぎなかつた。

「磯邊さん、ちよつとあなたにお話しがあるんだがね、明日の晩でも暇ならば何處かで會ひたいんだが。」

「はい、ですがどう云ふ御用なので？」

のぶ子は彼の思はくが測りかねてそつと彼の顔を見上げた。

「なにね、ちよつと其の、あなたに手傳つて貰ひたい仕事があるんだが。ぢやあかうしやう、明日の晩六時頃に上野の辨天樣の入口で待つて居て下さらんか。用は二三十分も話せば濟んでしまふのだから。ね、ぢやあ忘れずに。」

殿村が强ひる樣な口調でかうのぶ子と約束した時、二人はもう停留場の赤いランプの下へ來て居た。無言で並び合つて電車を待つ間に彼は今宵の約束を圓滿に運ばせる爲め、もつとのぶ子に彼の好意と愛情とを示して置きたいと考へた。

「さうだ、良い事がある。」

彼は秘かに頷き乍ら蟇口から五圓紙幣を一枚取り出して、「之れで着物の裏でも買つて此の間のお召を仕立てゝごらん。」と云ひ乍ら無理に彼の女の手に握らせた。

三

翌日の夕方殿村はのぶ子が歸つてしまつたのを見屆けてから自分も社を出て、電車で上野へ赴いた。丁度方々の會社や銀行がひける時刻で、電車の中は押し込められたまゝに身動きも出來ない程混雜をして居た。殿村は吊皮を握つてぼんやり窓の外の暮れかゝつた往來を眺め乍ら今宵の會見の結果を豫想してみた。のぶ子は自分の申出でを受容れて彼の女の愛を捧げてくれるだらうか、年が二十も違ふ事や無

論正妻にする事が出來ない事や、今迄彼の方でこそ戀ひ慕つて居たのだが、向ふでは何とも思つて居たのではないのだと云ふ事が彼の判斷を悲しい諦らめに落着かせやうとした。だが彼の女の家が貧しくつて到底立派な夫を求める事が出來さうもない事だの、もう年頃だから屹度彼の女が與へられたる最初の都合の好い機會に男の愛を迎へやうと待ち構へて居るに違ひないと云ふ推測だのが再び彼の樂しい想像を蘇らせた。のぶ子の魅力が主として彼の女の溫順と貞淑とにあつたにも拘らず、何故か今や彼は彼の女が淫蕩な、多情な女であつてくれゝばよいと秘かに期待する樣になつた。

上野で電車を降りて不忍の池畔へ出て、約束の辨天樣の入口へ行くと、其處にのぶ子がしよんぼり佇んで彼を待受けて居た。

「やあ、お待遠う。餘程待ちましたか。」

「いゝえ、十分許り。」

「其れは失敬。まあ何處かで一緒に飯でも食べませう。」

「いゝえ、御飯はもう宜しいのでございます。」

殿村が先へ立つて歩き出したのでのぶ子も後から二三歩隔てゝ從ひ乍らかう云つた。彼の女は一度家へ歸つたと見えていつも社で履いて居る袴を取つて居た。今朝塗つたまゝの白粉が剝げて、粉を吹いた樣に雀斑が浮き出た頰の上へ亂髮のほつれ毛が垂れかゝつた樣子が急に殿村には愛らしいと云ふよりも寧ろ物哀れに感ぜられて、淋しい氣持が彼の興味を幾分裏切つた。

「まあでも立話は出來ない。何處か小料理屋へでも這入つて休み乍ら話しませう。」

『いゝえ、折角ですが其れは御免蒙ります。其れよりか御用の話をどうぞ。』

のぶ子は無愛想にきつぱりと斯う答へて足を留めた。

『おやあまあ仕様がない、歩き乍ら話すとしやう。實はね、此の間からあなたの將來の事をいろ〳〵考へてあげたのだが――』

彼はかう云ひかけてちらとのぶ子の横顏を眺めると、彼の女は何か身體の痛みを堪へて居る人の樣に口をきつと結んで白い小さな額に小皺を刻み乍ら俯むいて足許を見つめて居た。顏の全面の表情には何かしら殿村の滑らかの話の進路を妨げやうとする端嚴な、冷酷な物があつたが、彼はもう今更云ひかけた事をやめてしまふ譯にも行かなかつた。

『實はね、あなたももう年頃でいつ迄あんな處に勤めて居るのも厭やだらうと思つて、僕が引取つてお世話したいと考へたんだがね。何處かへ一軒持つなり、間借りをするなりして、若しくは女學校へでも行きたければ無論通はしてあげるし、御兩親の方も充分面倒を見て月々の仕送りもしてあげる。好い加減にあなたを欺いて途中で振り棄てゝしまふ樣な事を決してしない事は私が今日の地位と名譽にかけて誓ふ。』

『其れは、其れはどう云ふ事なのでございます？』

のぶ子はやつぱり俯むき乍ら小聲で問ひ返した。

『つまりだね、私が今後あなたの一身上の面倒を一切引受けて安樂に暮させてあげる。其の代りあなたは私の愛を受容れてくれる。勿論私は決して一時の戯れ心でこんな事を云ふのぢやない。一生涯決してあなたを見捨てない事を誓つてもよい。私の妻は私より年も上で平常から病身だから、妻の身に若しも

の事があつた後には必ずあなたを正妻として家庭へ引取る――」

もう何とか返事をしさうなものだ、さう考へて殿村は言葉を切り、そつとのぶ子の顔を見下すと彼の女は靜かに、影の樣に足音も立てず歩き乍ら兩手で僅かり顏を蔽うて居る、彼の女は泣いて居たのだ。

「どうしたね、其れともあなたにはもう將來の身の振り方がついて居るのかね？」

失望の豫感から胸を顫はせ乍ら彼が問ひを新たにした時、彼の意外な驚きに迄、のぶ子の俯むいた頭が微かに頷くのが見えた。

「私は近い中にもう結婚する筈になつて居るのでございます。」

暫くしてのぶ子はやつと泣聲で返事をした。

「誰だ、相手は誰だ、社の人ぢやないか？」

殿村は烈しい嫉妬の情に突き廻され乍ら平常比較的のぶ子と親しくして居たらしい、若い記者たちの風丰を混亂した記憶の中から選び出して彼の女の前で其の男を恥ぢしめやうとした。

「誰だ、相手は誰だ？名前をお云ひ、名前をお云ひ。」

彼は脅かす樣に彼の女の耳許でかう怒鳴つた。のぶ子は急に泣き歇んで、濕つた睫毛の間からぢつと彼の顏を瞰みつけた。

「名前なんか申上げる必要はありません。」

「よし、では私からあなたの兩親に直接に聞いてみる。」

「そんな事を云つて脅かさうとなすつたつて駄目です。兩親も承知してとうから婚約をしてあるので

す。」
『ぢやあ誰だ、さあ云ひなさい。』
『申します。其の代りもう明日から社へは參りません。其の方と云ふのは永井さんです。』
『おゝ、永井か。何だあんな奴！』
永井と云ふのはつい一年程前彼が世話をして入れてやつた若い相場記者であつた。あんなおとなしさうな、日頃彼自身よりもつと空惚けて知らぬ顔をして居た若者に出し拔かれたかと思ふと、彼は齒嚙みをして口惜しがつた。而して何か此の場でのぶ子を思ひきり辱かしめる樣な言葉を浴びせかけてやりたいとあせつて居ると、突然のぶ子は『餘りです、餘りです。』と叫んで泣きじやくり乍ら彼を捨てゝ一散に明るい電車通りの方へ馳け去つてしまつた。

翌日殿村は何食はぬ顏をしていつもの樣に社へ出勤した。昨夜あゝは云つたもののやはりのぶ子は社へ來るに違ひあるまい、急に社をやめたら明日から食ふに困るのがわかりきつて居るのだから、さう思ひ乍ら彼はぢつと椅子・凭れて向側ののぶ子の席へ今に彼の女の姿が現れるのを待ち受けた。而して彼の女が編輯室へ這入つて來れば屹度自分に一瞥を與へるに違ひないから、其の時は昨夜の事はほんの戯れであつたかの樣な素知らぬ、傲り高ぶつた眼つきをして瞰み返してやらうと用意して居たが、正午過ぎになつても竟にのぶ子は姿を見せなかつた。彼の女の椅子の二つ三つ手前の、相場記者の永井の椅子も空であつた。

一時頃になつて給仕が無名の手紙を持つて來た。封筒の上書きは正しくのぶ子の手蹟で、急いで封を引裂くと中には五圓紙幣が一枚と短かい手紙が一通入れてあつた。『私と永井さんは今日限り社を去つて二人で家庭を作ります。永井さんはあなたより身分こそなけれ、教育こそ無けれ、心から私を愛して妻として迎へてくれる立派な人です。あなたの樣な卑しい行ひをする樣な人とはまるで違ひます。一昨夜下すつた五圓紙幣は同封してお返しします。いつぞやの反物も未だ其のまゝに取つてありますから今日小包みでお手許へ送ります。そんな厭やな人だとは知らなかつたと父も母も申して居ります。あなたの顏は見るのも厭やです。而して將來私達の家庭の名譽と平和の爲めに決して二度とあなたを見る機會が無い事を望みます。』手紙の文句は略(ほゞ)かうであつた。

『何と云ふ無禮な手紙だ。あんな奴に侮(あなど)られたか。』

彼は顏が火の樣にほてつて來るのを感じ乍ら手紙をずだ〳〵に引裂いた。追々社員が出揃つてのぶ子と永井の今日限り姿を見せなくなつた事が噂に上る時、彼の受ける侮蔑と失望とは今より更に幾倍するであらうと思ふと殿村は泣きたい程恥づかしくなつて來た。『だが恐ろしい程確かりした女だ。』さう思ひ返すともう一度彼の女に會ふ機會を造つて自分の罪を心から詫びたい樣な氣にもなつた。

地方版の原稿を工場へ廻す時間が迫つたので彼はいや〳〵机に向つて腰を落着けた。物憂い、單調な、日々の仕事が其處に彼を待つて居た。其の日は永い彼の記者生活の中で疑ひも無く曾て無かつた不愉快な日であつた。彼の努力と彼の勤勉とを以てしても打勝ち難い、或る大きな物に打つかつた樣な氣がして、彼の生活と未來の希望とを支へる大きな梁(うつばり)か一溜りもなく崩れ落ちた樣に感ぜられた。苛々した氣

持を抑へる爲めに時々左の手の親指と中指で蟀谷のあたりをぎゆうと握み乍ら彼は苦りきつた顏をして周圍を見廻した。部下の若い記者や給仕たちは其の日一日殿村の近くへ行く事を恐れて居た。(完)

次號豫告

戯曲 名殘の星月夜(五幕十場 百五十枚)……坪内逍遙

小說 續偸盜(六十枚の長篇)……芥川龍之介

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

五月一日發行

婦人公論

定價二十三錢
郵税一錢五厘

◀◀◀五月號內容▶▶▶

□初めて上京の女學生へ……下田教授

□女子墮落の眞原因(一)……浮田博士

□母としての一年間……平塚らいてふ

□露西亞の革命……長瀨鳳輔

情死の研究

□情死に就いて……高島平三郎

□情死の根を絶つには……本間久雄

□日夫人に與へて文學上の情死を語るの書……近松秋江

□輻射熱の話(家庭科學)……近藤教授

□夢の話……福來博士

□曲毛、赤毛の療法……古田才市

□趣味の算術……中村八郎

□端午珍説……巖谷小波

□金魚の話……白木正光

□鼠のお馬(お伽噺)……鈴木三重吉

□あやめの話……廣田花崖

(小説)

春宵記……小山內薰

蹂躪られて……正宗白鳥

秘めたる戀……徳田秋聲

□入梅前に要する主婦の注意……櫻田節彌

□時事畫報……

□藝術的插畫……

□現代女風俗(口繪)……

(中央公論社)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　北區東梅田町	宮內立盛堂
京都市七條停車場前	王共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數＼國別	內國	外國	
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付特別號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本郷區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし

一振替貯金口座は東京三十四番なり

一郵券代用必ず一割增の事

一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢（集金委託料
一金五圓迄　金七錢　及送料共）

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正六年四月廿九日印刷納本
大正六年五月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（長）下谷九一九九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場





CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

